
ヒーローがいるのに平和な街

狩人二乗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒーローがいるのに平和な街

【Nコード】

N5723I

【作者名】

狩人二乗

【あらすじ】

舞台は『ヒーローがいるのに平和な街』。

昔、ヒーローに命を助けられ、様々な人物と積極的に関わろうとする主人公 刀銃。

復讐を誓い、ヒーローがいるのに平和な街に入り込んだ指名手配犯を捕まえようとする主人公 佐藤栄作。

二人の主人公の視点は、時に脆く、時に強い。

エツト程度しか見えていないでしょう。あ、目が慣れたからといってその状態が変わることは有り得ませんのでご理解を。

この空間は、これからあなた方が観ることとなるヒーローがいるのに平和な街の世界の狭間に起こる別次元の世界となっています……という設定です。どうやらあなた方はこの世界に、随分と遠回りな方法で来てしまったみたいですね。ご安心下さい。この話しが終わり、ヒーローがいるのに平和な街を観終わったが直ぐに、元の普通の世界に帰らせてさしあげましょう。なので、今から私が言う戯言にお付き合いを願います。

さて。今、あなた方からは私がどんな姿に見えていますか？ 背格好は？ 性別は？ 髪型は？ 五体満足に見えていますか？ 見えている方は大丈夫です。一応、私は四肢が全てある状態なので。

憶測ですが、今、あなた方からは『小さな男の子』に見えていると思われる。あなた方から随分離れていますし、髪も短くしてあるのですから。

しかし、ほら、この短髪のかつらを取ったらどうでしょうか？ 髪が肩までの長さとなりました。ふむ。これは肩にかかりますね。億劫です。

では、このかつらをとりましたよう。どうでしょうか。今、あなた方から私は坊主のつるつる頭に見えていると思います。ですがこれは私の年齢からいって恥ずかしい髪型ですね。また、新しいかつらを被らせてもらいましょう。ふむ、ふむ、ふむ。この、ポニーテールにしましょうか。

そういえば、この位置はあなた方から遠すぎますね。どうせ後少しのお時間の付き合いです。近付きますね。私の身長がいきなり伸びても、嫌がらないで下さいよ。

ではでは。今しがた私自信が証明した通り、事実には嘘偽りが含まれる場合があります。それはいついかなる時でも起こり得る事象であり、ここまで来ることになったあなた方や暗闇の空間に住む私でも、逆らうことは出来ません。

そして、実際にそれは起こってしまうのです。

私の頭上に出現された巨大モニターをご覧下さい。ああ、ご心配なく。国お抱えの科学者……もとい、私の協力者達が精魂込めて作った代物ですので、光りは出ません。あなた方の頭の中を直接ジャックし、半強制的にモニターを写しますので。危険なことは一切合切ごさいません。先に断言しておきましょう……っと、そう言っている間に準備が整ったようですね。モニターに映像が映し出されました。

さてさて、ではでは。

これから始まりますヒーローがいるのに平和な街は、二つの視点から展開されます。

昔、ヒーローに命を救われ、様々な人物と積極的に関わろうとする大学一年生の主人公 刀銃。

復讐を誓い、ヒーローがいるのに平和な街に紛れ込んだ指名手配犯を捕まえようとする主人公 佐藤栄作。

二人の物語は接点など無いに等しく、しかもその物語が混じり合うなんてことが起きる訳が無かったです……が、ああ、運命とはなんと残酷なものでしょうか。

二人が居る物語の世界は……あるうことが『ヒーローがいるのに平和な街』なのです。

この世界において、接点なんて関係ないのですよ。

混じり合い 時に分裂し 融合し結合し分散し換算しあうその様は、まさに運命の歯車が狂っているとしか言いようがないのです。

さあ、私の言葉など、ほんの前座に過ぎません。では早速観ることにしましょう。

ヒーローがいるのに平和な街。

とくどご覧あれ。

暗闇の空間 1 (後書き)

どうも。初の長編の投稿です。出来るだけ更新してくつもりなので、未長くよろしくおねがいます。

ヒーローがいるのに平和な街の表？

俺が住む街にはヒーローがいる。

名前は『ヒーロー』。

職業『ヒーロー』。

そんな彼が日夜行うことはパトロールが主だ。たまにおばさんをおぶってやつたり、道案内をしたりする。歩いてだ。空は飛ばない。

これだけ切り取って聞いたら警察と変わらないだろう。だがそれは違う。確かに俺の街に警察はいないが、違うのだ。

ヒーローがいる。

警察はいない。

ならば、何故ヒーローは怪物や悪の組織などと戦わない？

答えは単純明快。

俺の街には悪がない。

正義はいても、悪はいないのだ。

なので警察はいらない。故に独りよがりとなってしまう、ヒーローは暇を持て余している。

「どうだい刀銃君。このカフェラテは絶品だろ？」

日曜の昼。

大学がないので暇だからという理由でいきつけのカフェに行き、十分くらいぼんやりと俺が好き作家の新作の本を読んでいると、同じく暇だったのかヒーローが俺の目の前に現れた。手にはコーヒを皿と共に持っている。客や店員からキヤーキヤー言われ、こやかに手をふっていた。

「久しぶりだなヒーロー。あんた、なんでここに？」

「はっはっは。僕はヒーローだよ？ 街中の人達の名前と顔は全て把握してるのさ。今どこに誰がいるのかも、それどころか住所もだよ。好き放題出来るんだよね、これが」

「……つて、そんなもん体のいい変質者じゃねえか！」

「何を言うんだい。人聞き悪いよ、刀銃君。……まあ、刀銃君なら僕は赤ん坊の頃から知っているけどね」

「いやあんた何歳なんだよ！」

ヒーローの見た目は俺が判断する限り普通に普通にメタボリックな五十年代だと思っただが、いかんせん俺が最初に見たヒーローの姿が今の姿と全く変わっていない為、正直な所判断に困る。なんだこのおっさん。不老不死かよ。

ああ。因みに今ヒーローが言った『かたなじゅう』っていうんだかおっかなびっくりな固有名詞は俺の名前だ。刀に銃と書き、そのまま刀銃。おうよ畜生。絶対変えてやる。

そんな風に俺がヒーローの実年齢と俺自身の名前の不幸さについて考えていたところ、ヒーローがいつもはもつと喋る俺の反応に少し戸惑ったのだろう。珍しく、こんな失言をした。

「当たり前だが君の両親の子供時代も知っているよ　　つておつとごめん、軽率だった」

「ん……」

昔の話だ。

俺は昔、昼間っばらからこんなコスプレにしか見えない恥ずかしい赤マントや赤いヘルメット、赤いサングラス等を装備している変なおっさんに命を助けて貰ったことがある。

刀銃というイケイケな名前をつけた俺の両親。

街では最後の悪と呼ばれている二人だった。

虐待を受けた。熱湯を浴びた。罵声も浴びた。殴られた。蹴られた。唾を吐かれた。やかんで殴られた。フライパンで火傷ができた。寝させてくれなかった。夜が長かった。友達にあることないこと吹き込まれた。スタンガンをくらわされた。ストレスを発散された。

どこからか買ってきた拳銃で左肩を貫かれた。

「待てい悪党ども！」

そこに、ヒーローは現れた。その姿は俺の約十年経つ脳裏に未だ

残っており、俺が最も尊敬する偉人と称してもいいくらいヒーローは神々しく、カッコよかった。

……のだが、その命の恩人は現在こうして俺の前で、俺が今さっき読んでいた本を片手にカフェラテを飲んでいる。読みながら、「うん。この作者の文体は独特だよな。一番僕が好きなのは世界シリーズかな。三作目のあの繰り返しネタは本当に最高だったよ」と一人で語っている。世界シリーズなんて知らねーぞ、俺。何だよ繰り返しネタって。頼むからネタバレはするなっ。

だけでもまあそれでも凶らずしも昔を思い出した俺は、なんだか感慨深くなってしまった。

今思うと、ヒーローがあの時助けてくれなければ、俺はここで本を読みながらカフェラテを飲むことも不可能だった訳か。

「……ありがとうな……あの時ばかりは本当に感謝している」

「え？ いやいや頭を下げなくてくれよ。ただ単に、僕はヒーローとしての使命を果たしたただだからさ。というより、謝るのは僕の方だよ。変なことを言っただけでゴメンね」

「そんなこと、昔の話だろ。全然大丈夫だって。気にするな」

「そう言ってくれると助かるよ」

今更だけど相席してもいいかい？ と言われたので、断る理由がない。どうぞ、と返したらヒーローは何故か立ち上がり、再びよっこらしよ、と言っただけで座った。今の全くもって意味がない一連の動作は一体何なんだ。ヒーロー特有の儀式か、こら。

「刀銃君。最近、腕の調子はどうだい？」

「ああ。動かねえよそりゃあ」

俺の左腕は銃弾によって神経を奪われ、動かなくなっている。これは後遺症というものらしい。治そうとしても現在の科学では不可能なんだとか。

「違う違う。僕が言っているのは左じゃないよ。右の話だって」

「右腕？ なんともないけど、なんだ？ なんかあったのか？」

「うん。昨日、刀銃君の腕にチタンをはめ込んでおいたから調子は

「どうかなと思つてさ」

「暴走したマッドサイエンティストかあんたは！」

「嘘だろ！　と思つて触つてみたらマジかよ心なしか固く感じる！　僕の家を調べてたら結構の量のチタンが何故だか知らないけどあったからね。刀銃君の身を守るという意味で、腕の骨に組み込ませて貰つたんだよ。こう、ガリガリと」

「えげつねえ！　ちょ、俺の右腕大丈夫！」

俺が結構な勢いで困惑していると、ヒーローはかえした状態の右手の平を俺に差し出してきた。

「ほら。社会人としてお金を払つてくれよ」

「ブラック・ジャックでもそんなの請求しねーぞ！　あんた本当にヒーロー！」

「当たり前だよ。面接試験も受けたんだからさ」

「ヒーローに面接つて必要なのかよ！　てかヒーローの面接試験！　やべえちよつと気になる！」

「じゃあ受けてみる？　試験会場は土星だからさ。行ってらっしやーい」

「そこまで行けたらもうヒーローだよ！　崇められるよ！」

「うん？　違うよ刀銃君。僕が面接を受けたのは宇宙の土星じゃないよ。何を言ってるんだい刀銃君は。バカじゃないのかい。そんな訳ないじゃん。少しは頭を使ってみたらどうなんだい全く」

「言い方がやけに辛辣なのは何故だ！　勝ち誇つてんじゃねー！」

「お前らぁ……人生変えたきゃ東大だ！」

「ドラゴン桜？　……つておいおい相当な勢いで話し逸れてんだけどよ。てことは何だ？　どっかの店の名前か？」

「暴力団のアジトだよ。土星組」

「ヒーローを引退しろ！」

「引退するのはまだ早いさ。あと二十年は現役だからね」

「ゴメンホントにホントの本当にあんた何歳！」

「それに、だよ。僕が引退するのは刀銃君と会えなくなることと同

じだからね」

どういう意味だよそれ？ と俺が問おうとしたときには既にヒーローはカフェラテを完全に飲み切っていた。俺の読みかけの本を「ありがとう」と言いながら俺の目の前に置く。そのまま椅子を引いて立ち上がったので帰るのかよと思っていたら、「あ、そうそう」と言っただけでヒーローは後ろを向いて俺を真正面に見た。

「その小説の最後。主人公とヒロインが結婚するよ」

「立つ鳥跡を濁しすぎだつての！」

そんな訳で、ヒーローは毎日ヒーローとしてヒーローらしい行動をしないままほのぼのと生きている。

街は平和だ。暴力事件も起きず、交通手段は歩きと自転車と……それから一部の電車だけなので交通事故も起きない。自殺もない。当然殺人もない。当たり前だが盗撮もない。多分というか絶対盗難もない筈だ。

ヒーローがいるのに平和なんてのは、普通は有り得ない話しなのだけでも。

昔から俺は不思議に思っていたんだ。

昔からヒーローが街にいるのは知っていた。親に隠れてテレビを見て、空想のヒーローを見たこともある。

テレビの中のヒーローは爆発音と共に怪物を倒していた。

俺がその高揚感に浸っていながら、番組が終わってしばらく待つと、違う番組が始まった。

なんてことはない日常を三人の高校生が飄々と過ごしていくコメディアニメだった。

その番組ではヒーローが出なかった。もちろん怪物も。

その次も。

その次もその次もヒーローが現れず、怪物は現れなかった。

ちんけな敵キャラは出る。だがそれも運動会でのポイント対決上の敵だ。怪獣のようなとんでもない破壊力を持つ悪訳は現れなかった。

怪物が現れたのはヒーローが活躍する番組だけだった。

悪が現れたのは正義が活躍する番組だけだった。

幼かった俺はこう考えた。

「ヒーローがいるからお母さんとお父さんがいるんだ」

でもそれは違ったんだ。両親が逮捕された後も 根強い悪が完全に途絶えた街の中に居ても ヒーローは存在を消さなかった。

「正義は必ず勝つんだ！ ヒーローは必ず勝ってくれるんだ！」

両親が逮捕されてからの俺の口癖はこんな感じだったと思う。

ヒーローがいるのに平和な街の裏

この街にはヒーローが居るらしい。赤い服を着て赤いマントを翻し、赤いヘルメットを被り赤いサングラスをかける。小太りで、話しも弾む陽気なおじさん。そんなヒーローがいるらしい。

これらは全て、目の前にいる門番を名乗る若い女性と、その育成を担当している。小皺が少し目立つ小柄な女性に聞いた話だ。今、僕は青い壁に囲まれた薄暗い空間にいる。周りを見渡しても、壁しかない。

二人の女性と、僕の横幅の軽く五倍。僕の背丈の軽く七倍はある、巨大で圧倒的な存在感を放つ異質な『門』を除いて。

先刻まで居た入街管理局へと続く、下り切るのに二十分もかかった階段はもう見えない。どういう原理かわからないが、既に壁に阻まれてしまっている。

ここは地下。

しかし、僕の目的地は地上にある。

僕はこれから、そのヒーローが統治しているというこの街に、外界からの来客として初めて移住する。

というより、潜入する。

僕の目的はこの街に紛れ込んだと情報提供があった、『徳永切裂』という指名手配犯の逮捕だ。『切裂』と書いて『きりさき』と読ませる人物が本当にこの世の中にいるとは未だに信じられないが、まあ。その辺はご愛嬌というところだろう。

「佐藤さん。聞いていらっしやるのかしら？」

手配書に写っている徳永切裂のげっそりとした髭面を自分の内心をギリギリで抑えながらじっと眺めていると、小柄な女性が苛々しながら話しかけてきた。

「マズイ、何も聞いていなかった。」

「すいません……何の話でしたっけ……？」

「……どうやら私達門番を舐めているみたいですね。外からこの街に入るということが、本来ならどれ程時間と手間をかけなきゃいけないか、あなたはわかりなのかしら？ いえ、どうせわかっちゃいないでしょう。わかりました、ええわかりましたとも。これから私が手取り足取り教えてあげますわ」

「よしえさん……抑えてください……」

よしえさんというらしい小柄な女性がどんどん瞳を鋭くしていく様を見て恐怖感を抱いていると、門番の女性が困った様に言った。それを聞き、よしえさんは「……仕方ないですわね」と呟き、渋々話しを元に戻そうとする。危ない。あの目は本気の本気だった。

ゴホン、と一回咳ばらいをすると、よしえさんが隣に立つ若い女性を口でけしかける。どうやら女性は緊張しているらしい。よしえさんの催促を受けた後、僕の顔を見て真っ赤になりつつも僕に話し始めた。

「えっと……とりあえず、佐藤さんはどこまでお聞きになりましたか？」

「おじさんのヒーローが居るといふ所までですね」

僕の言葉を聞くと、若い女性は啞然とした。そういえば、このうす暗い空間に入ってから……一時間は経っている。腕時計の短針が一周していたから間違いない。となると、僕はほとんどの話を聞いていなかったのか。

「じゃあもう最初から説明した方が早いんですけど……よしえさん、どうしますか？」

若い女性がそう言うと、よしえさんは俺の顔を嫌悪感溢れる目つきで見ながらこう言った。

「箇条書の要領で説明しなさい」

「え……大事な部分だけをかい摘まんで話せてことですか……？」

「不必要な部分だけをかい摘まんで話しなさい」

何でだよ。

どんだけ嫌われてるんだ僕は。

「……わかりました。じゃあ、HUNTER×HUNTERのレオリオの必要性について話します」

「そんな話してたんですか」

「やっぱり初期ではそれなりに活躍していたのですが、カメラアント編になってよくよく考えてみると、正直要らなかつたんじゃないですかね。トンパをレギュラーにすれば解説係も充分だった訳です」

「本当にその話しするんですか……」

道理で一時間も聞いていないで大丈夫な訳だ。

不必要にも程があるだろう。

僕の反応を受けてやっと自分がどれだけ要らない事を喋っていたのか理解した若い女性は、恥ずかしさからか赤面し、僕を見ながらゆっくりと喋り始めた。

「えっと……じゃあかい摘まんで話しますね」

「お願いします」

「まず、この街にはヒーローが居ます。ですが、警察は居ません」

「え？ 警察がいないんですか？」

「はい。ヒーローが居るので警察は居ても居なくても同じですから僕と同業者が居ない街か……そんな街、初めて知った。

「ですからヒーローは街の人の全個人情報を持っています。これは外の世界の警察と同じ筈です。佐藤さんの個人情報は既に私達門番がヒーローに引き渡しました。そこだけは理解しておいて下さい」

「わかりました」

つまり、僕はそれ程大きな動きは出来ないということになるな。下手をしたら、ヒーローとかいうおじさんに徳永切裂の存在を嗅ぎ回れてしまう。

若い女性は続ける。

「衣食住は佐藤さんには関係ないという話なので、省かせてもらいます」

僕は警察から多額の金銭（ちゃんとこの街の通貨だ）と、家を手

配して貰っている。住所も理解しているので、衣食住に関しては大丈夫だ。

「後は……金色のガツシュウ！！のアニメ版でタイトルを金色のガツシュウ・ベル！！にする必要性はあったのかという話ですが……」

「その話しはいいです」

というよりそれは明らかに必要な話しではないだろう。不必要過ぎて涙が出る。

「ていうか私はまずこの『金色』が『全色』に読めて仕方がないかつたです」

「普通そこは読みの方で『きんいろ』でしょう」

まさか漢字の方で読み方に困る人が居るとは。

しかしこの人……漫画が好きなのかなあ……さっきからそればっかだ……門番やってても漫画が読めるのか……？

「そ、それはともかく、佐藤栄作さん。今からあなたはこのヒーローがいる街に入るようになりますが、覚悟は出来ていますか？」

話しを戻した若い女性が、今度は大真面目な表情で話す。

「覚悟？ 何のことですか？」

「平和な街に入る覚悟ですわ」

と、いきなりよしえさんが話しに入ってきた。喋ろうとした若い女性を顎を払う動きで抑える。

「ここから先は、絶対に犯罪を行ってはいけない世界ですわ。現に、街ではヒーローが全ての悪　ここでは犯罪者としておきますけど

捕えた後の数年間、一度も犯罪は起こっては起こってはおりませんのよ。おわかりかしら？　あなたがもしそそうをしたら、街の平和が乱れることになります」

一呼吸置いて、よしえさんが再度念を押す。

「絶対に……絶対に、街の平和を脅かすことのないようお願いしますわ。もしそんなことがあった場合、私達街の住人は……外の間を一切合切許しませんからね」

目元が心なしか暗いのに笑っているよしえさんの言葉に、僕はこ
う反応した。

「大丈夫です。僕は絶対に、犯罪をおかしません」
当たり前だろう。

僕はこれから、その平和を脅かそうとするかもしれない人間
を捕えるのだから。

徳永切裂。連続殺人犯。

だが、徳永切裂の異常性はそんな肩書だけではおさまらない。

徳永切裂は、見つけた人間を手当たり次第斬りまくった。

切った、ではない。

斬った、だ。

徳永切裂の得物は 日本刀。

その武器一つで、僕ら警察をかわしきったのだ。

だが、僕達警察も無力ではない。何とか警察も、奴に深手を負わ
した。

銃弾によって左肩を負傷させた。

そして、今。

左腕が動かないであろう徳永切裂はこの街に存在する……らしい。

「そう……ならいいわ」

よしえさんは一回頷き、若い女性に「じゃあ開門してちょうだい」
と言った。

若い女性は巨大な門の真正面に立ち、こう言う。

「オープンセサミストリート」

ツツコミ所満載な呪文だったが、僕はあえて言わないことにした。
巨大な門が僕達が居ない方向に「ギ、ギ、ギ……」と大きな音を
起して、ゆっくりと開かれる。

「ようこそ、私達の街へ」

「佐藤栄作さん。あなたを歓迎致しますわ」

二人の女性の激励を受けて、僕は門が開いた向こう側に見える上
り階段へ向かった。開いた門のてっぺんを見ながら、青い壁に囲ま

れた空間から去る。

階段に一段足をかけた瞬間、音を立てずに青い壁が閉じ、僕は二人の女性の元に戻る事が不可能となった。見えるのはこれまた段数が多い階段と、足元を照らす微かな光りだけ。

徳永切裂のことに、これから僕は何をすればいいか考えながら、ひたすら僕は歩き続けた。まずは家とお金の確認だろう。警察はお金を銀行に預けてあるらしいから、まず残高を知らなければならぬ。

そして、先刻と同じく二十分。少し息を切らしながらも、白い壁に到達した。街を囲んでいる外壁というものだ。しかし壁が多いな、この街は。さつきから壁ばかりだ。

僕がその壁の前に立つと、壁は僕の縦幅横幅の分の長方形だけ存在を消し、街から漏れる太陽の光りが僕を照らした。

さあ、行こうか。

指名手配犯を、この手で捕まえる為に。

そう決意し、僕は街へと一步踏み出した。瞬間に目に入ったのはバラバラな場所に確認出来る大きなビルとマンション。その建物の下に存在する普通の一軒家と。一人の若い男の姿だった。目つきが悪く、髪を金色に染め、両耳にピアスをし、おしゃれの為か足を短く見せるブカブカのズボンに両手を入れ、白い髑髏が真ん中にある黒い服を着ながら、その上に白い特攻服を両腕を入れずにただただ羽織ってるだけの。いかにも不良というような姿の若い男の姿がそこにはあった。辺りには他に誰も居ない。

不良の目は、僕の方を向いていた。

「待っていましたよ、外の人」

そんなことを言っつて、僕を見据える。

「き……君は誰ですか？ 僕に何の用ですか？」

溢れ出る疑問をそのまま口にする、不良は少し口を濁しながら、僕にこう言った。

「……えー、すみません、俺、口下手なもんで。移動しながら喋る

んで、とりあえず何も言わずに俺についてきて下さい」

「いや……そんな勧誘についていく訳にはいかないんですけど……」
「そ、そうですね……」

不良は困った様に「うーん……どうしたもんか……」と呟きながら、考えにふける。その姿を見て、僕はこの不良がいい性格をしているんじゃないかと、少しだけ警戒を解いた。

数秒経った後、不良は「そうだ!!」と何かを思いつき、もう一度僕を見る。

「俺はあなたにとって、とてもいい情報を持っています。それを聞いたら、俺についてきてくれますか?」

「それは、情報の内容によりますよ」

「……ハハハ、大丈夫です。多分、いい情報の筈ですから。じゃあ、言いますね。これを聞いたら僕についてきて下さいよ」

だからそれは情報によりますってば　という言葉のみこんで、僕は不良の言葉を待った。

そして、不良は言った。

「この街に侵入した刀を持った男……どこに居るか知りたくないですか?」

ヒーローがいるのに平和な街の裏 二

「俺はこの街の地下で暮らしてるんです」

僕と取引をした高梨和也君という名前の不良は自分をこう称した。今、僕と高梨君はドラえもんなんかでよく見る 良く言えば哀愁溢れる 悪く言えば過疎の田舎のような街並みを歩いている。一軒家が建ち並び、街灯が所々に確認出来る。どう見ても僕達が歩いているこの場所は車道と歩道が合わさった道路だと思うのだが、車は一つも走っていない。高梨君に聞いた所、車は事故が起こって危険なので、現在はたった一つしかこの街に存在しないそうだ。成程、そこまで徹底しているからこの街は平和を語れるのか。

「地下……というと、さっきの門がある所ですか？」

「いやいや、あんなへんぴな場所で暮らせる訳ないですよ。俺達地下の住人は、その門があつた場所の、更に地下で暮らしてるんです」

高梨君は続ける。

「少し要らない話しになるんですけど、この街に外と繋がる門は北、南、西、東にそれぞれ一つずつあるんです。門一つ一つに、さっき佐藤さんが通つた場所があるんですけど、その周りを囲む様に、四人の門番専用の空間が用意されていて、俺達地下の住人はその下で暮らしてるんです」

「地下の住人って……何でこの地上の街で住んでいないんですか？」

すると高梨君は、へへへ、と右の人差し指で鼻の下を擦った。

「決まってるでしょ。俺達は、罪を犯した犯罪者 所謂悪なんですよ」

僕の目の前にいる『悪』は、どうみたって僕が今まで見てきた犯罪者の姿ではなかったが……そうか。それもあって、今僕が歩いているこの地上の街では平和が続いているのか。

悪を廃除して、正義だけを徘徊させる。言い方は悪いがこれ程実

用的で、かつ即効性のある『平和』の実現はないだろう。

そして、これを行ったのが この地上の街を統治するヒーローという訳だ。会ってみたくなくなったな、そのヒーローとやらに。

「因みに、高梨君は何をしたんですか？」

「俺ですか？ うーん……これあんま言いたくないんですけど……、……強姦です」

沈んだ顔で、高梨君は呟いた。

「いやあ、俺も昔は若かったんですよ。意味のないことをして、人生棒に振ってしまいました。今思えば、何であんなことしちゃったんだか……」

高梨君は本気で悔いているらしい。まあ……そうだろうな。強姦などしていなければ、今頃この平和な街に住んでいけたのだから。

僕にとっても、この街は理想的だ。犯罪もなく事故もない街……か警察の仕事が無いという点に関しては残念だが。

「ですけどね、俺なんてまだたいしたことないらしいんですよ」

「……と言つと？」

「中にはですね、年端もいかない息子の腕を銃で動かなくしたってのがありましてね」

「な……銃で……ですか」

「そう。銃で、です」

「……銃で行為に及ぶ意味がわかりませんね」

「全くですよ。銃なんて、昔の街でも滅多にお目にかかれない代物でしたのにね。他にも、父親を切り裂いた息子とか、娘を放り出した両親とか、昔の彼氏全員を殺した女性とか……色々な人達が、地下で住んでるんです」

「……………」

どうやら今現在向かっている地下の世界というのは思ったよりも凄まじい世界らしい。警察の人間として、そんな犯罪者の巣窟に近づくのはやぶさかではあるのだが、仕方がないだろう。よしえさんに忠告を受けた後だ。大事にはしないように我慢しなければならな

い。

暗い顔で黙っていると、高梨君が「で、でもですね」と話しをふってきた。

「皆、いい人達です。俺も含め、元は犯罪を犯した奴らばっかですけど、皆和気あいあいとしてます。これも、全ては一人の女性のおかげなんですよ」

「一人の女性？」

「はい。その人が、俺に佐藤さんが来るってことと、佐藤さんにこう言えば地下までついてきてくれるってことを教えてくれたんです。ホント、女神ですよ……あの人は」

言つと高梨君は今まで見た中で一番明るい顔になった。高梨君はその女性にとても救われたらしい。

しかし……女神か……。

その人は、僕も救ってくれるのだろうか。
色々な意味で。

「その女性、綺麗ですか？」

気がつくと僕はこんなことを口走っていた。我ながら脈絡も何もない最悪な問いかけをしたと思う。

高梨君は、一瞬ハツ、としたような表情をした後、笑ってみせた。
「……へえ。佐藤さんも話しがわかりますね」

高梨君の返答がこんな感じだったので、僕もそのテンションに合わせてることにする。

「当たり前ですよ。僕、今年で十八なんです。そろそろ結婚を考えた方がいいかな、なんて思ってますので」

「佐藤さん十八歳なんですか！」

僕の言葉を聞くと、途端に高梨君は驚いた。しんみりしたり、笑ったり、驚いたり 表情が色々変わる人だな、高梨君。

「は……はい……そうですね……」

「そうですねですか……いや、てっきりこんな街に一人で来るし、なんか冷静なんで年上かと……」

「高梨君は何歳なんですか？」

「二十七です」

「二十七歳！」

「しかも既婚者です」

「既婚者！」

二十七歳な上に既婚者！

この不良丸出しなファッションで！

「はい。そうか……佐藤さん年下なのか……」

「高梨君……いや、高梨さんなんて年上で既婚者なんて……」

素直に驚いた。やっぱり、外見で人と成りを判断してはいけない。

「高梨君でいいですよ。俺も、佐藤さんって呼ばせてもらいますし」

「へ？ そ、それでいいんですか？」

「はい。だって何か……」

高梨君は僕を見ながら、感慨深くこう言った。

「佐藤さん、ただ者じゃないって感じがビンビン来ますもん」

「そ……そうですか……」

良くはわからなかったが、高梨君は僕を高く評価しているようだ。

悪い気はしなかったので、好意に甘えさせてもらうことにした。

「はい。あ、ここです。ここが地下への入口です」

すると高梨君は突然立ち止まり、ある場所を指で指し示した。喋

り合っている内に着いてしまったようだ。

「これですか？」

「これです」

「……………」

高梨君の指は、車道の隅に何故かポツンと置いてある、仮設トイレを指していた。

「ここに入って、『ウォーターメロン』と叫ぶと、地下へと一直線に向かうエレベーターになります。その間は使用中になるんで、鍵は閉めなくても結構です。オートでロックやオープン状態を切り替える仕組みになってますんで」

「……本当ですか？」

「どうやら疑ってるみたいですね。わかりました。じゃあまず僕から地下へ行きます。開いてます、って表示になったらドアを開けてみてください」

言うがすぐに、高梨君は迷わず仮設トイレに入り、ドアを閉める。「ウォーターメロン！」という聞いてとても恥ずかしくなる合言葉を言ったと思ったら、ドアノブの上の表示が使用中に替わり、仮設トイレの中から『ヒューー……』と、何か大きな者が下に落ちていく音が聞こえた。

一分経った後、仮設トイレの中からいきなり、ガシャン、と大きな音が響いたと思ったら、表示が開いてますに替わった。

「高梨君？」

心配して言いながら僕は恐る恐るドアを開けた。

中には、トイレとティッシュと水を流すスイッチしか見当たらなかった。どうやら、高梨君の言っていたことは本気らしい。

ここで退くのもおかしな話なので、僕はドアを閉め、恥を忍んで叫んだ。

「ウウヲオーターメロンッ！」

瞬間、ガコンと足が浮遊感に包まれると、下方向に足場が動き始めた。『ヒューー……』という音が聞こえる。それ程早くは無かったので安心して身を委ねた。

そして、一分。

仮設トイレのドアがひとりでに開いた。

「へっへっへ、やっぱあの話は最高だぜ」

「なんていつてもあのラストだよな」。伏線が集まった感が、半端じゃない」

「馬鹿野郎！ あの話して一番いいのは会話の掛け合いだろうが！伏線やらラストやらは二の次だ、二の次！」

「何だと！ それこそ二の次だろうが！」

「ああん？ やんのかコラあ！」

「やってやるよコラあ！」

「まあまあ……二人共、とりあえず飲もう飲もう」

目の前には、よくある酒場の風景が広がっていた。ぼんやりとした明かりが空間を照らし、ガヤガヤとした大声が留まることを知らない。瓶やジョッキからお酒の匂いがする中、点々としてある円形の木製のテーブルに男性女性が三人やら四人やらで木製のもたれることが出来る椅子に座って囲んでいた。全員、昼間から出来上がっている。地下だから時間の感覚が無いのか……と思ったが、一人の男性が「あ！ あのドラマの再放送始まっちまう！」と左腕の時計を見ながら言っていたので、全員わかつて酔っ払っているのだろう。後ろの仮設トイレのドアがひとりでにガシャンと閉まったかと思うと、中から物凄い勢いで上がっていく音が聞こえた。さようなら、トイレ。

「あ、佐藤さん。こっちですこっち」

辺りを見渡していると、手を振っている高梨君の姿が酒場のメニューが張ってある壁の側で目に入った。僕は高梨君の元へと近づくと、「どうです？ びっくりしたでしょ？」

「ええ……あんなトイレは始めてです」

「そうですね。エレベータートイレなんか言ってるね、もしかしたら売れるかも……っていやいや違いますよ佐藤さん。何言ってるんですか。俺が言ってるのはこの酒場ですよ」

ノリツッコミも出来るのか……と高梨君に感心しつつも、僕は改めて周りを見渡した。この姿を見て、彼ら彼女らが犯罪者と思う人は居ないだろう。それだけ全員、明るく晴れ晴れとした表情でお酒を飲んでいる。

「なんか、混ざりたくなってきましたね」

「そうですね？ 俺も、飲みたくなってきました」

ウキウキと舞い上がる高梨君を見て僕はいい気分になりながらも、

指名手配書に写っていた徳永切裂の顔を思い出して、目的を再確認した。そうだ。僕はこんな所でのんびりしている暇はない。

「高梨君」

「はい？」

「情報を、貰いたいんだけど」

「……あ、はい。わかりました。覚えてましたよ。ええ、覚えてましたとも」

必死に慌てて取り繕う高梨君を見て穏やかな気持ちになりつつも、僕は返事を待った。

高梨君は、指である場所を指す。

「あそこです。あそこに、俺達の女神が居ます」

高梨君の指は、焼酎やワインが並ぶ、二人が座っている椅子があるカウンターを指していた。

「ありがとう。協力、感謝します」

「そんな警察みたいな言い方やめて下さいよ。どうもです。俺は酒を飲みますんで、帰る時は話しかけてください。トイレに案内しますから」

言つと、高梨君は空席がある机へと向かった。高梨君は僕が警察の人間だと気付いていなかったらしい。まあ、今となってはどうでもいい話した。

お酒の強烈な匂いと、椅子と机の間をすいませんすいませんと言いながら抜け、何とかカウンターに到着した。

そこには、着物姿の和風な女性が佇んでいた。見た目は三十代前半くらい。髪を一固まりに束ね、かんざしを刺している。僕が空いている真ん中の椅子に座ると、女性は僕の姿を確認し、右腕をカウンターに置いて顎を右手の上に置いて僕の顔に近づくと、こう言った。

「へえ、あんたが外から来た輩かい。結構可愛い顔してんじやないの。話しは外の警察から聞いているよ。確か……刀を持った指名手配犯だったっけ。大丈夫。私の夫が、姿を確認してるからさ」

「夫……ですか……？」

「ああ。そうだね。私の夫は凄いよ。多分、この街で敵う奴は誰も居ないだろうね。なんせ、」

フフフ、と年齢を重ねた故に出来る妖艶な笑みを浮かべながら、女性は言った。

「私の夫は、ヒーローだからさ」

「……そうなんですか？」

「ああそうだね。なんだい、リアクションが乏しいね。もっと驚いたらどうなんだい」

「いやいや、僕はまだその噂のヒーローとやらに会っていないんで「ああ。そういうことなら仕方ないか」

そうかいそれはつまらないねえとでも言いたげに肩をすくめるこの女性が、かの有名なヒーローの奥さん……か。成る程、確かにこの空間で、一際静かな威圧を感じる。極道の妻みたいだ。

「それで……えっと、お名前を教えてくださいますか？」

「名前？ そんなもんは私を固定名詞として縛る厄介な代物だろ？ 要らないんだよそんなの。私の名前を知っているのは夫だけさ」

言つと女性は僕から離れ、カウンターの奥にあつたらしいキセルを口に加えた。マッチも手に取り、キセルの先を焚いた。フウー、と口から煙りを出すと、「まあ、」と言い話しを続ける。

「私を便宜上識別したいんなら、ヒーロー夫人とでも呼んでくれればいい。少なくとも、ここにいる皆は私をそう呼んでるからさ。おっと、あんたら、寝ちゃ駄目だよ」

あんたらというのは僕の隣に座っていた男性二人らしい。酔いがまわり切っているのか、腕を枕代わりにして頭をカウンターに沈めていた。「う……う……う……」と言いながらようやく起き上がった二人を見たヒーロー夫人はため息をついて、カウンターから出る。二人の男性に肩を同時に貸しながら、「ちよっと待っててくれ」と僕

に言い、その場から離れる。

そして五分。ヒーロー夫人が「待たせたね」と言いながらカウンターへと戻った。もう一度、キセルをふかせる。

「それで、佐藤栄作……だっけ。あんたは何が知りたいんだい？」

「徳永切裂の居場所です。それだけが、僕の知りたい情報です」

「……ふうん」

煙りを口から出すと、ヒーロー夫人は言う。

「あんた、その歳でなかなかいい目、するじゃないの。いいよ。教えてあげる……って言いたい所なんだけど、残念だね。そんなに簡単に教えてあげるとは出来ないよ」

「何ですか？」

「あんたが徳永切裂って言った奴は……異常だからさ」
異常。

この街を統治するヒーローの妻は、徳永切裂のことをそう称した。「知ってるかい？ どうやってその男がこの街に侵入したのか。その男はね、一降りの刀を突き刺しては抜いて浮き上がって、巨大な外壁を昇ってきたらしいんだ。……刀と右手と両足だけで」

そう言うヒーロー夫人の手は、僕の見間違いかもしれないが、微かに震えていた。

「夫は……そいつの姿を確認しただけで取り逃がしたらしい。あの夫が 街唯一の正義が 恐怖を理由に見逃したのさ。わかるかい？ 要は、それだけ異常なんだよ……その徳永切裂って奴は。切裂……ねえ。名前に恥じない奴だよ、あんたが追ってる男は」

「それでも」

僕は、ヒーロー夫人の話を払って言う。

「それでも……僕は捕まえます。徳永切裂を、捕まえます。捕まえなければいけないんです……あの男は……あの男だけは……」

「……気になるね。どうして、徳永切裂にそこまでこだわるんだい？」

「そんなの……僕が警察だから決まってるでしょう」

「いいや。違うね」

ヒーロー夫人はキセルを置き、僕の顎を右手に持ちながら顔を至近距離まで近づけて、こう言った。

「あなたのその執着心は、明らかに『警察だから』なんていう上っ面の名目からじゃない。何なんだい？ 言つてご覧よ、私に。初対面だけど……初対面だからこそ、喋れることもあるよ」

「……言つたら、情報をくれますか？」

「ああ。教える」

「……わかりました」

仕方がない。これも、徳永切裂の居場所を知る為だ。覚悟を決めよう。

僕は次第に荒ぐ息を整え、言った。

「僕の両親と恋人が、徳永切裂に殺されたんです」

「……ふうん」

ヒーロー夫人は、口から煙りを出して、僕の顔を静かに見据えた。
「……そういうことかい。悪かったね、キツイこと聞いて」

「いえ……いいです……。じゃあ、話してください。徳永切裂の居場所を」

僕の過去を聞いたヒーロー夫人は、もう一度キセルを口付け、煙りを口から出した。

「いいよ。教えてあげる。けど……少し待ってくれるかい？」

「……何ですか」

僕は静かに怒った。何を言っているんだ、この人は。本当だったらこうして喋っているのも時間の無駄なのに。

そんな僕の心境を読みとれないせいか、ヒーロー夫人はもう一度口から煙りを出した。

「過去の復讐……ねえ。確かに、何をしても捜し出したいくなる」

「……ならどうしてですか？」

「立ち向かう準備をしておいた方がいい　そして、正々堂々と、捕まえた方がいいからさ」

つて。確かに私は部外者だよ。とやかく言つてすまなかつた。でも、あんたの今の顔は……さつき言おうとした言葉は……間違いない『悪』だよ。徳永切裂と一緒にさ」

ヒーロー夫人の言葉に、真つ白になっていた僕の頭に冷静さが戻る。空気が冷え切っている。どうやら僕が先程発した言葉はそれはそれは大きなものだったらしい。高梨君も含む酒場にいる人たちは静まりかえっていた。

「……それでもいい……悪でもいい」

「だから、言ってるじゃないか。今の　悪のあんたじゃ、徳永切裂には勝てないんだ」

「……なら、どうすればいいんですか」

……悔しいが、確かにヒーロー夫人の言う通り、今の僕じゃ、警察総出でようやく左腕を負傷させられた徳永切裂を捕らえることはできない。

「どうすれば……どうすれば僕は……」

「……私がとやかく言うことじゃないけど、一つだけ、言わせてくれないかい」

僕が無言で頷くと、ヒーロー夫人はこう言った。

「正義は必ず、悪に勝つのだ」

「……………」

言ってることは無茶苦茶だったが、それでも今の僕には、心に響いた。

徳永切裂は悪だ。まごうことなき悪だ。

なら、僕は？　僕は悪か？　悪でいいのか？

答えは　否、だ。

「まあ、とりあえず、息抜きしな。今日はここで一泊するといい。明日は、台風が来るからね」

僕はいつの間にか流れていた涙を服の袖でふき取り、それからヒーロー夫人と酒場にいる全員に頭を下げて、謝罪した。

ヒーローがいるのに平和な街の表 ？

「台風だ！ 台風が来るぞ！」

「早く避難するんだ！ 家諸共飛ばされちゃあ意味がない！」
街の人間がそんな風に騒ぎ始めた日の午後。

「焦らないで！ 落ち着いてこっちに来るんだよ！」

ヒーローは人々を率先して引率していた。

ヒーローは飛べない。台風や竜巻を吹き飛ばすなんて以つての外だ。出来る訳がない。

だからヒーローは、人々をまず最初に見つけようとする。天災などには気をかけず、ただただひたすらに。

力はない。

権力もない。

だけどヒーローはヒーローとして、正義の心を持っている。

ヒーローの運動神経は素人に毛が生えた程度のものだ。アスリート選手はもちろん、その辺にいる高校生にも負けるかもしれない。

それでもヒーローは、街を駆けるのだ。

そんなヒーローもいていいと思う。

さて俺もそろそろ逃げようかなと思つたら、雷鳴に混じり、小さくか細い声が聞こえたような気がした。

右を見ると、そこには古ぼけた建物があつた。

左を見ると……… よいよりかもう全体的に風塵は迫っていた。古びた神社だ。いつ崩壊してもおかしくはない。

「……… チッ」

一目散に右へと向かい、声の元を捜すことにした。ヒーローの目の前でカッコ悪いことは出来ないからな。仕方がない。

「おい！ 誰かいるか！」

カビが生えた古い木製のドアを開けて、俺は声の主を呼びかける。

周りを見渡すと、そこには大量の歴史物があつた。

兜に刀、その他諸々の骨董品。

全てこの神社に昔から存在するものだ。全部売ればそれなりの値段は下らないだろう。このまま神社が崩壊してこれらの物産の価値が下がる可能性もないこともなかったので、出来るだけ持っていてヒーローか誰かに保存して貰おうかどうしようか本気で迷っていたら、女の子の小さな声が聞こえた。

「……………怖いよお」

さつき聞いたものと同じ声だ。

「大丈夫か！」

声のした方に向かって走ると押し入れがあつた。襖を開けると、幼稚園児くらいの女の子がいた。

「お母さん……………お父さん……………怖いよお……………」

子供らしい赤いスカートにツインテールの髪。俺に気付いてないらしいその子は暗がりの中でもわかる程顔を赤くして泣いていた。十分二十分ではなく、どうやら何時間かずっと隠れていたらしい。

「お兄ちゃんの腕につかまれ！早くここから逃げよう！」

突然の大声と大学生の来訪者に驚いたのか、体を一瞬びくつかせる女の子だったが、すぐに涙を拭いて右腕にしがみついていた。さつきまでと一変。キリっとした表情で女の子は言う。

「は……………早く私を連れてきなさい」

「……………」

意外とプライドが高い方なのかもしれないなあと思いつながら、笑つてその子の体を引っ張つた。

両腕で支えたかったが、出来なかった。

神社から急いで立ち去り、天災の中、俺は女の子を抱えながら走る。変人に聞こえる描写だが、まあ許して欲しい。神社の中にあるお宝？ そんなもん、後でいいだろ。

可能な限り全力で走っていると、背に全体重を乗せようと頑張っているであろう女の子から、常時罵声が飛んできた。

「ちょっとあなた！ちゃんと私を持ちなさい！落ちたらどうする気なの！ただでさえ私の魅惑のボデーを下賤な者に触らせてやるだけで褒美なのに！ボディーじゃないわよ！ボデーってところがみそなの！」

「ああもうツツコミ所が多過ぎて対処出来ねえ！黙ってしつかり掴まってる！」

「わ……私に命令するなんて……お父様にもお母様にも命令されたことなんてないのに！」

「あーあー過保護なんですねー！はいはいわかりましたー！」
「テキトーに対応してるでしょあなた！」

「こんな大雨の中喋れるか！聞こえづらいんだよ何言ってるか！」
「じゃ……じゃあこれ聞こえる……？………悦んでんじゃないわよこの変態」

「聞こえてるよボケがあ！どんな挑戦だそれ！」
「わ、私はただあなたを気分よくさせようとしただけなんだからねっ！」

「お前の中で俺はどういうキャラ付けなんだよ？てかツンデレかそれ？気分悪すぎるわそのデレ！」

「勘違いしないでよねっ！」

「勘違いする要素が無えっ！」

「うるさいわよバーカ！」

「バーカ！」

初対面の少女と同レベルの会話をしている大学生が、その少女を背に乗せて、台風が襲いかかる平和な街を走る。

そうこうしている内に俺は、なぜか自分でも覚え切れていない過去を思い出していた。いや、別に昔こんなアホみたいな会話をしてた訳ではないんだが、まあそれはそうとして。

こんな……こんなことが昔あった気がするのだ。

台風が怖くて押し入れに隠れ、誰かが押し入れに来てくれて。泣いていた俺を助け出してくれた人がいたような……そんな気がする。

その人は誰だ？

俺は、その人をどうしたんだ？

わからない。

思い出せない。

思い出そうとしても、答えが出ない。答えが無いのかもしれない。

「ば、バカって言う奴がバカなのよ！」

「バカって言う奴がバカって言う奴がバカなんだよ！」

「繰り返すなんて卑怯過ぎるわ！ なにこの人？ 天才？ 天災の中
の天才だわ！」

「はっはっは参ったか！ 俺の勝ちだバーカ！」

「この……アホ！」

「何！ その手があつたか！」

「ホーホッホ！ ほら、ひざまずきなさいよこのアホ！」

そんな心境を後ろに、俺は内心ひそかに会話を楽しんでいた。煮え切らない過去なんてどうでもいいくらいに思える程楽しい会話だ。小さい女の子との会話を楽しむ大学生って犯罪じゃね？ みたいな話しは聞かないことにする。

二人して罵声を浴びせあっていると、大声で避難を呼び掛けているヒーローの姿が目に入った。

「ヒーロー！」

「刀銃君！ そんな所にいないで早く避難……ってなんだいその子は！ とうとう誘拐してしまったのかい刀銃君！」

「断じて違う！」

なんてことを言いやがる！

一応、あんたを見習って俺は救助活動に勤しんだんだぞ！

……しかし……でも……うーん……思い返してみると、確かに大學生が背に小さな女の子を乗せながら走るつてのは危ない図だったかもしれないなあ。脅威だよ。そんなの見たら。俺だったら間違いない通報するね。うん。

「離れの神社で泣いてたんだよ。この子、どうすればいい？」

「私は泣いてなんていないわよ！ 泣いていたとしたらそれはあなたの幻聴ね！ あー危ない人だわこの人ー！ 権力持つてる人来てこの人捕まえてー！」

「自分の醜態をさらされたくないからって平然と俺を罵倒するな！ 黙ってるっての！」

そこまで言い合った所で、「わかったわかった！ とにかく避難してくれ刀銃君と女の子！ 小学校が避難の場所に指定されてるから、そこで夜を明かすといいよ！」という助言というか叫び声というか、とにもかくにもそんな言葉がヒーローの口から発せられたので、二人してその小学校とやらに向かうことにした。

ヒーローがいるのに平和な街の裏 三

「本当に、台風が来てるんですか？」

「はい。地下じゃ全然わからないもんでしょ？」

「というか、そんな情報をどうやって知ったんですか？」

「ああ。それはですね、テレビです。地下にも電波は微かですが届いているんですよ」

「……意外と地下って不自由ないんですね」

僕はヒーロー夫人と夜の時間になるまで話した後、高梨君に地下に泊まる旨を伝えた。高梨君は「佐藤さん泊まるんですかー。どうぞどうぞ、歓迎しますよ」と快く受け入れてくれ、自分が住む部屋まで連れて行こうとしたが、ヒーロー夫人も含めた地下の人達はそれを止めた。所詮僕はよそ者だ。流石に地下の全てを把握させては貰えない。

となると僕はどこで寝泊まりすればいいかヒーロー夫人に聞くと「ここだね」と言い、酒場を示した。ヒーロー夫人の目は冗談を言っている様ではなかった。嘘だろ。こんなお酒臭い場所で寝れる訳がない。大体、全員が全員この場から離れるのだから僕は広い空間の中一人で寝ることになる。流石の僕も心細かった。

そんな風に心配にしていると、ヒーロー夫人と高梨君が右手を挙げた。何の為の挙手かと思ったら、どうやら僕と一緒に酒場で寝るという意味表示だったようだ。僕としても願ったり叶ったりだったので、甘えさせてもらった。

ヒーロー夫人に目をつむるよう言われる。言われた通りに両手を両目に覆い隠せて五分。長い間閉じていた目を開けると、酒場からはヒーロー夫人と緑色の寝袋を三人分持ってきた高梨君の姿があった。五分の間に今までどんちゃん騒ぎをしていた人達が全員居なくなっただようだ。一体全体、どこに行ったのやら。

それから寝袋に僕と高梨君が入った。机と椅子を端にどかせて、

地べたに横になる。ヒーロー夫人は寝袋に入らずに、椅子に座って寝た。着物が崩れたら困るからね　とのことだ。まあ、極道の妻のようなヒーロー夫人が寝袋を使って寝るというのもなかなかシユールで見たかったシーンではあったのだが。

寝袋に入りながら、僕は色々なことを思い返していた。亜希子のこと　母さんのこと　父さんのこと　そして、徳永切裂のこと。

僕が結婚を急いでいたのは、亜希子を忘れようとする為でもある。やっぱり永遠に一人の女性に囚われているのも馬鹿な話だと思うし、何より僕が永遠に独り身だと亜希子が悲しむと思うからだ。

だが……それでも……そうは思っても、心の奥底では亜希子を忘れられない自分がいる。その為に、女性と全く付き合おうともしない自分がいる。亜希子が悲しむに違いないのに。

そのせいもあって、僕は徳永切裂に復讐しなければならぬ。これは僕の人生がかかっている復讐なのだ。

そんなことを悶々と思いつけていると、誰かに頬をビンタされる感覚が僕を襲った。何事かと思いついて体を勢いよく上げると、高梨君が笑顔で僕を見て、ヒーロー夫人がカウンターでキセルを右手に持ちながら口から煙りを出している光景が目に入った。

「朝ですよ、佐藤さん。地上では大雨暴風洪水警報発令中です」
こうして、現在に至る。

まず僕は、腕時計で時刻を確認した。現在午前五時。起こすのは早過ぎるんじゃないかと高梨君に文句を言ったら、酒場が午前七時から開くらしいので、この時間に起きないと後々マズイそうだ。

「いやでも、それでも流石に早過ぎるんじゃないですか？　後二時間もありますよ？」

「うるさいね」
僕がこう言うと、高梨君ではなくキセルを手につくヒーロー夫人が応対した。

「私は朝食を済ますのに三十分かかるんだよ。これくらい、我慢し

たらどうなんだい」

「……………」

よく見てみると、ヒーロー夫人の目は暗くやつれていた。朝に弱い人なんだろうか。苛々しているようにも見える。

じつとヒーロー夫人の顔を眺めていると、ヒーロー夫人はそんな僕をいぶかしく見つめ、こう言った。

「……………それに、七時から皆が来ちまうからね。あんたに鍛える気があるんなら、この時間に起こすのがちょうどいいんだ」

「へ？」

いきなりのヒーロー夫人からの提案に口をポカンとしてしまった僕を背に、ヒーロー夫人はカウンターのすぐ側へと近付いた高梨君にキセルで指示した。高梨君の手には、黒く描かれた外心で形成された丸い円が、三重に存在する持ち運び用のホワイトボードと、茶色いガムテープがあった。ホワイトボードの四辺を、僕から離れた青い壁にガムテープで丁寧に貼る。

「何を……………」

言葉足らずな疑問をそのまま口にしてしまったが、それには理由があった。遠くから過程を見ている分には訳がわからなかった高梨君の行動だが、全て終了した時、ようやく意味がわかった。

これは、『的』だ。

「栄作。あんた、拳銃持つてんだろ？ あの的の中心目掛けて撃つてみなよ。ガムテープは特別製で、ホワイトボードは、まあ壊れるけど、その向こうの壁は壊れない仕組みになってるからさ。今から二時間……………中心だけを撃ち続ければホワイトボードはそこから離れないよ」

ヒーロー夫人が、淡々と言った。作業を終えた高梨君が、不安げな目つきで僕を見る。

……………成る程。ルールはわかった。要は、二時間　僕は一つの地点だけを狙い続けなければならぬということか。少しでもズレると、ホワイトボードに二つ目の穴が出来てしまう。

僕は、服の内側にしまっていたリボルバー式の拳銃を取り出した。「どうして僕が拳銃を持つてるとわかったんですか？」

「私を舐めるんじゃないよ。服の膨らみを見れば、一瞬でわかるさ」
言つとヒーロー夫人は、カウンターの足場から、銃弾が山ほど入られたビニール袋と銃を一つ取り出した。目算だが、三十はあるだろう。

「弾はまだまだある。銃も言ってくれば少しだけ予備はある。好きなだけ撃ちな。音調整備はバツチりだから、隣で寝てる奴らに迷惑かけることもないだろ」

「……ありがとうございます」

「礼を言うにはまだ早いよ。徳永切裂を捕らえてから、言っておくれ」

「……はい」

僕はヒーロー夫人とカウンターに隠れた高梨君に感謝をしながら、仮説トイレによって来た入口まで下がった。ここからホワイトボードまでは通常の射的練習の距離の二倍はある。

普通の心境なら無理だと判断するだろう。

だが、僕は拳銃を手にとり、構えて、引き金の前に人差し指を置いた。僕は両目を開けたまま銃を撃つ。片目を閉じたらそれだけ集中力が落ちると思っっているからだ。

そして、狙いを定める。今の僕には、何も聞こえていない。視界には、拳銃の上部と、的しか入っていない。無意識のまま呼吸を止める。ピタリ、と張り詰めた空気を感じた。

僕は、自分の狙いを信じて迷わず引き金を引いた。銃を構えた左腕が勢いを殺す為に上へと持ち上がる。加速する弾が銃口から発射され、一直線に着弾点へと向かった。

銃弾は、円の中心を捉えていた。

「す………凄いですよ、佐藤さん!!」

高梨君が歓声をあげるのがわかった。気持ちは有り難いが、まだまだ時間はある。少し静かにして欲しかった。ヒーロー夫人は「左

利きだったとはね」と言っただけで、高梨君を静かにするよう促した。そのままカウンターの奥へと入って行った。朝食を食べるのだろう。高梨君も名残惜しみながらカウンターの奥へと入った。

……さてと。リボルバーに込められた銃弾は六発。とりあえず残りの弾が無くなるまで撃ち続けよう。それを終えたら、あの袋を持つてくればいい。

僕は拳銃を構えて、撃った。

そうして この一連の動作を何回も繰り返して 一時間五分。今の所僕は執念で一撃も中心から外さないことに成功している。人間の集中力というのは一時間が限界だ、というような話を聞いたことがある。そんな話、僕には関係のないことらしい。袋は二つ目だ。ヒーロー夫人と高梨君が静かにカウンターに置いておいてくれたお陰で助かった。そのヒーロー夫人と高梨君というと、カウンターでじつと僕と的を眺めている。

改めて拳銃を構えて、撃つ。中心に着弾。成功。腕時計は六時五十四分を示していた。次で最後だろう。ちょうど、リボルバーには残り一発込められている筈だ。

既に、拳銃を持つ両手両腕に感覚はない。それでも、僕はもう一度構えて、狙いを定めた。荒く息を、口を力強く閉めることによつて無理矢理抑える。額から流れる汗が、地面に落ちた。

「……………」

僕は、撃った。

最後の一発は……………中心から、左に少しズレた所に着弾した。ホワイトボードに、穴が横並びに二つ出来る。

「……………畜生ッ」

緊張の糸が切れたのか、はたまた悔しさからか、僕はその場に大の字になった。息が荒い。いくら呼吸を繰り返しても、息は整わない。

「佐藤さん……………」

高梨君の眩きが聞こえた。彼も、息を呑んで僕の行動を見守っていてくれたのだろう。しかし、僕は最後の最後で外した。やっぱり…… まだまだだ、僕は。

呆然と青い天井と光りを眺めていると、ヒーロー夫人の顔がいきなり現れた。

「失敗したね」

「…… すいません。最後の最後で失敗しました」

「最後だろうが最初だろうが関係ないよ。失敗は失敗だ。過程なんて関係ない」

「そうですね…… その通りです……」

「悔しいかい？」

「…… はい」

「自分の力がどれくらいなのか、把握出来たかい？」

「…… はい」

「徳永切裂を今から捕まえに行くかい？」

「…… つ、いいえ」

「じゃあ、あなたは大丈夫だ」

そう言つと、ヒーロー夫人は片手で僕の体を起こした。パン、パン、と背に付いたホコリを払ってくれる。

「好きな時にここに来な。酒を飲みたくなった時でもいいし、もう一度挑戦する為に来たら、酒場は閉店にするからさ。皆には、私から言つとくよ」

ヒーロー夫人は、僕に向かって微笑んだ。とても眩しい笑顔だった。

「さあ、朝食にしようか」

「…… え？ 七時から開店じゃないんですか？」

「八時からなんですよ、佐藤さん」

僕の問い掛けに、高梨君が答えた。

「え？」

「ま、そんな所だね。ゆっくり休むといいさ。上はまだ、荒れてる

ことだし」

そう言つと、ヒーロー夫人と高梨君は、僕を見て笑つ。

「……………」

二人して……。全く。いせたりつくせり過ぎて、何も言えないじやないか。

「二人共……ありがとうございます……………」

「へへへ」

「だから言つたろ？ それを言うにはまだ早いつて」

いつの間にか整つていた息を確認して、僕は二人に感謝した。

さてと、用意してくれた朝食を食べさせてもらおう。高梨君がカウンターからトーストを三つ持ってきてくれ、僕はカウンターの近くに机と椅子三つを運んだ。

「食べましようか、佐藤さん」

「食べましよう食べましよう」

僕と高梨君が椅子につくと、先程まで僕が撃つていた場所で、ヒーロー夫人がキセルをふかしているのが目に入った。

「何やってるんですか？ 早く食べましようよ」

高梨君が催促する。だがヒーロー夫人は、こちらへ来ないでキセルを地面に置いたかと思うと、右手を着物の 膨らんだ胸の部分の内側へと入れた。

ヒーロー夫人の右手には、拳銃が握られていた。

「……………ま、久しぶりだから自信はないけど」

言うがすぐに、ヒーロー夫人は銃口を全てバラバラな方向に向け、一時も止まらずに六発連続で撃つた。下、横、上、斜め。その間六秒。一発に一秒程しかかけていない計算になる。

思わず閉じてしまった目を恐る恐る開けてみると、六発の弾は、全体的の中心に着弾していた。ホワイトボードの下 僕が撃つた後の弾の山に、六発分の弾が重なる。

「えー!?」

「な……………跳弾……………!?!」

ヒーロー夫人は、銃口からゆらゆらとあがる煙りを、口元で息を吹きかけた。

「こんなところかね」

この人は……ヒーロー夫人は、僕の想像を遥かに越える人物のようだった。

ヒーローがいるのに平和な街の表？

「一応礼は言っとくけど、私は助けてなんて言っていないからね。だからありがとうなんて言わないわ」

「日本語を学びなおせ！」

「失礼ね！ 今習ってる所なのよ！」

台風の中助けた女の子は西山あゆみという小学二年生だった。台風が去った一週間後の日曜日。ヒーローから俺の住所を聞いて、御礼と挨拶を兼ねて来たらしい。この街の個人情報保護法とかはどうなっているんだろう。

そんな西山あゆみの後ろには、無駄に長いリムジンと黒服を着た執事が一人いた。

「いいこと？ 私、西山あゆみは西山財閥の大事な大事な一人娘なの。だから、私がここまで足を運ぶなんて滅多にないんだから。感謝しなさい」

と言いながら、西山あゆみは幼稚園児にくらいにしか見えない小さな小さな体を踏ん返り返す。世界は私を中心に回っているのよ、と言わんばかりの勢いだ。

「ああそうですか。それじゃ、わざわざどうも」

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！ なんて家の中に帰ろうとするわけ！ 私よ？ 西山財閥の娘、西山あゆみが訪問してきたのよ？

テレビにも出た有名人なの！ なのになんでそんな淡々としてくれるの！」

こいつ……本気で言ってるのか？

動かない左腕が疼いた。

撃たれた左肩が疼いた。

「……うるせえ」

「へ？」

言つと俺は西山あゆみのツインテールの中心、つまり頭のとっぺ

んを掴む。

「い……痛い痛い痛いっ！」

西山財閥の一人娘とやらが痛がる姿を見て焦ったのか、執事が動く。知るかそんなの。勝手にしてる。

「黙って聞け。いいか。お前はどうかやら人気者らしい。学校や周りの人間の対応もそんな感じなんだろう。だからお前は調子に乗る。それが両親の力のお陰だと気付かずに」

「そ……そんなことないわ！ 私、お父さんとお母さんのこと尊敬してるもの！」

俺は更に力強く頭を握った。しかめつつらをする。西山あゆみも俺も。

ふざけんなよ。

両親に甘えたいのは俺も一緒だったんだ。

「だったら尚更だ。その親を利用して調子に乗るな」

「な……そんな……そんなこと……」

「礼に来てくれたのは嬉しいんだ。わざわざ俺の住所を調べてくれたのも嬉しい。それならな。それならちゃんと、俺を見て言ってくれないか？」

俺は右手を離した。

西山あゆみは一瞬泣きつ面になるが、無言で佇む俺を見るとすぐに目を手で拭き、何も言わずにリムジンへと向かった。

「……ま、しょうがない」

礼に来てくれただけでも嬉しいんだ。それ以上の文句なんて言っても意味がない。

「待って！」

すると、家に戻ろうとリムジンに背中を向けたら、後ろから声がかかった。

振り向くと、リムジンが音と共に去り、西山あゆみだけがそこに残った。もちろん黒服の執事もいない。

小走りでもた俺の近くに來た西山あゆみは、俺を見上げてこう言

った。

「く……車が私を置いて行っちゃったの……だ、だから、私と遊んでくれない？」

「はあ？」

先に言っておくが俺にロリコンの気はない。

当然子供が訳のわからないことを言っても粉骨碎身して話しに付き合っつてやるうなどという健気さもない。

なので、言っている意味がわからなかった。

「だ……だから！ 私、あなたと一緒にどこか行きたいのよ！」

いつの間にか西山あゆみは赤面していた。沸騰寸前のやかんの様触れたら火傷し、そのまま放っておいたら沸騰してしまっつて、お湯が零れてしまっつ。

意味がわからないままだったが、今日もどうせ大学が休みだ。一日中暇だったので、暇潰しをしたというのも確かにないこともない。

「ん……じゃあそこら辺ぶらつくか？」

そう言っつと西山あゆみは、赤くなっつていた顔をより一層赤くし、そのまま俺の目を見ながら言っつた。

「あ……ありがとっつ……」

「……………」

……………うん。

これがこいつなりの礼なのかもしれない。

根はいい奴なんだろうな。

そう思っつながら俺は西山あゆみと共に歩き始めた。

そして歩き続けること十分。

「あ、そうだ。俺、お前のことなんて呼べばいいんだ？」

電柱が見える街並みの道路の真ん中。車があまり通らないので二人して陣取っつて歩いていた時、ふと思っつ付いて俺は言っつた。その言葉に西山あゆみはきょとんとするも、確かにどうしまっつしょうか、と

言い人差し指を顎に指し、考える表情をつくる。

「そうね。いきなり呼び捨てつても馴れ馴れし過ぎて気持ちが悪
いって言うより気分が悪くて吐き気を催しそうだし……そしてその
ゲロをあなたにかけてしまいたくなりそうだし……」

「仮にもお嬢さんならもう少し上品な言い方出来ませんか？」

「うーん……そうだ。私の名前は西山あゆみだから、略してにしま
あみってのはどうかしら？」

「別人じゃねそれ！ 略すにしてももう少しいい方法があるだろ！
にしまあみって！

「二文字しか略せてないし！

「じゃあ、にまあゆ」

「地味に言いにくい！ 人間の名前でもないよそれ！」

「無駄にうるさいわねあなた。略シリーズは駄目なの……。それじ
ゃあ普通に西山ってどうかしら？」

「小学生相手に苗字をそのままつてもキツイものがあるぞ
しかも西山って。」

「なんか堅苦しいじゃないか。」

「はあ……本当にどうしようもないわね。なに？ 自分からは何も
言わずに人から提案されたことをただただツツコんで否定するしか
ないの？ まあ酷い。私はあなたのことをバッドマンと呼ばせて貰
うわ」

「バッドマンじゃなくてバッドマン！ 直訳したら駄目な男じゃね
えか！」

「辛辣過ぎる！」

「こいつ、俺が滅多にしない説教で全然懲りてねえ！」

「あーもううるさいわね。いいわ。普通にあゆみ様にしましょう。
ほら復唱。せーの」

「あゆみさ……ってお前これ服従誓ってんじゃねえか俺！ 怖い！
手口が怖すぎるよこのガキ！」

「なんだ。バッドマンにもちゃんとした考える力が備わってたのね」

「そのあだ名もう決定事項なの！」

「なぜ？ どうして？ これを常に考えることが大切なんです」

「またしてもドラゴン桜っ！」

芥山先生じゃん！

ドラマの再放送でも見てるのかこいつは！

「あーじゃあ俺お前のことあゆみって呼び捨てするぞ！ いいのかそれで！」

そんな提案をしたら、西山あゆみはいきなり腹を抱え始めた。

「う……オエエ……」

「マジで吐き気もよおしてんじゃねーか！」

そんなに！

そんなに俺から名前で呼ばれるの嫌なの！？

「もう……あゆみでいいわ……めんどくさいし……」

「そ……そうか……」

諦めたようにふらついたあゆみは、その後五分間あれを出し続けた。今度、改めて話しあおうな。結構深刻な問題だから。

因みに俺の刀銃という名前をあゆみに言うと、ハンツと鼻で笑われ、それから刀銃と俺を呼び捨てで呼ぶ様になった。

バッドマン並に酷い名前ってことかよ。

否定は出来ないけども。

そうこうしている間に人通りが目につく大通りにさしかかった。

周りには以前言ったカフェや、服屋等のおしゃれな店が立ち並んでいる。

そんな中。

俺はピンチに陥っていた。

大体そうなんだよ。いくら善良な一市民である俺も端から見ただけの成人男性だ。あれ？ 普通じゃん？ じゃあなんでこんな事態に？

まあ結局何が言いたいのかと言うと……

「……………刀銃君？」

目の前には市民の悲鳴を聞いて飛び出してきたらしいヒーローが、悲しい顔で俺とあゆみを見ていた。

「幼女誘拐って本当かい？」

「断じて違う！」
そう。

こんな休日の真昼間に大の男が幼稚園にしか見えない小学生と二人で喋りながら歩いていたら、当然そう思われる。

見渡すといつの間にか、大量の人が俺達二人を囲んでいた。
はっはっはー。

もう逃げられないって訳かー。

「うっ……そうなんですよヒーローさん……」
するとあゆみはいきなり泣き真似を始めた。

両手で顔を覆っているが、よくみるとニヤニヤ笑っているのがわかる。

俺は泣き真似だとわかった。

だが、しかし。

「刀銃君……本当なんだね……」

「この犯罪者！」

「ロリコンー！」

「ロリータコンプレックス！」

俺への非難の声は、あゆみの泣き真似と比例してどんどん大きくなっていった。

い……今すぐやめやがれその泣き真似っ！

「うわーん！ 大きいお兄さんが睨んでくるわー！」

俺の心からの懇願と反対に、あゆみは泣き真似をより一層大きくして続けた。

「今すぐその子から離れる！ このロントリーコンビネーション！」

「恥ずかしくないのあなた！ このロリーコンパニオン！」

「このロンドンコンピューター！」

「ロングコンサート！」

「ロマンチックコンテンツ！」

なんで皆さん言うことが違うの！

後半なんて略してもロリコンにすらならないし！

「皆！ 静かにしてくれるかい！」

そこで、大衆の中からサングラスの上からでもわかるくらい悲しい顔をして、ヒーローが喋った。

「この男は刀銃君と言った！ 確かに犯罪を犯したかもしれない！ この平和な街でこれ程由々しき事態はないよね！ でもちよつと待って！ 刀銃君も一瞬の気の迷いでやってしまったかもしれない！ それを…… たった一回の間違いを、僕達は何の事例もなく裁いていいのかな！ この男の処遇は僕に任してくれ！ 後は僕が受け持つからさ！」

ヒーローの演説で、周りの人々は先刻までの勢いが嘘の様に去っていった。流石ヒーローねえ どうかのロリコンとは違うわあ 等と呟きながら。

台風の中助けた女の子に裏切られ。

命の恩人に演説をさせてまで助けられ。

女の子が嘲笑の笑みで見つめ 命の恩人が終始悲しそうな目をして そんな中呆然と、ただただ力が抜けて泣き崩れていく大学生がそこには居た。

悲しいことに、俺だった。

ヒーローがいるのに平和な街の表？

「ハア……ハア……」

目の前に居る彼女はさつきからずっと息を苦しそうにしている。

「ン、ンンツク……ハア……アツ」

顔をどんどん赤くしていき、時間が経つにつれ息を荒げる。

周りが見ているのにも関わらず。

恥ずかしいなんて感情を知らないかのよう。

「ウウウ、ンアツ……クウ……アツ……ハア……ハア……」

次第に衣服が乱れていくが、彼女は気にしない。そのままの状態
で動き続ける。

顔を苦しそうに歪めながら。

「ハア……ハア……アアアアアツ！」

三十分が経った。

それでも彼女は止まらない。

もっと激しく。もっと辛く。もっときつく。もっと荒げ。もっと

動き。もっと紅潮させ。もっと高ぶらせる。

もっと。

もっと。

その思いは途切れない。

「ハア……ハア」

そしてようやく彼女は止まった。

息を整える為に深呼吸を繰り返し、じっとこちらを見つめる。

「あれ？ 刀銃？ あんた、そんな小さい子を連れて何故スポーツ
ジムに来てんの？」

ランニングマシーンから降りた彼女は、乱れている服をちゃんと
着直し、置いてあったスポーツドリンクを飲みながら俺とあゆみを
見た。

「二人でカフェとかデパートとか図書館とか行ったんだけど、もう

行く所が無くなつちまつたんだよ。行く宛てもないし、どうせお前が居るだろうかなあと思つて来ただけだ」

「ふーん。そうなんだー」

俺に全く興味が無い様だ。相変わらず。日曜日だと言うのに体を動かすところは変わらない。

俺が小さい女の子を連れてきてもガン無視か。ガンガン無視か。逆に凄いなそれ。

「紹介する。西山あゆみだ」

「西山あゆみよ」

俺からの紹介を受け、あゆみはペコリと頭を下げた。なんか、こうしてみると本当にお嬢様だよなあ。

「西山……西山……西山！ えつとあなたもしかして、西山財閥の一人娘！」

「え……ええ。そうだけど」

すると彼女は一層目を輝かせてあゆみに近付いた。うーむ。いくら万策尽きたからといってこいつの元に連れてきたのは、やっぱり間違いだったかもしれない。

嬉々爛々とさせて、彼女は一言こう叫んだ。

「誘拐してお金を強要してもいい！」

これが俺の大学での友人。

運動オタクでスポーツと金目の物（者）にしか興味が無い。

大学で浮いてた俺に唯一話しかけてきた女。

だけど本人も大学で浮いている。

スレンダーな体格でポニーテールに髪をまとめる。

運動時でもポニーテール。

それが異様に似合っている。

妖艶。

運動関連のサークルを全て掛け持ちしている狂人。

練習には出ずに試合だけは出ようとする鬱陶しい女。

言われたことは何でもこなす。

一円があればそれが授業中でも奇声をあげて飛び付く。
存在が濃い。

キャラクターが濃い。

濃すぎて誰も近寄らない。

濃すぎて誰も近寄れない。

ある意味俺と正反対。

そんな友人。

叶香里だ。

まあここでじっと叶の運動シーンを鑑賞していても仕方がない……
…というより、それこそもう犯罪の領域だと判断した俺は、あゆみと会った過程と、今日どこへ行って何をしていたのかあゆみと共に説明した。

「成る程ね。つまり刀銃は少女を誘拐した犯人として逃げまくっている」と

「ひとつかけらも合ってねえ！ お前と一緒にするな！」

ことのあらましを懇切丁寧に教えたら、何故だか俺は犯罪者になつていた。

「失礼ね。私がもしも誘拐をしたら、その子供には快適な環境を用意するわよ。途中で死なれたりでもしたら困るし。それに成功したら金が手に入るのよ？ 山ほどの金よ？ 後先考えなくてもいいくらいのお金よ？ お金。お金。お金お金金金金……」

平和な街というのは嘘かもしれない。

だって、こんなにうっとりしながら金金呟く奴がいるもんさ。

凄く笑ってる。

それが怖い。

「という訳でこの子、私が預かってもいい？」

「この流れですんなり渡す奴は逆に犯罪者だ！」

「いいじゃん。悪いようにはしないよ」

「子供には悪いようにしないけど両親に金は要求するだろお前どうせ！」

「当たり前じゃん！」

「本人目の前にして断言するな！」

「世のお金だよ！ 次に運動！ その次はスポドリ！ 次は財布！ 銀行！ ジム！ 預金通帳給料ランニング練習試合！」

この世の駄目な部分をかき集めたとしか思えない人間叶香里は叫び続けた。仕舞いにはハーハッハーと雄叫びをあげる。

実に醜い。こんなの駄目だ。トラウマものだ。子供が見ていいものじゃない。やっぱりこいつがいるかもしれないと一度でも思った場所にあゆみを連れてくるんじゃないやなかった。こんな残念な映像をゴールデン番組なんかで流してみる。即刻PTAやらなんやらが動き出して放送を中止させようとするに違いない。

あゆみに向かって、さっさとここから出るぞと言おうとしたら、あゆみが無表情のまま凍りついているのが見えた。

……うん。流石のあゆみでもやっぱりキツかったか。すまなかったな。次はあれだ、もっと聖なる空間へと足を向けようぜ、あゆみ。そうだな、映画館なんてどうだ。

「早く外に出るぞ」

これからの予定を考えて言ったのだが、こう言われて俺を見上げるあゆみの顔は、何故だか呆然としていた。

じつと叶を見つめ、しばらくした後あゆみはこう呟く。

「世の中にはあんなに綺麗な人がいるのね……」

「……は？」

……まあ……まあ、わからないでもねーよ。あんなに嬉しそうに叫ぶ奴はそうそういないだろうし、叶は美人の部類だ。そんな奴が笑えばそれなりには見えるだろうしな。正直、俺が最初にこいつあってこの顔を見たときの興奮は言葉に言い表せないものがある。なので言葉に言い表せないものだから勿論俺はこれから決してこの過

去に対する感想は言わないつもりだ。もし言い表わせる言葉をそのまま口に出してしまった場合、叶に軽蔑されると思うからさ。いやこれホント。言えねーって。

そんな叶のこんな姿だ。あゆみが綺麗というのも一寸法師の身長の十分の一くらいは頷ける。

……でもさ。

「アイウオントウヨアマナー！」

「あいつは駄目だ！ 駄目人間だ！」

叶はやっぱり駄目だって。

改めてそのことを強く再認識した俺は、あゆみの手を思いつきりひっぱり、逃げるようにして急いで外へと出た。

スポーツジムの外へ出るとリムジンが待機していた。あの執事も一緒に。

「あ……ありがとう」

もじもじと俯きながら礼を言うのは西山あゆみ。

「今日は楽しかったわ。お……お礼をしたくてきたのに、私が楽しませて貰ったというのもなんだかおかしな話だけど」

恥ずかしいのかなんなのか顔が赤くなるが、それでも初めと違ってちゃんと俺の目を見ていた。うーむ、そう思うとなんだか感慨深いものがある。実際のところはあゆみと知り合ってまだ全然時間がたっていないけども、それでもやはりあゆみと喋っているとジンと心に来るのさ。

「いいよそんなの。俺も楽しかったから」

「そう……ならよかったわ」

言つとあゆみは「セバスチャン」と執事に命令し、執事に一枚の紙を出させた。

てかセバスチャンって。

マンガかなんかの世界にしかないと思ってたよ。

そんな場違いなことを考えている俺に向けて、あゆみは紙を両手で持ちながら俺に向けた。

「これ……私の家の住所と電話番号……」

プルプルとした手で俺に渡すと、それから何も言わずに一目散に走ってリムジンに乗り込む。

車の中に入り、窓を開ける。

そこから、あゆみの小さな顔を眺めることが出来た。

「またどこかに連れて行きなさい！」

最後に皮肉を残して、小さな台風は過ぎ去って行った。

ヒーローがいるのに平和な街の裏 四

嵐が過ぎ去った後、僕は酒場の手伝いを一日だけさせてもらった。ヒーロー夫人と高梨君への感謝の気持ちからという理由もあったが、一番は自分の心境の整理だった。

二時間の射撃訓練。あの時、僕は正直なところ、三十分も経たない内に集中が切れていた。『今にも倒れそうだな』状況が、一時間三十分もの間続いていたことになる。

それでも僕は撃ち切った。最後撃ち損じてしまったが、それでも僕は自分の限界を越えて撃つていたという確信がある。

僕は一時間三十分の間、自分の両親と恋人を殺した徳永切裂を的に見立てて撃ちつけていました

なんて言葉は、嘘になる。

僕は撃ち続ける間、何も考えていなかった。

……いや、正確にいうとそうではない。

僕は、何も考えることが出来なかったんだ。

父さん母さん亜希子徳永切裂高梨君ヒーロー夫人ヒーロー門番の若い女性よしえさん上司同僚部下自分の成果を祝ってくれた警察のお偉いさん慣れに慣れた拳銃による牽制に驚きたじろぐ人達初めて逮捕した中年のおじさん初めて対峙した立て籠もり犯拳銃で撃つて動きを止めた虐待を強要していた女性警察署に勤務していた頃警察署に駆け込む初老の男性目を奪われる程美人な教師ナース服のまま病院を抜け出した患者さんを見つけ下さいと歎くメガネの女性百円を拾ってきてくれた女の子先輩として僕を教育してくれた同年齢の婦警担任の先生同級生初恋の女の子転校してきた外国の男の子叔父さん叔母さん従兄弟おじいちゃんおばあちゃん自分自身僕という人間佐藤栄作……。

全てを切り捨てて、僕は撃ち続けた。そして、ヒーロー夫人の課題を後一步というところまで辿り着くことが出来た。

冷静に考えてみてくれ。ただの一介の警察官に　普通の人間に、二時間の間、しかも的の中心を外さずに連射し続けるなんて芸当が、出来る訳がない。

僕はそれを、何も考えないという方法でやり抜いた。こんな経験は初めてだった。いつも僕は、怒りや鬱陶しさや億劫さを感じながら銃を構えて撃っていた。

だが、今回のヒーロー夫人の課題では、本能でだろうか何なのか理由はわからないが、僕は何も考えないことにより、通常時とは比べものにならない程の集中力と正確さを得られた。

ならば、結果論としてはこうなる。

僕は何も考えずに徳永切裂を撃たなければならない。

つまり僕は今のところ、徳永切裂を見つけたら、三人を殺した復讐を一時でも考えてはいけないことになる。これは厳しい条件だった。しかし、そうしないと僕は強くなれない。それを確認した僕は、気持ちの整理に一日を要した。だから僕は酒場の経営を手伝った。

様々な『元』犯人がいた。テレビ談議に華を咲かせたり、どのアイドルが一番可愛いか、お笑い芸人で今後消えそうな人は誰かなど。全員が全員テレビにくぎづけで驚いたが、テレビ鑑賞と飲酒しかすることがないのかもしれないと思ったら、仕方ないと自分で勝手に理解した。誰かに話しかけるとかはしなかった。僕は警察の人間だ。結局射撃の時高梨君にはバレたが（高梨君は笑ってそれを受け入れてくれて胸をおろした）いつボロが出てもおかしくはない。出来るだけ身分を隠して行動したかったので、積極的な接触は控えさせてもらった。

一日中、お酒の匂いが充満する空間で考えに考えた結果、僕はいくつかの対象法を得た。

母さん父さん亜希子のことを忘れる。

徳永切裂を見ない内にかむしゃらに撃って終わらせる。

誰かに代わりにやってもらう。

別人格を入手してそいつにやってもらう。

銃を諦めて別の武器を使いこなす。

結局。

嫌だ。出来たらやつてる。自分でやらなきゃ意味がない。都合良すぎ。だったらこんな問題考えるな。

という結論に達した。

「短い間でしたが、ありがとうございました」

僕は、地上の仮設トイレに上がる出入口の前で、ヒーロー夫人と高梨君にこう言った。

「色々大変だとは思いますが、頑張ってください。佐藤さん」

高梨君が、鼻を右手の人差し指で擦りながら僕に言う。ヒーロー夫人はキセルをふかし、無言の無表情を貫いていた。

「ありがとうございます。とても有意義な時間を送ることが出来ました。二人には、とても感謝しています」

精一杯の気持ちを伝え、僕は二人に背を向けた。地上に上がったら、まずは生活する場所とある程度の金銭を確保しなければならぬ。当面の目標を見定めた僕は、両開きの出入口に手をかける。

「ちよつと待ちなよ」

すると、背後からヒーロー夫人が声をかけてきた。もう一度、僕は出入口に背を向ける。

「何ですか？」

「あなた、徳永切裂の居場所を聞きに来たんじゃないのかい？ いいのかい？ このまま帰って」

ヒーロー夫人は、相変わらず無表情だった。その言葉の裏に隠されている心情を読み取ることが全く出来ない。

僕は、そんなヒーロー夫人を見据えて言った。

「昨日、一晩考えました。僕が徳永切裂を捕まえる為には、まだまだ力が足りません。今、徳永切裂の居場所を知ってその場に向かっ

たら、真つ先に僕はやられてしまつてしよう。それじゃあ意味がないんです。僕は、絶対に徳永切裂を捕らえなければいけないんです。何としてでも……何をしても」

「それでも、あんたはわかかつてる筈だよ」

ヒーロー夫人は、僕の言葉を遮つて発言した。

「今、私から情報を聞き出すことにデメリットは全くない。後に徳永切裂を捕まえるにしても、早めに奴の居場所を知っておいて何ら損はないからね。それなのに、何であんたは私から聞き出そうとしないんだい？」

「……全く……この人はつくづく意地悪な人だ。自分の中で全て答えを持っているのに、あえて僕を試す。」

「じゃあ、僕が今ヒーロー夫人に徳永切裂の情報を教えて欲しいと言つたらどうなるんですか？」

「どうもならないよ。その場であんたを撃ちのめして終わりさ。実力差がはつきりしてる奴の居場所を知つたつてやれることは何もない。そんな簡単なこともわからない奴なんて、地下から離れさせるのも勿体ない話しさ」

「……………ヒーロー夫人、貴女言つてることがくちやくちやなんですけど」

ヒーロー夫人の言葉に、彼女を女神と称した高梨君が静かにひいていたが、僕は理解した。

彼女は、ただ単に僕を試しているだけなのだ。

地下に呼んだのもそう。二時間の連射課題もそう。僕の要望を聞いて一日酒場を手伝わせてくれたのもそう。今のあまのじゃくな質疑応答もそう。

彼女は、僕という人間を、陰ながら手伝うことによつて『楽しんで』いるのだ。

現に、リアクションをしない僕を見ながら、彼女は口の端を、ニタアと歪ませていた。

彼女は決して僕の理解者であろうとしている訳ではない。かと言

つて、僕を積極的に助けようとしているのでもない。

彼女は、僕を遠くから鑑賞する『傍観者』なんだ。

「ヒーロー夫人、もう僕に聞くことはないですか？」

「ああそうだね。今のところは何も無いよ。」

「また僕に対する質問が生まれる時が来るんですか？」

「さあどうだろね。それは私じゃなく、あんたが決めることさ。」

「カッコイイことを言っている様で、意味のわからないことを言うてますよ、ヒーロー夫人。」

「何言っただい。そんなの、いつもの話しじゃないか。」

「自覚あつたんですか？」

「ロマンチストなんだよ、私は。」

「そんな歳取ったロマンチストは居ません。」

「そうだね。ところであんた、ロシアンルーレットに興味はないかい？」

「何で今この時にロシアンルーレットの話しを持ち出すんですか？」

「私は三十代前半なんだよ。」

「そうですね。じゃあ僕の対象外です。」

「残念だねそりゃ。撃っていいかい？」

「やめて下さい。」

「冗談だよ。」

「冗談なら着物の内側に右手を入れないで下さい。」

「怖いのかい？」

「ヤダなあ色つばいからですよ興奮するじゃないですか。」

「そうかい。」

初対面から今までの間で、一番長い会話を断ち切ったヒーロー夫人は、最後にこう言った。

「達者だね。私はあんたを助けられないけど、小さな小遣いくらいならやれるからさ。来たかったらいつでもここに来な。」

「……はい。」

僕は、ヒーロー夫人と高梨君に背をそむけて、出入口に入り、「

ウォーターメロン」と叫んだ。

これから大変だろうが、僕は僕の復讐を達成するまで、頑張って生きていこう。

そんな風に感慨深く思慮にふけていたが、僕は気付いた。どれだけ待っても、独特な匂いを放つ仮設トイレが上昇しなかった。

「あ、佐藤さん。上がる時の呪文は下りの呪文とは違うんです」

高梨君の声が閉まったドアの向こうから聞こえてきた。少し笑いながらだった。確信犯か、高梨君。無茶苦茶恥ずかしい。

「……何ていえばいいんですか？」

「『巨乳最高』と叫んで下さい」

「嫌です」

「だったら、『腹話術』と叫んで下さい」

「腹話術……！」

仮設トイレは上昇し始め、僕は地上へと向かった。高梨君の「さようならー」という声が小さく聞こえた。

壁にもたれながら、僕は巨乳最高と腹話術の関連性を捜しに捜したが、みつからなかった。もし関連性を見つけられた人は是非、僕に教えてくれ。何も報酬は出せないが。

しかし……巨乳最高と言っていたら本当に仮設トイレは上昇していたのだろうか。試してみたかったと言えば嘘になるが、気にしないことにした。

下りと同じ時間をかけて僕は地上に着いた。久しぶりの太陽の光りだ。台風の後ということもあって、さんさんと輝いている。軽く目眩がした。

僕は右ポケットを探り、銀行手帳と、住所が誰かの直筆で書かれた紙を出した。

取り敢えず僕は昭和風の町並みを歩き、犬の散歩をしている男性を見つけた。声をかけ、住所が示している場所を教えてもらう。男性は空いている左手で鼻を押さえて嫌な顔をした。よくよく考えてみると、僕は地下で一回も風呂に入っていなかった。酒の匂いでわ

からなかったが、試しに嗅いでみると強烈な匂いがした。お風呂と洗濯も必須のようだ。

男性はそんな僕に快く場所を教えてくれた。次の交差点を右に曲がったところらしい。言われた通りに行くと、信じられない光景が目に入った。

住所が示す場所には、茶色い木片が堆積された塊があつた。

一瞬で僕は理解した。

僕の居住予定地が、台風で崩壊したのだ。

僕の後ろを通り過ぎるおばちゃん二人が大きな声で話をする。

「あそこの家、台風で崩れちゃつたらしいのよ」

「まあ大変」

「誰もいなかったから怪我人とかはでなかったらしいんだけど、近々あそこに引つ越そうとしていた人がいるらしいのよ」

「まあ大変」

「でも、しょうがないわよね。いくらなんでもこの街で一番古い家よ。夜になると幽霊も出るくらいぼろかつたらしいし、崩れてもしようがないわよね。寧ろ、今まで建つてたのがおかしくらいだわ」

「まあ大変」

二人はそう言うつとすたこらさつさと去つて行つた。

僕は突然の事態に啞然としたが、直ぐさま切り替えて不動産に行く決意を固めた。幸いお金はある。それを元手に家を借りようとした。

手帳を開け、八桁の数字が記載されていて喜んだ僕は、瞬時にまたもう一つの事実に向面した。

「暗証番号……聞いてないや……」

八八八……八八八八八……。

僕は方向転換し、深呼吸をし、歩き、心を整え、仮設トイレに向かい、仮設トイレに入り、ウォーターメロンと叫び、地下に下り、扉が開かれ、僕の姿を見てポカンと口を開けた二人の姿を見てこう言つた。

「お風呂と洗濯と寝る場所と食事を貸してくれませんか？」

二人は見つめ合い、そして笑うって僕の方を見るとこう言った。

「おかえりなさい、佐藤さん」

「ここに住むなら手伝いな。そろそろ開店の時間だよ」

こうして僕は、地下で生活しながら徳永切裂を追うことになった。

ヒーローがいるのに平和な街の表？

翌日。

朝、目を覚ますと俺は目を疑った。

目の前に、刀と銃があった。

一降りの日本刀。輝きは白く美しい。よく手入れされているように錆一つない。

拳銃。リボルバー式。黒光りするその銃身は何者も寄せ付けない。刀と銃。

刀銃。

それらを見て初めに思ったのはこれだけ。

「なんで“ここ”にこんな物があるんだ？」

ここは平和な街。

俺が刀と銃を知っているのはただ単純に平和な街になる前にそれらを見た経験があるからだ。

銃は俺の両親が使った。思い出したくもない。忌ま忌ましいだけの物体。

……ん？

あれ？ ちょっと待て、おかしい。

それなら、何で俺は刀なんて存在を知ってるんだ？

いつ見たんだ？ 両親が居たくらい昔のことだったら俺は絶対に覚えてる。銃を覚えてるんだ。刀なんて、絶対に忘れる訳がない。じゃあ最近か？ そんな訳ないだろ。平和な街で、こんな物騒な物を目にする機会があったらお目にかかりたい。

この街の人間は誰一人こんな危ない物達を覚えていない。

危険は悪。

悪は危険。

どんなことでも揺るがないその意識は百パーセント変わらない。だから“ここ”にこんな物がある筈ない。

ならば何故存在してる？

何故俺は存在を知っている？

「……………」

……答えは出ない。どんなに考えたところで、意味がわからないぞどうすりゃ答えが出るんだよこれとかいう結論しか出なかった。これは俺の頭の悪さが原因なのか？ いやいや、そんなことはないだろ。自分の家に、いきなり出所不明の危険物体計二つがあったら誰でも思考回路が停止する筈だ。でも。

それならそれで、やる事は一つしかない。

「とりあえず処分しないと……………」

そう思い二つの物を手に取った瞬間、ノックも無しにいきなりドアが開いた。

「刀銃今暇っ！」

どこまでも空気が読めない叶香里だった。

何で…………何でお前はこういう時にこういう状況の時に限って登場シーンをつくりだすんだよ！

どうすりゃいい…………どうすればこのピンチを切り抜けられる！

俺の家にいきなり入ろうとした叶だったが、俺の前にある刀と銃を見て一瞬呆気にとられる。しかしここが流石叶というところか。

一瞬の内に曇らした顔をポーカーフェイスにしたかと思うと、今度はニパー、と明るい表情になった

「あれ？ 何それ？」

叶は俺の両手にある物を見て首を傾げる。

……………そうだよ。そうだ、そうだった。

いくら変人の叶でも、刀や銃なんて存在を知ってる訳ないじゃないか。

「ああこれか？ 何でもない。テキストに物産展を目まぐるしく回ってたらかんなん買っちゃまった。なんなんだろなこれ？」

その間約十秒。知らぬ間に言い訳が完成していた。我ながら最低

な性格をしていると思うが、まあそこは気にしないでおこつ。

「うーん……金目の物なら私が知らない筈ないし……じゃあどうでもいいや。金目じゃないならどうでもいいし。刀銃の変な趣味のことなんてどうでもいいし」

「最後の一言要らなくね！」

「アーアーもつうるさいですよ刀銃はー。そんなんだから幼女をストーキングしたりしちゃうんだよ」

「勝手に捏造するなよ！　する訳ないじゃんそんなの！　これでも紳士だから俺は！」

「新死？　何それ？　どんな死に方？」

「どんな漢字の間違いしたのお前！」

「だって紳士ってジェントルマンだよ？　刀銃はジェントルマンじゃないもん」

「……ぬう。」

まあ反論は出来ないけれども。

「私にとつてのジェントルマンは、ビルの上に立って札束を巻き上げて「ほら、金だ愚民共！　拾えよ！　地面にはいつくばってゼーハー言いながら拾いまくれよ！　醜く汚く金をせびれよ！」って言う人だし」

「怖えよ！　紳士どころか人間でも無え！」

「銭ゲバかよ！」

「普通に酷過ぎる！」

「なんでそんな奴が紳士なんだよ！　お前にとつては金を笑顔でくれる奴の方がいいんじゃないのか！」

「嫌よそんなの。つまんない」

「じゃあなんで！」

「いや。だって私、Mだから」

「……はい？」

「ドMだから」

二回言われても困るんだけど。

しかもドが付いたバージョン。

「Mって……あれ？ 服のサイズ？」

「つまらないボケしてんじゃないの。マゾよマゾ。ドマゾよ。だから私運動が好きなんじゃない。自分で自分を追い詰めるなんて……しかもそれを他人に見られてるなんて……私が汗をかくのを見て笑顔で会釈してくれる……皆私を虐める……アア……最っ高……」

朝っぱらから知人の部屋に押し入り顔を紅潮させ、体をよじって興奮し始めた奴がいる。

なんとそれは、俺の友人だった。

「で、お前は何の用で家に来たんだ？」

「だから言ったじゃん。暇なのよ私。どっか連れてけばバカヤロー」という訳で、俺は今叶と共に街中を歩いている。

刀と銃はとりあえず押し入れの中に入れておいた。叶の反応でもし誰かに見られても大丈夫だと安心したからだ。大丈夫。うん大丈夫。安心感とはまさにこのことだろう。なんせ街一番の変人と言っても過言ではない叶が普通にスルーした代物だからな。凄いぜ、旧世代の重火器。

「よし、次はあそこに行こう！」

しかしこの叶香里という女は俺の想像以上に嫌な奴らしい。空気が読めないだけならまだしもな話だ。

「ほら刀銃。あそこのブランドよブランド」

「もう俺の財布が悲鳴を上げる余裕もなさそうなんだけど！」

朝いきなり押し入った揚句、連れて行かれる場所はどれもこれも高価な物しか売ってない場所だった。

会計は何故か俺。

これで怒らない方がどうかしている。

「じゃあ今から銀行へ行こう」

「お前は俺を破綻させるのが目的なんだろ！　なあ、そうなんだろ！」

「違う違う。そうじゃなくて、ちょっとだけお金を銀行の人から借りてほしいだけだよ」

「貸し借りじゃなくて強盗の方！」

「こいつやっぱり半端じゃねえ！」

知人を笑顔で犯罪者に仕立てようとしている！

「銀行はお金を貸して、借りる所じゃん？　だからいいんだって少しくらい」

「お前の銀行の定義は間違ってる！　いいか、銀行つてのは自分のお金を預ける所だ！　貸し借りする場所はまた別の所なんだよ！」

「え？　じゃあそこに行けば私、無償で大金持ちになれるの！　よし、そこに行こう」

「やっぱお前間違ってるよ！　金融関連で危機に陥りそうなタイプの中で一番厄介なタイプだよ！」

そうやって回れ右をする叶を本気で制していたら、叶はふとピタリと動きを止めた。

「刀銃……あれはなんなのかな」

そう言っ指をさした場所にあったのは、遊園地とかでよくみるハンマーのあれだった。

あああつまりわかりやすく説明するとすると、あれだ、ハンマーを振りかぶって台とかに当てて、その台がどこまで上に行くかどうかを競うやつ。つまり力自慢のゲームだ。その横には頂上に達した時のみ手に入る景品が横に置いてある。街中にこのマシンはかなり不釣り合いだと思うが、そこは平和な街。不思議に思わない。

「刀銃……あの景品……」

そう言う叶の目にはうつすらと涙が浮かんでいた。

トラウマ泣きなのか。

それとも嬉し泣きなのか。

多分後者だろうなと判断し、金目の物なのか運動関連の物なのか

どっちだろう、と軽く考えていたら、それらは大きく外れていた。

「SMグッズよ刀銃！ 私これやる！ も……もし景品貰えたらさ

……あ、後でこれで遊ばない……？ ……ああ……鞭だけじゃなく

て蠟燭まであるんだってさ……ほら……私なぶられてあげるから……

……刀銃……虐めて……私を弄って……」

その場から全速力で逃げ出した俺の目には、マシーンを欲望のまま力一杯殴ったせいでぶち壊されてしまったマシンと、沸き上がる煙りの中、恍惚の表情をした変態が立っていた。

その変態は、俺を見たら真っ先に向かってくるだろう。

だから俺は逃げるしかなかった。

というより、逃げなかったら俺は一線を越えていたと思う。

そして、その一線を越えてしまった場合……ああすまん、これ描写したら一気にひかれるパターンだ。

あなた方はそれから選択することも逃げることも出来ません。ただただ、その流れに乗り、邂逅の瞬間に立ち会うしかあなた方の進む道はないのです。

勿論、傍観者であるこの私も含めて……です。

思えば長い道のりでした。二人の主人公が交代制で進むかと思えば現実はそのようではなく、二回連続で主観になったり、そうかと思えばまた交代制に戻ったり。こんな無茶な形式の『ヒーローがいるのに平和な街』だったのにも関わらず、ここまでこうして話の展開についてきてくれているあなた方には本当に感謝の意を示しましょう。いや……割と本気で頭を下げていますんですけどそれも無反応だとこちらとしても困るものが……ああ、そういえばあなた方も私をシルエットとしてでしか確認出来ないんでしたね。それなら何の動作も起こさないことに納得です。ほら、何か驚いてみてください。……何やってるかさっぱりわかりませぬシルエットじゃ……。そ、そうだ、表情の変化だけでは判断がつかないので、私の言葉に驚かれたりしてください。た方は会釈をしても構いませんか？……は、ははは……この話は置いておきましょう……ええ、流石に戲言でしたね……ええ本当に……はは……リアクション芸人という種族の人たちの必要性が十分にわかりましたよ……ええ。

ゴ、ゴホン。

閑話休題です。話が逸れ過ぎました。

えー、と……なんでしたっけ？ 芸人の話でしたでしょうか？

まあ確かに最近のキャラ芸人という人たちは目に余るものがありますが、それにしただってキャラ芸人の人たちも、そのキャラが売れたからといってそのキャラに定着し過ぎなのです。大体ですね、次第に変わっていく時代に合わすのも最もな考えなのには間違いないのですが、お笑いで一番面白いのは、やっぱり練りに練られた漫才やコントなどの昔から培ってきた歴史あるネタなんです。年末年始にやるのは新旧の漫才が多いですし、長い間続いているなんとかの神様とかなんとかエアバトルとかその辺の番組も一組のお笑い芸人

が大体四、五分はネタを披露します。『短時間で笑える!!』とかそういう宣伝文句は間違っていると思うんですよ。やっぱりそういう番組に出る人達は『短時間で笑わせられる!!』じゃなくて『短時間しか笑わせられない……』芸人だと思っんです。あ、でもやっぱりその中にも四、五分間のネタを悠々と披露する人たちもいる訳ですし、そこら辺も考慮しないといけないのかもしれないですね。……っと。スイマセン。今重要なのは最近のお笑い事情ではないですね。反省します。『キングオブコントの審査方法の良い部分と悪い部分』についてはまたいつか語らせてもらいます。……え? そんな話興味がないですか? あー聞こえませんか聞こえませんか聞こえませんかとも。

では、話の本質に戻らせてもらおうとしましょう。ですが少し脱線しすぎたという感じもありますので、台詞を引用させてもらいます。自分が言った台詞を自分で引用するなど、私くらいしかやったことがないんじゃないでしょうか。そう思うと誇らしくなりますが、下らないと一蹴されたらそれまでですよ。

『私を含めた 暗闇の空間にいる者達は、邂逅することになるのです。』

あなた方はそれから選択することも逃げることも出来ません。ただただ、その流れに乗り、邂逅の瞬間に立ち会うしかあなた方の進む道はないのです。

勿論、傍観者であるこの私も含めて……です。『あなた方はそれから選択することも逃げることも出来ません。ただただ、その流れに乗り、邂逅の瞬間に立ち会うしかあなた方の進む道はないのです。』

勿論、傍観者であるこの私も含めて……です。今まで根気よく観てきたあなた方ならもうおわかりの筈です。ほら、その証拠に私の頭上にあるモニターの画面がぶれ始めました。ふむ。どうやら、今回の分岐点は『刀銃』の方で起こるようです。あ、『今回の』と表したのは言葉のあやです。これからもう一度起

こるかどうかもわかりませんし、私どもにも分岐点が発生するタイミングは掴めていないのです。タイミングさえわかれば私も心の準備が整うのですがね。まあそれは無理な話なのでしょう。実際に、私はこれまで分岐点に四桁以上は邂逅しているのですが、いかにせんその分岐点が無慈悲かつ誰も救われない展開の方が多いので敬遠しているのですよ……つと、すいません。要らない話も含んでしまいました。改めて謝らせてもらいます。すいませんでした。

なにはともあれ、こんな何もない空間で私の話をぐだぐだ聞いていても仕方がありません。私だってあなた方のシルエットとモニターくらいしか見えないこんな場所で延々と語っているのも疲れる話なんですよ。それでも、私は喋らなければいけないのです。

何故なのか。

その疑問に対する回答は、『余りにも不条理な展開なのが予想される』という情報が、今しがた私の協力者から届いたからです。どうやら、今回の分岐点は私が今まで出会ってきた中でも異常に異質な分岐点だそうです。なので、私はあなた方の心の準備の為をと思い、こうやって中途半端に必要な最低限の情報をどうでもいい言い回しで語ってる訳なのですが……所々に要らない話が含まれているのはあなた方の勘違いですからそこら辺は忘れて下さい……つと、どうやら私の思いすごしだったようです。あなた方のシルエットから察するに、あなた方の顔は私の頭上にある映像がぶれるモニターに釘付けの様子です。わかりました。早速観るとしましよ。

ヒーローがいるのに平和な街の表。

ヒーローがいるのに平和な街の裏。

そして、ヒーローがいるのに平和な街の表の裏。

とくどご覧あれ。

暗闇の空間 2 (後書き)

趣味ですこれは

ヒーローがいるのに平和な街の裏の裏？

さあ楽しい時間はここまでだ。

登場人物は全員揃った。

ここからこの物語は始まる。

導入。

物語。

結末。

導入は終わった。

物語はこれから。

結末はまだ遠い。

どのくらいかかるかわからない。

どこまでいくのかわからない。

どうなるのかわからない。

それでも、

どんなストーリーにも、

必ず終わりはある。

必ず結末はある。

それがハッピーエンドなのか。

それがバッドエンドなのか。

誰にもわからない。

決めるのは誰でもない、登場人物達だ。

つまり、俺達だ。

どうなるかはわからない。

だが俺達は進まなければならぬ。

立ち止まっではいけない。やめてはいけない。諦めてもいけない。

周りに歩幅を合わせなければならぬ。突き進まなければならぬ。納得の行く道を出来るだけ行かなければならぬ。選ばなければならぬ。

ない。例えそれが酷い終わりに続いているとしても。

どう転んでも。

どうなっても。

俺と奴らの物語に結末は来る。

ヒーローがいるのに平和な街。

そんな街、ある訳がない。

その理由はこれから話すことになるだろう。

コメディーなんかじゃない。

至って真面目。

至って極端。

さあご覧あれ。

これが俺の結末だ。

これが俺達の結末だ。

これが俺達の集大成だ。

これが俺だ。

これが俺達だ。

そして路地裏。

俺が叶香里という名の変人もと悪魔から逃げ去った場所に居たのは、暗がりの中には余りにもミスマッチな二人だった。

「これを見てどう思ったんだい？」

「……………」

ヒーローと、沈黙状態のあゆみ。

二人はいつにも増して真剣な顔だった。ヒーローに至っては俺を睨んでいる。

「迂闊だったよ。誰かはわからないが君の次に見てしまう奴がいるなんて。ただの住人にはまだ早かったからね。まあ、あまり支障はないのだけれども」

「俺の名前は刀銃じゃない……俺の名前は刀銃じゃねえ!!」

ヒーローがいるのに平和な街の裏の裏？

全ての始まりは俺が生まれて六年くらいが経った頃だった。

その日は台風五号が来ていたと思う。観測史上最も巨大で強力な台風だったが、当時の俺は台風が雨と雷の集みたいに考えていたので、家の中でのんきに隠れんぼをしていた。

両親と一緒に。

俺は押し入れの中という簡単な場所に隠れていた。両親は思っていたよりも観察力がなかったらしく、苦戦していた記憶がある。いや、というよりも台風が接近するという中、俺が二人に何も言わず始めてしまったのが原因とも言えるが。

そして台風が来た。

激しい豪雨。切り裂ける風の音。雷撃の凄まじさ。

一瞬で俺は怖くなった。

一瞬で俺は恐くなった。

だから泣いた。

「……怖いよう……お父さん……お母さん」

二人はそれを聞き取れたのか、俺をようやく見つけだしてくれた。そして俺は、お父さんの背中に掴まって逃げた。

お父さんの片手は怖がっていたお母さんの右手に繋がっていたから、俺は確かもう片方の腕を相当掴んで姿勢を保っていた記憶がある。

ここまでは俺が正常だったんだ。

だが、本当の俺はここから始まった。

翌日。台風が去り、家を見るとそこには何もなかった。

テレビも。冷蔵庫も。ラジコンも。ランドセルも。マンガも。宿題も。机も。筆記用具も。化粧台も。台所も。カーテンも。財布も。貯金手帳も。座布団も。服も。

今までの思い出が。

今まで生活していた場が一気に、一晩に消えて無くなった。そこから俺と両親のじり貧生活が始まった。

家の周りには畑しかなかった。なので家の周りに他人の家はほとんど無い。しかしながら、台風というのはとても残酷だ。

家の周りだけじゃなく、俺が住んでいた三丁目全体でみても、家全体を持っていかれたのは俺が住んでいた家だけだった。

何故か他の家は全壊を免れている。

その現状を見て、子供ながら次第に壊れて行った。

ただいまを言つとお母さんのおかえりという言葉が返るのが普通の家庭だ。

俺の家も昔はそうだった。微笑ましく、明るい空気が漂っていたと思う。

だけど家が変わってからは変わった。

俺達の家は二階建ての一軒家から、今にも壊れそうな木の腐敗臭がする汚い家になった。

家と呼ぶのもおこがましいそこは、家族の空気を一変させるのにも役立っていた。

「ただいま……」

俺が外から帰ってくると、お母さんの口からはこんな声が聞こえた。

「なんであんた学校なんか行ってるのよ！ いい？ あんな場所行かなくていいの！ 義務だかなんだか知らないけどあそこに行くとお金を払わなきゃいけないのよ！ 学校側は学費負担とか言うけど全額払わないっ！ だったらこちらから願ひ下げなの！ 行かなかつたらお金を払わなくていい！ でも行つたらお金を払わなくちゃいけないのよ！ だから絶対行つちゃだめ！」

出迎えの一声はいつもこんな感じだった。やれ金やれ金。言い方は叶っぱいが、深刻さは全く違う。金切り声で とてつもない表情で 実の息子に対して接していたお母さん。

「学校じゃないよ……公園だよ……お金使つてないよ……」

「言い訳するんじゃないの！ 罰として“ここ”から外に出させないからね！ あんたがここに居るのも迷惑だけど、あんたがここに居ないのも迷惑なのよ！」

お母さんは変わってしまった。

金銭面で苦勞していたからだけじゃない。

お父さんが、家が全壊した後いきなり仕事を辞めて引きこもってしまったからだ。

何を思ってお父さんがそうなったのかは未だにわからない。何か思惑があったのかもしれないし、ただただ自暴自棄になってしまったのかもしれないし。

理由はわからない。

だけど、そのせいもあって俺より先にまずお母さんが壊れた。

ある日お母さんの部屋に行くと、お母さんは俺を見るなりこう叫んだ。

「もうあなたも嫌よね！ だから早く死にましょうよ！」

お母さんの手には一握りの刀があった。

どこから手に入れたのかはわからないが、刀というのは銃よりも手に入りやすいのかもしれないのは確かだ。

銃は警察が持っているが、刀は普通の家にもある所にはある。

「包丁なんかつままないのよ！」

とにかくお母さんは壊れていた。

そしてお母さんは刀の切っ先を俺の腹へ刺そうとした。とっさに俺は避ける。当たり前だ。誰だつて刀なんてものは怖い。

重いのか刀を両手でしっかり持っていたお母さんは、そのまま気を失って倒れた。

刀はお母さんの手から離れた。

病院には連れていけない。お金が無いからだ。なので俺はお母さ

刻み、バラバラにし、飾り、満足する。

別に家族を壊した世界を恨んでやった訳じゃない。台風ごときで無くなった家が悪いし、お母さんとお父さんがそれにめげずに頑張ればよかった話した。

だけど、俺は人を襲い続けた。

理由はわからない。多分誰にも俺の深層心理はわからないと思う。俺自身でさえもわからないのだから。

そして十二年。

俺は俺を捕まえる為にけしかけられた警官三十人程度を返り討ちにして捕まった。

代わりとして左腕を打ち抜かれたが。

それまでに殺した人間の数はわからない。四桁を越えた辺りから数えるのを止めたから。

しかし。

けれども。

なるべくして。

こうして俺の暴走と所業は止まった。

牢屋に連れていかれた時。俺は覚悟を決めた。あれだけの人を殺したんだ。死刑に違いない。

しかし、そうはならなかった。

「君、少しだけ生きる気はないかい？」

牢屋の前でそう言ってきたおじさんは変な格好をしていた。

赤いヘルメットに赤いマント。見渡す限り赤だらけだ。

「国の実験に協力してくれば、少しだけ生きる可能性をあげよう」
ここで俺はヒーローと初めて出会った。

その男は俺に実験とやらの概要を説明しだした。

「国お控えのマッドサイエンティスト達が君の頭の中を知りたがっている。過去を調べたらしいんだけど、どれも君をここまでの犯罪者に仕立て上げる要因にはなりえなかつたらしいんだよ」

座っていいかい、と言われたので断る理由がない。どうぞ、と言つたらよつこらしよ、と座った。

「そこで科学者達は考えたんだ。いつそ、彼を善人に見してみないか？」とね」

「……意味がわからないんだが」

「そうだよ。まあ聞いてくれ。彼らはこう考えたんだ。「彼の頭が壊れているのは間違いない。だったら記憶を完全に取り除き、名前を変え、記憶を改竄させる。そして平和な街を造りそこに彼を住まわそう。ある程度時期がきたら全てのネタバラシをし、記憶を取り戻させ、改めて自らが犯した大罪を本人に考えさせる。そうすれば原因もわかる筈だし、それで改心すれば尚の事いい」って」

この国で最後に死刑を執行したのは百年も前らしい。成る程、国の体裁を守ることも兼ねてるのか。理に適っている。

つまり、奴らにとって一石二鳥な訳だ。

「どうだい？ これに協力して君に損は無いと思うよ。ご覧の通り、僕自信も少なからず協力するし」

「わかった……まあどのみちここに捕まった時点で終わりだからそれでいい。だが、これだけは聞かせてくれ。その格好はなんなんだ？」

承諾と素朴な疑問を口にしたら、そいつはにこやかに笑った。

「僕は平和な街に居るヒーローとして君を陰からサポートするよ」

まず記憶を入れられた。昔の記憶は実験場の中で取り除くらしい。

実験の記憶と同時に。

俺の名前は刀銃。

そうして俺は実験場となる平和な街に連れて行かれた。

「はあ……ここまで国は腐ってるのか」

国会議事堂の中。

そこには室内にも関わらず屋外の風景が再現されており、その大きさは本当に街そのものだった。

ビル街が並び、家も並び。雲がどうという原理か知らないが天井を動き続ける。

その中には沢山の人が居た。ツインテールの小さい女の子が印象に残った。

「これらの人達は科学者達が集めた善人の中の善人の人達だ。彼らが犯罪を犯すようなことは絶対にしない。ストーカーや盗撮行為。お金に囚われていないし、変人でもない。生殖活動も極力制限させるつもりらしいよ。全く、そんな人達を集めるなんて酷い話したと思わないかい刀銃君？」

「何言ってるんだ。俺の名前は……そうか。俺は刀銃なんだよな」

「……ま、もうすぐそんな悩みからは解放されるよ」

ヒーローを語る男の言う通りだった。

俺は昔の記憶をねこそぎ削られ、完全に平和な街の住人となった。

ヒーローがいるのに平和な街の表の裏？

こうして今俺は、刀銃としてではなく、犯罪者としてここに居る。俺に刀なんか寄越して大丈夫なのかよ、ヒーローさん？」

そう言うつとヒーローは不適にも笑った。

あゆみは終始無言だった。

「だから、それを今から試すんじゃないか」

ヒーローがそう言うつと、路地裏に大量の人が集まった。

そうか。こいつら、全員俺を実験しているんだった。

ヒーローが居るのに平和な街なんてやはり存在しない。今まで信じていたヒーローは造られた偽物だったし。

ああそうだ。この場合、俺は悪で住人全員が正義なのか。

ハハハ。笑える。

要は俺以外が全員ヒーローみたいなもんじゃないか。

そんな理想的な街は造らなきゃ存在し得ない。実際には有り得ない。

ヒーローがいるのに平和な街なんて有り得ない。

俺の左腕を動かなくなったものと同じ形状の拳銃を恨めしく見ながらも、刀を右手にとった。

「やっぱりわかんねえよ。俺がなんで人を殺してきたかなんて。善人の立場から見ても異常だし、悪人の立場から見ても悪質だ。俺がやったのはそういうことなんだよ。誰が考えても答えは出ない。人が人を殺す理由なんて、答えは一つなんじゃないのか？ そうだよ。そうに違いない……」

「その答えとはなんだい？」

ヒーローは興味深く聞いた。

俺は感じたままの言葉をそのまま発言する。

「だからさ、『わからない』んだ。恨みやねたみ……金銭問題や鬱陶しさ……衝動でも連続でも殺人は殺人に変わりはないだろ。人が

人を殺すなんて普通は有り得ないんだ。普通なら自制心がかかる。だから、何故人が人を殺せるのかもわからない。それでいいんじゃないか？」

そう言っつて俺は刀を片手で握った。正直重いが、まあなんとか振り回せるレベルだろう。

ヒーローとあゆみを含めた街の住人は身構えたが、ふと俺は思い出した。

この街は善人だけが集められて造られた街だ……当然、この街には俺以外の人間は全員善人であることが必然だろう。

だったらあいつは？

あいつは善人なのか？

「ヒーロー……あいつ……叶香里は何なんだ？」

金にがめつく運動オタク。人の家に勝手に入りその上ドM。

そんな奴が善人の中の善人な訳ないだろ。

じゃあ何で叶は平和な街に居るんだ？

俺が質問をすると、ヒーローは首を傾げた。

「叶香里？ 誰だいそれは？」

その横であゆみは震えていた。

俺は無我夢中であゆみの近くに行きその手を取り、一気にその場から逃げ出した。

「待て！ そいつに近付くな！」後ろからヒーローの声が聞こえる。俺はあゆみを連れてビルの屋上に逃げ込んだ。

その間、俺は住人と目が合ったが、住人は俺を見ると一歩遠ざかった。ヒーローの命令かはわからないが、とりあえずは助かる。

「あゆみ。お前、叶香里を見たよな？」

「え……ええ」

あゆみは俺の剣幕に震えながらもしつかりと頷いた。

俺の手には刀がある。

「あいつは何なんだ！ 何故この街にあんな奴がいる！」

「わ……私が知ってるのは実験のこととあなたのことだけ。あなた

の記憶を目覚めさせるキツカケとしても居たんだし」

やはりこいつはわざと台風の中隠れていたんだ。どうりで矛盾だらけな訳だ。

お金持ちなお嬢様が一人で隠れたり、あの豪雨の中小さい女の子の声が聞こえる筈もない。

クソ。俺は全部騙されていたってことになる。

「あの人を見た時、私も驚いたわ。あんな人見たことないし、私以外の人は誰も知らないって言うし。ヒーローもおかしいのよ。あなたに干渉している人のデータは全てあの人が管理しているのに、ヒーローはデータとして彼女を知っているだけで彼女自信の情報を全く知らないの」

先刻、ヒーローは俺に向かって刀と銃を見た奴が居ると言った筈なのに、それが叶香里だとはわからなかった。

つまり、叶はこの街の中で唯一、情報の包囲網を少しだけ抜けている人間だと言うことになる。

「なら、何であゆみは叶を知って……いや、何で覚えているんだ！するにあゆみは泣きながらこう叫んだ。

「私、この街に来る前から彼女を知っているもの！ 彼女は百年前、死刑を執行されて死んだ犯罪者なのよ！」

叫んだあゆみは、その後ポツリポツリと呟き始めた。

「……私の家は本当に裕福でね、家に昔の資料や新聞が沢山あるのよ。暇があったら私はそれを読み漁っていたわ。面白いんだもの」

あゆみの家とは実験に参加する前の家だろう。こいつが実験に参加した理由はわからないが、とりあえず俺は聞くことにした。

「その中にかなり古い古い新聞のコーナーがあつてね、読んでたら凄い綺麗な人が写ってたの。大きくなったらこんな風になりたいって思ってたらその人は死刑囚だったわ。だから私はその時その人の事を忘れようとしたんだと思う。でも、忘れる前に実験に連れていかれたの……そしたらスポーツジムに美人が居るじゃない？ それで気になったからその人の事をセバスチャンに聞いたら、「知らない」

って言うのよ。おかしいと思った私はよく女の人の顔を思い出して考えて、そして思い出したわ」

あゆみは一呼吸置いて俺の目を見た。

「死刑囚の名前は叶香里よ。罪状は千人超の男を逆に強姦、その上全員殺害した大罪の女」

あゆみがそう言い切った後、その女はふいに後に現れた。

音を起てずに。空気と同化して。有り得ない登場で。

叶香里は笑顔でこう言った。

「刀銃……今暇……？　ちょっと話さない……？」

そう言う叶の右手には、俺が拾わなかった拳銃があった。

静かに銃口を俺の眉間に向け動かす叶。

目はいつまでも笑っている。

俺はその姿を見て呆然としていた。

「何黙ってるの？　私、ばれちゃったんだよね？　刀銃の実験が終わる直前ってことは、もう記憶が戻ってるんだもんね。アハハハ八それならそれでいいや。もうここに居られないなら、何しても構わないでしょ」

そう言う叶は親指で拳銃の安全装置を外した。こいつ、本気か？

「まあ待て。一度話し合おう」

平常心を取り繕って、必死の交渉に移る。マズイ。俺は人を殺した経験はあるが、幽霊とかそんな類いの者を相手にした経験は無いぞ。対処の仕方がわからない。

「……ま、そうだね。まだ時間は残されてるし、ゆっくり喋ろっか。お互いのことを……ね」

叶は拳銃を右手ごと下に向けた。

横に立つあゆみは恐怖で固まっている。

俺が動くしかない、か。

「叶。お前は一体何なんだ？」

「何探り入れてんのよ刀銃。さっきのでわかるでしょ。私は幽霊よ。百年前に死刑で死んだ、自縛霊みたいな存在かな」

「真顔で自分を幽霊だとか言う奴を信用出来るか。そういう奴はたいてい最後には幽霊じゃなくて本当は生きてました、とかそんな才手が付き物なんだよ」

すると叶は何故か俺を見直したような表情を向けた。

「へー。意外と余裕なんだね、刀銃」

「当たり前だろ。記憶が戻る前ならともかく、俺は人殺しなんだ。そんな奴が自称幽霊なんぞにビビってどうする」

実際はかなり対応に困ったが、あえて伏せておこう。

叶は左手と拳銃で拍手をし始めた。

「やっぱり刀銃は私と似てるね。その落ち着き方も、罪状も似てるよ」

言つと叶は拳銃を地面に落とした。手から離れたそれは、音と共に転がる。

「私は百年くらい前、男に興味が行ったの。きっかけなんてなかったわ。ただ普通に思春期なんだろうなー、って簡単に思ってたの。だけど私の思春期は少し……いや、大分変わっていたわ」

叶はまた笑顔になる。

それが異様に怖かった。

「私は男の中身が知りたくなつたの。外見じゃなくて中身。女である私とどう違うのかとか、どんな内臓の形をしているのかとか、そう言う中身ね。で、私は最初に付き合ひ始めた男の子と、三日で性交したの。快樂とかはどうでもよかつたわ。痛かつたし、そんなこと興味なかつた。だから私はとりあえずその子のあそことかガン見して観察したの。二人で悶えながらね。そしたら気付いたのよ。私を知りたいのはこの子のもつと奥じゃないかって」

アハハ……。

アハハ……。

叶は不気味に笑う。

過去を思い出しながら。思い出し笑いとは違う、だけど完全に違うとは言い切れない、そんな笑いを平気でする。

「だからね！」「どう？ 気持ちよかった？」って聞いてきた裸の子を私は裸のまま切り刻んで調べたの！ 悲鳴とか血しぶきとか何も考えてなかったわ！ とにかく一心不乱にその子を開けて、中身を見せて貰ったの！ 最高だったわ！ 凄い発見だった！

ああ……あの子の呆気に取られていた表情の下にあった首の脈が忘れられない……！」

俺はそこまで聞いて刀を握った。覚悟を決めて斬りかかる。

しかし、その刃は叶の体を……何の感触も手ごたえもないまま通り抜け、白い煙のようなものが叶の体から沸き起こる。そしてそれが叶の体を包むと、傷口一つのこっぴでない叶の体が現れた。

「私は幽霊って言うてるでしょ？ お願いだから私の話しを中断させないでよね」

もう全く、と頬を膨らませてかわいらしく笑うその顔も、俺とあゆみには恐怖感しか与えなかった。

「その後私は風呂で体を洗って、服を着て外に出たわ。それで、それから家には帰らず夜の街を出歩くようになったの。で、何人も観察して、次第に指名手配とかされたんだけど、サングラスかければ案外バレナイってことがわかって、場所を転々として性交ばかりしたわ。一番良かったのがね、外見ひよろひよろなんだけどあそこが妙にがちりしてる男でね、その人のあそこを観察するのにてこずったことは今でもいい思い出かなー」

想像するだけで痛くなる。

だが、そんな余裕はない。この女から一時でも目を離したら、どうなるかわからない。

「それで好き勝手やってたんだけど、やっぱり限界は来たわ。観察しようとした男が警察でね、私の経験値溢れる接待の快樂をかい潜って私の両腕に手錠をかけたのよ。不覚だったわ、あれは。で、そのまま牢屋へ連行されて普通に死刑よ。ホント、残念だったわ……。」

でもね、」

叶は俺を指さしてこう言った。

「私が次に目を醒ました時、私は何故か大学にいた。そして刀銃、あなたを見つけたの」

フフフフ、と本当に楽しそうに笑う叶は、次の瞬間こんなことを口にした。

「私は一瞬でわかったわ。刀銃は私と同じ人間だって」

叶はこんなことを平気で言った。今までの叶の話の話を聞き、呆然としていた俺は、こらえ切れずにこう言う。

「どこがだよ」

「へ？」

「どこが俺とお前が同じだって？」

言うと叶は、アハハハハと腹を抱えて笑い、一通り済んだ後ヒイヒイ笑いを抑えながら俺を指さし、こう発言した。

「そんなの簡単よ。あなたは私と同じで、人を殺すのに全く躊躇いが無い」

叶は感情的になってる俺に反して、冷静に言った。

そして、また笑った。

「最高よ！ 私、私と同じ人間は観察したことなかったもの！ だから生き返った理由はわからないまま、私はあなたに話しかけたの！ したらこの街は普通と違う場所で、他の人に聞いても返事をしてくれない。だから私はここで仮説を立てた……」

後半で一気にテンションを下げた叶は、右手の二本の指を立てる。

「一つ。私は生き返ったんじゃないって幽霊として意識を取り戻した。そしてもう一つ。ここは刀銃の為に造られた空間じゃないか。

一つ目は簡単に実証出来たわ。どうやら私と同じ刀銃と私を前から知っていた西山ちゃんだけしか私の存在を知ることが出来なかったみたいだし。それでもう一つは、この街の外に出てみてわかった。

実験データなんて物もあったし、ちょっと見させて貰ったのよ。で、私は刀銃のことを知った。何でこんな下らないことをしているのか

も知ったわ。だからあなたを観察するのを止めたの。で、あなたに近付いて私も答えを捜したわ」

そう言つと叶の体は徐々に透けていった。

……嘘だろ？

いや……そんな訳が……でも現にこいつの体はどんどん薄くなつていく……。

こいつまさか！

ここまで引つ張つておいて、こんな中途半端な去り方をするつもりか！？

「私はね、人が人を殺すのは『人を殺す理由を捜す為』だと思つ。わかんないことをわかんないままにしないように、わかんないことをわかるようにする為に、人は人を殺すんだと思つな。要は探求心よ。そんなもんなの、人間なんて」

薄く。

叶香里という存在がどんどん薄くなつていく！

「さて。私が言いたいことは言えたわ。じゃあね刀銃。刀銃のこれからの決断、期待してるよ」

「ちよつと待て叶！」

何ふざけたことぬかしてやがる！

このまま帰らせるかよ！

「俺はお前と居て楽しかった！ だから……また後で会おう！」

「……ふーん。それが叶の答えなのね……わかった」

叶は薄れていく中、笑つてみせた。

「じゃあ私、いつまでも待ってる！ 次会つたら……観察抜きで、してね！」

そう言つて叶は消え去つた。衝撃的な過去を言い、さらにはとつととあっさり消えちまつた叶の余韻に浸りつつも、現時点で犯罪者としての実験対象としての俺は、すぐに気持ちを切り替えて周りを見渡した。

さて、と。

「ヒーロー。早く出てこいよ」

俺は、覚悟を決めてそいつに話しかけた。

「あれ。ばれてたのかい」

ヒーローは屋上へと続く入口から現れた。隠れてるのなんてお見通しに決まってるだろ。これでも昔は指名手配されてた男なんだぞ、俺は。周囲への観察力くらい嫌でも付くさ。

「牢屋に普通に出入り出来たあんたが叶を知らない訳ないだろ」

「うん。まあ、その通りなんだけどね」

横に震えていたあゆみは俺から全力で離れ、ヒーローの元へと駆けた。

その目は、涙と恐怖で溢れていた。

「じゃあこれで実験は終了だ。さあ、君はどうする？」

言葉足らずのこの質問の真意は簡単だ。

生きるか。

それとも死ぬか。

ヒーローの手には地面に落ちていた拳銃が握られた。

俺の答えは決まっている。それを答えようとした時、

「嫌よ！　なんであなたが死ななきゃならないの！」

西山あゆみが叫んだ。

「あなた、改心したんでしょ！　この街で生活して心を入れ替えたんでしょ！　だってそうじゃなきゃ、私を生かしておく理由がないもの！」

今まで黙って震えていたあゆみは、泣きながら俺を直視していた。

「じゃあいいじゃない！　普通に暮らして普通に生きて普通に死になさいよ！　なんであなたが死ななきゃならないのよ！　私はあなたと居て楽しかった！　今まで生きてて、あなたと会話してる時が一番楽しかった！」

走って俺に近付き、あるうことがあゆみは俺に抱き着いた。

「私の両親は私に全く興味がなかった！　金持ちだからって皆私と遊んでくれなかった！　だから……だからあ……お願い……死なな

いで！ 刀銃としてでもいいから生きてよ！ 生きて私を楽しませなさい！」

気付くと屋上にいっばいの人が溢れていた。俺の意見を待つかのように。

ヒーローも含めた平和な街の住人が俺に向ける視線はとても穏やかだった。

「……それでも俺は、生きてちゃいけない」

「何で！ 改心したんでしょ！ だったら！」

「改心したから……かもしれないな。とにかく、俺は今自分を殺したくてたまないんだ」

この時俺はとても朗らかな笑みを浮かべていたんだと思う。危ないからどいてろよ、というあゆみへの忠告は無視された。最後まで一緒に居たい、とかか？ 全く。いい奴だよお前は。

「あゆみ。ヒーロー。それから皆」

首に刀の切っ先を当てる。左手は依然として扱えないせいで酷く不格好になっていると思うが、そんなこと、今となってはどうでもいい。

俺は最後の最後に、こう言った。

「なんで俺は人を殺したんだろうな」

痛みはあった。

だけど、それよりも住人全員の泣き叫ぶ声の方が鬱陶しかった。

ヒーローが居るのに平和な街。

そんな街、ある訳ない。

だってそこはヒーローが居るから平和なのではなくて、その街に住む皆が善人だから……という理由で平和なのだから。

平和な街。

それはこの世の中、どこにでもあるんだ。

え？

刀銃が死んだ物語は間違いない？

……どういうことですかそれは？ ちゃんと説明してもらわないと困りますよ。『主人公が死ぬ』なんて分岐は今までで一度もなかった筈です。それが何故今回に限って起こったのかという疑問に対する明確な答えを今すぐ出してもらわないと私としても対応に困ります。というよりか現段階でもう頭が混乱してるんですけど……え？ 安心しろとはどういう意味で………んん？ それは本当ですか？ いや……信じる信じないの問題ではなく、あなたが言っているのはそれこそ今までの経験では有り得ないことなのですが……嘘だと思っただけならモニターを観てみる？ 嫌です。嘘だと思ってるのであなたみたいな変人のいうことなど聞きたくありません。さっさと本当の映像を流してください。それ以外の回答は現時点から許しません。

……え？ 有給を増やしてくれる？ ま、全く、何、何言ってるんですかその程度の報酬で私がつられる訳がないじゃないですか全くもおかしなことを言いますねあなたアハハアハハ……何日ですか？ ……それ本当ですね？ 本当に休ませてくれるんですね？ その間漫画読み漁ったり図書館入り浸ったり古新聞集めしたり音楽聴いたり外をブラブラ歩いたり昼寝したりお菓子食べたり自分でキーキ作ってそれを自分だけで食べたり海外の映画をDVDで借りずにわざわざ映画館に足を運んで臨場感や緊迫感を楽しんでハラハラドキドキしたり妄想小説書いてどっかの賞に応募して大賞を取ってその賞金で外国行ってイケイケでアゲアゲな恋人つくってウハウハしたり……もういいからとっと話を続ける？ はいはいわかりましたよどうせ叶いっこありませんよこんなの。わかってますよ。えーと、すみません皆さん。少したてこんでしまいました。気にせずに、私の頭上にあるモニターをご覧ください。ほら、どうでしょう。一度は完璧に途切れてしまった映像ですが、今はちゃんと『ヒーローがいるのに平和な街』の世界を映し出しています。

どうやら、先刻まで観ていた『ヒーローがいるのに平和な街の表と裏』は正しい物語だったようです。刀銃は死に、叶香里は幽霊と化し成仏し、ヒーローや西山あゆみを含めた全ての住人はわざわざ集められた本当の住人ではありませんでした。この話は独立し、完全に失われてしまったとお思いになるでしょう。

……厳密に言うと、実はそうではないのです。

『ヒーローがいるのに平和な街の表の裏』は確かに実在し、そして消えました。

しかし、どうやらこの小さな世界は、他の大きな二つの世界に少なからず『余韻』という名の影響を残してしまっただようのです……。

ヒーローがいるのに平和な街の表？

この物語は終わらない。

どう転んでも。

どうなっても。

俺と奴らの物語に結末は来ない。

ならばどうする。

ならば歩みを止めてはいけない。

ならばどうする。

ならば生き続けよう。それしかない。

ヒーローがいるのに平和な街。

ここがその有り得ない街だ。

俺達は喋って笑う。

至って真面目。

至って不真面目。

さあご覧あれ。

これが俺だ。

これが俺達だ。

未来永劫変わらない。

こんな楽しい日常、変わってたまるか。

これが俺達なんだ。

ダッシュで路地裏に行くと、ヒーローとあゆみが居た。言い換えればおっさんと幼女だ。俺よりたちが悪い。

「なんでこんな所にいるんだ？」

俺は“二人”にそう問い質したが、二人の返答は信じられないものだった。

「……わからない」

「……わからないわ」

「はあ？」

ついにボケたか、と思ったがあゆみがボケるのはおかしい。二人の表情は至って真面目だった。一体何だっけ言うんだ。意味がわからないぞ。

「今ここにいるのに、なんでここにいるのかわからないなんてのはおかしい話しだね」

「そうですね。私が思い浮かぶ理由としては……刀銃。あなたを路地裏に連れ込んで口先だけで弄るとかしかないわ」

「それが本当だったら俺は即刻逃げるぞ！」

「あら？　じゃあ逃げた方がいいんじゃない？」

「マジなのかよ！」

ちよ、いくらなんでもそりゃ嘘だよな！

そう切に願っていると、あゆみはため息をひとつ吐いて俺に目を向けた。

「馬鹿ね。冗談に決まってるじゃない」

「あ……だよな。そりゃそうだよ。いくらあゆみでもそれは酷過ぎる」

そう言ったらあゆみは、ハンツと一回鼻で笑い、俺を見た。これが小学二年生の女子がとるアクションの一つなのかと思うと涙が出る。

「冗談を過剰なりアクションで返すあなたを鼻で笑う為よ」

「つまり目的は達成されちゃった訳だな！」

俺がそう返すと、満足したのか「セバスチャン」と言い、迎えにきたリムジンに乗った。

「刀銃」

窓からあゆみの顔が覗く。

「どうした？」

「……また会えるわよね？」

そう言うあゆみの顔は真っ赤だった。心なしかモジモジしているようにも見える。

「あ……じゃあ、ちょっと待ってくれ」

俺は懐から携帯を取り出すと、窓から小さく顔を覗かせるあゆみに向けた。

「……え？ く、くれるの？」

「違う！ ……赤外線通信だ。お前なら携帯持つてるだろ？ いつそのこといつでも連絡出来るようにしちまおうぜ」

するとあゆみは俺の予想外の反応を返した。

「私……携帯持ってないの」

「何っ！」

俺は普通に驚いた。いくら小学生とは言っても財閥の一人娘だ。携帯くらい持つていてもおかしくないと思っていたのに。

ふとあゆみの顔を見ると、さっきまで赤かっていた表情が一転、暗くなっていた。

「私ね……母様と父様の相手にされてないのよ……」

俯きながら、ポツポツと呟き始める。

「そりゃあ私は西山財閥の一人娘よ。でもね……そのせいで母様と父様は毎日忙しくて私を見てくれないし、友達も出来ないの……普通の家族の方がマシよ……いくらお金があつたって、つまらなきや仕方がないじゃない……」

どうやらあゆみは俺が考えている以上に暗い重りを背負っているらしい。

両親が相手にしてくれない。

他人が相手にしてくれない。

自分を相手にしてくれない。

そういう悲しみを背負って、それでも頑張って生きている少女。そんなあゆみに俺はこう言うことにした。

「今日俺と一緒にいてつまらなかつたか？」

「そ……そんな事ないわ！ とても楽しかった！ 多分、今までの

人生で一番……！」

「じゃあさ」

俺はポケットからメモ帳を取り出し、ボールペンで二つの個人情報を書いた。

これでも大学生だ。メモ出来る物される物は常時持っている。

それを切り取り、あゆみに渡した。

「俺も電話する。けどさ、もし暇で俺と遊びたかったらいつでも連絡してくれ。いつでもいいから」

呆気にとられた表情をしたあゆみは一回メモ用紙をみて、キリツとした顔でまた俺を見た。

「……アドレスに連絡してもいい？」

「ああ。別にいいけど……それメールアドレスだぞ？ いらなと思うけどとりあえず、のつもり書いたんだが」

俺の個人情報を震える目で見ながら、あゆみはこう言った。

「わ……私、あなたの為に携帯を買うわ。も、勿論当分は電話で連絡するけど、メールもいつか送る。あ、でも直接喋れる方がいいかしら。でも、やっぱりメールの方？ メールで電話？ あら？」

「落ち着けよ」

この言葉を最後にあゆみは「じゃあまた会いましょう」と言い、リムジンの窓を閉じて去っていった。

その時のあゆみは顔が真っ赤で汗まみれになっていた。その様子を俺は無言で見送る。

「ハハハ。全く。あの子は可愛いね」

リムジンが見えなくなるのを確認すると、あゆみにも俺にもすっかり放置されていたヒーローが俺にこう喋りかけた。

「ああ……全くだ」

「僕の奥さんの若い頃にそっくりだよ」

「あんだ奥さんいるの！」

何っ！

こんなコスプレしてる変人と結婚する人が存在するのか！

「そうだよ。かれこれ三百年くらい前かな。僕の一目惚れだったんだ」

「何歳なんだよ両方共！」

「その時彼女は小さい子供でね。ワンピース姿が何よりもそそのものがあつたんだ。それからだね。ヒーローを目指すようになったのは」

「今までの話しにヒーローの志望動機に当たるものが何一つないんだけど！」

ワンピース姿を見て何故ヒーローを目指す？

少なくとも俺は絶対目指さない！

「考えてみなよ刀銃君。前にも言ったと思うけど、ヒーローになったら住所や電話番号等の個人情報か思いのままだ。つまり」

「変人の完成つて訳だな！」

「そう。流石刀銃君」

「少しでもいいから否定してくれ！頼むから！」

こんな奴が命の恩人なのか！

我ながら恥ずかしい！

「流石、僕と同じ変人なだけはあるよ」

「自分を変人と肯定した揚げ句俺を道連れにするのはやめろ！俺のどこが変態なんだ！」

「だってそうだろ。さっきの子は勿論、今日だってあの叶香里つて子をはべらしてたみたいじゃないか。やーい二股ー」

「今から俺は力ずくでお前をヒーローから脱退させる！そこに居直れヒーロー！」

そう叫ぶと、じゃあまた会おうね刀銃君、と言ってヒーローは全速力で駆けていった。

ヒーローの運動能力は素人に毛が生えた程度だ。その辺の高校生でも追い付けるかもしれない。

だから、俺は追い付けなかった。

しかし……何故あゆみとヒーローは路地裏にいたのだろう。あの二人に接点なんてものはそこまである訳でもないのに。

まあ、本人達がわからないのなら俺がわかる筈もない。

これが安易なものならいいんだ。

だが、これが重要な分岐点とかだったらどうする？

そう。例えるなら朝の刀と銃だ。

あの時来たのが叶ではなく、ヒーローだったら俺という存在は終わっていただろう。ああそうだ。家に帰ったらちゃんと処分しないと。

しかし……うーむ……答えは出ない。

考えても無駄だと悟った俺は、背中がどんどん小さくなるヒーローを見て、息を切らした。

そして家の玄関の前。

走った後の為呼吸を整える。休日も残り半分を切った。とりあえず昼飯を食おう、と思いマンションの二階まで上がる階段を昇ろうとした瞬間。

肩に物凄い力の手が乗せられた。

「やっと思つけた……さあ刀銃……私を……なぶって……」

ハア、ハア、と喘ぎ、景品のSMグッズを手に持ちながら目を輝かしている変態叶香里がそこに居た。

「い、いや待て叶！ 今何時かわかるか！」

「ハア……アツ……凄……刀銃そこまで……」

「今は昼の十二時だ！ こんな時間にSMプレイなんぞしたら近所の噂になっちまう！」

「え……そんな……釘バットなんて……流石の私でも……」

「だからとりあえず昼飯を食おう！ その後また話し合えないか！」

「う……うつん……お願いします刀銃様……私が口答えするなんて有り得ません……」

「わかったな！　ってさつきから話しが全く噛み合っていない！　なんちゅう妄想してやがる！」

ヒーローの変態度がマシに思えてくるぞ！

「こ……この変態！　俺の話しを聞け！」

「へ……変態？　いい響き……いい響きよそれ！　刀銃、もっと言つて！」

「無敵かお前は！」

「じゃあさ、あの、変態つて大声で私に叫んでくれたら昼ご飯一緒に食べてあげるからさ！　勿論オゴリだから！　お願い刀銃！　私を蔑んだ目で見ながら変態つて叫んで！」

自分の中の色んな葛藤と戦った後、俺は人生において重大な決断をした。

つまり、叫んだ。

「この変態が！　お前なんか一生地べたに生えずり回ってるのがお似合いなんだ！！　呼吸をするなこのゴミ！　地球が汚れるだろうが！」

……いやあの……これは、巷でよくいう一種の気の迷いつて奴だ。誰にだつて判断を間違えるときはあるだろ。それが俺の場合、今この一瞬だつたつてことだよ。だから……うつん……。

俺が心底自分の発言に後悔していたら、目の前の叶は俺の持つ感情のベクトルとは全く方向性が違う感情を持ったらしい。

「う……ウワアアア……フワアア……」

言いながら全身をほてらせ身をよじつて興奮する友人を、何故だか俺は凝視していた。

先に言っておくが俺は加虐趣味に目覚めた訳ではない。

ただ。ただ、その、あれだ。

「ウウウ……アアアア……アッ……」

叶が無茶苦茶色っぽくて見取れてたとか、そういう理由ではない。ポニーテールを揺らしながら目を虚ろにして喘ぐ叶が無茶苦茶可愛いとか、そういう理由ではない。

そう信じたい。

そんな俺はずっと立ち尽くしていた。

真面目な顔で見る男と。

身をよじりながら見られてる女。

第三者が見たらどう思うんだろうか。余り考えたくはない。

野良犬がワンと吠える。

野良猫がニャーと鳴く。

叶の興奮はその後数秒続いた。

「さあ刀銃。私のオゴリだからさ、存分に食べてみよー」

言われて連れて行かれたのは駄菓子屋だった。

「大体はよめてた展開だけど駄菓子屋は酷すぎるんじゃないかな！」

「これでも譲歩した方なんだよ。第一候補は公園だったんだから」

「公園に食い物つてないよね！ あつたとしても自動販売機くらい

だよな！ 候補に入ること自体間違ってるよね！」

「第二候補は郵便局」

「あそこは手紙とか切手とかしか扱ってないぞ！」

「食べればいいじゃん。大丈夫だよ。刀銃ならバリバリ食べれる食

べれる」

「ヤギじゃねーんだよ俺は！」

「白ヤギさんたら読まずに食べた？」

「白ヤギさんも読まずに食べる奇怪な人も居ない！ その流れから

言ったら第三候補とかはもっと酷いんだろうなあ！」

すると叶は叶に似つかわしくない、モジモジとする動作をとった。

「第三候補はね……私の家よ」

「……………」

「私の部屋よ」

何故限定したんだ！

いつもの俺ならそう言うだろう。

だが、先程の艶やかな叶を見て叶の美しさを再認識してしまった俺には、返せる言葉が無かった。

叶が足元を見つめる。

その姿もどこかきらびやかで、耐え切れずに俺も足元を見つめる。そして沈黙。

「……………」

「……………」

何なんだよ…………何なんだよこの空気はっ！

「と、とりあえず俺腹が減ったからさ！　なんか買って食わせてくれよ！　た、たまにはこういう駄菓子屋もいいかなーとか前々から思ってたんだ！」

「え、えー本当！　じゃ、じゃあれとこれなんかどーおー！」

テンパリながらそう言って叶が指さしたのは五円チョコと十円ガムだった。

えー…………こんな空気でもこの二つチョコイスしちゃうのかこいつ…………。

一方叶が手にしたのはうまい棒とチョコバット。

会計は俺持ちだった。

意味がわからない。

五円チョコと十円ガムでは流石に足りないので近くのコンビニに行き、唐揚げを五個と握り飯ツナマヨを一つ買って昼を凌いだ。勿論と言ったらある意味勿論だが、叶は代金を支払うそぶりすらしなかった。お前、どんだけ？

太陽の陽射しがさす中、ベンチとブランコしかないシンプルな公園に行き、二人で同じベンチに座る。誰も他にはいない。沈黙が少し続いた後、叶が口を開いた。

「刀銃……例の件についてなんだけど……」

叶は目をキラキラと輝かせながら、静かに聞いた。右手に持つ物を俺に突き出す。

「今ここでやる？」

驚いたことに、叶は未だにSMグッズを片手に持っていた。というかもはや呆れの境地に達していた俺は、そんな叶に極めて冷静に返す。

「残念だな。昼飯おごってくれなかっただろ。だからこの話しは無しだ」

当たり前だろう。約束も守らなかったんだ。好き好んでSMプレイなぞする訳がない。

すると叶は懐からある物を取り出した。

千円札だ。

「な……何っ！」

か……叶が……今までの中で一時も俺に硬貨すら見せなかった叶が……自分の千円札を俺に見せるだど！？

しかもこの千円札、俺に向いてないか！

「私はね……本気なのよ」

叶は俺に千円札を渡してでもSMプレイをしたいらしかった。

そんなことで本気になられてもこちらが困る。

「え……えっと……」

驚きでもたもたしてたら、叶の手が俺の右手を掴み、その千円札を握らせた。

「私の本気……わかってくれた？」

上目使いで俺を見る。

叶はもう色々な意味で本気らしかった。

俺に、明らかに昼飯代より高い千円札を渡したのもそう。

わざわざ俺の右手を掴み、動かない左腕を掴まなかったさりげない優しさもそう。

上目使いで……俺の目をじっと見つめて……ゆっくりと……静か

に……それでも確実に誘っているのもそう。

段々頭がぼやけて、俺は何も考えられなくなってきた。頭が浮遊感で揺れる。視界もぼやけてきた。

その間も叶は俺の右手を暖かみのある右手でしっかりと握りながら、左手で準備をする。

S Mプレイの。

「叶……叶叶叶叶叶叶……！」

「刀銃刀銃刀銃刀銃刀銃……！」

叶は俺の右手を離し、代わりに赤色の拘束具を俺に差し出した。手錠のような形のそれを躊躇うことなく俺は受け取り、叶の両手を背の後ろ側に持っていていかせて嵌める。叶の両腕は動かなくなった。

「刀銃……服……どうする……？」

その言葉を俺は無視し、S Mグッズの中から一つを選ぶ。これまた赤で、通常の市販の物より少しだけ太くて長い口ウソクだ。

「アア……私の要望を無視した上で口ウソクを選ぶなんて……服も焼けて私も焼けて……一石二鳥の攻めじゃん……」

S Mグッズの中にちゃんとあったライターを使い、右手した使えないのでベンチに置いた口ウソクに火をつけ、叶の上に持っていてことうとする。叶はいつの間にか地べたをはいずっていた。

「……………」

「……………」

沈黙が流れる。

耐え切れなくなったのか、それとも興奮のせいか。叶が喘ぎ始めた。

「アア……アアアア……刀銃……さ……様あ……早くううう……」

この言葉をキツカケに俺が口ウソクを叶の上に持ってきた瞬間。聞き覚えのある声が公園の入口から聞こえた。

「刀銃君……君は本当にそんなことを……」

ヒーローだった。

その声で俺は意識を取り戻す。そして、今の現状を再確認する。

「お……俺は何でこんな真昼間から友人に手錠をかけてロウソクのロウを垂らそうとしてるんだ!?」

この言葉に叶は心底驚いた表情をして見せた。

「え！ 嘘でしょ！ ここで止めるの！ あんなにいいムードだったのに！」

「SMプレイにいいムードなんてあるか！ ありがとうヒーロー！ 助かった！」

危ねえ！ 一線越える所だった！ 叶とそんな一線なんて越えてたまるか！ どうせなら違う一線越えたいんだよ俺は！

「とにかく俺は逃げる！ 後は頼んだぞヒーロー！」

「あ、ちよつと刀銃君！」

ヒーローの制止を聞かずに、こうして俺は公園から立ち去っていった。

帰り際、「そ……それって放置プレイじゃん……こんな拘束しときながら立ち去るなんて……最高過ぎるよ刀銃……様……」とか聞こえたのは気にしないことにする。

公園を抜け、ビル街を抜け、俺の家の前まで全速力で駆け抜けていった先に居たのは、軽く見知った顔だった。

「こんにちは。先程はどうもありがとうございました」

白い髭を蓄え、軽いウェーブをかけた白髪に皺が大量。映画でよくみる右しかない眼鏡をかけ、それでいて服は黒がベースの正装。身長は俺くらいあるが、初老の為か細い。

軽く俺に会釈したのは、あゆみの執事のセバスチャンさんだ。

「あ。どうも」

俺が会釈し返すと、セバスチャンさんはレンズで太陽の光りを反射し、ニコリと笑った。

「あゆみお嬢様も大変お喜びです。携帯電話をすぐ買うと聞いておりました」

「そうですね。よかったです。それで、今日はどういったご用件ですか？」

少し反応が冷たい気がするが、それは仕方のないことなんだ。全速力で走ったので今俺の体力はひん死に近い。早く部屋に入ってゆっくりしたいんだ俺は。失礼は承知しております。すみませんセバスチャンさん。

そう言うと、セバスチャンさんはフッフと笑った。

「どうぞやら疲れているようですね。わかりました。手早く済ませましょう」

流石執事といったところか、俺の現状を瞬時に見抜いてくれたセバスチャンさんは、右手を俺に差し出してきた。

「ありがとうございます」

「はい？」

いきなり初老のおじいさんから面と向かって何のことかわからないお礼を言われても、対処に困る。第一にそういった体験がない。

そんなことを思ってたなら、セバスチャンさんは流れるように口を動かした。

「あゆみお嬢様のことですよ。最近、あゆみお嬢様は本当に楽しんでおられます。以前のお嬢様の事を思い返すと、あなたの存在はそれ程驚異的で、それ程大切にしたいものだったようです。今日はそれだけ伝えられなかったのですよ。ありがとうございます。あゆみお嬢様があゆみお嬢様になれたのは、刀銃様。あなたのお陰です」

「……………そうですね」

言っと俺は右手を差し出した。セバスチャンさんとしっかり握手をする。

俺は内心物凄く嬉しかった。ヒーローの前だからという理由だったが、俺が助けた女の子がこれだけ喜んでくれる。ここまで嬉しいことはないだろう。

手を離したセバスチャンさんは、ほんわかした空気の中、こんなことを発言した。

「本当……あゆみお嬢様の可愛さに磨きがかかったのは刀銃様のお陰です」

「……………」

「……いやいやいや。ここまで立て続けに二人も変態を見てきたんだ。まさかこんな真面目そうな人が俺が考えている人な訳がない。そうだ。そうに決まってる。」

「……ただ怖かったので、これまた失礼を承知で恐る恐る聞いてみた。」

「……セバスチャンさんってあゆみのことをどう思っていますか？」

「勿論、世界一の美少女でございます」

「……それは実の孫娘のように可愛いとかそういう感情ですよね？」

「実の孫娘に発情はしません」

「発情してるんですか！」

「六十代を越えているであろう爺さんが小学二年生に発情！」

「絵がヤバイとかそういうレベルじゃ収まらねーぞ！」

「え！　じゃああゆみの執事をやっているのは……………」

「私が執事の仕事を西山様方にお頼みしたのはあゆみお嬢様が産まれたから四年が経った頃でございます……………」という設定だったら良かったのですが。残念ながらあゆみお嬢様が産まれる前から西山様方には仕えております」

「残念ながらも何も確定ですよね！　一連の会話だけで確定ですよこれ！」

「この人……………あろうことがあゆみ目当てで執事やってやがる！　てか俺の周りには変態しかいないのか！」

「ヒーローに叶にセバスチャンさん……………」

「ここが平和な街なんて冗談にも程がある！」

「では私はここで。また会った時はあゆみお嬢様を宜しく願います。刀銃様と喋っているあゆみお嬢様の顔が、一番可愛いので。」

「まあ……………複雑ですけど……………」

最後にやけに変な後味を残すコメントをし、セバスチャンさんは歩いて帰っていった。

……セバスチャンさんのことは一度置いておいて、最近すっかり騙されていたことがあるのだが、この平和な街には事故を起こさない為に車は販売されていない筈なんだ。

なのに、何故西山家はリムジンを普通に所有し、かつそれを運転しているのだろう。

別に走る道がないという訳ではない。現に車道は自転車の道としてそのまま残されている。ドライブしようと思えばいくらでも出来るのは確かなんだ。

だが、何故それをヒーローは許しているのだろう。今度聞いてみようと思いい、数分前と数秒前の衝撃を心の奥底にしまった。

鍵は俺がかけ忘れていたらしく、ドアノブを回すと普通に家に入ることが出来てしまった。今度から気をつけようと心掛け、ふとポケットを探り携帯を見てみたら着信が一件あった。

『来週 行きたいところがある 行きます』

メールの最後には、西山あゆみという名前が書いてあった。誘いの文面が決定事項になっている。明らかにメール初心者文面だったが、来週の休日も楽しくなりそうだった。

『オーケー。楽しみにしてるぞ』と返信をしたら、『うん』と言だけのメールが来た。

さてと。数々のいざこざが一旦終了し、静かな時間が流れたあかつきにはとりあえずあれとあれを処分しないと。

勿論、刀と拳銃だ。

叶の突然の訪問に驚いたが、そこは流石俺と言ったところ。焦りながらもちゃんと押し入れに入れたことを覚えている。

我ながらよくやったと感心しながら木で出来た押し入れの中を見
てみると、そこには一枚の紙切れしかなかった。

「な……無い！」

刀と拳銃はどこへ消えたんだ！ あれを見られたらこの街で生き
る俺の人生は終了なのに！

急いではいつくばりその紙切れを右手に取ると、そこにはこう書
かれてあった。

『久しぶりだな。警察に捕まったお前がまさかこんな所でこのう
と住んでいるとは思わなかった。探したぞ。さあ、また一暴れしよ
う。とりあえずは思い出して貰おうと置いてきた刀と拳銃はまた後
で持つてくる。いつでもいいから連絡をくれ。お前の連絡が来るま
でこの何の面白味もない街のどこかに滞在している 05630*』

*258』

何度読んでも同じだ。書いてあることがさっぱりわからなかった。
家の鍵が開いていたのは恐らくこの手紙の主のせいなのだろう。
刀と拳銃も同一人物にまず間違いない。

しかし、この文面の中に俺がわかる内容は一切含まれていない。

何だこれは。意味不明にも程がある。ある種とても迷惑だ。気味が
悪い。

俺は紙切れをポケットの中に入れ、後でヒーローに相談しようと
決定した。

心の奥で、ヒーローに頼りっぱなしの俺がいることに薄々感づい
ている俺が、今この場にいることに気付いた。

翌日。

今日は平日だ。普通に歩き、普通に大学へ行き、普通に勉学に励
む。まあ大学なので勉学等オマケみたいなものなのだが、生
憎それは喋ったりふざけあったりする友人が居る奴の話であって、

大学での友人がほとんど皆無である俺にとって大学とは、勉強をするくらいしか過ごす方法がなかった。

そんな中、校舎の入口で俺は“奴”を見つけてしまう。

「あ。おはよう」

叶香里だ。

朝にピッタリなこの晴れ晴れとした笑顔からして、昨日のことは触れないまま過ごせそうだと思い、俺は少しだけ安心する。

「おう」

右手を軽く挙げて返し、俺は三階へ上がる為にエレベーターの上のボタンを押した。光が灯る。

「全く。そうやってすぐエレベーターを使おうとするから体力がなくなるんだよ。極力階段を使わないと」

「いやいや。今の俺にとって階段を昇り降りするなんて地獄に等しいものがあるからさ」

「へえ。てことは刀銃にとって大学は地獄なんだ」

「何言ってるんだお前！ 人の話を半分しか聞いてないだろ！」

「てことはつまり、刀銃が死んだらどこへ行くんだろうね。地獄より更に酷い場所ってどこなんだろ」

「叶の中で俺は地獄に行くことが決定しちゃってるんだな！」

地獄より更にキツイ場所って、大地獄とかか！

微塵も想像つかない！

……というより、心なしか叶の言い方がいつもより微妙にキツイのは気のせいだろうか。試しに叶の顔を見たら、無駄に笑顔だった。何故だ。今笑顔なのはおかしいだろ。

「因みに今大地獄とか思った人は語彙力がありません」

「まさかのトラップかよ！ 叶なんて思いつきもなかったじゃねーか！」

「私はわかってたけど言わなかったただけだよ」

「じゃあ地獄より酷い場所ってどこか答えてみる！」

どうせ無理に決まってる！ というかエレベーターはまだなのか

！ 結構待ってるんだけど！

叶は俺を見て指をさした。

「地獄より酷い……それはね、刀銃だよ」

「え？」

改めて叶の顔を見る。

う……うわあああ……。

口は笑ってるのに、目が全く笑っていない。どうしたんだ叶は。俺、なんかやったか？ いやまあ、だいたいわかると言ったらわかるのだが。え、でもまさかそんな筈はないだろ。

その顔の恐怖によって耐え切れなくなったので下に俯いたら、ふと叶の左手の部分が見えた。

力一杯握っている拳がワナワナと震えていた。

「俺……なんかしたか……？」

恐る恐る思ったことをそのまま口にしてみた。

叶はこの言葉を聞き、目をカツと見開いて俺にガンを飛ばす。

「なんでよ……なんで昨日途中で帰ったのよ！」

大方の予想通り、SMプレイの話だった。

もう……それ掘り返すのやめにしないか！

「私、放置プレイは嫌いなのがわかったわ！ あの後本当に大変だったんだから！ 特にヒーローよ！ あの人とプレイしても全然面白くないの！ やっぱ私、刀銃じゃないとダメなのよ！」

「ちょ、ちょっと待て！ その言い分からしてまさかとは思うが、ヒーローとSMプレイをしたのか？」

仮にもヒーローだぞあのおっさん！

何やってんだこいつらは！

「ヒーローがやりたいって言い出したのよ！」

「この変態共！」

「もうあの人全然なの！ ロウソクだって服脱がしてからやるしムチだって背中しかやらないし電気も流さないしナイフで切り付けるとかいって腕だけで顔にやらないしそれでいてマスクすら私につけ

ないし言葉責めも刀銃に比べたら切れ味なさすぎだし最後の締めも「もういい……もういいよ！ お前ら俺が帰った後ハジケ過ぎだろ！」

仮にもヒーローが。

仮にも俺の友人が。

本当のホントにリアルにガチで真面目なSMプレイを昼間っばらから野外でやっていた。

なんか……色々な意味で悶々とする事実だよ！

「しかもお前言葉責めとかなんとか言ってたな！ それってお前……もしかして……」

「もしかしてとかじゃなくて何を包み隠そう私は、私の全てを否定する刀銃のツツコミに毎回毎回興奮してましたっ！ イエイ！」

「イエイじゃねえ！」

じゃあ何だ！

叶は俺との会話をSMプレイと等しいものとして扱っていたのか！
知りたくなかったよ！

知った上でどうしろっていうんだよ！

どうもしないよ俺は！！

「さあここで刀銃はどんなツツコミを私に入れてくれるのかな……さあさあ……私を存分に攻めなさい！！」

「……………」

もうこいつとは喋りたくない。一回拒絶してみよう。喋らなきゃツツコミも言葉責めもあつたもんじゃないだろ。

そうして喋らないこと十秒。

さあもういいかなと判断し、横を見てみたら叶は右の人差し指を噛んで自分を抑え、虚ろな表情でこちらを見ていた。

「ハア、ハア……私、やっぱり放置プレイもありかも」

「無敵かお前はっ！」

そうこうこうしている内によやくエレベーターは一階に到着した。このエレベーターは最初何階に留まっていたんだよ。

エレベーターには誰も居ず、俺と叶の後ろにも誰も居なかった。それに気付いた叶は顔をパーっと顔を明るくして、俺の右腕を物凄いい力で掴んでエレベーターの中に引きずり込もうとした。

「さあ刀銃……続きはこの中でやるつか……」

「て……丁重にお断りさせて頂きます！」

「いやよいよよも好きの内だもんね」

「そんなの虚言だ虚言！」

「うるさい。さあ……覚悟決めろや」

「い……嫌だああああ……」

エレベーターが非情にもしっかり閉ざされ、上の階に上がった。

ヒーローがいるのに平和な街の表 ？（後書き）

すいません色々な意味でやりすぎました（泣） シリアス分は当分
お預けになる予定なので、表の方はしばらくこんな感じですよ。伏線
織り交ぜつつコメディ頑張っていく所存です。

ヒーローがいるのに平和な街の裏 五

この物語に始まりなんてものはない。

この物語には過程と終演しかない。

何があるかと僕は僕の目的の為に突き進み。

何があるかと僕は僕の目的を果たすだけなのだから。

そんな僕に関わってくれる登場人物は全く揃っていない。

一人は僕と友好関係を持つてくれる元犯罪者。

一人はこの街唯一の正義の妻。

それでも足りない。足りる訳がない。

思考錯誤の故に。

思考錯誤が故に。

僕が僕の目的を果たす為にはまだ足りない。

だからこれから紹介しよう。

この物語における過程の始まりはそれからだ。

これから僕は動じない。

何があるとも。

何が起ころうとも。

何が降り懸かろうとも。

何が襲いかかるとも知れないこの物語に、僕は動じない。

例え抗えきれない真実に辿り着いたとしても。

例え信じたくない真実に辿り着いたとしても。

僕は動じない。

僕は動じられない。

僕は動じてはいけない。

何故ならそれがこの物語における終演に繋がる過程であり。

僕の目的の為ならば、目を逸らしてはいけない過程なのだから。

さあ始めよう。

これが過程の始まりだ。

これが過程だ。

これが終演だ。

これが僕だ。

これが僕の選ぶ道だ。

これが僕の選んだ道だ。

これが僕達だ。

これが僕達なんだ。

「さあさ、早く準備しな」

そう言つてヒーロー夫人は、ノートや財布諸々の用意がたんまりと入っているくせにそこまで膨らんでいない黒色の肩掛けバッグを僕に差し出した。ヒーロー夫人の横で笑う高梨君も「頑張つて下さい」と僕の見送りで立っている。

ヒーロー夫人が早朝なので不機嫌というのはいつもと変わらない。変わっているのは、僕が朝早く起きる理由だけだろう。

この街に来てから結構な日にちが経った。家が台風には飛ばされ、お金が全く無い状況での徳永切裂探索は至難の技だと判断していたのだが、ヒーロー夫人や高梨君を含む地下の住人達のご厚意でどうにかここまで暮らしていくことが出来た。

毎朝早く起きて二時間の射撃をした後、開店する酒場の手助けをする。最初は目隠しされて見ていた住人達の生活移動の風景も、酒場を手伝っている内に信頼を得られたのが理由なのかどうかはわからないが、見させてもらえた。他にも地下の住人の中で知り合いが出来たり、地下の酒場以外の風景も見せてもらつたりと色々な進展があつたのだが、それはまたどこかで話すとしてしよう。その機会もいずれ訪れる筈だし、納得するまでの実力を手に入れるまで徳永切裂

の居場所はヒーロー夫人に欲しないことにした僕には、まだまだ街の地下で住む時間は残っている筈だから。

何はともあれ、今の僕にとって重要なのはそんな些細な言いは悪いが、現在僕が直面している問題に比べたら些細なことになつてしまふから仕方がない。事柄ではなく、昨日突然沸き起こつた問題なのだ。

昨日の夜、寝袋に入つて寝ようとした僕と高梨君に、いきなりヒーロー夫人の電話の音が大きく聞こえてきた。カウンターの裏にある地上にも繋がる電話を使つての会話だったらしい。「何だつて！ あんた、そりゃ本当のことなのかい！」と酒場にはいない他の地下の人達にも聞こえるんじゃないかと一瞬思う程の大きな声を出し、「ああ……わかつた、わかつたよ。明日からなんだね？ わかつた。今から本人に伝えるから」と言う言葉で会話を締め括つたヒーロー夫人は、溜息を一回ついた後カウンターから出てくる。因みに「何だつて！」から「本人に伝えるから」までの発言は同じ大きさだった。感情の起伏が激しくないヒーロー夫人らしいといえばヒーロー夫人らしいが、それにしつたつて一度大きくなつた自分の声量を調整するくらいのはして欲しかった。

「何かあつたんでしようか」

心配そうに言う高梨君を横目に、ヒーロー夫人が頭を抱えてこちらにやつて来るのが見える。今まで見たこともない程困惑しているのが目に見えた。もう一度大きな溜息をつくつと、ヒーロー夫人は言つた。

「今日の練習はやめにしようか。今すぐ外出の準備をしてくれ」

「え？」

当然、僕は驚く。高梨君も同様に驚いた。

僕がこの街に来てから今日まで、酒場の手伝いを休むことはあつても、この練習だけは欠かしたことがなかった。それが毎日の必要事項だったし、僕にしたつて居ても立つてもいられない気持ちを抑える為に必要な行動だった。ヒーロー夫人がヒーローから送られる

『徳永切裂がまだこの街から脱出していない』という情報と、『徳永切裂が移動した場所がまだ特定出来ていない（ヒーロー夫人が徳永切裂の居場所を知っていたというのは嘘ではなかったが、翌日ヒーローが確認してみると、その場所には誰もいなかったらしい）』という情報があると言っても、今でも動き出したい気持ちは変わらないのだ。

「だけど、何だって？」

「練習をせずに外出の準備をしるだって？」

「どういうことですか、ヒーロー夫人！ 佐藤さんが地上に上がったら、真っ先に徳永切裂つて人を捜しに行くに決まってるじゃないですか！」

高梨君が早朝なのに叫ぶ。高梨君の意見を否定しきれない僕は、とりあえずの疑問を発することにした。

「さっきの電話の相手は誰で、どんなことを言われたんですか？」

困った顔をしてその場を濁すかと勝手に僕は思っていたのだが、それ程隠す必要がなかったや取りだしたらしく、ヒーロー夫人は迷わずこう答えた。

「夫から、あんたを大学に通わせるよう言われたんだ」

……。

「……………は？」

思わず唾然となってしまう僕。横目で見ると高梨君も同じで、口を開けて呆けるくらいに反応しか出来ていなかった。

ヒーロー夫人がもう一度、何度目かになるかわからない溜息をつく。綺麗な髪を右手でかき、「夫が言うにはさ、」と僕に説明仕出した。

「この街に入る時に、大学の入学届けを出したらしいんだよ」

「……………誰がですか？」

当然、僕は聞き直す。こんな厄介事を押し付けたどこかの誰かを問い詰めなければならぬ。大学なんて行く意味がない。僕は高校を中退している。あまり思い出したくない過去が、高校二年生の夏

にあつたからだ。その日からずっと休んだ僕は当然留年が確定し、それ以降も行かなかつたため、自然と退学させられていた。学費を払っていないのだから、自分から退学したと言った方がいいかもしれないけれど。

そして僕は復讐を心に決め、今ここにいる。

そんな僕が、今更大学になんか行つたつて意味がない。独学で何もかもこなしていたから教わることなんて何もなし、そもそも教わる気がさらさらない。

だから、大学なんて行く気はない。

しかし、入学届を出した誰かを知ろうとしたこの質問は、ヒーロー夫人の口から意外な返答を作りだすことになった。

「あんただよ、栄作」

「……は？」

もう一度、僕は呆れた声を出した。高梨君も同様で、やはりほうけた顔をしている。ヒーロー夫人は信じられないというよりも、半ば諦めかけた表情をしていた。

「誰が何の為にあなたの名前であんたを大学に入れようとしたかはわからないけどね、とりあえずあんたは今日から、地上に行つてこの街唯一の大学に入つてもらわなければならぬ訳なんだよ」

「……もし、大学に行かなかつたら？」

ヒーロー夫人も、僕にそんなことをしている暇がないことはわかっている筈だ。そうじゃなかったら、こうやって溜め息をつく訳がない。つまり、ヒーロー夫人が僕に大学へ行かそうとするにはちゃんとした理由がある。

そして、ヒーロー夫人はこう言った。

「もし入学の手続きをして、『この日までには来て下さい』っていう通知を無視して大学に行かなかつた場合、あんたは強制的に地上へと連れていかれるんだ」

「な……」

ヒーロー夫人が言うこの言葉の真意を掴むのは容易だった。

「そうなんだ。夫にもうバレてんだよ　栄作、あんたが地下で暮らしてゐるってことは」

「そ……そんな！　どういうことですか！」

高梨君がヒーロー夫人の言葉に食ってかかった。先程まで事態を呑め切れていなかった高梨君だが、この言葉の意味は直ぐに理解出来たらしい。

僕の居場所がヒーローというこの街唯一の正義にばれているということの意味を。

「ヒーロー夫人！　貴女は、佐藤さんがここに住んでることをヒーローにはらしたんですか！　そうですね？　この街に来た初日から佐藤さんは一回しか地上に戻ってない　その一回だつて十分かそこらだ！　台風で住めなくなつた佐藤さんが、地下で暮らすなんてヒーローが予測出来る訳がない！　ヒーロー夫人！　貴女は……佐藤さんを売つたんだ！」

高梨君が激昂する。ヒーロー夫人に向かつて。その姿は、今まで共に生活していて知らない姿だつた。確か高梨君は、自分を救つてくれたヒーロー夫人を尊敬していなかったか？　当のヒーロー夫人も信じられないようなものを見る目をしている。どうやら、高梨君は相当怒っているらしい。自分が尊敬するヒーロー夫人でも構わず激をとばせるくらいに。

しかし、待つて欲しい。僕が言いたいことはそういうことではない。高梨君の意見もわからないでもないが、少なくともヒーロー夫人は僕の居場所をヒーローに言つたということはない。

「あんたがそんなに怒るとはねえ」

ヒーロー夫人は、驚きを通りこして感嘆の意を示していた。怒る高梨君を横目に、僕を一回見て艶やかに微笑む。この短期間で気に入られたようだね、と言われたような気がした。

「何言つてんですかヒーロー夫人！　どういうことか、ちゃんと答えて下さい！」

「私は栄作がここで住んでいることなんて夫に言つちやいないよ」

「じゃあ誰が」

言いかけた高梨君の発言を抑えるようにして、ヒーロー夫人はこう言った。

「通りすがりのおばさん達らしいよ。台風の翌日、栄作の行方を見ていたただのおばさんさ」

そうだ。僕は台風の前日の自分が住む予定の家が崩壊しているとわかったあの時、通りすがりのおばさんの話を聞いて崩壊の意味を知った。半ば放心状態のまま地下への入口のトイレまで言ったのだが、明らかにあの時の僕はおかしな動きをしていた。今思えば、噂が好きそうなあのおばさん二人のことだ。トイレへと向かう変な若者を見て、好奇心がわきおこっのだろう。

「山田ことこっていうおばさんと川田まみっていうおばさん二人組みだったらいいんだけどね、トイレに入って一向に出ない栄作を不審に思っただけだ。地下への入り口は普通の住人は知らないことだからね。疑うのは当然って訳さ。そこに、地下への入口を知る夫が現れて、おばさん達が全て話してしまった……っていう次第さ」

ヒーローは地下に入った僕のことを調べるまでもなくわかった筈だ。よしえさんは、僕がどこに住むのかをヒーローに教えたといっていた。それならば、崩壊した家の新しい入居者が僕だということも容易に思い出せたに違いない。

「夫はこうも言ったのさ。『どういう訳があるのかは知らないけど、普通なら地上に住む予定の栄作君が地下に住むのは僕としても余り了解出来る用件じゃないんだよ。それに、誰がやったかはわからないけど、こうやって地上にある大学に催促の話も来てるんだ。これじゃあ流石の僕でも『地下に住む地上の住人』の栄作君を隠し切れない。だから、もし大学に行かない場合は、地上に強制送還されて、二度と地下には戻れなくなるからそのつもりでね』って。わかったかい？」

ヒーロー夫人がヒーローとやらの声マネをしながら言う。声マネの上手さを判断しようにも、その本人の声を聞いたことがないから

どうしようもなかった。ヒーロー夫人にしては結構太い声なので、頑張っただけはわかるけど。

高梨君は、額に流れる汗をぬぐいながら、下を俯いた。

「……はい、わかりました。すいません、なんか……訳もわからず怒ってしまった」

「いいよそんなの。あんたが私に怒ったって、昔のあんたのことを考えたら何とも思わないさ」

「ちょ、ひ、ヒーロー夫人、昔の話はしないうって約束したじゃないですか」

ちよつとちよつとと焦った様子で高梨君はヒーロー夫人に言う。

ヒーロー夫人は笑って応対していた。昔の高梨君か……今でさえこんな格好をしているんだ……想像するのが怖いな……。

そんなことを思っていると、「という訳だ」とヒーロー夫人が改めて話しを切り出した。

「一日だけでいい。地上に行って、大学に通ってくれないかい？」

ヒーローがいるのに平和な街の裏 五（後書き）

すいません無茶苦茶更新遅れました。出来るだけ更新してくつもりです。

ヒーローがいるのに平和な街の裏 六

「じゃ、行ってきな。絶対に切裂の奴を捜すんじゃないよ」

荷物を肩にかけ、エレベーターの前に立つ僕をヒーロー夫人は見守ってくれた。そんなに気にかけなくてもいいと思うが、やはり僕が徳永切裂を捜しに行かないかどうか不安なのだろう。

正直、僕も徳永切裂を捜しに行こうとする自分を抑えられるか不安だ。実際、僕は今直ぐにでも徳永切裂を捜し出そうとしている。

滅多に許されない地上に行くんだ。チャンスを活かさない手はないけど、まだ僕にそれはまだ早い。的を狙い続けるくらいのが簡単に出来ない僕の方では、徳永切裂を追い掛けるなんて不可能に近いからだ。跳弾を利用しての何発も当てるなんて神業を見せたヒーロー夫人でさえ、徳永切裂を恐れている。それなのに僕なんかが徳永切裂の居場所を突き止める……ましてや、徳永切裂を「殺す」なんて出来る訳がない。

しかし……自分を抑える自信がない。

前回地上に行った時は徳永切裂の居場所を突き止める為に僕の家へ向かおうとしていたからこんなことに悩まされる必要はなかった。何が起ころうと、僕の目的に変わりはないからだ。

だけど、僕は地下で生活することによって自分がどれだけ非力か知ってしまった。何もヒーロー夫人だけじゃない。地下に住んでいる全ての人が、何かしらの戦闘術を持っていたからだ。

というより、全員拳銃を扱うことに手慣れていた。元が悪人云々なんて関係がない。僕が朝早く起きて技術を磨いていることを知った地下の人達が僕に教えてくれたのは、明らかに素人のものではなかった。

瞬間的に、次の弾を入れる特殊な指の動き。

撃つ目標を目で追わず、音や気配で把握する仕方。

銃を使つての防御術。

全てが全て、僕にとって目新しいものばかりだった。

「この人達は……本当に『元』悪なのだろうか？ これ程までの技術を持ちながら、何故ヒーローとやらに復讐をしようとするのだろうか？」

「何故、地下に銃があるのだろうか？」

疑問が膨らむばかりだったが、高梨君さえも銃をいじっている姿を見て質問する気にならなかった。何か特別な事情があるのだろうか。それなら、部外者の僕が口を挟む問題じゃない。

そう思っただけなら、地下の人は引き下がったが、地下の人達の教えのせいで僕は自分の力に自信が持てなくなってしまった。

だから、僕は悩んでいる。

徳永切裂を大学に行くついでに捜すかどうかを、悩んでいる。

そうやって考えに考えて、ずっと下を向きながら黙っている僕を見ると、ヒーロー夫人は、ハア、とため息をつき、こう言った。

「切裂の奴を捜さないって、約束出来ないのかい」

「……すみません」

「すみませんじゃないよ、全く。今のあんたが切裂を捜して、ただですむ訳がないだろうが」

「わかっています。だけど、それでも……それでも僕は、徳永切裂を許せないんです。徳永切裂がこの世に居ることが許せないんです。徳永切裂が食事をするのが許せないんです。徳永切裂が呼吸をするのが許せないんです。徳永切裂が少しの時間でも動き続けるのが許せないんです。徳永切裂が生きているのが、はらわたが煮え繰り返って煮え繰り返るくらい……許せないんです」

「……ハア。そうかいそうかい。要するに、あんたは何が何でも切裂を捜し出したいんだね。自分がどうなるかが関係なしに」

「……否定は出来ません」

ヒーロー夫人が言うように、結局のところ僕は徳永切裂を捜し出すだけでいいのかもしれない。徳永切裂の姿を見たら、僕は何も考えずに特攻するとわかりきっているからだ。

ヒーロー夫人は何度目かわからないため息をつくど、僕を真っ直ぐに見た。

「今のおんたが、もし徳永切裂を捜し出したら、間違いなくおんたは返り討ちになる。そうなたら、元も子もないだろ？ おんたの目的は何だい？ 徳永切裂に殺されることかい？ そうじゃないだろ？ おんたの目的は、徳永切裂に復讐……つまり、徳永切裂を殺して家族と恋人の仇を討つことだ。だつたら、今はまだ早い。もう少し待てば、おんたの力は成長する。徳永切裂だつてまだこの街から出ない。……これだけ言つても、まだおんたは徳永切裂を捜そうと思ふかい？」

こつ言つたヒーロー夫人の目は僕を審査する目だつた。朝に弱い筈なのに目を鋭くし、僕を睨みつける。蛇に睨まれた蛙とはまさに僕のことだろう。恐怖すら感じた。思わず体が震える。

それでも、僕の心は揺るがなかつた。

「すみません、ヒーロー夫人。無謀だと思つてます。だけど、これだけは譲れません」

「……………チツ」

啞然とした顔で僕を見たヒーロー夫人は、露骨に舌うちすると、「あーもう！」と綺麗な髪を両手でかき、騒ぎ始めた。場違いだと思ふが、子供みたいなヒーロー夫人の動作が珍しく、なんとなく得した気分になる。

「そこまで言つたらおんたをこれ以上止めないよ！ 私には、おんたを止めることは出来ない！ つたく、何でだい！ 何で復讐に駆られた奴らは皆、そうやつて自分を追い込みまうんだ！ やつてらんないよ、全く！ どこにでも行くがいいさ！ おんたが死んだつて、私にや関係ない！ とつと行きな！ おんたの顔なんて、これ以上見たくない！」

大声で僕を怒鳴りつけたヒーロー夫人は、直ぐさまカウンターの後ろに入ってしまった。僕と、空気を読んだのか何も言わなかつた高梨君だけが取り残される。無言の状態が僕達二人を包んだ。

「……佐藤さん。俺からも言わせて下さい。本当にこのまま、徳永切裂とかいう危ない奴を、捜しに行くんですか？」

「大学に行くついでだよ」

「徳永切裂を捜しに行くついでに、大学に行くんでしょ？」

「……………」

僕は、高梨君の心配してくれる視線に何も応えることが出来なかった。

「……わかりました。佐藤さんがその気なら、俺は止めません。俺にあなたを止める義理もありませんから」

言つと高梨君は、僕に背を向けた。高梨君らしくない、冷たい言葉だと思った。

「エレベーターが動く為のパスワードは毎日変わります。エレベーターに入った後、『俺は人間をやめるぞ』と言つて下さい。エレベーターから降りて地上に出た後、四分三十五秒待つて下さい。そうしたら、佐藤さんは徳永切裂を捜しに行くことが出来ます。さようなら、佐藤さん。今まで楽しかったです」

「……はい」

僕はエレベーターに入り、上に向かうボタンを押して「俺は人間をやめるぞ」と言った。カウンターへ走つて向かう高梨君の姿を、僕は最後まで見た。

そして、エレベーターの扉は閉じ、地上へと向かう。体が上へと引つ張られる感覚が僕を襲った。

高梨君。

ヒーロー夫人。

今日の夜、もう一度会つて謝れるか、自信がなかった。けれど、僕は徳永切裂を捜し出す。

「……………ううう……………あああ————っ！」

自責の念。怒り。拒絶された。悲しみ。憎しみ。苦しみ。復讐。殺意。

様々な言葉と様々な感情が入り交じり、入り混じり、意味や訳が

わからなくなつた僕は、何の意味もなくエレベーターの壁を拳で殴りつけた。ガスン、と大きな音がし、右拳が痛む。それでも、溢れ出る感情の波を抑えることが出来なかつた。

復讐とは……これ程までに辛いことなのか？

口から、嗚咽が漏れる。

誰も、気にかけてくれる人はいなかつた。

数分後、エレベーターが地上のトイレに着く。レトロな町並みが僕の視線に入り、トイレから出ると、静かな空気が僕を包んだ。濡れた目を服でふき、前を見据える。悩んでたつて仕方がない。仕方がないなら、前に進むしかない。肩かけバッグを探ると、中から手書きの地図が出てきた。ぐちゃぐちゃで何がなんだかわからない。わかるのは、現在地という文字と、久貝田大学という文字だけだつた。久貝田は『くがいだ』と読む。さつき、ヒーロー夫人に教わつた。その時の情景と最後に聞いたヒーロー夫人の言葉を思い出し、悲しい気分になるが、気にしないことにした。

高梨君が言うには、エレベーターから降りた後、四分三十秒待たなければいけないらしい。今の時間は七時二十分。腕時計を見ながら、四分三十秒経つのをひたすら待った。

すると、ふと僕は気付く。

こんなこと……前回地上に来た時、高梨君は言っていたか？

そう思うと同時に。

ほぼ同時に、後ろのトイレの扉のロックがかかった。

……嫌な予感がする。四分三十秒待つ意味が、一つしか思いつかない。

それでも僕は、その場から動かなかつた。

嫌な予感がすると同時に、嬉しい予感がしたからだ。

四分三十秒が経った。

トイレのロックが解除され、色が赤から青に代わつた。

トイレの扉が開かれる。

「五秒の話し合いの結果、俺とヒーロー夫人の意向が合致しました」

その言葉の主を見て、僕は顔を綻ばした。

「……どんな話し合いをしたんですか？」

トイレの中で僕を睨み続ける言葉の主は、こう言う。

「『後をつけな』、『はい』です。佐藤さん」

トイレから出ると、僕を真つ直ぐに見て、高梨君はこれまでにな
い程真剣な表情で呟いた。

「俺があなたを止めます。今日一日、俺はあなたが大学に行った後、
すぐ帰るか、見張ってます。俺も、言葉には出さないけど……ヒー
ロー夫人も、あなたが心配なんです。死んで欲しくなんかありません。
だから……」

高梨君は僕の両肩に力強く両手を置くと、僕にこう言った。

「謝って下さい、佐藤さん」

「……………」

何も言うことが出来なかった。

こんなに、僕を心配してくれる人達がいる。このことが、ここま
で嬉しいなんて、思いもしなかった。

………そうだよ。

僕が死んだら、高梨君とヒーロー夫人はどうなる？ 悲しむんじ
やないか？

そんなの、嫌だ。

死んで取り残された奴の悲しみを、こんなにも優しい人達に背負
わせたくない。

僕は、迷いをふっ切ってこう叫んだ。

「生意気言って、すいませんでした！」

その後、高梨君は僕の横で笑いながらずっと喋ってくれた。久貝
田大学の場所がわからなかったので、ぐちゃぐちゃの地図を見せて
「どうすればいいかわからないんだけど」と正直に言うと、高梨

君が笑い転げた。

「これ、ヒーロー夫人が書いたんですよ。いやー、久しぶりに見たなー、このひつどい絵」

高梨君が声に出して笑っている横で、僕は温かい気持ちになった。後でヒーロー夫人にも謝ろう。

久貝田大学は仮設トイレから歩いて十分の場所にあるらしい。しかし、肝心の場所がわからない上、早朝なので誰一人通行人が居ないせいで、久貝田大学に着いたのは八時十分を越えていた。門の向こうに、高くそびえるビルのような建物が右にも横にも斜めにもそびえる。茶色のタイルで彩られた床は、太陽の光りをよく反射した。

高梨君の横で、高梨君と同じように荒いだ息を調える。危なかった。確か八時三十分が一時間目の始まりの時間の筈だ。こんなにギリギリの時間になるとは思っていなかった。

「それじゃあ佐藤さん、これを服のポケットに入れて下さい」

そう言っただけ高梨君が取り出したのは、何だかわからない小さな黒いマイクだった。

「これは？」

「盗聴器です。それに内側にカメラも仕込んでます。佐藤さんがどんな行動をしても、筒抜けという訳です」

「……これは、一体どこで手に入ったんですか？」

すると高梨君は、一回笑って言った。

「ヒーロー夫人から、ついさっきです」

「……そうですか」

僕は、何の躊躇いもなしに胸ポケットにマイクの部分を上に向けて入れた。高梨君は説明しなかったが、こうやって上に向けた状態じゃないと服が邪魔して見えなくなるんだろう。

高梨君は僕がマイクをポケットに入れると、「ありがとございませ、佐藤さん」と満足して言った。

「んじゃ、俺はこれで。この近くで見張ってるんで、変なことをしようとしなくて下さいよ」

「わかりました、はい、わかりましたよ」

笑ってこう返すと、へへへと鼻に指をかけて、高梨君はその場を去った。

さて。

色々あったが、僕のとりあえずの目標は大学に行つて一つでも授業を受けることだ。それ以外は、あまり考える必要はない。

向かう場所は南館三階の教室。肩かけバッグに入っていた紙にそう書いてある。とりあえず右の建物に行くと、南館だった。運がよかつただけだけど、少し嬉しくなった。南館に入り、横に二つ並ぶエレベーターを見つけると、急いで入り、三階に向かうボタンを押した。エレベーターが上昇し、一分も経たない内に着く。

扉が開き、エレベーターから降り、急いで教室とやらを探そうとした。白色の廊下や壁の間に、ドアが等間隔で並ぶ。残り時間も僅かだ。全く大学生を見ないのもそういう意味だろう。そう思っていたら、一人見つけた。しかし、何だかやつれた様子で、柱の影に隠れてしまった背中で人を判断するのは難しかった。

しかし。

「……え！」

ここで僕は、驚愕することになる。

やつれた大学生の後ろに、遠目からでもわかるくらい満面の笑顔で、彼女は現れた。カジュアルな服装、細長い美脚、それなりに大きな身長……そして、何度見たかわからない、僕が愛しく思うあの顔。亜希子が。

柳田亜希子が。

徳永切裂に殺された、柳田亜希子が、確かにそこに、間違いなく存在した。

「亜希子！」

迷わず僕は叫び、駆け出した。死んだ筈の亜希子が生きていた。そんな突飛な考えがすんなり思いつく程、目の前の彼女は亜希子に似ていた。

いや、似てる似てないの問題じゃない。

彼女は、亜希子だ。

「ひゃっ……えっ!」

彼女は突然の僕の大声と、突然近づいた僕に体をびくつかせる。

構わない。亜希子が生きてたんだ。もう他に、何も考えられない。

「亜希子! お前、今までどこにいたんだよ! 死んだかと思つて

た! なあ、なんでこんな所にいるんだ? 何でだ? 何でなんだ

? なあ!」

「ちょ……何で何でうるさいっての! 誰よアキコって! 知らない

いわよ、アキコって人!」

そういうと彼女は、彼女の両肩を勢いよく揺らす僕の両腕を思い

つ切り離れた。ハア、ハア、という声と共に、彼女は息を整える。

そして、こう言った。

「朝っぱらから人違いで体を揺れに揺らされて、こんなに顔を近く

に寄らされて……こんな……こんな、気持ち良過ぎるじゃないの

よ!」

「……………へ?」

サー、と何かが去っていく音が僕の中をこだました。……………つて、

あれ? 亜希子って、こんな風に両手で体を包みながら、こんなに

赤くとろんとした……いかにも気持ち良い快感を得たよう……表

情をする奴だったっけ……?」

不思議に思っていると、僕の視線に気付いた彼女は顔をハツとさ

せ、身を取り繕った。どうやら恥ずかしかったらしい。「えー、ゴ

ホン」と言うと、こう続けた。

「とにかく、私はアキコって名前じゃないよ。私の名前は叶香里。

お金とスポーツをこよなく愛する、ただの女子大生なんだよ!」

「叶………香里………?」

目の前の女性は、自分の名前を叶香里と言った。依然戸惑っている僕だったが、これだけはなんとかわかった。

この人は、亜希子じゃない。

「ただ、亜希子に似ている。」

「うり二つとはまさにこのことだろう。冷静になってみると亜希子と髪型が違っただけ、（亜希子は肩までの長さのショートヘヤーに対し、この人は恐らく長いであろう髪をポニーテールにしてまとめていた）、それでも、顔や体格が酷く似ていた。似過ぎているといつても過言ではないかもしれぬ。」

「違うのは、髪型だけだ。」

「亜希子はあるおかしな反応をする人じゃなかったけど、あれ以外の仕草や雰囲気はそっくりそのままだった。」

「そう。私は叶香里。だからさ、君が言ってるようなアキコって人じゃないの。わかったら、肩から手を離してくれない？」

「……はい。すみません」

「そう僕が言うと、叶香里という名前の女性は僕の両手を剥がした。そして、そのまま教室に向かおうとする。その教室は僕が次受ける授業の場所ではなかった。つまり、このまま彼女を見送ると生半可なことではもう一度会うことが出来なくなる、ということだ。」

「……って、待ってくれ。」

「それは、嫌だ。」

「何とかして、またこの人と話しがしたい！」

「待って下さい！」

「僕は、知らず知らずの内に叫んでいた。しかし、叶香里という名前の女性は、僕の方を振り返らずに教室に入ろうとする。流石に気味が悪いと思っただろう。当然だ。朝にいきなり肩を掴まれ、大声でまくしたてられたら、誰だつて不審に思うに決まっている。」

「それでも僕は諦め切れることが出来なかった。それこそ、当然だろう。今の僕の心の中には、先程までの復讐心は全くなかった。」

「あるのは、亜希子への思いだけ。」

「僕は、叶香里さんに向かって走りだそうとした。距離はそれほど開いていない。この距離なら、チャイムはまだ鳴らない筈だ。」

すると、教室の扉を開けようとした叶香里という人が、ふいに後

るを振り向き、僕を見た。

そして、こう言った。

「……これ以上付き纏うつもりなら、授業が終わってからにしよう、始まるからさ」

叶香里さんは、これ以上喋る気はないというような雰囲気を出して教室への扉に手をかけた。僕には背中しか見えていないけど、とてつもなく嫌な表情をしていると思う。それくらい、彼女の声は低かった。

だから僕は、こう叫んだ。

「校門の近くで、待ってるから！」

亜希子に似た叶香里さんは、一度ピタリ、と動きを止めたかと思うと、結局僕に顔を振り向かせずに教室に入ってしまった。

世界には自分と似た人間が、自分を含めて合計三人いるという話は、僕でも聞いたことがある。今の今まで、僕はそんな話を信じたことも、感慨深く思い返したこともそんなに無かった。

でも、亜希子に似た人が、徳永切裂が逃げ込んだ街に住んでいた。あまりの出来事に呆然としていた僕を、廊下に響いたチャイムが急かす。

「……とりあえず」

今は叶香里さんのことは忘れて、授業に集中しよう。

多分、無理だろうけど。

ヒーローがいるのに平和な街の裏 六（後書き）

久貝田大学はひらがなにするとか「くがいだいがく」となり、回文になる仕組みになっています。まあストーリーには全く関わりのないことなので、自分の遊び心だと思って温かい目で見えてやってください（笑）

ヒーローがいるのに平和な街の表？

「今から三百年程前、この街にヒーローが誕生しました。皆さんがよく知っている、あのヒーローです。その頃からヒーローは、現在のようにな少し大きな体型だった訳です。しかし、ヒーローがいるからといってその頃は平和な街ではありませんでした。犯罪者がはびこり、病を治す医者は少なく、車や電車等の交通事故も多発していたのです。そこでヒーローは、この街を他の街の影響を一切受けない、独立国ならぬ独立街にしようと言いました。そして提案されたのが、およそ三千年も昔とされているある国の国策です。それが、皆さんご存知の、この街を取り囲む壁の存在なのです。しかし、三千年前の国が建築した壁とは、違う理由でこの街の門は建築されませんでした。ヒーローはその理由をこう言っています。「他の街から悪を入れないようにする為なんだよ」と。なので、三千年前の国が建築した壁とは少し毛色が違います。まず、街全体を囲み内部を遮断しない点。次に、完全に他の国と連絡を遮断するのではなく、東西南北それぞれの地下に巨大な門を造った点。門を通過する為には、厳しい審査と、それぞれの門を守る門番のお目がねに敵わなければなりません。これらの案により、この街には犯罪者は入れずに必要な物資や食料を定期的に外の街から輸入出来る仕組みが出来上がったのです。その後、車と電車を一部分だけ残して廃除し、飛行機は当然全廃。医者を増やし、犯罪をしでかす者達を徹底的に廃絶する為に、地下に特別な場所を造りました。これを行ったのは、私達の住む平和な街が誇る最高の科学者達、通称『暗闇の空間』です。彼らは二百年程前、ヒーローの名の元に結成された科学者団体であり、地下建造は勿論、記憶操作、人格形成のし直し等も可能にし、最近では死人の幽体化や新次元想像のような物理的に不可能なことも出来るらしいのです。ですが詳細は不明。彼らがこの街のどこで何をしているかは、ヒーローとヒーロー夫人しか知らないのです。……

って、ゴメンね。暗闇の空間にはちよつと詳しいから、皆さんがポカーンとするようなことも喋っちゃった。えつと、話を戻すと……そうだった、ここだった。えつと……様々な案を出し、実行したヒーローは、ついに本格的に動き出し、およそ百年をかけて、犯罪者を含めた『悪』を廃絶することに成功しました。それが、ちょうど今から十五年前。だから、先生も皆さんも、ヒーローを尊敬している訳です」

相も変わらずかつたるい喋り方をする眼鏡の先生だったが、いかんせんこの人の見た目がグラマラスな女性代表というような感じだからたちが悪い。喪服のような黒い服の胸元ははちきれんばかりだし、何故か短いスカートからは叶よりも細くて長い美脚が覗かされていた。唇はたつぷり口紅を塗ったのか、蛍光灯の光りによく反射し、しかも顔が物凄く小さい。眼鏡がいい味出してる。何でこんな先生が大学なんかで歴史を教えるんだろう？ 全くもって、意味がわからない。

意味がわからないといえば、先程の、叶の教室への入り方もだ。エレベーターの中で疲れに疲れきった俺が（……まああれだ、何も起こってないんだが……この話題は少しの間放っておいてくれ）、猫背で、それでも何とか教室の一番奥の真ん中の席に着くと同時に、こんな叫び声が聞こえた。

「校門の近くで、待つてるから！」

俺が聞いたことのない声の種類だったのだが、その声が明らかに大学の廊下で発しても恥ずかしくない大きさにおさまり切らない声だった。嫌でも注意が入口に向く。どうなってるんだ。こんな朝っぱらから、誰が誰に向かって大声なんて出すんだっての。

この教室の机と椅子は映画館のような構成になっており、ホワイトボードと教壇の間に挟まれる先生が、俺を見上げるような、だんだんなつくりになっている。故に俺が教室の入口を見る時、自然と下に目線が行くのだが、つつぶしながら見た場所には、扉を開けた後の満面の笑みの叶が居た。

……ちよつと待て。ってことは何だ？

叶に、「校門の近くで、待ってるから！」なんて叫んだ奴がいるのか！

おいおい叶の奴、笑ってやがるぞ！

え、これどういふこと……どういふことなんだよ！

俺の知らない場所で、何があつた！

そう考える俺を少し見上げた叶は、今度は二ヘラと嫌な意味でいやらしく笑い、空席だった前の席の、俺から見て左側に座つた。

俺はそんな叶の後ろ姿を見ながら、悶々と考えにふける。

えーつと、あれだ……つまり今さつき、叶は俺の知らない誰かから一緒に帰ろうというお誘いを受けた……んだ。まあ……いいよ。

うん、叶は外見だけ見りや普通に美人だからな。何も文句はない。

だけど、叶を誘つた奴が、叶の変態性を理解しているかが問題なんだ。

金好きで、ドM。唯一まともそうな運動好きという概念も、他人から見られる自分の痛めつけられた身体が快感だからなんだ。

そんな、外見美人で中身変態な叶だ。当然、内面を知つてて帰りに誘う奴がいる筈がない。この大学に、叶の性格を知らない奴もいない筈なんだ。

だけど、あいつは帰り道同行に誘われた。

「……ああああ、意味わかんねえ」

こつ言いながら貧乏揺すりをする俺を、隣の奴が残念な者を見るような目つきで見る。止めてくれ、その視線。頼むから。俺、変人じゃないから。

「では次は、ヒーローに長年付き添うヒーロー夫人についての話しをしましょう」

こんなような話しを先生がしているが、今の俺に理解することはもう無理だった。何でだ？何でこんなに俺が悩まなければならぬんだ？

「何なんだよ、ホント……」

ボソツと呟く俺。しかし、ここで俺は頭にコツンと何の先端が当たる感触を得た。授業中に誰が……と思つて顔を上げ、机の周りを見ると、大学ノートと筆箱の横に紙飛行機が落ちていた。

「は？」

さつきまでなかった紙飛行機が机にあるということは、誰かが俺に向かつて投げたんだらう。しかも、嫌なことに俺の頭を狙つて。

今の俺はこの教室の奥にいる。つまり、紙飛行機を投げたのは近場の奴だらう。そう思つてまずは横を見てみると、さつき俺を残念な者を見るような目つきで見えていた名前は知らない男子大学生が、困つた顔で、右の人差し指を左下の方向を指していた。

何も考えずに流れでその方向を見てみると、そこには真剣な表情でこつちを見る叶が居た。瞬間、紙飛行機を手取る。

あいつ、どうやって下から上に俺の頭目掛けて紙飛行機を飛ばしたんだよ！

そもそも今授業中なんだけども！

口に出したいツツコミを寸手で堪えた俺は、隣の男子大学生に首の動きで礼を言うと、紙飛行機を広げた。あいつのことだ。頭を抱えて悩む俺を見兼ねて、全てを知らせようともしたんだらう。……つて、あれ？ ということはあいつ、本当に同行の誘いを受けたつてことか？ いや待て。これ以上考えるな。全てはこの紙飛行機の内部に書かれている。

勢いよく開き、正方形の両面白色の折り紙に戻すと、そこにはこう書かれていた。

『アキコつて人、知ってる？』

「……………」

あいつ……ついに女にまで手を出しやがったか！

許容範囲が広いにも程がある！

つて、そんな訳ねーだろ！

……そんな訳、ねーよな？

とにかく元の文面を修正機で消し、『知らねーよこの野郎！ ア

キコつて誰だよ！ 演歌の巨匠か！』という文を改めて赤のボールペンで上書きした。さて叶に伝えようと思つたら、今は授業中。高校や中学の時のようなメモ渡しは出来ない。何故なら、机が段々になつてゐるからだ。これじゃあ渡そうにも、どうしたつてかがまなきやいけない。

仕方なく紙飛行機に戻し、叶の方向を見る。何とかあいつの場所まで飛ばそうと、奇跡を信じて構えたら、突然、ドゴガンガラ、と大きな音がした。

前方の教壇からだつた。

正確に表すと、先生が思いつ切り叩きつけた拳から。

全員が全員驚いて先生を見ると、先生はニコリと口だけで笑い、俺を見る。手元の教壇が、キツチリ縦に半分に割れた。

ていうか、割れやがつた。

この先生…… どんだけ怪力なんだ！

「刀銃君…… 君さ、先生の授業、嫌い？」

どす黒く低い声が、俺を圧迫させた。ヤバイ…… 先生の体からなんか恐ろしいオーラが出てゐる気がする……！

「め、めめめ滅相もないです！」

「好き？」

「好きです！」

「あ、イヤン。照れちゃう」

「いやあんたのことじゃねーよ！」

誘導尋問かコラア！

ひっかかつてたまるかこの野郎！

クネクネしながら頬を赤く染める先生を見てゐると先生はハツ、と我に帰り、こつちを見つめ直した。暗い顔で。

「チツ、私としたことが…… 大学生のどこがいいのよ…… 確かに若いわよ…… だけど若いだけじゃダメでしょ…… そう、経済力よ！

男は経済力が無きゃダメなのよ！ それに気付いていたら、今頃あんな男にひっかかつてなかつたのに……」

「あの……俺見ながら呟くのやめてもらえませんか……？」
俺がそう言うと、先生はまたもやハツとした表情にかわり、周りを見る。

見ると、多くの大学生が訝しげな表情で俺と先生を交互に見ていた。特に男。先生のあるな仕種を見るのは初めてなことも拍車をかける。

要は、大学生と先生の禁断の愛……ってか？

「勘違いも甚だしいわね……」

「え、今誰の声！」

とか思っていたら、前方から低い声がまた聞こえてきた。先生がこちらを見ながら、半分に割れた教壇を大きな音をたてながら粉々にし始める。

間違いなく先生じゃん今の声！

てか怖い！

俺は、あの先生が普通に怖い！

「お……俺、先生の授業好きです！」

「へえ。ど、れ、く、ら、い？」

「く……さ、三度の飯の後のカップラーメンくらい好きです！」

「……先生も好きよ、カップラーメン。三度のご飯がカップラーメンでもいいくらいね」

それ結局四回カップラーメン食ってんじゃない！

太る元凶背負い過ぎだろこの人！

なんてことを思いながらも、心の中にしまっただけとしておくことにした。今の先生に太るとかなんとか言ったら、どうなるかわからない。

「……美味しいですよね、カップラーメン」

俺がボソツと呟いたのを一瞥すると、先生はうんうんと頷き、俺を見上げた。

「うん、そうね。じゃ、刀銃君。黙って……先生の授業聞いてね」

「……わかりました」

そう言つて、先生はいつものほんわかした雰囲氣に戻る。ただし、教壇がもう塵すら残つていない状態だったので、先生は「あらあら」とか言いながら平行移動式の四枚の左下の黒板に「ヒーロー夫人と街の地下」と書き始めた。

……ふう。まずは、一件落着か。先生は今、黒板の方を向いている。それなら、紙飛行機を飛ばそうとしても気付かれる筈がない。

そう思つてもう一度飛ばす体勢に入ろうと、まずは紙飛行機を持つとつと机を見たら、そこには俺がさっきまでいじっていた紙飛行機と別の紙飛行機が置いてあった。

は？

何これ？

そう思つたのもつかの間、犯人は叶しかいないことに気付くと、色々いいたいことはあつたがとりあえず二つ目の紙飛行機を開いた。そこには、「それ和田様じゃない。違う違う。私が聞きたいのはアキコつて人のこと」と、小さい文字でピッチリと横書きに書かれていた。

何でこいつ俺が言おうとしたことがわかつたんだ！

というか和田様つて！

演歌の巨匠に様付けするってどこのおばさんなんだ！

そもそもどこをどうしてどうやって俺のいいたいことを理解した上で先生の目をかいくぐつて俺の元へ紙飛行機を飛ばしたんだよ！
こついいたい気持ちを実剣に堪えた。堪える堪える堪えれ堪える俺。もしこの感情の波にかぎ括弧をつけたりでもしたら、その瞬間俺は周りの学生どころか叶にまで冷たい目で見られるかもしれない。そんなの受け止められる訳ないだろ。

普通にこつという結論に至つた俺は、叶の動きを見てみることにした。そうすれば叶が、どうやって俺が書いた事柄を理解出来たかわかる筈だからだ。

身を乗り出して、叶の方を見る。別段、何も不自然な点はない。
あれ？

何もやってねーぞ、叶の奴？

そう思ったのもつかの間、叶は突然右手で自分の頭の横を引っ張り始めた。何やってんだあいつ、と不審に思ったので、手で引っ張っている周りをよく見てみると、蛍光灯の光りに反射してキラキラ光る一筋の線みたいなのがあった。ピアノ線か何か、叶の手元にある。そして、その先の何かを引っ張っていた。その『何か』を確認する為、目線を追ってみると、ピアノ線は蛍光灯の光りが眩しい、天井に延びていた。

「何で天井？」

……まあいいよ。天井にピアノ線が延びていることだつてあるさ。おいおいちよつと待てよいや無いじゃん普通は無いじゃん大学の1室にピアノ線なんて有り得ないじゃんなんて相槌は、今の俺の耳には届かないからそのつもりでそのままじつと俺の話聞いてくれ。

つまりは、だ。俺が言いたいのはピアノ線が天井に延びている云々じゃない。

言いたいことは、二つ。

いつ叶が準備したのかということと、なんでそのピアノ線が天井を伝って俺の真上にある意味がわからないガラス板に繋がっているのかということだ。

てか何故にガラス板が真上に！

いやわかるけども！ 用法わかるけども！ 俺が紙飛行機に書いた文をカンニングする為のガラス板だつてことはわかるけども！

叶…… あいつ、何でこんなもん準備してたんだ！

明らかに死人が出る中忍試験真つ最中か！

あの試験の最後の問題は予想出来なかったなあ、なんて感慨深く思いながらも、砂でカンニングは不可能だるなんて思ったりする俺の手元に、紙飛行機がまた到着した。こ……これはどうやって俺の手元に来てくるんだ……。どうやって叶が下で俺が上に居るんだから不可能な筈なのに……。

八八……八八八……。

不思議ちゃん過ぎだろあいつ！

「…………あーもう、知るか！」

そう叫ぶと同時に、俺は三つ目の紙飛行機を開いた。前回までの二つの紙飛行機よりも若干サイズが大きい紙飛行機だったが、色は変わらない。周りの視線が一気に俺の元へと集中したが、もう俺は一切合切気にしないことにした。

そこには、『さっきさ、私の肩をいきなり掴んでぶんぶん揺らした人がいたんだけどさ、一緒に帰らないか誘われちゃったのよ。刀銃も一緒に行かない？ てか行こうよ。刀銃と変質者のコラボレーションは私にとって麻薬になるかもしれないからさ』ともの凄く小さい文字で書かれていた。裸眼で両目がA判定の俺でさえ、近くに寄らないと読めない大きさだった。いかにも女子です！ ってな感じの丸文字だったのも読みにくい原因の一つだったかもしれない。

俺はその文章を読んで、ある程度叶の身に起こったハプニングを理解した。

朝、エレベーターで俺に抱き着いて頬擦り…………じゃなくて、喋った後、俺の少し後ろをついて歩いていた叶は、俺が机につくと同時に見知らぬ誰かから肩を掴まれた。アキコという人に間違えられたのかもしれないな、話の流れからいつて。正直よくわかんねーけど。そして、叶はその危ない奴と一緒に帰ろうと誘われた。

そこまではよかった。いや、よくはない。それはわかるんだけど、これまでなら叶の反応は一般のそれと何ら変わらない。

問題なのは、その後だ。

確かあいつ…………教室に入った時、無茶苦茶笑顔じゃなかったか…

…？

てことは喜んでたんじゃん！

変質者の登場に喜んでたんじゃん！

駄目だ…………このまま叶をその変質者さんと帰らせると何が起こるかわかったもんじゃやない…………。とにかく、紙飛行機に『俺も一緒に行く！』と書こう。友人が変質者に関わるなんて考えられるか。そ

の友人が変質者な場合の解答は、俺は持ち合わせていないので、考えないでおく。

「へえ……」

しかし、そこまで考えていると、俺が使っていた机に突然、穴が開いた。大きな音と共に俺の目の前を何かが通過したと思うと、紙飛行機が飛び散り、くしゃくしゃになって地面に横になる。

え！

穴ってどういうこと！

そう思ったのもつかの間、前方からこれまた低い声が出た。言うまでもなく、先生だった。

頭上から何かが降ってくる。ガラス板の破片だった。

天井に、チヨークが刺さっていた。

先生が、チヨークで机に穴を開けたのだった。

「もういいかな……刀銃君……？」

「な……何がですか」

思わず顔が引き攣った。

構わず、先生が話しを続ける。どす黒い顔のまま、どす黒い声で。……君さ、さっきからペチャクチャペチャクチャ喋ってるよね？ 気付いてないでも思ってるの？ 舐めてるのよね、私を……新米だからって舐めてるのよね……ホント、これだから若い奴は……私 はあんな奴に興味はなかったのよ……なのに若さだけで私に迫ってきやがって……」

「せ、先生……あの、途中から昔の苦い経験に怒りの矛先が向いてるんですけど……」

「なんであんなのと一夜を共にしちゃったのよ……」

「それ以上言わないでください！」

先生の経験遍歴なんて豚の丸焼きをどうやって作るかくらい興味ないんだよ！

というか言わないでください！

なんか聞いてて悲しくなってくる！

因みに俺の夢は豚の丸焼きを一人で食べることだ！

……ああそうだよ。周り見てみるよ。男子見てみるよ男子大学生
見てみれよ……皆、涙目だろうが！

俺含めて皆好きなんだよ、年上の女の人！

「と、とにかく……刀銃君」

「は、はい……なんででしょうか……何すればいいんでしょうか……」

「あら、率先して何かをしたがるなんて、話がわかるわね。若いく
せに」

最後にボソツと呟いた先生は、蛍光灯の光りなんて目じゃないく
らいに明るく笑って、俺を見た。

そして、こう言った。

「机と教壇を、今日中に手配して買ってきなさい」

「えー！」

「嫌なの？」

「え、あ、あの、嫌とかそういうんじゃないって」

「じゃあ何？」

「え、い、あ、あの」

じゃあ何じゃねーよ……よくわからないけど、この命令をそのま
ま聞いたら俺は叶と一緒に帰れなくなる。そもそもその二つ壊した
の先生じゃん。そうだ……そうだ！俺は何も悪くない！

「お、俺が運ぶのはおかしいと」

「……フンツ！」

先生の握られた小さな拳が、握られたまま後ろに振られる。ドゴ
ン、と大きな声がまた教室に響くと、左下の黒板が壊れていた。

「な、に、か、言っ、た？」

「何も言ってません！」

「そう。じゃ、黒板もお願いね。あと、チョークもね。多分さつき
投げたやつ、もう使いものにならないから」

「……………」

机に新しく投げ込まれた四つ目の紙飛行機には、『私もあの先生

にいたぶられたいよ！ 羨ましいよ、刀銃！』と書かれていた。
「……はあ」

知らないうちに、俺はため息をついていた。

ヒーローがいるのに平和な街の表 ？（後書き）

書いてて本当に楽しかったです（笑）

ヒーローがいるのに平和な街の裏 七

「何やってんですか、佐藤さん」

校門の前。夕暮れに黄昏れる中、呆れた様な表情で、高梨君は久貝田大学と書かれた大理石の近くの青いゴミ箱の中からいきなりガコンと顔を出した。当然、僕は驚く。

ゴミ箱の中に外見不良の男。

緑色の土管の中から出て来るヒゲのおじさんよりもシユールな画だった。

「……それはこっちの台詞なんですけど」

「勘違いしないで下さい。これは隠れて佐藤さんを監視する為ですよ」

それにしたつてもっと何かいい場所はあつただらうに。

何がどうしたらゴミ箱に隠れようなんて思つたんだらう。

そう思ってるのを、表情をよんでわかったのか、高梨君は「とにかく」と話を切り替え、ゴミ箱から出て真剣な表情になると、言った。

「何考えてんですか、佐藤さん。初対面かどうか微妙な人にいきなり大声でまくしたてるなんて、ただの変態ですよ、それ」

「……手厳しいな」

「そりゃそうですよ」

僕の反応に、高梨君は怒った様な口調になった。

「佐藤さんの今日の目的は何ですか？」

「大学に行くこと」

「佐藤さんの最終目的は何ですか？」

「徳永切裂を……捕まえること」

一瞬、戸惑ってしまった。

僕は警察の人間だ。つまり、僕は徳永切裂を 憎むべき復讐の標的を 捕らえなければならぬ。捕らえるということはずなわ

ち 絶対に殺してはいけないということになる。警察に雇われている人間が、犯人を裁ける訳がない。裁くのは裁判官の役割だ。僕達警察の役割じゃない。

じゃあ、僕はどうする？

捕まえるか。それとも、殺すか。

警察として徳永切裂の前に立つのか。それとも、復讐者として徳永切裂の前に立つのか。

答えは……わかりきってるけども。

「そうです。佐藤さんがこの街に居るのは徳永切裂っていう奴を捕まえる為の筈です。それなら、叶香里とかいう訳のわからない女をたぶらかしてる時間は無いでしょう？ それなのに、何です、こんな時間に待ち合わせまでして。どうすんですかこれから。ヒーロー夫人も待ってるんですよ？ どう説明つけるつもりなんですか？」

僕の心境など関係無しに、高梨君は僕に説教をし始めた。どうやら、本当に怒っているらしい。高梨君が怒っているのを見るのはこれで二度目だなあ。結構長い間に一緒に暮らしているのに、怒ったのはたったの二回だけ。不良っぽい外見なんて、やっぱり関係ないだろう。

そう、外見なんて関係ない。

顔や声や体格や髪の毛の質や大きな目や綺麗な肌や色々な音が聞き取れそうな耳やふっくらした唇やその他諸々なにもかかも亜希子に似ていても、性格が全く違うであろう叶さんは、亜希子とは関係がない。

それなのに、やっぱり気になってしまう。

それくらい、叶さんは亜希子に瓜二つだったから……。

「……ヒーロー夫人には、僕から話をつけます」

「へ？」

説教中、考えことをして閉ざしていた口を開いて言った僕の言葉に、高梨君は驚きを隠せない様な顔をした。

「いくら怒られたっていいんです。とにかく、僕は叶さんと、もう

一度……もう一度でいいから、話しをしてみたんです。夜には帰ります。次に僕がこの街の地上に来る時は、徳永切裂を……殺す時です。叶さんには、二度と会うことは無いでしょう。だから、僕は叶さんと話しをしたい。お願いです、高梨君。お願いだから……見逃して下さい……」

「な……叶香里って何者なんですか……？　そこまで佐藤さんが会いたがる人って、一体どんな……」

……そうか。高梨君は、僕が叶さんにつかみ掛かった理由を知らないんだ。そういえば、高梨君にも　ヒーロー夫人にも　地下の人にも誰にも僕の殺された彼女の名前を言っていなかった。

僕は、力をこめて言った。

「叶さん……彼女は、亜希子　徳永切裂に殺された僕の恋人に……そっくりなんです」

「え！　そ、そうなんですか！」

高梨君がまたもや驚く。僕は、「はい」と言って話しを続けた。

「だから僕は叶さんと喋りたいんです。叶さんと亜希子は別人だけ……別人で、それでもそっくりだからこそ、喋って気が少しでも晴れることがあると思うんです」

「……はあ……わかりました」

高梨君は、大きな溜息をつくくと、力が抜けたかの様に頷いた。「俺は逆効果だと思うんだけどなあ……」と小さくつぶやくと、高梨君はチェーンが巻き付いた黒いジーンパンの右ポケットから、何かを取り出した。掌に収まるか収まらないかくらいの大ささの、画面がついた小さなパソコンみたいな機械。よくこんなものがポケットに入っていたなあ……と思うと、高梨君はそれを僕に差し出した。「何ですか、これ？」と聞くと、高梨君は久しぶりに笑ってこう言う。「盗聴機です。二人の会話を聞くのは、野暮つてもんでしょう？」

「……でも、いいんですか？　僕の監視をしていなくて。徳永切裂を捜しに行くかもしれませんよ？」

「本当に捜そうと思っっている人が、そんなことを聞く訳がありません」

んよ」

へへへ、と鼻の下を人差し指で擦りながら、高梨君は笑う。……本当に、高梨君はいい人だ。素直に、有り難かった。多分、僕は叶さんの前で冷静でいられないと思うから……そんな場面を盗聴して欲しくないというのは、確かに思っていた。

「……ありがとうございます」

そう言っただけで受け取ろうとすると、高梨君は何を思ったか、突然「ただし」と言い出し、盗聴機(?)を頭上にかざした。どうということだろうと思っていると、高梨君は喋った。

「後で、どんな話をしたか、簡単でいいので教えて下さい。やっぱり、叶香里っていう人が気になるんで」

「……わかりました」

高梨君の言うことを了承すると、高梨君はもう一度笑い直し、僕に盗聴機を渡してくれた。

さて。今の時間は午後五時ちょうど。僕は六限の途中で抜け出してきたので(居ても立ってももらえなくなったからだ)、十分くらい前からこうして学校の敷地から出て、校門に寄り掛かりながら立っただけで、チラチラと見ながら叶さんが来ないか待っている。そろそろ来ると思っただけで、やっぱりずっと立ってるままだと気が滅入ってしまうので、ゴミ箱をしっかりと指定の場所に置いた高梨君と話をしようかと思った。

「高梨君」

「あ、はい。すみません、すぐ帰るんで。つかの間のストロベリータイムを過ごして下さい」

ストロベリータイムって。

実際に使う人を初めて見たよ。

どうやら、高さんと僕梨君は叶の邪魔をしないように直ぐさま帰ってしまおうと思っただけらしい。

「いや、そうじゃなくて。少し話ませんか?」

「話し? 何をですか?」

「え……例えば……例えば……そうだ、何で高梨君は地上に普通に
来れるんですか？」

話しをふられてたじろいだ僕が苦し紛れに聞いたのは、この疑問
だった。思えば、前から疑問に感じていた。それこそ、最初 僕
がこの街に初めて来てからだ。高梨君は元『悪』らしい。実際に彼
は昔、強姦といわれつきとした犯罪を侵したらしい。今の高梨君か
ら想像がつかないが、恐らく、昔、何か事情があったのだろう。そ
うでなかったら、こんないい人が強姦なんて行為をする訳がない。

とにかく、そうして高梨君は『悪』と判断され、地下の住人とな
り、二度と日の目を見ることは出来なくなった。他の地下の人達は、
金曜ロードショーのヒロインが獣のような動きをするアニメーショ
ン映画を観た感想を言う中で、たまには日光を浴びたいと愚痴を漏
らしていた。

それなのに、何故高梨君だけ地上に出ることが出来るのだろうか？

「……そういえば、佐藤さんにはまだ言ってなかったですね。前ま
では部外者ってことで話すのを止めてたんですけど、ここまで来た
らもう高梨さんは部外者なんかじゃないですよ。そんなに隠すよ
うなことでもないんで、言わせて貰います」

高梨君はそう言つと、じつと僕の目を見た。沈黙の空気が少し流
れる。僕は、唾をゴクリと飲んだ。

「俺は、地下に住んでる皆の中で、一番罪が軽いんです。その上、
俺はヒーローに俺の技術がかわれています。だから、俺一人だけ地
上に出れますし、結婚も出来たんです」

「……高梨君の技術って何ですか？」

強姦なのに一番罪が軽い理由は何なのか？

地下に居ると結婚も出来ないのか？

聞きたいことは他にもあったが、とりあえず優先して聞きたいの
はこの疑問だった。高梨君は少し渋りながらも、やがて口を開く。

「俺はですね。昔……まだこの街が平和じゃなかった時、『運び屋』
って呼ばれていた。その筋の業界じゃあ結構名の通っていた職業

をしていたんです」

「運び屋？ タクシーとかですか？」

「そうなんですよ。へいタクシーとか言われましてね、お客様皆の笑顔がタクシー運転手の喜びなんですよ……って違いますよ。タクシー運転手が捕まる訳ないじゃないですか。そうじゃなくて、頼まれたら何でも運ぶ仕事をしていたんです」

二回目のノリツツコミだった。それも真面目な表情で言うから味がある。ヒーロー夫人じゃこうはいかないだろう。僕がボケても、「ああそうかいそうだね」で終わらせると思うから。

高梨君が言う『運び屋』とは、何でも運ぶ仕事のことをさすらしい。そこまで言うと、高梨君は暗い表情で俯いてその場から動かずに、口を閉ざした。高梨君の罪状は強姦。地下の住人の中で、一番罪が軽い。そして、運び屋という職業。

大体、想像がつきはじめた。

何でも運ぶというのは、それこそ大きな物から小さな物まで運ぶのだろう。

その中に、『女性』も入っていたらどうなる？

高梨君は、誰かに女性を運ぶように言われ、その途中でヒーローか誰かに見られてしまったのではないか？

「……………」

高梨君は何も言わない。当たり前だ。僕が、何も言っていないのだから。これらは、全て憶測だ。全てが正しいとは……正直、わからない。だが、僕はそうであって欲しいと心の底から思った。

「……………高梨君」

「……………何ですか」

暗く低い声だったけど、臆せずに僕は続けた。

「結婚した人は、どんな人なんですか？」

高梨君の暗い雰囲気を変えようと思って言った質問だ。気になっ
てはいたが、そこまで知りたい情報ではない。だけど、ここで高梨君はパアッと明るい顔になり、「俺の嫁さんはですね！」と、その

言葉を待ってましたと言わんばかりに僕に近づいて話し始めた。

「もう本当に綺麗でやさしい奴なんですよ！ 少しぬけてるところがあるんですけど、それもどこか憎めない感じで！ 週末によく遊園地とか行くんですけど俺の横にちょこんとついてきて手を握ってくるところとかもう最高ヤッファー！」

「ちよつと、高梨君……落ち着いて……」

次第に大学生が校門から出始めた。そして、僕に至近距離まで近付きながら大声で叫ぶ高梨君と僕、気味が悪い目で見ている。すいません、僕達そついう関係じゃないんです。そう思っても、誰にも通じなかった。

「……君」

そして、いつの間にか校門から出ていた彼女にも。

彼女 叶さんは、物凄く冷たい目で僕と高梨君を見ていた。

「待ってるって言っから来てみたら……なんだ、お楽しみ中じゃん」

「い、いや、待って」

「ごゆつくり」

そう言って早足に駆けてく叶さんを、僕は高梨君を引きはがすと追った。高梨君の「夜まで待ってますからー」という明るい声が、後ろから聞こえてきた。

叶さんは、より一層早く走り始めた。

ヒーローがいるのに平和な街の裏 八

「……………」

「……………はあ」

沈黙。沈黙。

僕はこれでもかというくらい沈黙を続けていた。溜息をついたのは叶さんだ。夕暮れを呆然と眺める叶さんの横顔は僕が知っている亜希子そのものだったが、この人は亜希子ではない。何とも言えない不思議な気分がするが、今の僕にとってはもつと重要なことがあった。

僕の右に並んで歩く叶さんの横顔は、明らかに怒りに満ちていた。

「……………あの」

「何？ ああ、安心してね。君とあのヤンキーっぽい人の交流は広めないから。ていうか広めたくもないしねー、あんな生々しいやつー。ホント、何で私は君と一緒に帰ってるんだろ」

「……………」

叶さんは、未だに僕と高梨君の関係を誤解していた。

「……………というか交流って。」

そんな嫌な表現は止めてほしい。

「……………何回も言ってるんですけど、さっきのは誤解なんです」

「誤解？ そりゃどういう意味の？ 朝っぱらからいきなり肩を揺さぶられて、その上校門の前に待たせた揚句、見たくもない光景見せられた女の子を納得させられる話があるのかな？」

「いや……………あれはそもそも高梨君が興奮して僕に掴みかかってきただけで」

「……………充分じゃん」

「え、いや、あの……………興奮っていうのはそういう意味じゃなくて……………」

……………高梨君は奥さんの話で興奮したっていいですか……………」

半ば頭を下げながら、叶さんの機嫌をとろうとする僕。それでも、

叶さんは頑として不快さを隠さなかった。……こんなところも亜希子そっくりだ。昔、僕が先輩の婦警さんと話しを少しした一部始終を見られた時の亜希子の反応と、これでもかというくらいに似ている。叶さんと横に並んでいると、自然に叶さんの目が、僕の目の前にくる。つまり叶さんは、亜希子と身長も酷似しているということだ。そう思うと、何だか目頭が熱くなる。

「……何泣きそうな顔してんの？」

「あ、これは……その……」

そう言う僕は、顔を見られないように頭を少し下げた。普通に恥ずかしい。そんな僕の気持ちなんて関係無しに、叶さんの視線は僕を刺した。

そして叶さんは、「はあ」と溜息をつく。気付くと、僕の頭にポンと柔らかい手が置かれた。

「わかったよ。私が言い過ぎちゃったね。まさか私が虐める側に移るなんて……ちょっと反省しちゃうなあ……。ああ、でもそんな私が恥ずかしい気持ちいい……。って、ゴホン。ゴメンね。えっと……朝の話の続き、聞くとよ。アキコって誰？ 女の人？」

言いながら、叶さんは僕の頭をもう一度優しく叩く。僕が顔をあげると、そこには満面の笑顔の叶さんがいた。この人は……得体の知れない。しかもホモ疑惑までかかっていた。認めたくないけど変質者な僕に対して、こんな笑みを向けてくれるのか。

しどろもどろになりながらも何とか弁解しようとしていた僕を、溜息をつけてから見る亜希子の顔にまた似ていた。

この人は……本当に亜希子じゃないのか……？

いや、答えはもう出ている筈だろう。

そう、僕は見たんだ。家のリビングでバラバラに斬られた、無残で残酷な母さんと父さんと。亜希子の死体を。三人の骨を、箸で箱に移した。お墓もたてた。

だから断言出来る。

この人は……絶対に亜希子じゃない。

「……亜希子は……僕の恋人です」

「……へー。そうなんだ。じゃあ君は恋人をほったらかして私をたぶらかそうとしちゃったってこと？」

亜希子が僕の恋人だと言った瞬間に、ビクリとした叶さんだったが、引き攣りながらも笑顔の状態を保ち、僕におかしな疑問を投げかけた。

ていうか違うし。

「そういう訳じゃありません……。亜希子は今……。この世には居ませんから」

「……え？ それってまさか……」

「はい。亜希子は、もう死んでます。そして、叶さん。貴女は亜希子に似ているんです……物凄く」

「……ふーん。そういうこと」

笑顔を崩した叶さんは、うかがうように僕の顔をじっと見つめた。やっぱり怒らせてしまったか。それはそうだろう。いきなり、自分が『死んだ恋人』に似ているなんて言われたら、誰だって困惑するというかいい迷惑だ。

そんなことを言っても、どうしようもならないのは僕自身が一番よくわかつている筈なのに。

「すいません……なんか、変なこといっちゃって。すいません。僕、もう帰りますね。やっぱり叶さんに迷惑がかかりますし。本当にすいません。僕の……」

言いながら、知らない間に僕は涙を流していた。頭の中では理解していた亜希子の死……だけど、心の中では全然受け入れられていない亜希子の死。それを今、他でもない僕自身が自分の口で肯定していた。苦しい。頭が痛む。自然と頭に思い出したくない映像と、憎むべく復讐の相手を思い返す。それでも、言わなければならぬ。叶さんに謝らなければならぬ。

亜希子に似ている、叶さんを苦しませたくない。

「……泣かないですよ。泣かれても困るよ、私」

「……でも……僕は、叶さんに辛い思いをさせてしまつて……」

「私にとって本当に辛いことなんて、少ししかないんだよ。気安く私の全てをわかつた気でいないですよ」

涙を拭いた僕のの前には、今までとは違う形相で構える叶さんがいた。ああ……これも亜希子に似ている。

これは、本気で怒っている顔だ。

「はつきりいつて本当に迷惑なのよ。いきなり死んだ恋人に似てるつて言われても私にどうすればいいの？ いきなり泣かれても君の事を何も……何も……何も……知らない……？ 知らない……知らないのよね、私、君のこと……あれ……？」

自分の記憶を疑うくらい僕のせいで混乱している叶さんは、やがて諦めたように「とにかく」と言い、話しを続ける。

「君のことを何も知らない私は、何も君にしてあげられることはないの。わかる、そこら辺？」

「……はい。すみません」

「謝らないで」

「……はい」

「……君さ、私の知ってる奴と正反対なんだね」

「……はい？」

突然話を変える叶さんに驚く僕だったが、いつの間にか僕の少し前を歩いて夕日を見つめていた叶さんは、僕の心境に気付かなかつた。

「私の知ってる奴はさ、どんなことがあつても謝らないの。どんなに厳しい言葉を浴びせても謝らないし、どんなに酷いことをしても私に謝らない。……まあ私だからっていうのもあるんだろうけど……とにかく、私はあいつが謝った姿を見たことがないのよ。でもね……それと同じで、私はあいつに謝ったことが少ししかないのさ」

『あいつ』と称して僕の知らない誰かを語る叶さんの顔は、とても嬉しそうな笑顔をしていた。さっき僕に向けた笑顔とはまた違う、綺麗な笑顔。

「それって凄いと思うんだよねー、私。だってさ、謝らなきゃいけないようなことをしてないんだよ？ 凄くない？」

「……ああ、はい」

「……何その冷たい反応……だから君はあいつと正対なんだよ。もつと堂々としようよ、堂々と。亜希子って人にも言われてなかった？ そんなようなことをさー」

「……」

言われてました。無茶苦茶言われてました。「栄作は凄いんだけど凄くない」みたいなことを。

黙って下を向く僕を見て、「やっぱりね」と呟いた叶さんは、僕に向かってこう言った。

「だから私が虐める側になるなんておかしいことが起きるんだよ。お願いだからさ、私に君を虐めさせないでくれるかな？ 対等な関係になるうよ。死んだ恋人に似ている私と喋るんじゃなくて……同じ大学に通うミス久貝田の私と」

ああ……やっぱり、叶さんは亜希子に似ている。何度でも言おう。本当に、叶さんは亜希子に似ている。

だけどそれは『似ている』だけだ。

だったら、叶さんは違う。亜希子じゃない。叶さんの言うように、対等に接しよう。そうしないと、叶さん……ましてや亜希子に失礼だから。

「ミス久貝田なんて自意識過剰過ぎですよ。よくて準ミスくらいです」

「……へー」

僕がそうツツコミを入れると、何故だか叶さんは、何かに納得したような顔付きになった。「何がへーなんですか？」と聞くと、叶さんはこう返した。

「いやね、何か……君、私の知ってる奴に少しだけ似てる……」

「え、そうですか？」

「うん。似てる……ツツコミしてるよー！」

「まさかのツッコミの話ですか！」

何でこの流れでツッコミの話！

明らかに反応間違ってる！

そんなことを心の中で叫んだ僕を尻目に、叶さんはこう口で叫んだ。

「そうそれ！ そんな感じ！」

「及第点貰っちゃいましたけど！」

「うーん、私さ、仲が良い人にしか自分の性癖言わないんだけどね

……君には言うよ！私、実はMなのよ！」

「いきなり何言ってるんですか叶さん！ え……Mって……服のサイズですか……？」

「……やっぱり君、刀銃に似てるっ！」

「何処聞いてそう判断できたんですか！」

というか『カタナジユウ』って何！

まさか人の名前！

……物騒過ぎるでしょうその名前！

「とにかくね！ 私は虐められるのが大好きな、虐められっ子香里ちゃんなのよ！ さあ、君！ さあ！」

「さあの次に続く言葉は何ですかね！」

「あれねー？ 私に言わせたいのー？ もう、この欲しがりっ子め！ わんぱく真っ盛りじゃないの、君！」

そんなことを言いながらくるくと回る叶さんの顔は、輝いていた。今までの暗さとは格別に。

訂正しよう。

この人は……ただの変態なんだ！

「正確に言っとそうだね、まず私に『この働き蟻！ 女王蟻になれやしなかった働くだけの低俗な蟻なら何も言わずに砂糖運んでろ！

ったく、使えねーなあ！』って大声で叫んで欲しいところかな！」

「それどんなところなんですか！」

そんなこと言うくらいだったら僕は逃げる！ 絶対に！

僕がそれ以上何も言わないでいると、叶さんは沈黙の空気の中「ほ……放置プレイ二度目……！」と言って一人悦に入っていた。それが異常に艶やかだったのだけど、外見は亜希子そのものだったので……すいません……誰だか知らない皆さん。ここに謝辞をしておきます。

夕暮れの下、普通に僕も興奮しました。

そしてそして一分ちようど。お互いに興奮が収まると、僕は叶さんに今まで興奮していたことを悟られないように「とりあえず歩きましょうか」と言って前を歩くと、叶さんは「はいよ」と言って横に並んで歩いた。

周りにはやはり昭和な風景が建ち並んでいる。夕暮れの中、街灯の光りが僕達を照らしていた。しんみりとした、いいムードだった。嵐が去った後の静けさとはこういうことを言うのだろう。僕はずっとこんな感じで叶さんと歩けばいいな、と素直に思った。

「あのさ」

そんな空気の中で、叶さんは僕に話しかけた。先程の暴走状態とは相反している、シリアスな表情をしていた。「何でしょう」と返した僕に、こう言う。

「私達、今日会ったばかりじゃん？」

「はい。そうですね」

嘘偽りのない、率直な事実だった。亜希子とは関係なしに、ただ純粹に叶さんと知り合ったのは今日の朝からだ。

「それなのにあんな会話が出来るなんて、珍しいことだと思うのよ。で、ものは相談なんだけどさ。私、君の話を一回聞いたじゃん？その代わりに、何の脈絡もない私個人の話を、君に聞いて貰ってもいい？」

「どうやら叶さんにも何か悩みがあるらしい。他でもない、今日一日に渡って迷惑をかけた叶さんの頼みを、僕が聞かない筈もない。当然僕はこう言った。」

「いいですよ。遠慮無く話して下さい」

僕の返答を聞くと、叶さんは安心したように胸（結構ボリュームがある。ここも亜希子と似ている）をなでおろし、喋った。

「私の友人に刀銃って奴が居るんだけどね。これがまた歳とは違って冷静に私を虐める奴なんだけどさ……本人は何も喋ってくれないんだけど……刀銃の左腕……動いたところをみたことがないのよ……」

「え！」

今、叶さんは何て言った！

友人である刀銃という人の……左腕が動かないと言った！

そうだ……そうだそうだった……！

徳永切裂の年齢は、二十七歳……！

無理すれば……大学にも潜りこめる筈だ！

そして　もし大学に潜伏したとして　徳永切裂が亜希子に似

ている叶さんに接触しない訳がない！

つまり徳永切裂は……久貝田大学にいたんだ！

そもそも刀銃なんて名前の人物が実在する筈がない。切裂という

おかしな名前を持つ『あいつ』の考えそうな名前だ。

叶さんがその刀銃とやらの褒め言葉が何かずっと言っていたが、今の僕には何も聞こえていなかった。よし。早速今からあいつを殺しに行こう。復讐だ。復讐しかない。無念にかりとられた三人の意識身体躯体切り刻まれ弄ばれた三人の命記憶思い出想い出繰り返される最悪で最低な屈辱の映像あの場所に僕がいればあの場所に僕がいていたらあの場所であいつを殺していたら嫌だ嫌だあいつが生きる活きてるなんて嫌だあいつを生かすな活かすいかすなイカスナ殺せ動け何も考えずにあいつを死ねしねシネ死死ししし死ししし殺殺殺殺死を死を殺せ殺し殺す殺れ死ね死ぬ殺せ　！
混濁した僕の意識何も考えられない徳永切裂への復讐以外そう思っ
ってそう思っていたら。

ある一言が、僕をこの世に呼び起こした。

「今日さ、刀銃に紙飛行機をぶつけたんだけど……どう見ても、動かない筈の刀銃の左腕が動いてた気がするんだよね……」

ヒーローがいるのに平和な街の表？

俺の異変に気付いたのは先生の言い付け通りに机を運ぼうとした時だった。紙飛行機を開く時は何も感じていなかったのだが、いざ先生に睨まれながら机を運ぼうとしたその時、俺は俺の異変に気が付いた。

俺の左腕が動くようになっていた。

何があつたかどうかはわかったもんじゃない。とにかくにも、俺の左腕が動くという事実そのものが明らかに異常だった。

何時からだ？

何時から、俺の左腕は動くようになっていた？

思い出せ……思い出すんだ俺……。まず朝の紙飛行機の時にもう動いていた。その前という……嵐の中、あゆみを助けた時か……いや、あの時はまだ俺の左腕は動いていなかった……もう少し最近……路地裏であゆみとヒーローに出会った時………あ。そうだ。

あの時 あゆみにメモ帳の紙を渡す時には既に、俺の左腕は動いていた……！

あの時。そう、あの時だ。

俺が一回、死んだ時だ。

「刀銃？ ほら、起きなさいよ」

誰だ、俺を刀銃という名前なんかで呼ぶ奴は。そうじゃないだろ。俺の名前は、そうじゃない。

路地裏からの俺の記憶は二手に分解されている。

一つは、左腕を動かなくなったのが両親の銃弾で、しかしながらそれでも今まで通り馬鹿話をして平和な街で生きていく普通の記憶。

もう一つは、左腕を動かなくなったのが俺を捕らえようとした警察官が撃った銃弾で、そのまま俺は実験体へと地位を移し、叶が実は俺と同じような罪を犯した幽霊で成仏し、それを見送った後、俺を

俺自身の手でけりをつけた記憶。

そして……この二つの内正しい方がどちらかと聞かれたら、迷わず俺はこう断言出来る。

俺の名前は徳永切裂。

警察の追っ手から逃げながら人を殺していた昔は風呂にも入っていなかったので髭面だったが、どうやら科学者集団か誰かが俺を綺麗にしてくれたらしい。まあそんなこと、今はどうでもいいが。

「ほら、刀銃。もう着くって言ってるじゃない」

うるさいな。全く、一体全体俺を揺らす奴は誰なんだ。今忙しいんだよ。黙っていてくれ。

……そう。俺の名前は徳永切裂。一度は自殺した筈の徳永切裂が何故生きているのかという疑問には、『俺の記憶が俺を徳永切裂と言っている』としか答えようがない。これが問いに対する答えになっているかどうかはわからないが、とにかくそういうことだった。

俺は連続殺人犯 徳永切裂。

恐らくだが、叶の方も正しいだろう。幽霊云々は確実に間違った情報だとしても、少なくとも叶が快樂殺人犯ということには間違いない。

さて……それではここで、もう二つの疑問だ。

俺が徳永切裂という犯罪者だというのには間違いがない。仮に俺が『刀銃』という平和な街に住む住人だとしても、結局はここでこういう疑問が生まれる。

だから言わせてくれ。

何故、俺の左腕は突然動くようになったんだ？

更に、何故俺や街の住人は今の今まで動くようになった左腕に気付くことが出来なかったんだ？

「……へえ、そう。私の揺らしに対しても何の反応を示さないの……」

……流石ね、刀銃」

……まったく、うるさいって言うてるだろさつきから。頼むから黙ってる、誰だか知らない奴。多分、今の俺の心理状況は無茶苦茶重

大なところなんだよ。二時間ドラマなんかだと十分もかからない内に終わってしまう場面なんだろうけど、それでもCM跨ぐくらいはおてのものみたいな場面なんだぞ。

「本当に起きないの？ 私がこうやって揺らしてるのに？ ……」

「あら？ちよ、ちよっと待って……案外……こ……これってチャンスなんじゃ……」

だからうるさいって言うてるだろ。そもそもお前誰なんだよ。小学二年生女子みたいな声しやがって。しかもなんだチャンスって。何する気だ俺に。

……あーもう！

「うるさいって言うてるだろうが！ 黙って俺を静かにさせてろくらあー！」

思わず厳しくなってしまった俺の大きな叫び声だったが、しかしこのおかげで俺は今の状況を理解することが出来た。

今俺は平和な街唯一の電車の中に居る。この電車には一応窓があることはあるが、太陽の光りはあまり見ることはできない。この電車は街全体を囲む二つの壁の中に造られていて、そしてその二つの真ん中で走る電車の上には何も構築がされていなかった。太陽の光りは上空から注がれる。外の世界には地下鉄という真っ暗闇の中走る電車があるらしいが、ここの中途半端に明るいやよりそっちの方がよかったのかもしれない。まあ地下と言ったらこの街には門番と地下の住人がいるので、地下鉄は無理な話な訳だが。

休日だというのに周りには誰もいない。いや、休日だからこそとすべきか。よくわからないけれど。ん？ ということは、俺は今今までほぼ一週間前の月曜日の話をずっと回想していたのか。凄いなそれ。今は土曜日なのに。

……って、え？

土曜日って、何か約束してなかったっけ？

あ……そういえばあゆみと遊ぶって……。

気付いた時にはもう遅かった。というよりか、今のこの状態の時

点で気付くべきだった。

もう一度……今度は周りじゃなく、目の前の状態だけ描写するでしょう。まあいいだろ。どうせ二行くらいで終わる描写さ。

では、描写開始。

俺の目の前には、目を開けたまま唇を尖らせて顔を赤くした急接近中のあゆみがいた。

俺の大声で、ピタリと固まるあゆみ。元々赤くさせていただろう小さな顔が、みるみる内に赤くなっていった。頬についている水滴は俺の唾かなと思っていると、その上にまた一筋の水が流れた。あれ？こいつ、ひよつとして涙を流している？

……あゆみが寝ていて無防備な俺に何かをしようとしていたのは間違いないが、今重要なのはそこじゃない。

「へ……へへ、へえ……ふーん……刀銃……あなた、私に大声を出して怒るなんていい度胸してるわね……」

「い……いやいやあゆみさん……ちよつと落ち着こうぜ……あの………すみません」

俺が謝ったのを見ると、あゆみはガバッと頭を上げ、腕を組んで仁王立ちになり、小さな背丈を存分に伸ばして俺を見下そうとした。実際はほぼ同じ目線だけでも。というか危ないぞ。まだ電車は動いている。手摺りにつかまれ手摺りに。

「……何でもう少し寝てないのよ」

「ん？ 何か言ったか？」

「な、何でもないわよ！ ったく、何で私がこんなにうるたえなきやいけないのよ！」

「そりゃ、電車が動いてるのに仁王立ちで構えてるからだろ」

「そういう意味じゃないわよ！」

「……………」

初めてだった。

初めて、俺は他の人からツツコミをされた。

思えばいつもいつも俺は大声でツツコンでいたなあ……俺以外に

変態が多過ぎるから自然とツッコむしかなかった俺の人生だが……
そういえば、あゆみは変態が多い平和な街（なんだか矛盾している
ような気がするが気にしない気にしない一休み一休み）で、割りと
まじな部類だった。

だから俺にツッコミが出来るのだろう。そう思うと、目の前で顔
を赤くしながら涙を拭う小さな少女の存在をなんだか感慨深く思え
てきた。

「何なのよ、もう！　今私達がどこ向かってるかどうかどうせわかっ
てないでしょう！」

「わかってるよ。ソウルソサエティ……だろ？」

「私達誰を助けに行くの！　刀真っ白の小柄な死神さん！　それと
もオレンジ色の髪した巨乳美人！」

「俺は……あれだな、小柄な巨乳美人なんかがいいな」

「あなたの好みなんて聞いてないわよ！　つて、え！　今あなた、
何て言ったの！」

そう言ったあゆみだったが、ふと何かに気付いたのかハツとなり、
もじもじとし始めた。

何なんだこの「言っちゃった」的なOLの反応は。

よくわからないが、もう一度言うことにした。

「俺は……あれだな、小柄な巨乳美人なんかがいいな」

「な、なら……あの……えっと……きよ、巨乳って……Aカップも
入る？」

「Aカップが巨乳なら人類全員巨乳じゃねーか！」

女性どころか男性からも巨乳の人が出るぞ！

というよりかAカップが巨乳ならFカップの人とかどうやって表
現すればいいんだろうな！

サインコサイン超ポイントか！

くだらねー！

ってしまった！　ついツッコんじまった！

ああああ……もういい！　やっぱり俺にはツッコミ待ちなんて有

り得ない！

決めたぞ！

ツツコミ王に、俺はなる！

「だから、俺が言う巨乳つてのはF……ないしはせめてDくらいは欲しいんだよ！」

「リアルな反応じゃないのそれ……」

するとあゆみは、進行方向に造られた俺が座る二人用の椅子の手摺りに左手で掴みながら、右手でなにやらおもむろに腹より上らへんを擦り始めた。

な……何やってんだこいつ？

そんなこと思っていると、あゆみは一つ溜息をつき、真顔でこんなことを言った。

「わ……私はJカップあるから刀銃の好みに入っちゃうわね」

「お前の判断基準を俺に教えてくれ！」

何言ってるんだこいつ！

Jカップなんて化け物見たことない！

真顔で冗談言うんじゃないよ！

「簡単よ。さっきやったみたいに服の上から右手で触るでしょ？」

その時に何も感じなかったらAカップ」

「手触りが何も感じられない服はそれ裸の王様が着る服だ！」

「何か……何か、そう……うふふ……何かを感じたらFカップ」

「『何か』って何だよ！」

何かを言う時にためるあゆみが怖い！

何かを言う時に顔を暗くするあゆみが俺は怖い！

「本当……Fカップなんて皆死んじゃえばいいのよ……」

「ボソツと死刑宣告するのをやめろ！」

「ふん。そして……服の柔らかさを感じたらJカップなのよ」

「皆が皆Jカップの素質を持っている！」

この世界すげーや！

全員乳お化けになっちゃってる！

だってお前……あれだぞ、ほしのさんなんて目じゃないんだぞ」
カップ。魅力通り越して兵器だそんなもん。

「いえ、皆が皆ではないわよ。ちゃんと、「カップの素質がない人も居るわ」

「え？でもあゆみ、服着てる奴が皆」カップなんだろ？ だったら

……」

「そう……服着てない人は……」カップじゃないわよ」

「そんな奴いねーよこの街に！」

仮にも平和な街だ俺が住んでるここは！

服来てない奴なんている訳が……

「フフフ」

あゆみは。

うるたえる俺を見て、大胆不敵にも笑ってみせた。

「お前……まさか……」

「そう……私は、全裸になりながら私の横を歩いた女性を知っているのよ……」

「だ……誰だそいつは！」

まあ多分……というか確実に予想が出来るんだが……。

こう言つと、あゆみはちょこんと俺の横に座り、俺の耳に口を近づけて小さな声で呟いた。

「決まってるじゃない。香里お姉様よ」

「やっぱりな！ てかお姉様！」

叶が犯人なのは大体予想がついたが……香里お姉様って何だ！

どういうことだ！

何で全裸で歩くような奴をお姉様と呼んで崇拜することが出来る！

「何時からだ、叶と仲良くなったのは！」

言つとあゆみは「そんなに怒鳴ることないじゃない。何？ ヒス

テリック？」と俺を罵倒しながらも発言した。

「えっと、今週の月曜日だったかしら。校門でセバスチャンを待ってたたら、全裸の人が私に近づいてきたのよ。それが香里お姉様だっ

たという訳」

「どういう訳！」

全く持って意味わかんねえ！

何で叶が帰り道に全裸になってるんだ！

「……ん？」

今、あゆみは何て言った？

今週の月曜日の帰り道に叶が全裸になっていた……？

今週いっぱいのは帰り道は、「若い奴はこれだから」とか「なんでこんな年齢まで結婚してないのよ私」とかブツブツ呟く先生の補習で叶と同行することが出来なかったのだが、それでも授業中隣り合わせになったので月曜日の話しを聞くことが出来た。

確かあいつは、「楽しかったよ。久しぶりに栄作と喋れたし」と言っていた。

叶にとつての『楽しかった』。

変質者の名前は佐藤栄作。

佐藤栄作は変質者。

で、叶が全裸になってあゆみに近付いてきた。

この一連の事実が導く答えは一つしかない。

「……佐藤栄作このヤロウ！」

佐藤栄作とやらは……叶を全裸にしがった！

最悪のヤロウだ！ いや、最低最悪極まりない外道と表現した方がいいかもな！ ああ感謝しろよ！ いくら丸くなつたからといって昔人殺しをしていた俺にこう言われるんだ！ 光栄に思え！

「栄作……どこかで聞いたことあるような名前ね……」

「そりゃそうだろうよあゆみ！ なんせそいつは、俺の友人を汚したヤロウの名前なんだからな！」

「え？ 何言ってるのあなた？ 香里お姉様は全裸にさせられたんじゃないわよ？ 私と一緒に食事したりゲームセンター行ったりする時にはもう服を着ていたことだし」

「……は？」

叶は佐藤栄作に裸にさせられたんじゃない？

「じゃああいつは、何で全裸になってたんだ？」

「そんなの、決まってるじゃない」

そう言つとあゆみは、涙で赤くした顔を真面目な表情にしながらこう呟いた。

「香里お姉様が、自分から全裸になったのよ」

「……………」

はあ？

どういふ状況だ、それ！

ヒーローがいるのに平和な街の裏 九

「……へ？」

「やっぱりそういう反応になるよね。うん、そうなの。有り得ないんだけど、今まで動かなかった左腕が動いてたのよ。しかも皆それに対して何も言わないのさ。どういうことなんだろ、これ」と、これまた困ったような表情で言う叶さんの話しは、僕の耳に全く届いていなかった。

「……どうということだろう？」

久貝田大学に刀銃という偽名を使っている徳永切裂が潜んでいると思ったら、その刀銃という男の人の左腕は動くようになったらしい。

徳永切裂の腕は言うまでもなく二度と動かない代物だった。僕と同僚が撃った銃弾が左肩を貫いたんだ。当時から全国に向けて指名手配されていた徳永切裂が医者にかかることが出来るなんてことは不可能に近い。

つまり、徳永切裂の腕は治らない。

それなのに、叶さんが言う刀銃という人の腕は治っている。

「……………」

要するに……刀銃は徳永切裂じゃない？

「……って、どうしたのさ。そんな怖い顔して私を睨みつけるってどういう意味？」

そんなことを考えていると、叶さんが心外とでも言いたげな顔で僕の顔を見た。どうやら叶さんは僕が考えている間、ずっと喋っていたらしい。駄目だ、門の時と同じだ。全く聞いていなかった。とりあえず、頭の中に残っている突然治った左腕の疑問に答えることにした。

「いや、なんでもありません。えっと……その、刀銃っていう人の左腕が動かなくなった原因は何なんですか？」

すると叶さんは、溜息を一つついて僕にこう言う。

「……あのさ、今何の話しをしてるかわかってる？」

「……………すいません。わかりません」

やっぱり僕がボーっとしている内に話が変わってしまったらしい。どうなってるんだ僕の頭は？情緒不安定にでもなっているのだろうか？

暗い顔で俯いた僕を見て、「全くもう」と溜息をまたついた後、叶さんは僕の方に目を向けた。

「だから言ってるじゃん。今私がしてるのは、『誘拐犯罪起こすのに一番適切な場所はどこなんだろう』って話よ」

「そんな話してたんですか！」

これは……………必要過ぎて涙が出るとかそういう次元じゃない話の題材だぞ！

というより男女が二人寄り添って歩きながらする話でそのチヨイスは一体全体どういうことなんだろう！

僕がこう思ってるのを悟ったのか、叶さんはシュンとうなだれた。その子供っぽい仕種もまた亜希子に似ていて、ドキリとする。

「そうだよね……………やっぱりこの話はマズイよね……………刀銃の左腕が動かない理由は　今さっき　わかったからもうよかつただけさ、その代わりの話に誘拐話は失策だったかな……………」

そう言っただけで叶さんは本格的に悲しい顔を始めた。どうやら叶さんにとってこの話は重大な話だったらしい。ただでさえ僕は今までの言動で叶さんを悲しませていた。少しでも、叶さんを楽しませたい。

「そ、そんなことはないですよ。とても大切な話です。寧ろ、叶さんよりも僕の方がその話に関して興味を持っていると言っても過言じゃないですよ」

「何で？」

「え、何でって……………」

「何で？」

「……………」
叶さんを楽しませたいから　なんて浮ついたセリフを言える訳がない。

僕がまた沈黙を開始したのを見ると、叶さんは「アハハッ」と笑い、明るい顔で僕の顔を覗き込んだ。近い。僕の目と叶さんの目の距離がこれでもかというくらいに近かった。視界の中には、叶さんの顔しかない。まあ、それ以外に必要なかと聞かれたら、迷わず僕は要らないと答えるだろうけど。

だから僕に不満はなかった。

あるとしたら、叶さんの鼻息がかかる距離に対する心臓の鼓動への心配だけだ。

「……………何ですか？」

「んー？　いや、何でもないよー」

「何でもないなら歩きましようよ……………。そんなに近くに寄られたら歩こうにも歩けませんし」

「んじゃ、私を歩かしてよ」

「……………何を言ってるんですか？」

「手取り足取り、さ。私を乱暴に扱ってみて」

そう言つと叶さんは一旦僕の至近距離から離れ、両手を腰につけて直立不動の状態になった。ただし、さっきまで僕にかかっていた鼻息を荒げて。

……………うん。

やっぱり、この人は僕の知っている亜希子じゃない。

何度目かになるかわからないこの自問自答だけど、今の僕には重要なことだった。

この人は、叶香里さん。

ヒーローがいるのに平和な街に住んでいる、ポニーテールが特徴的な、ちよつと変態な女子大生だ。

「……………ここで僕が「わかりました」とか言つて、叶さんの胸やら尻やらを触った場合、僕はどうなりますか？」

僕がこう言ったら、叶さんは一瞬キョトンとした表情をしたかと思つと、直ぐさまこんなことを言った。凄く輝かしい笑顔で、その上大声で。

「そんなことを君がする訳ないじゃん！」

電線にとまっていたカラスや、電柱の前で用を足していた野良犬が、体をびくつかせ、颯爽とその場を去って行つた。僕は一つ溜息をつき、トコトコと先を歩き出した叶さんの背中を見た。

全くその通りだな、と僕は素直に思つた。

こうして一悶着あつた後、下らない話しをしながら（効果的な運動の仕方とか、友人の誕生日会をどんな風にするかとか、ヒーローは具体的にどんな人なのかとか、本当に下らないことばかりを喋つた）歩き、叶さんはそれまで会話をしていた話題をいきなり中断し、「あ、ここだよここ」と言つてある場所を指さした。

夕暮れが映える中、叶さんの人差し指の先には校舎があつた。

勿論、大学の校舎じゃない。かといつて高校の校舎でもないし、中学校の校舎でもなかつた。

それは、小学校の校舎だつた。そして、鉄で出来た横スライド式の 両開きの校門が、四階くらいはあるかもしれない校舎の斜め横にある。

その側に 下校時刻はずつと前に過ぎた筈なのに 一人の少女と、やけに長い黒色のリムジンが居た。

赤いランドセルを両肩にかけ、汚れが一切ないツインテールの黒髪を少しも動かさずにじつと、遠目からでもわかるくらい無愛想な顔で校門に背中をつけていた。背丈から予想するに、小学校低学年くらいだと思う。それにしても、歳には見合わない冷たい表情をしている。彼女の過去に何があつたのだろう と警察官である僕は不審に思つたが、そういえばここは平和な街。彼女の過去に何かあ

るなんて有り得ない話なので、僕は彼女自身の素なんだろうと一人で勝手に納得した。

問題は、少女の前で広い道路の横幅の半分を占領しているリムジンの方だ。

ここは平和な街。ヒーロー夫人から、予め『車や電車や飛行機は撤廃された』ことを聞いてあつた僕は、驚いた。

「何でリムジンが？」

「うーん、なんかね、あゆみちゃん家は特別らしいんだよ。よくわかんないけど」

ほぼ無意識で発したこの疑問を、叶さんはこう返してくれた。でも僕は納得出来ない。そんな僕の顔を見ながらも、あゆみちゃんと言うらしい少女が叶さんに向けて笑顔で手を振ってくるのを見て、「ごめんね」と僕に言い、少女の方へ駆け足で向かった。

「……あ」

ここで、ふと、僕は気付く。周りも暗くなってきた。叶さんはあの意味不明なリムジンに乗って帰るのだろう。運転手の人と、少女と一緒に。

そして……そして？

僕と叶さんの関係は？

……そして、ここで終了だ。

明日から、僕は一步も外に出られなくなる。そうになったら最後に叶さんが居るのであろう大学にはもう行けなくなる。

そして……僕は叶さんに会うことが二度と出来なくなる。

最初で最後の対面。

簡単に言ってしまうえば、そんな所だ。

「んじゃねー！ また明日、大学で会おうー！」

リムジンに乗る寸前、僕に向けてブンブンと大きく手を振った叶さんは、僕との再開を全く疑っていなかった。

違うんだ、叶さん。

僕はこの街の人間じゃない。

僕の目的は、徳永切裂を殺すこと。その為には、腕を上げないといけない。

大学なんて 例え叶さんに毎日会えるとしても 行っている時間なんて割けない。

だから、もう会えない。

叶さんには……もう会えない。

僕の視界には、土の地面しかなかった。叶さんの「おい、返事はー？」という声が聞こえていたが、僕の耳には騒音にしか聞こえなかった。

……別れに悲しんでいじけるなんて、僕はどこまで甘い奴なんだ。なんて思いながらも、やはり納得出来ない僕がいる。納得出来る訳がない。

もし、僕が復讐を完遂したとする。徳永切裂を殺し、僕の心は満たされ、この街を去る。

そして……どうなる？

そしたら……どうにもならない。

僕はただ単純に生きる為の資金を稼ぐ為、がむしやらに働いて、終わる。

終わり、だ。

何も……始まらない。

その生活に、何の意義がある？

僕は早く死んだ三人のことを忘れ、とつとと誰かと結婚し、とつとと幸せな家庭を築き、とつとと隠居生活をするべきなんだ。

だ、だけど、だけ、だ、けど、そん、なせい、か、つを、ぼく僕ぼく朴ボク僕撲ぼくぼくぼく撲僕朴牧ぼくぼくぼ、ぼぼぼボぼぼぼくくく句区玖駆くくぼくぼくぼくボク僕僕ぼく僕僕僕僕僕僕僕僕僕僕……、は、ほんと、う、におく、るこ、とが、でき、るの、か？

ほ、

んとうに

？

でき

る

のか？

だつて、

亜希子

も

父さんも母さんも

だれ

も かれも か

のじよも かれらも

か

のじよ

らも

だれもない。

そんな未来を僕は思い描けない。今あるのはそう徳永切裂徳永切裂そうだ徳永切裂だったそうだったそうだったんだねよし徳永切裂だそれしかないそれ以外に何かある何もないだる徳永切裂しか僕にはない明日は何をしよう徳永切裂だ明後日は何をしよう徳永切裂だあいつーの目をくりぬいてうつつうつつうちまくってなくしてあいつーの舌を切り抜いてもあそんでもあそんであいつーの目の前でうちまくってああそういえばそのときにはあいつーの目はなかったじゃあどうしようそうだろうとうあいつーをうつつうつつうだそうだその為には僕はーいっぱいとつくんしてヒーロー夫人をりようして高梨君もりようしてりようりよう徳永切裂にりよう再りようりようだりようそうしよう僕は何を甘い事を考えていたんだそれしかないじゃないかこの街に来てから僕は甘くなっていたいやそうじゃない何時からだ何時から僕は甘くなつたそうだよだんだん思い出してきたよ僕はせいこうほうでこの街に入つて来た訳じゃないじゃないか

僕は

上官を脅迫してこの街に入ったんじゃないか

なら今更何をおそれる事があるもつ失うものなんて何も無い僕は僕が何者かも今断言出来ない何故なら僕はけいさつかんなのにけいさつかんの上司の上官を脅してそうだそれまでは僕はなりふり構わずなりふり構わなかったのに何時からだ何時から僕は抜けた事をしていた思い出せ思い出せおもいだせおもいだせお、もいだ、せおもいだせ、いやいや何でおもいだす必要がある何をおもいだす必要がある何かをおもいだす必要があるなら忘れた記憶がある筈だ記憶

きおく？

きおく？ 何かのきおくを僕は忘れてる忘れていた忘れさせ

られていた？

頭をほじくり返せ何を忘れた僕はどこをいじられた僕は誰かに何をされた何かをさせられたのかもしれないだから僕は僕は何を忘れたんだわすれたんだわすれたものをわすれた存在を忘れた人のことをわすれた人のことを僕を助けてくれた人がいたその人は何処にそうだ一人欠けている僕の中から一人欠けている大事な人の姿を一人忘れてるその人がいたから僕はここまでこれたその人がいなくなつたから僕は いなくなつた？

いない？

いない？

いない？

い、な、い？

いないっていないってどういうことなんなんなんだ？

その人はもう居ない？

その人は、もう居ない。

……叶さんに会うことで 亜希子に似ている叶さんに会ったことで、僕はどうやら記憶となりふりの構わなさを思い出したらしい。そうだった。

この復讐劇に足りない人がまだ一人いる。

徳永切裂の左肩を撃ち抜くことが出来た　　僕の同僚。

信じられないくらいに暴虐無人さで、上官を脅迫してまで有休を増やしていた同僚。その姿を真似て、僕はこの街に入ることが出来た。拳銃を持ってこの街に入れた理由はただ一つ。僕は、「徳永切裂を捕まえるスペシャリスト」という名目でこの街に入ったから。お金も住む場所も。全て脅迫して警察側に払わせた。

それもこれも全てはあの同僚のおかげだ。姿も名前も思い出せなくなっているが、同僚のあの勇敢な姿は僕に勇気をくれた。

同僚は。

徳永切裂と　　相打ちをした。

徳永切裂は左肩、しいては左腕全体の負傷。

同僚は、死亡した。

さて。

少し落ち着いた所で、周りをよく見渡そう。

まだ時間は経っていない。叶さんは「おい」とまだ手を振っている。僕はその手を見ながら、小さく手を振り返す。表情を変化させず、ただただそれだけの為に。先程までうじうじ悩んでいた自分が嘘のようだ。最初からこういう感じに生きていればよかった。そうしていたら、復讐のことにあれだけ悩む意味なんてなかったのに。僕の顔を見て、叶さんは表情を冷めた。何か僕の顔についていたのか？いやいや、逆だ。僕の顔に何もなかったからだろう。「なつななななな何もない、何もないんだよー徳永切裂以外！。それ以外なんて必要ないのさ僕には。何故ならこの街を去ったら最後、僕に居場所はないから。恐らく指名手配か何かをされているだろう。だからだからだからーからー、何も恐れる必要はない。とっとと特訓して、とっとと殺して、とっととこの街を出て、とっとと自殺でもしよう。そうだよ復讐さ亜希子の為に父さんの為に母さんの為にー。ふざけるなふざけるなー徳永切裂ー」ふざけるなふざけるなそうさふざけるなあのヤロー殺害せよ殺害せよ未来などなど血に染めてーふっくしゅうだふくしゅうだ予習復讐だー。

バシン、と。

そんなことを思っていた僕の頬に、いきなり強烈なピンタが着弾した。

……え？

驚いて前を見てみると、そこにはポロポロと大粒の涙を零した叶さんが居た。

「何言ってるのよ栄作！ あんた、復讐の為には全部切り捨てるつもりなの？ そんなの意味ないじゃん！ 亜希子さんも悲しむだろうし栄作のお父さんお母さんも悲しんじゃう！ だって……」

どうやら僕はどこかから思っていたことを口に出していたらしい。だから叶さんは泣いているんだろう。

まあでも。

この後に叶さんが叫んだ言葉は、僕の心にきついお灸をしてくれた。亜希子に似た叶さんだからといって、過言じゃない。そんなセリフを、叶さんは復讐を誓った僕にぶつけてくれた。僕は情緒不安定なんだ。復讐を誓い、同僚が殺され っ て、いやそうじゃない。同僚は相打ちしたが、徳永切裂と同じく片腕 左腕の負傷だけだ。まだ記憶に語弊があるかもしれないが、少なくとも同僚は撃ち殺されたのではなく癌で死んだ…… っ て。

こんな話は野暮だった。

潔く、叶さんの言葉を身に染み入らせるとしよう。

まだ叶さんは全く変化しない僕の顔をきちんと見据えている。背丈的にも僕と叶さんは同じくらいなので、叶さんの泣いている顔が目の前にあった。

叶さんは涙を流しに流し、顔を赤くして、それでも僕の顔をしっかりと見て、大声でこう言ってくれた。

大声で。これでもかというくらい大声で。目の前に壊れた復讐者が居るのにも関わらず、僕だけを見て、こう言ってくれた。

「だって、それじゃあ三人とも、栄作の人生をポロポロにする為に

死んだみたいなもんじゃない！」

ドクン、と僕の心に突き刺さってきた。

それは今まで僕が目を反らしていたことだった。目を反らさない
とやっていけなかったと言いついて代えてもいいかもしれない。

復讐。

それ一つの為に、僕は大事なことから目を反らしていたのかも
しれない。馬鹿だ。僕は大馬鹿だ。二度と辛い思いをさせたくない
思っていた叶さんに涙まで流させて、こんな当たり前のことを言わ
せてしまった。

だったら僕は大馬鹿者だ。

何を……今まで僕は何をしてきた？

同僚の真似をして上官を脅した？ 助けになつてくれた同僚まで
出して上官を脅した。上官には世話になった。その上官を、僕は脅
した。何も考えずに、淡々と、

最低だ。

高梨君とヒーロー夫人を利用した？ 二人の優しい行為を、僕は利
用した？ 二人は善意で僕に協力してくれた。地下の皆もそうだ。
皆が皆、僕に笑って協力してくれた。それを、利用？

自惚れるな。

叶さんを泣かした。あゆみちゃんと呼ばれていた女性が近付いて、
叶さんを慰めようとしている。叶さんはその手を振り払い、「ごべ
んね、あゆみちゃん」と言いついて涙ぐみながら僕に掴みかかってきた。
「栄作！ あんた、復讐もいいけど、あんた自身のことは考えてい
るの！ 栄作のことだもんね！ どうせ何も考えてないんでしょ！
馬鹿にしないでよ！ あんた、何様のつもりなの！ 迷惑かけて
るだけじゃん！ 死んでる人にまで迷惑かけるってどういう意味！
ねえ、答えなさいよ！ 答える！ 佐藤栄作！ あんたは、復讐
をし終わったらどうする気なの！」

そこまで一気にまくしたてると、僕の体を押して、叶さんは黙っ

た。ハア、ハア、という荒いだ息を整え、少女を無意味に抱きしめて、僕の返答を待った。

僕は、もう迷わない。ふっ切れた。今までぐらついて不安定だった僕の地盤。たまに衝撃が与えられると大きく動き出し、僕の行動と心境をふざけた物にしていた地盤。二時間の射的訓練の時、僕が出した結論はなにも『全て考えずに冷静に撃つ』ことじゃなく、『地盤を動かさないようにして前を見据えて撃つ』ということだったんだ。

僕の目的は、徳永切裂を殺すこと。

その後は

「謝ります。色々な人に。迷惑をかけた人全員に。上官にも、同僚にも、高梨君にも、ヒーロー夫人にも、地下の皆にも……叶さんにも」

「栄作……栄作っ！」

僕の言葉を聞くと、叶さんは泣きながら僕に抱き着いてきた。あまりの衝撃に僕はグエツと声を漏らし、頭から地面に倒れてしまった。叶さんに押し倒されてしまった形になる。それでも、鼻水も流れていた泣きつ面を、叶さんは容赦なく僕のお腹らへんの服に押し付けてきた。栄作……栄作……と叫びながら。

僕は叶さんの頭を撫でながら、困惑した表情のあゆみちゃんに笑ってごまかした。

あー……こんな大胆なこと、亜希子にされたことあったっけな！？キスマでだったしな、亜希子とは。それくらいで満足だったっていうこともあったけど。

夕暮れから夜の暗がりまで、僕と叶さんはこうして交流をした。叶さんのおかげで僕はなんとかこうして立ち上がることが出来た訳だし、叶さんには感謝しても仕切れない。

五分くらい経つと、叶さんは目から少し流れる涙を服で拭いなが

ら、僕からバツと勢いよく離れた。

「……………へへへ」

「……………」

地面に手を着いた状態の僕を見て、笑ってくれる叶さん。顔はすっかり涙の後に朱くなっていた。

「あー、スッキリした！ 今日はあるがとね、栄作！ んじゃー……また会おう？ ね？ ………………いいよね……………？ それとも……………私なんか会いたくない……………？」

叶さんは、今日の朝から今までで、一番大人っぽい声で、僕にこう言った。もじもじと、もつと顔が朱くなる。僕は立ち上がり、服についた土を両手ではらって、そのまま真っ直ぐ叶さんを見た。じつと、叶さんがしてくれたみたいに。

「は……………早く言って……………」

次第に叶さんは恥ずかしそうに顔を僕から背けた。けれども、ちらちらと僕を見て、返答を待ち望む。

可愛かった。

今までで一番。

この姿が。

彼女が。

叶さんが。

僕の心をわしづかみにした。

その表情が。その仕種が。僕を立ち直らせてくれた、彼女の全てが。

堪らなく、心地良かった。

「また会いましょう、叶さん」

ヒーローがいるのに平和な街の裏 九（後書き）

やっとこの状態までこさせることができました。もう少し。もう少しでクライマックスまで近づけられる筈。

ヒーローがいるのに平和な街の表 ？（前書き）

短めです

ヒーローがいるのに平和な街の表？

「まあ全裸なんて嘘なんだけどね」

「結局嘘なのかよ！」

だと思っただよ！ いくら叶でも全裸は有り得ないって！

あー……、いやー、それにしてもよかった。知り合いの友人が変質者の前で全裸になりたがる奴だったら俺はそいつとの友好関係を破棄しなければいけないからな。あああー、よかった。うん。

そう本気で安堵していると、隣に座るあゆみが慈愛と悲しさで満ちているというおかしな表情で俺の方を見上げてきた。

「……どうした？」

心配になって俺がこう聞くと、あゆみは「はあ」と小さくため息をついて呟く。

「何でもないわよ。何でもないわ。あなたがどういう理由で安心しているのかとか、あなたが私をどう思っているのかなんて、全然何でもないんだからね」

「ん？ 何でお前怒ってるんだ？」

「……何でもないってイッテルビウムでしょ」

「イッテルビウムって何！」

いきなり小ボケを挟みやがったぞあゆみ！

今のよくわからないシリアスモードでまさか小ボケをはさむとは！

流石、あゆみ！

「インテルの進化形よ」

「インテルに進化形も退化形もない！」

「じゃあ進化刑」

「一瞬見落としそうだけどそれインテル大変なことになってるから！」

「そうね……進化刑……フフ、楽しそう」

「黒い笑顔止めろや！」

ずっと無表情で淡々と喋ってるかと思ったら、俺見ながら進化刑
楽しそうだとか呟きやがった！

まさか小学生二年生女子にこんな笑顔が出来るとは！

将来あゆみが悪女か何かになる想像をしていると（勿論ナイスボ
ディではない）、あゆみは俺に構わず話す。

「まずは最初の文字がが行で最後の文字があ行の全六文字で大学に
通ってる残念な男性を切り刻むわ」

「百パーセント間違はなく圧倒的に俺が切り刻まれるんだけど！」

「その後……社会的に潰す」

「切り刻まれた時点で社会に存在しない人間をどうやって潰すと！」

「何イッテルビウムだよ。切り刻んだと言っても遺産とかが残って
るでしょう？ それを……潰す」

「イッテルビウムイッテルビウム言ってる奴に……塵も残さず消さ
れるぞ俺！」

「何イッテルビウムだよ」

「うるせえ！」

何イッテルビウムんだこいつ！

あ、いや間違えた……何言ってるんだこいつ！

うーむ、やっぱりなんか怒ってないか？今まで俺に散々言ってきた
たあゆみだったが、流石にここまで言われようはなかった。だっ
てこれ最終的に俺死んでんだぜ？まあ名前呼んだだけで吐かれた経
験もあつたあゆみな訳だけど、それでもこの言いようは酷い。

今までの会話で何かこいつを怒らすようなことがあつたか？

「……何で怒ってるんだ、あゆみ」

「怒ってる？ 私が？ 刀銃に？ 自惚れないでくれるかしら？」

「やっぱり、怒ってるだろ」

「……怒ってなんか、ないわよ」

言つとあゆみは暗い顔で下を俯き、それっきり喋らなくなった。
周りには誰も居ないので、太陽の光りが街を二重に囲む巨大な壁と
壁の間の頭上から差し込み、電車が進む音だけが聞こえる。

……何か気のきいた一言でも言えればいいんだが、生憎友好関係特に小学生なんかとは特に少ない。俺にはそんなことが上手く出来る筈もない。

仕方なく、こんなことを言った。

「暗い顔するなよ。俺、結構前からあゆみと遊ぶの楽しみにしてたんだぞ」

「……どれくらい？」

あゆみは。

何かに懇願でもするかのような視線で、俺を見た。

「もし……もし、今刀銃の隣に居るのが私じゃなくて……か……香里お姉様だったら……刀銃はもっと楽しみにしてたんじゃないの？」

「……」

この場であゆみが俺にそう言うってことは、あゆみにとってお姉様とまで言わしめている叶の存在がとてつもなくデカイものだからだろう。こんな何の脈絡もない話しの展開で叶の名前が出て来るんだ。よくわからないが、とにかくあゆみはこの疑問に答えて欲しいに違いない。現に、あゆみはチワワのようなつぶらな視線で俺を見上げている。うん、チワワ。異論は認める。

「あー……」と唸りながら、とりあえずあゆみが言う状況を考えしてみた。

もし今横に居るのが叶だったら。

もし今横に居るのがあゆみじゃなかったら。

……そんなに大差はないと思うんだが。

だってあゆみ……俺だぞ？

大学で誰にも喋りかけられなくてずっと一人だった、友達の少ない俺だぞ？

今までの話し相手といたら、ヒーローと叶しかいなかった。いやこれマジで。喋り相手は、二人しかいない。まあもっと詳しくと言われたら大学の先生とかアパートの三階の大人はいるけど、それだっけとするとしたら世間話しただけだ。

だからさ、あゆみ。

俺は、お前と喋れて嬉しいんだよ。

過去を振り返っても人しか殺してない俺の人生。かといって、今を直視しても友人の少ない人生。

それを、さ。

あゆみは変えてくれたんだ。あゆみのおかげでセバスチャンさんとも喋れるようになったし、叶なんかと一緒にいったら 恥ずかしさで耐え切れなくなる 遊園地にも行けるようになった。

だから俺は、お前がピンチになったら絶対に助ける。この街に住んでてピンチになるなんてことは有り得ないだろうけど、少なくとも俺が自殺しようとした時、泣いて近づいてくれたお前を

あれ？

あゆみ……が……俺が死んだ記憶の中にいる……？

俺が徳永切裂として死んだ記憶の中に……あゆみがいる？

ちよつと待てよ、ちよつと待て。以前俺が思い出した時には、笑いながら消えていく叶の姿と、周りで囲む街の人の泣き叫ぶ声と、俺の血飛沫しかなかった。

今俺の記憶の中にあるのは……笑いながら消えていく叶と、街の人と、俺の血飛沫と……あゆみとヒーローとセバスチャンさんとあゆみの母親とあゆみの父親？

……あれ？

あれ？

ヒーローがいるのに平和な街の裏の裏？

俺が目を開けると、そこにはあゆみの泣き顔があった。瞬間、「刀銃！」と大声を出し、あゆみは俺に抱き着いてくる。

……何だ、これは？

どういう状況で、俺はこんな状態にいるんだ？

いや待て。まずは落ち着こう。耳元で「刀銃！ 刀銃！」と泣き叫ぶあゆみが正直鬱陶しかったが、それでもなんとか我慢して状況を整理するとしてよう。

まず、ここはどっかの豪邸の一室。大きなシャンデリアが俺の頭上から光りを照らす。なんだここ。どこだここ。俺の記憶の中にこんな場所は存在しない。だけでもまあとりあえずこの豪邸の謎は置いておこう。いやいや、全くわからないという理由で置いておくとかそういう訳じゃない。そういう訳じゃなく、俺の今ある知識を総動員すればなんとかわかる話だから置いておこうという訳だ。因みに俺の考えを言おう。

ここは十中八九あゆみの家だ。

街一番の豪邸。そこに住むのは西山財閥の人達しか有り得ない。

その有り得ない中に、あゆみは一人娘として存在している。こうしてここで俺を介抱出来たのも、あゆみのおかげの他ならない。

「良かった……良かったよ……刀銃……死んじゃうかと思った……

……まあ私死んでるから条件同じになるんだけどね！」

「香里ちゃん……君、清々しいくらいキツパリ言うね。まあ僕としても刀銃君に死んで貰う予定はなかったから、これで良かったよ。うん」

「あら？ 意外と冷静な反応ですわね？ さっきまでうるたえていたヒーローさんが、どうしてこんなに平然としていらっしゃるのかしら？」

「よしえさんよ、そこは放つといておくれよ。夫も複雑なのさ。ヒ

「ローが、一回助けた相手にうるたえる姿なんて見せたくないもんだらう？」

「成る程、そういう訳でございますか。流石はヒーロー様。徹底しておらっしゃる」

「刀銃！ 刀銃！ 死んでない？ 死んでない？ 死なない？ 私を置いて死なないでよ、刀銃！」

「……………死んでねえって」

すると周りから声が聞こえた。どうやら今俺はベッドの上に居るらしい。見渡すと、その声の主達が俺が居るベッドを中心に囲んでいた。

左から、涙を流した後なのか頬をほんのり朱く染めた叶 マン トやヘルメットを上手く着こなせていないヒーロー あゆみの母親であり、西山財閥の中心産業である、『門番』を育成する西山よしえさん 和服を着た極道の妻っぽいヒーロー夫人 相も変わらず綺麗な姿勢で立つ執事の鏡のセバスチャンさん。

そして、俺の体に抱き着いている、泣きっぱなしのあゆみ。

これで、この場に居るのは全員だった。

そうだよ。そうだ、そうだった。

「皆……………心配かけてゴメンな」

俺は死ななかつた。

いや、違う。そうじゃない。

俺は死のうとしたが、治されたんだ。

「なんで俺を生かさせたんだ？」

全員を見ながらそう言うと、あゆみを除いた全員がやれやれとでも言いたげな顔で肩をすくめた。

そして、全員視線が俺の腹辺りの部分に集中し、言葉を待つ。

「私を置いて死ぬなんて許さないんだからね……………。嫌なの、貴方が死ぬなんて……………ヒグッ……………私ともっと遊びなさい……………私をもっと楽しませなさい……………ヒック……………私にもっと……………あなたと喋らせなさい……………」

「……………」

あゆみは依然泣いていたが、服の袖で涙を拭いながら、俺の顔を見ずに言った。顔が赤い。これが涙のせいなのか、はたまた違う理由のせいなのか。今の俺にはわかったもんじゃないが。死のう、と思った。

償いの為に。自分の為に。自分が犯した罪の為に。

何よりも、俺がこの手で殺してきた人達の為に。

だけど、どうやらそれはまだ早いようだ。ここにはあゆみが居てヒーローが居て、街の人達皆が居る。俺と一緒に笑って喋ってくれ人達が居る。昔ならよかった。笑って喋り合う人なんか誰一人居なかった昔なら、俺は自分の意志で死んでもよかった。

だが、ここには俺と笑顔で接してくれる人達が沢山居る。

「……だったら死んじゃ駄目だな」

俺がそうボソリと呟いたのが聞こえたのか、あゆみは鼻水や涙でベタベタにした顔を慌ててふき、腫れぼったい表情で俺を見直して、こう呟いた。

「死なないでよ、刀銃」

「……すまなかった」

「謝らないでよ、刀銃」

「……すまなかった」

「……刀銃」

「……何だ？」

「私、貴方のことが好きなの」

いきなり発せられたあゆみの言葉にピクリとしたセバスチャンさんの姿を横目に見たが、気にせず会話を続けることにした。何言ってるんだよ、あゆみ。俺がお前のことを嫌いな訳がないじゃないか。「おう。俺も好きだぞ、あゆみのこと」

「そういう好きじゃなくて！」

「ん？ じゃあどういうタイプの好きなんだ？」

俺がこう聞くと直ぐさま顔を熟し切ったトマトの様に赤くさせたあゆみ。もじもじと指を絡ませあい、「えっと、その」とブツブツ

小言を発し続ける。どうでもいいことなんだけど、いつまであゆみはこの状態のままに居るつもりなんだろうな。いいかげん俺のふとももが痺れてきてるんだけども。

そんなことを考えていると、やがてあゆみは覚悟を決めたように俺の目を真っ直ぐ見た。

「ライクじゃなくて、ラブの方の好きよ!」

「……………へ?」

この言葉に。

セバスチャンさんだけでなく、叶やヒーローや西山よしえさんやらが驚いて体を反応させた。

……………へえ。

あゆみのやつ、そんな風に俺を見てくれたのか。

これは所謂告白とかいう奴だろう。今まで友好関係が少なかった俺のことだ。当然、今までこんなことをされた経験などなかった。

しかも、してきた相手は『大学生』。歳の差は……………五くらいか。

考えたくないな、それは。俺がロリコンとか言われるのが目に見えるている。

……………だけどぞ。

俺が三十歳の時には、あゆみは二十五歳くらいだ。普通に釣り合ってるよな? 今の状態がロリコンだとかなんとか言われるなら、それまで待てばいい。……………うん。全然苦痛じゃねえや。寧ろラツキー? だってよ、今から付き合い始めて老後まで一緒にいたら、五十年くらいずっとあゆみの側にいれるんだぞ?

最高じゃねえか、それって。

まあ何が言いたいかというと要するに、簡単なことだ。

あゆみからの告白。

それに対する俺の答え。

そんなものに、俺が一秒でも悩むとでも?

ずっとずっと、あゆみのことが好きだった俺が？

……そんな訳ないだろ。

だから俺は言おうとした。「俺もあゆみのことが好きだ」と。そして付き合い始め、罪の意識を感じながらも子供を産み、やがては穏やかな生活に全ての身を注ぐ。俺が死ぬ時は、俺が病気で死ぬか、老衰するか……もしくは、俺に対する復讐の中死ぬかのどれかだと思いつながら、余生を過ごす。

そんな生活を、一瞬の間に夢見ていた。

だけれども。

今この状況が、それを許さない。

「……あれ？」

俺はこの状況の矛盾に気付いてしまった。周りにはあゆみ、叶、ヒーロー、ヒーロー夫人、セバスチャンさん、よしえさんが居る。

そして、ここはあゆみの家だ。

なのに……何故だ？

明らかに、一人足りない。足りない人が居る。足りない登場人物が居る。

その矛盾が、俺を　俺の記憶を苦しめる。

これは一種の夢だ。夢だが、夢は夢なりにある程度理に適っていないといけない。なのに、この場には、矛盾が生じている。

矛盾。そう、矛盾。

それは簡単に単純な話なのだが、その一つのせいでこの幸せな状況が全て台なしになる。

「あゆみの母親は居るのに……」

家に帰っていなかったあゆみの母親であるよしえさんが仕事のキリがようやくついたから帰ってきたのに。

何故、あゆみの父親は居ないんだ？

「それに気がついたら、おしまいだ」

その矛盾は、音を起てずにいきなり俺の目の前に現れた。背丈は俺と同じくらい。しかし全くサイズが合っていないせいでダボタボのジャージを着ているせいで、だらしなく見える。顔のほりが深く、髭もかなり生やしていた為かなり年上に見えた。

それだけならまだよかった。

だが、それだけじゃなかった。

その矛盾は……右手に刀を持っていた。蛍光灯の光りを反射する研がれた刃を備える、一振りの日本刀。ダラリと垂れ下がった左腕も相重なり、それらを、男を不審な存在に至らしめていた。

「何を……」

何を言っているんだ、と言おうとした。だけれども、言えなかった。

「私に気付いた時点で、君の記憶は崩壊するんだ。こんな私の過去の真似事など、消し去ってあげよう」

男の右手と、刀が一瞬無くなったと思った。そう見えたんだ。実際に無くなったように見えたその二つの存在は、俺のしている光景を鮮血に染めた。

「……え」

全員が、全員斬られた。

ヒーローは太い腹を横に一閃され、ずるずると上と下に体が分かれる。ヒーロー夫人は首の横を斬られた。血筋が一つ延び、何も言わずにぱたりと倒れる。叶は粉状に。よしえさんは少ししか斬られなかったようだが、残った衝撃で壁に叩きつけられていた。

あゆみは。

鼻から上が無かった。

「う……うわあああああ！」

駄目だ。駄目だ駄目だ駄目だ。この男は、駄目だ。関わっちゃいけない。全身の感覚という感覚が男の存在を拒否しようとする。

何なんだ、この男は？

人間が……普通の人間が、血をしたらせた刀を持ちながらこんな

に無表情でいられるものなのか？

「ほらな。やはり、君は私とは違う。私と君とは決定的に違うものがある」

男は一瞬で俺の元へと移動し、俺の喉元に刀の先端を突き付けると、何も言えない俺に向かってこう言い放った。

「私の名前は徳永切裂。どうやら君の名前も徳永切裂らしい。この記憶も私のそれと被っているからあながち間違いでもないのだろう。だが、君は殺人鬼ではない。しかしどうやら君の方も何か私と同じような特別な事情があるらしい。君の本当の名前を教えてくださいませんか？ その代わり、私の名前を忘れないでくれ」

俺は、俺の知り合いを全員瞬殺した徳永切裂に恐怖を抱いていた。しかし……今はどうだ？ 刀のヒンヤリとした鋭い感触が喉元にあるのに、しかしそれでも俺はこの妙に冷静な態度に心酔していた。徳永切裂は……そういう人物なんだ。人を殺すというそのタブーを、何の気無しに軽くやってのけてしまう。そのせいで 殺す時に何も感じないせいで、徳永切裂が殺人鬼だとは感じれなくなってしまう。

反面、尊敬を越えて、カリスマ性まで、感じた。

俺の中に居る矛盾 徳永切裂という殺人鬼に向けて、俺は今さつき思い出した自分の名前を、生気が感じられない死んだような徳永切裂の目を見て伝えた。

イツノマニカ、マワリニハザンサツサレタコウケイガキレイサツパリキエテナクナツテイタ。

「俺の名前は田中雄二。並び替えて……刀銃」

ハハハ、と徳永切裂は小さく笑う。

「久し振りだな、我が左腕に傷を残した私の天敵よ
そう。」

俺の名前は、刀銃。ヒーローが居るのに平和な街でほのぼのと暮らす極普通の大学生。

俺の名前は、徳永切裂。人という人を斬りまくり、一度死のうと

したが死に切れなかった殺人鬼。

そして、俺の名前は田中雄二。徳永切裂という殺人鬼を、一度、相打ちという結果で追い詰めた警察官。

俺の中に、三人居る。

俺の中には、三人分の記憶がある。

「整理するでしょう」

徳永切裂は、血も肉も無くなっている日本刀を、左の腰の脇にさしてある鞘に収めて、ベッドから降りた。そしてそのまま、胡座をかいて俺を目で招く。

「有り難いことにここは単なる記憶の中だ。どれだけ話したとしても時間はさほど動かない」

「……どうも」

無表情のまま言う徳永切裂に言われるがまま俺はベッドから降り、徳永切裂の前に正座した。当然だろう。この人の前で馴れ馴れしく胡座なんかかいた日には俺がどうなるかわからない。ていうか何でこんな大の大人が胡座をかいているのに様になるんだろうな。オッサンっぽくなく、普通に見とれるくらいカッコイイ。

「さて。まずは私の成り立ちについて話そう」

徳永切裂は俺を見ながら、なおも無表情でこう切り出した。

「私の名前は徳永切裂。生まれた当時は私も殺人を犯すような者ではなかった。しかし、台風で実家が飛ばされ、家が途端に古くなった時、まず最初に父親が変わった。何もしない怠惰な人物に変わった。次に母親が変わった。平気で息子に暴言と暴力をふるう人間になった。そして、ことは起こった。何処からか刀を盗んだ母親が私に切り掛かってきた。私は逃げ、母親は気を失った。私は当然のごとく母親から刀を奪い、当時重かった刀身を振りかぶり、父親を切り刻んだ。それが最初の殺人だ。理由は単純だったな。怠惰な父親を憎む母親に褒められたいが為にやった。次に母親に褒められる為に母親を殺した。次に生に疲れたお婆さんに褒められる為にお婆さんを殺した。次に首輪を首に繫げられて苦しんでいる犬に褒められ

る為に犬を殺した。次に母親に叱られ悲しんでいる子供に褒められる為に子供を殺した。次に子供が殺されて悲しんでいる母親を」

「もういいです。すいません、次に行つて下さい」

今までの話しを聞いた俺が持った感想は三種類。恐怖と、共感と、奮怒。やはり俺には何かがあるらしい。そうでもないところの相反する三つのぐちゃぐちゃな感情の理由が同時に発生する説明がつかない。

俺が複雑な表情で言ったのを見ると、徳永切裂は「では、私が捕まった話に移ろう」と言つて話を続けた。

「私が何十人も殺していると、警察官が私を追い詰めてきた。私の周りを囲み、捕まえようと撃つてきた。その中に……君が居たんだ。覚えているかな？ 私と唯一渡り合った最初の人間の姿形が君だったのだが」

「……………」

そう言われても、俺には何のことだかさっぱりわからなかった。今思い出せるのは、街での暗い過去と明るい今。そして街での実験と明るい未来。

今の俺の中には、俺を田中雄二と断定出来る記憶はなかった。

「……わかりません、ね。貴方程の人を追い詰めた記憶はないですし、寧ろ俺は貴方になって追い詰められた記憶があります。これってどうということなんでしょう」

「ああ、それは簡単に説明がつく」

俺が真剣に訳がわからなくなつていたこの疑問を。

徳永切裂は簡単に説明がつくと言い切った。

「それは、暗闇の空間の奴らの仕業だ」

「暗闇の空間？ 何ですかそれ」

「私を実験体にした科学者団体の俗称だ。死刑目前だった私を造られた平和な街に封じ込め、その上で私が人を殺す理由を調べようとした奴らだよ。恐らく私の想像だが、奴らは私の記憶をコピーペーストし、更に脚色を所々加えて君に入れたのだろ。それならば君

が私の記憶を持っていることにも説明がつくし、君自身が私の天敵だということも君は悟れなくなるからな」

そんな色々な物理現象を無視した話を平然と言う徳永切裂だったが、全く表情を変えずにかつ低い重量感のある声で言いのけるのでつい信じてしまいそうになる。実際の所はどうなのかわからないが、とにかくこの話を信じない訳にはいかなかった。

つまり、今徳永切裂が惨殺したこの記憶に居るのは、徳永切裂が体験した人たちに一部修正を加えたもの。

徳永切裂に告白したよしえさんは、あゆみの姿に。

しかしそれでは成り立たないので、よしえさんを記憶に加える。

更に俺には叶という知り合いが存在するので、都合上成仏した筈の叶も記憶に加える。

そうして、俺の中に入れられた徳永切裂の別の記憶は完成した。

だが、もし徳永切裂の記憶を入れられた田中雄二が俺ならば、俺は一体全体どちらの記憶を優先して生きればいいんだ？

しかもまだ俺には、刀銃としての記憶もあるんだぞ？

徳永切裂と田中雄二と刀銃。

殺人鬼と警察官と一般人。

殺す力と護る力と無力。

さて、ここで一つの問い掛けだ。

「私が奴らの問いに対して出した答えは『褒められたかったから』だったのだが、生憎暗闇の空間は私の答えに納得しなかった。しかしそんなことは私には何の関係もない。当時大学生なのに身長が小学生くらいしかなかったよしえと、ヒーローにふんしていたセバスチャンの前で私は死のうとした。が、死ねなかった。よしえが暗闇の空間に頼んで私を生かしたらしい。そして私は生き続けることを決めた。よしえと結婚し、子供が産まれた。名前はあゆみ。よしえに似過ぎて困った記憶がある」

徳永切裂が黙っている俺を無視して過去の記憶に浸りながら喋り続けていたが、今の俺の耳には何も入ってこない。

「その後私はよしえとセバスチャンとあゆみと共に暗闇の空間から逃れて造られた平和な街を抜け出した。追っ手が来たが、なんとか殺さずに遇ったのだが、ここで一つの手違いが起きた。警察が再び私を指名手配し、私達を泊めてくれた夫婦と夫婦の息子の恋人が私の正体に気付いてしまったんだ。しかも夫婦の息子がどうやら警察官だったらしく、その両親も恋人も正義感が強くてね。通報しないで私を直接捕まえようとしてしまった。私が気付いた時には三人は動かなくなっていたよ。手には刀。馬鹿だと思った。あゆみをおんぶしたよしえやセバスチャンがそれを見たが、もう過ぎたことと言ってくれた。そしてその場をそのままにして立ち去った。間違ったことだったと思う。私達三人は間違ったことをしたんだと思う。しかし私達にも時間が無かった。いつか償わなければいけないとは思ってたが、その方法が見つからなかった。そうして無我夢中で辿り着いた場所が、本当のヒーローが居るのに平和な街だったという訳だ。周りには草原が広がっていた。国はこの街を参考にして平和な街を造ったのだらうと悟った。ここで問題だったのが、入街審査を受けなければならなかったということだったのだが、セバスチャンのおかげでよしえは門番に関する重要人物としてなんとか潜り込むことができた。私も便乗し、それからまた私達は平和に過ごすことが出来た。だが私は本物のヒーローに、暗闇の空間という科学者団体がこの街にもいることを知らされた。私は決意し、わざと外法の手段で街に入ることによって、街の中と外に私がこの街に居るということを広ませた。私はそれから隠れ、暗闇の空間を捜し続けていたところ、大きくなったあゆみの隣にいる、私の天敵の姿を見つけた。と、思ったが矢先、今この状態にいるという訳だ。私の記憶の中に叶香里という人物は居ない。君に入れた私の記憶も一部脚色されたということだろう」

知るか知るかと叫びたい気持ち山々だったのだが、目の前に居るのは徳永切裂だったので止めておいた。というかよく喋るなあこの人。寡黙な人という訳ではないのかもしれないが、正直どうでも

いい。

では、改めて自分に問い掛けよう。

殺す力と護る力と無力、どれが欲しい？

「……意味のない問い掛けだこりゃ」

「ん？ 何か言ったかな」

「いえ、俺個人の話です」

言っただけがついた。そうだ、これは俺自身の話だ。徳永切裂でもなく田中雄二でもない。

今の俺、平和な街で暮らす刀銃の話だ。

それを考えたら、欲しい力は必然と決まってくる。

殺す力？ 要らねえよそんなの。護る力？ まだ甘いな。護るだけじゃ俺の理想には届かない。

俺の理想は、ヒーローだ。

だったら、欲しい力は何だ？ そんなの、当たり前だのクラツカ
ー並にくだららないことだ。

俺が欲しいのは、人を助ける力。

「……どうやら君も何かか吹っ切れたようだな」

「そう見えますか？」

「ああ。ようやく君も実験体ではなく、一人の人間に戻れたらしい」

「……はあ」

正直微妙だった。今でも俺は三人分の記憶があるし、出所がわからない。両親が最後の悪だったという矛盾要素が残っている。

だが、それでも俺は、人を助ける力を欲することにしよう。それを俺の存在理由とすることにしよう。

「なんか、すいませんでした。こんな訳のわからない俺の為に時間を割いて下さって」

「いや、気にすることはない。暗闇の空間の居場所は後一步で突き止められる。その一步を踏み出す為には街の住民を危険にさらして

しまう可能性があるのだが……。まあ、い……ヒーローとヒーロー夫人に何とかしてもらおうでしょう」

言っていることの半分以上がわからなかったが、ゆっくりと立ち上がった徳永切裂にとっては重要なことなのだろう。刀を構えると俺が立ち上がったのを横目に天へと高く掲げた。勿論、動く右腕だけだ。

「ではまたいつかの機会に会おうとしよう、我が天敵」

「あ、すみません。ちょっと待って下さい。最後にもう一つだけ」

「何かね」

「あなたとヒーローはどういう関係なんですか？」

俺のこの問い掛けに、初めて徳永切裂は表情を凍りつかせた。無表情とは違う、本当に冷徹な表情。

「一蓮托生だよ。ヒーローとヒーロー夫人の方も、自分達を不死身の体にした暗闇の空間を追っている。彼らは私が動きやすいように働いてくれている。時間を稼いでくれもしている。　　どうやら私に復讐しようとしている男もいるらしいからな。セバスチャンに頼んで大学に強制的に通わせたり、あまり役に立ちそうもない特訓をさせたり……な」

「……そうですか」

話を聞く限り復讐者という点にも気がいったが、俺が最も気になったのはヒーローと一蓮托生という嘘偽りがなさそうな事実。ヒーローの方にも何か事情があるらしい。まあそうでもない俺の部屋にあったあの刀と銃の説明が尽きそうにもないし。とりあえずはまた後日聞くことにしよう。ヒーローが苦しんでいるのなら、俺はそれを手助けしたいしさ。

「さて。ではまた会おう、我が天敵」

「出来れば会いたくありませんがね」

「ハハハ。その減らず口も昔を思い出す。さらばだ、田中雄二」

「刀銃ですよ、指名手配犯徳永切裂」

「……ハハハ」

今まで徹底して無表情だった徳永切裂が口だけで笑って、刀を頭上から縦に一閃した。目の前を刃が通過したと思うと、目の前が真っ白になってきた。
こうして。

かの因縁の相手とのセカンドコンタクトは終了した。

ヒーローがいるのに平和な街の表？

またまた目を覚ますとそこは見知らぬ空間だった。盛大な音が耳をつんざく。おいおい何だこのパレードみたいな音楽は。お祭り騒ぎ中か、この野郎。

未だに寝ぼけている自分の両目をこすりながら冷静になって周りを見渡してみた。そこには絶賛稼動中のジェットコースターや、観覧車。回り回るコーヒーカップやメリーゴーランドやらがあった。

……ああそうか。俺は遊園地にいつの間にか着いていたのか。

気が付くと俺が座っているここは白い二人がけのベンチだった。

その両横にはまたベンチがあり、完全に休憩専用になっている。

「……ってあれ？ あゆみは？」

今の今までとんでもないものを見ていた気がするが、まあ、あんなもんは夢だろう。しかしやけにリアルな夢だったなあ。俺が刀銃だということは恐らく間違ではないし、俺が殺人犯だったという記憶は実は徳永切裂の十年前くらいの過去編で、俺に告白してきたあゆみはあゆみの母親の昔の姿だったというオチ。本来ならあの記憶の中にはあゆみの父親というポジションである徳永切裂がいないとつじつまが合わなかったのだが、生憎あれは元が徳永切裂の記憶なので徳永切裂を登場させる訳にはいかなかったのだ……というようなすこぶる程ばらんばらん夢。

「……まあ、夢……だよな。うん、夢」

そうやって無理矢理自分を納得させた上でもう一度周りを見渡すと、あゆみが居た。かき氷やシャーベットを売っている店の前に立っている。

ただし。

外見を見るだけで、ああこいつ不良だよこれ近寄らない方が身の為だよと子供にいいなくなるくらいチャラチャラした格好をした男性と、かたや反面真面目そうな、昔図書委員でもしていたのではな

いかというくらいおしとやかな女性。

その二人が、あゆみに向かって頭を下げていた。頭を下げられているあゆみは、あたふたと慌てている。珍しい表情だった。

「……………って」

おいこれどういう状況だあ！

何で不良とおしとやか美人さんと小学二年生の金髪ツインテールが一方所に固まってるんだよ！

しかも何故に小学生に二人が頭を下げてるんだ！

そう叫ぼうとしたところ、不良とおしとやか美人さんがあゆみに手を振り、去って行った。あゆみも躊躇いながらも恥ずかしそうに手を振って応じる。二人の姿を見送った後、満足そうな表情で振り返ったその瞬間、俺と目が合って「うわあ！」と大声を出した。

「か、かかかかか刀銃！ あなた、何時から起きて……………ってあなた！ もしかしてもしかして、い、いいいい今の……………見てた？」

「お、おう。一部始終とまではいかねえが、半分くらいは多分見たぞ」

「きゃ……………きゃああーっ！ 変態が……………ここに幼女の行動を観察して付け回す真性の変態が居ますっ！」

「やめろやめろやめろあゆみ！」

何てことを言いやがる！

ほら見てみるよ、店員の男の人が白い目で俺を見てくるじゃねーか！

ロリコン扱いされる悪夢再来か！

「なによ……………何なのよ！ 肝心なことは無視したくせに、見て欲しくない所だけ見るなんて！ 重罪よ、重罪！ 刑法小数点第二十条で罰則を課させてあげるわ！ 覚悟してなさいよ！」

「覚悟も何もそんな刑法絶対無いから！」

「刑法小数点第二十条……………刀銃を折檻の刑に処す！」

「まさかの俺限定の刑法かよ！ てか何だ折檻の刑に処すって！ 響きが怖いつての響きが！」

「うるさいわよ！ 罪は罪、罪には罰をの精神で魔法で裁きを降すわ！ 訴えて勝つわよ、私！」

というかそもそも法律ってこの街にあったかどうかを頭の中で思い返していると、「全く」と言いながらあゆみは俺に近寄り、ベンチの前で立った。

「何か私に言うことはないかしら？」

「……えーと、さっきの二人はあゆみとどういう関係なんだ？」

俺が今一番聞きたいことを聞いてみると、あゆみは「そんなことは今どうでもいいでしょう！」と俺に怒ってきたが、やがてあゆみはため息をつき、諦めたように俺を見て言った。

「もういいわよ……こうなったら私がして欲しい質問にたどり着くまでとことん答え続けてやるわ！ まずあの二人は私が財布を拾って渡してあげたの！ はい終了！ 次いきなさい！」

「お、おうよ！ んじゃ次！ 俺はいつから気を失ってたんだ！」

「わ……私が重要な質問をしてからパタリよ！ 何を言ってもうんともすんとも答えなくせにちゃっかり私についてくるんだもの！ オリマー？ 私オリマーなの？」

「それだつたら俺ピクミンになるじゃねえか！」

「当然よ！ 刀銃は青ピクミン並の力しか持ってないけれど！」

「溺れないだけかよ！」

あんなもんオリマーだって持つてる能力じゃねーか！

じゃあお前は白ピクミンだ！

毒があるなんて、あゆみにピッタリ過ぎるじゃねーか！

そこまで叫び合うと、あゆみは「疲れた！ 帰るわよ、刀銃！」

と言って大股で歩き出した。まあ大股と言っても元々の足が短いからそこまで……というよりか全然速くない。追い付くのに全く苦勞しなかった。

「帰るって俺ら全く乗ってないじゃんかよ。ジェットコースター乗るうぜ、ジェットコースター」

「身、長、制、限！ 考えて提案しなさいよ、刀銃！」

「……なんか、すいませんでした、あゆみさん」

「謝った程度じゃ済まされないわよ！ 私だつて乗ってたわよ！
！ キャーキャー刀銃に言わせたかつたわよ！」

「俺にキャーキャー言わせたかつたのかよ！」

「なのに肝心の刀銃は放心状態だし揚句の果てに私は身長が足りない？ ふざけるのも大概にしなさいよ！ この私を舐めないで欲しいわ！」

完全に俺の話しを無視しながら小さな体の内部に溜め込む毒を吐きに吐くあゆみ。あー……もうこの勢い止まりそうにねーなあ。どうやったら機嫌なおるやら。

真剣に考えながら、あゆみの暴言を頷きながら応答して歩き続けていると、遊園地の出口に差し掛かった。今気付いたことだが、俺の右腕に何だかよくわからない緑色の紙みたいなのが巻き付いている。と思つたらどうやらこれはこの遊園地のフリーパスらしい。前方にいる男の子が右腕の付近を係員に切らせてもらっていた。てかデカイなああのハサミ。デカすぎだろ。一般男性の平均身長のお四分の三はあるぞ。それなのに何故男の子は怯えてないんだ？ 両腕をめいっばい使っている男の係員の顔が笑顔なことともまた恐怖の要因を担っていた。

あのハサミの二つ名はマインドレンデルだな、と何の意味もなく勝手に考えていると、「何ぼーっとしてるのよ。早くしないと西山を始めるわよ、私」というあゆみの声が聞こえてきたので我を取り戻し、「すまんすまん。じゃ、行くか」と言つてあゆみの横を歩いた。

フリーパスを切つて貰い、出口を通る。

目の前には、『如月駅』という名前をデカデカと掲げた駅が広がっていた。

ふいに、一つの考えに至る。

おい……ちよつと待て。俺、今日のこのあゆみとの外出の中で、財布を開いたことが一度でもあつたか……？

駅の切符を買う時も。

遊園地に入る時も。

フリーパスを買う時も。

俺は、ずっと何かにとりつかれたように放心状態だった。当然、全くその間の記憶がない。

気が付くと横には既にあゆみがおらず、遠くの方で「少し待ってなさい、刀銃」と俺を横目に見て言いながら、改札口の前でデカイ金色の財布を小さな手で探っているあゆみの姿があった。

……まさか。

俺、今まであゆみにお金を払わせていたのか？

喋りかけても何にも答えない……そんなつまらない男の為に、あゆみはかいがいしいくらい声をかけてくれ、仕舞いには全額負担してくれていたのか？

「嘘だろ……おい……」

呆然としながら、俺はあゆみを見た。

あゆみ……お前は確か、ほんの数日前まで物凄く高飛車な奴だったよな？

それが……そんなお嬢様が……あゆみが……俺の為に、全力でサポートしてくれていた。

いや……それだけじゃない。あいつは見ず知らずの二人組の財布を拾ってあげたりもした。

感謝され、恥ずかしがっていた。

「……………おい」

それに比べて、何だ俺は？

最悪？ 最低？ 外道？ 性悪？

その全てをかけて更に二乗してもまだ足りなくらい醜悪な奴じゃねえか、俺は……俺は……！

どこまで馬鹿野郎なら気が済むんだ！

無我夢中であゆみの方へと近寄ると、あゆみは息を荒げた俺に戸惑いながらも「はい、刀銃。帰りの切符よ」と伏し目がちに手渡し

てきた。

その仕種が、何とも言えないくらい可愛かった。

「あゆみ！」

「な、何よ！」

「映画館に行くぞ！」

「え……映画館？ いきなり何を言い出すのよ」

俺の突然出した提案に戸惑いを隠せないあゆみ。そりゃそうだよな。今までもろくに質問にも答えなかった男が何言ってるのよ、って感じだよな。

「すまなかった、あゆみ！ 本当にすまなかった！ せつかくの外出なのにくくに会話もしないで金も払わなかった！ すまなかった！」

「ひゃん！ ちょっと、いきなり私の両手を握らないでよ！」

「そうか？ スマン」

「あ、ヤダ！ 離さないで……は、離さないで握ってなさいよ！」

「お、おお」

言われて両手で包み込むようにあゆみの両手を握ると、どんどん温かくなっていった。柔らかくてスベスベで、何より小さい。赤ん坊がしっかりしたみたいな手を握っている感じだった。

何故だか知らないが顔を赤くさせるあゆみに向かって、俺は叫んだ。

「映画館に行ってスリードの大迫力の画質を見よう！ 本屋に行つて漫画を立ち読みしまくろう！ CDショップに行つて雨の日以外に仕事をしたことがない死神みたくミュージックを楽しもう！ もつともつと色んな所に行つて喋りまくろうぜ、あゆみ！」

「ふえ……ふええ？」

擬音を発するあゆみに気にせず俺は感情を爆発させる。

「さっきっていつかどのくらい前かわからないが俺に言ったよな、あゆみ。『叶だったらもつと楽しみにしてたんじゃないか』ってよ」

「え……ええ。言つたわよ」

「答えは『んな訳ないだろ』だ！ 年中絶倫な叶なんかよりもお前と外出の方がよっぽど楽しみに決まってるだろが！ だから……」
あゆみの両手から手を離し、あゆみが買ってくれた切符を通して、今ちようど来た電車をバックに俺はあゆみに言った。

他でもない、あゆみに。

「今日はとことん遊ぼうぜ！」

「あ……当たり前よ！ 今度私に気をつかわせたりしたら許さないんだからね！」

俺がこう言うと、あゆみは全力で走り、改札口に切符を通して俺に近づいていた。

「さあ、さつさと乗るわよ！ 映画館なら二つ向こうの駅に大きいのがあるわ！ 切符が勿体ない気がするけど別にいいわよ！ だって刀銃のオゴリだものね！」

そう暴言まがいのことを言いまくるあゆみだったが、そんなあゆみの顔はとても晴れ晴れしいものだった。

電車が止まり、目の前で扉が開く。位置の関係上、俺が先に乗らせてもらった。楽しい休日に今度こそはさせるぞとあゆみをエスコートしようとして振り返ったその瞬間。

今までの前兆が、事件へと移行する。

声が。

本来聞こえる筈のない聞き慣れた声が。

俺の体を通過した。

「刀銃……今ヒマ……じゃないけどまあいいやー」

プシューと頼り無い音がして、電車の扉が閉まろうとする。

俺の目の前には。

何処からともなくいつの間にか現れた運動着の叶と、叶の右腕で完全に動きを封じられているあゆみの姿があった。

何で……どうしてどうやってどうという理由で……叶……お前があ

ゆみを連れ去ろうとしてるんだ……？

何で、苦しそうにもがいているあゆみを抑えながら、そんなに幸せそうな顔で俺を見るんだ？

「最も最適な誘拐場所はやっぱり駅の中だと思っただよな〜。栄作とも喋ったけど、駅の中が一番だよ、うんうん」

アハハハハ……。

アハハハハ……。

叶は、静かに……だけでも不気味に笑う。俺は、その笑い方を知っていた。

徳永切裂の記憶に住まう最もイレギュラーな存在。

予感はしていた。俺の中に入れられた徳永切裂の記憶。その中に叶の存在を入れなければ話が成り立たないのはわかるが、その叶を凶悪犯の幽霊にする必要性は全くといっていいほどない。寧ろ要らない手間だろう。

それなのに、暗闇の空間はそんな叶を俺の中に入れる徳永切裂の記憶の中に入れた。

つまり……そうしなければこの後に起こる展開の理由がつかないから……。

俺の目の前にいるのは、今まで仲良く喋って笑い合っていた、ド変態の叶じゃない。

凶悪犯にて幽霊 叶香里っ！

「あゆみ……！」

「おっとつと。駆け込み下車はおやめ下さーい」

慌てて飛び出そうとすると、叶はスニーカーを使って蹴りを繰り返してきた。あまりの衝撃に周りの風が唸る。

「グハッ！」

俺の体が反対方向の扉に強制的に押し付けられる。痛みに堪えながらも何とか立ち上がって寄ろうとするも、既に扉は閉まっていた。右手を振ってニコニコ笑う叶。

右手を力の限りのばし、俺の助けに縋るあゆみ。

その姿が、嫌でも心に残った。

「クソ……があ……！」

突然の事態にも慌てたらそこで終了だ。まずは冷静に起きた出来事を整理し、そこから打開策を組み立てる。

あゆみが叶に誘拐された。

それに対応する為にまずはしなければいけないこと。

「それは……この電車から降りて急いであゆみを探しに行くことだ！」

善は急げだ！

もう何も考えるな！

あゆみと叶との思い出が走馬灯のように駆け巡る。

かまうもんか！

今は電車を止めることだけ考える！

走って車両を移り、先頭車両へと向かう。土曜日にも関わらずまるで人払いでもされたように誰もいなかったが、今の俺にその理由を考える術はなかった。

ようやく先頭車両にたどり着く。運転している人が居る筈だ。こうしている間も景色はどんどん移り変わる。大至急その人に話しをすれば電車を止めてくれる筈……。

そう考えていた俺が甘かった。電車なんて今日初めて乗った俺だからしかたがないというつもりはないが、それでも愕然とした。

「無人電車かよ……！」

考えてみれば当然だ。運転を機械に任せておけば何も危険性はない。だからさつきあゆみが誘拐された時もすんなりと扉が閉まったのだろう。

表裏一体。

長所もあれば短所もある。

「畜生……どうすれば……どうすれば電車は止まるんだ！」

急がないとどんどんあゆみから遠ざかる。考えろ、考える俺。今ある全ての情報で適切な答えを導き出せ！

早くしろよ！

早くしないとあゆみが……あゆみが……！

その時。

俺の右ポケットに入っている携帯のバイブが作動した。

俺が俺の携帯の電話番号がメールアドレスを教えているのはたったの三人。

叶香里。

西山あゆみ。

そして……ヒーローだけだ……！

「もしもし！ ヒーローか！」

「あ、うんそうだよ僕だよ。どうしたんだい刀銃君、そんなに息を荒げてさ。まあいいや。ねえ知ってるかな？ 今度僕を特集した特番が七時にやるんだけど、観てくれないかな？ 視聴率を少しでもいいから上げて欲しいんだけど……って、どうしたの、刀銃君？ 元気ないね。何かあったのかい？」

その、のほほんとした声を聞いて、俺は心の底から安心した。そうだよ。この街には、ヒーローが居るじゃないか。ヒーローならきっと何とかしてくれる筈だ。

「ヒーロー！ 単刀直入に言う！ あゆみが叶に誘拐された！ 今俺は動く電車の中にいる！ まだ止まる気配はない！ なんとかして電車を止める方法を教えてくれ！」

「……携帯をそのままの状態にして少し待って！」

訳を少しも聞かずに、ヒーローは俺の言葉を信じて動いてくれる。ああ……やっぱりヒーローが居ないと駄目なんだ……俺は……俺は

……！

すると後ろから、ブウウンと言う無機質な音が聞こえてきた。驚いて後ろを振り返ると、そこには二つの物が電車の床に置いてあった。

徳永切裂が使う刀。

田中雄二が使う銃。

「刀と銃……刀銃」

俺が感動を越えて羨望の域にまで達していると、まだ通話中の携帯からヒーローの声が聞こえてきた。

「僕の知り合いに元科学者の人がいる。その人に頼んで状況を打開出来る物を瞬間移動で運んでもらったよ！何がいったか教えてくれるかい！」

「刀と銃だ。ありがとよ、ヒーロー……と、セバスタンさん！」
「え、ちよつと待」

俺は急いで携帯を放りなげ、足場が依然ぐらつく中、二つの無機質な兵器を取り上げた。

右手に刀。

左手に銃。

徳永切裂は左腕を撃たれた。

だから右手に刀を。

田中雄二は誰だか知らない友人の警察官と同じ左利きだった。

だから左手に銃を。

「これで準備は完了だ」

二人の記憶を頼りに、俺は行動した。体のベースは刀銃である俺だが、俺の中にある二人分の記憶が本来なら不可能である動きを可能にさせる。

まず刀を振り、その刃で無人電車の先頭部分へと繋ぐ入口を作った。四角に切り跡ができ、その四角を辿るように境目が切れる。一人分が通れるくらいの空間が出来る。

そして銃の引き金をひいた。安全装置は初めから解除されていたので関係ない。狙いを全く定めていない銃口は、放たれる銃弾を生み出し、一直線へとごちゃごちゃした訳のわからない機械達の真ん中に着弾する。

運がよかったのか、電車は徐々にスピードを落とす、やがて完全に止まった。

「よし」

しかしまだ喜ぶのは速い。急がないとあゆみが叶に何をするか
からない……！

大急ぎで先頭から離れ、放り投げた携帯を左手で拾い上げる。拳銃と重ねて持っているがなんとかあった。耳に画面を押し付けながら、刀で出口を斬り出し、とにかく全力で走ろうと思ったが、生憎壁に挟まれていた。

「どうしたんだよ！ 大丈夫だったのかい、刀銃君！」

「ああ大丈夫だ！ 何とかあった！ ヒーロー！ 今度は街を囲んでる壁が邪魔だ！ 斬っていいか！」

「な……何言ってるんだよ、刀銃君！ そんな分厚い壁を刀なんかで斬れる訳がないだろ！」

ヒーローが言う言葉ももつともだったが、今こうして刀を持っている俺には確信できた。

「いや、徳永切裂は……やろうと思えばこの壁も斬れる」

「と……徳永切裂？ 何で刀銃君がその人の名前を知ってるんだい！」

「今はそれどころじゃない！ ヒーロー、答えてくれ！ いいのか？ それとも駄目なのか！」

ヒーロー……すまない、話しの腰を折って。ヒーローのその問い掛けにいつかは答えなくちゃならないが、ただどしかしそれは今じゃない。

今は何としてでもあゆみに近づかなければ……！

「だ……駄目だよ！」

だが、悩みに悩んだ末ヒーローが出した決断は却下だった。

「そこは壊してもらっちゃ困る！ だから刀銃君！ おとなしくそこで待っていてくれ！ あゆみちゃんと香里ちゃんの居場所は突き止めたから後は僕に任せ」

「壊すのが駄目なら……昇ってやるよ……！」

言うがすぐに、俺は渾身の力を込めて刀の切っ先を壁に押し付けた。コンクリートで出来ている壁だったが、その繋ぎ目に突き立て

れば何とか刺さる。

そして、勢いよく上にあがり、同時に上の方向にある繫ぎ目へ突き刺す。

上がり、突き刺す。

上がり、突き刺す。

この繰り返しを何度もし、ついに壁の頂上までたどり着いた。街の全貌を見渡せるくらい高く、じだんだが踏める足幅が小さい。俺の足の縦の長さの二倍しかない。太陽が照り付ける中、風が弱いことに感謝しつつも前を見た。

「アハハハ！ 頑張ってるねー、刀銃！」

手がギリギリ届かない距離。

それなのに目が合う。

そこには、何かの薬品をかがされたのか　はたまた窒息したのか既に意識を無くしているあゆみを抱えた叶が、何の足場も無い空間に立っていた。

「何でだ……何でお前があゆみを誘拐しようとするんだ！」

「そんなの簡単だよー。私にも徳永切裂のいじられた記憶が入ってさ、ゆっくりゆっくり思いだしてたの。それで、こんなことになりましたー。私はしたいことをしただけ。その対象があゆみちゃんだった。ただそれだけ……それだけよアハハアハハハハッ！」
遊園地の音楽なんて目じゃない程に高らかな笑い声を発する叶だったが、その笑い声の種類が残酷だった。

これは……快樂だ。

叶の欲求をただただ満たすだけの快樂の笑いだ。

「久貝田大学と刀銃の家の間にある、トイレの横の三つの土管しかない公園に居るから。んじゃねー」

「おい……待てよ叶！」

俺は何の躊躇いもなく銃を撃とうとした。叶しか見えていなかったから。

しかし叶はニタリと笑い、気を失っているあゆみの頭を右手一つ

で軽々と握り、垂らした。まるで身代わりのように。

「……っ」

「その躊躇いが命取りだよ、刀銃」

先刻までの笑みから一転。冷めた表情で俺を見下した叶は、スーッと立った状態のまま静かに遠ざかっていった。

俺は、この短時間で二度も叶を逃がした。

「う……うおおお！」

叫び、急いで地面へと向かう。降りる方法も上る方法とさほど変わりはない。要は逆をすればいいだけの話だ。

降りて、突き刺す。

降りて、突き刺す。

やがて地面に辿り着いた俺は、全速前進で叶が言っていた場所へと向かった。トイレの横にある土管公園なら覚えがある。小さいくせに入口みたいに開かれた場所が二つあるというおかしな公園だ。幸いレトロな風景が今目の前に見えているので近いっちゃんあ近い場所だろう。

走りながら、携帯を耳に押し付ける。

「刀銃君！ 今どこだい！ 焦っちゃ駄目だ！ 僕らもすぐ向かうからゆっくり向かってくれ！」

ヒーローが大声で俺にこう言ってくれる。ははは。何言ってるんだよ、ヒーロー。焦ってるのはヒーローじゃないか。

「……ありがとな、気にかけてくれて。でも……もう遅い」

「へ？」

「もう、着いた」

二人分の記憶が、俺の走りを早くさせた。

冷静だから状況判断が出来るんだ　そう自分に無理矢理言い聞かせて、目の前の状況を確認する。

三つの土管は公園の真ん中にある。

土管の向こう側に、相変わらずダボダボのサイズが合っていない青色のジャージを着た徳永切裂と、カジュアルな若者向けのラフな

格好をした、知らない……いや、あいつは佐藤栄作か。何やってんだこんなところで。警察の仕事はどうした……ってそうか。

あいつは徳永切裂への復讐でこの場にいるのか。

まあ……いいさ。今の俺には関係ない。

目的の奴は、あゆみを抱えて上空にいた。

叶香里がそこにいた。

ヒーローがいるのに平和な街の裏 十

「それはね、栄作。暗闇の空間の奴らの仕業だよ。いじられた記憶が徐々に戻ってきているんだ」

今までのある程度の話聞いたヒーロー夫人が発した言葉はこんな感じだった。実際には「熱いねえ、ホント。ほのじだねえ、ホント」という言葉が入っていたけれど、無視して僕はヒーロー夫人と高梨君との会話に興じようとする。

ここは地下。僕は叶さんと和解をして別れ、この場所に帰ってきた。

エレベーターの前で待っていた高梨君の先導でエレベーターに乗り、移動する。因みに今は夜六時。大声で放った高梨君の「ウォーターメロン！」という言葉は電柱にとまっていたカラスを逃がしたのはまた別の話。

エレベーターに乗りながら「どうですかー、叶さんって人とロクヨンしてきましたかー？」とかいう高梨君と会話をしていただけけれど、生憎叶さんとはロクヨンしていなかったから「……それヨロシクじゃないですか？」としか言いようがなかった。わざとかなと思っていたのだけど、高梨君が「アハハ、何言ってるんですか佐藤さん。ロクヨンはロクヨンでしょう」と言い切ったのでもう笑うしかなかった。

エレベーターの扉が開く。そこで待っていた準備中という札をカウンスターに置き、その前で両腕を枕にしてスヤスヤと眠っているヒーロー夫人だった。ていうかどんだけ眠かったんだろう。日曜日だったらおかつぱ頭の小学生がダミ声で喋っている時間帯なのに。

「ヒーロー夫人。起きて下さい」

高梨君が小走りで近寄りあらわになった白い綺麗な肩を揺らすと、ヒーロー夫人は「う……うっ……」と唸りながら起きた。

そして僕を見て、こう言う。

「何で帰ってきたんだいあんた。徳永切裂を殺しに行くんじゃないのかい。ああ返り討ちにあったのかい。それなら納得だね。なんだい、じゃあ今のあんたは幽霊か。暗闇の空間の奴らに寝返るつたのかい。はんっ。じゃあ今からあんたは私の敵だ。銃を抜け、栄作！」

「どうしたんですかヒーロー夫人！」

高梨君が尋常じゃないくらい驚いていたのだけど、それも仕方がないといえば仕方がなかった。何故なら、言いながらヒーロー夫人は「銃はどこだ」と着物を脱ぎ始めたからだ。

「……何で？」

何これ。

どういう状況？

「ボーっとしてないで佐藤さんもヒーロー夫人を抑えるの手伝ってください！　ってうわっ、酒臭っ！」

言われてヒーロー夫人の左腕を抑える。うーうー唸って僕の方角にがんつけしてくるヒーロー夫人の口からはアルコールの臭いしかなかった。言われてみれば確かに、ヒーロー夫人は酔っている。表情は普段通り冷静で肌も若々しいのに、口からはアルコールの臭いとおかしな言葉が飛び出してくる。この人……酔ってもそんなに外見が変わらない人なのか。

……ってあれ？

何で、ヒーロー夫人が酔っているんだ？

「何なんだいもう……心配かけて……あんたに死なれてもらっちゃ困るんだよ……前までは邪魔だったから死ねとか思っていたけどね……今じゃ私はあんたを死なせたいなんて思わないっ」

僕がそう思った矢先、いきなり酒臭いヒーロー夫人が着物がくずれて下着のような包帯が巻かれた中途半端な大きさの胸で僕に飛び掛かってきた。

「うわっ、ちょ、ちょっとヒーロー夫人」

慌てて振り払おうとするも、「栄作ー、馬鹿ヤロー」と言いなが

ら離れようとしなかった。というよりヒーロー夫人の力が純粹に強い。こんなの離そうにも離せられないって。

「……どうやらヒーロー夫人、朝からビール飲んで酔い潰れてたらしいですね」

そう言う高梨君の右の人差し指は、カウンターの裏を指していた。

「ほら、見てくださいよ」

「……成る程」

そこには、大量の缶ビールが落ちていた。当然中身は空だ。ありすぎて足の踏み場がない。

そうか……ヒーロー夫人はこんなになるまで僕を心配してくれたのか……。高梨君にしたってそうだ。エレベーターの前で、僕を笑顔で待っていてくれた。

僕はやっぱり、いろんな人に迷惑をかけて生きている。僕が復讐者だろうと関係ない。人は、生きていればそれがどんな人間でも他人に迷惑をかけて生きているんだ。

だから僕は、謝るんだろう。

だからこそ、僕は謝れるんだろう。

人との関わりを持っていないと、迷惑をかけるどころか、謝ることすら出来やしない。でもそれは逆に、人との関わりを持っているから出来ることなんだ。

『私の知ってる奴はね、謝ったことがほとんどないのよ』

叶さんは、その生き方を凄いと語っていた。

だけどそれは、人との繋がりがあまりないってことじゃないだろうか。

もしくは、その誰だか知らない叶さんの知り合いが、何処かで壁をつくっているからかもしれない。

とにもかくにも、叶さんはああ言っていたが、僕は人に謝る人生も別に悪くはないと思う。

だから、こう言おう。

徳永切裂のことが終わる前の　とりあえずの和解の言葉を。

「勝手なことばかり言つて、すいませんでした、ヒーロー夫人」
「……栄作！」

なんかこのやり取りデジャブっぽいな……と思つたら、やっぱりヒーロー夫人は僕を押し倒してきた。そしてなんと、そのまま僕の胸の上に頭を乗せて寝てしまふ。

「……抱かれてばかりだなあ、今日の僕」

こう呟くと、今までのヒーロー夫人の一挙一動にあわあわと慌てふためいていた高梨君が「えっ！」とこれまた大きな声で驚いた。

「抱かれまくりなんですか佐藤さん！ マジですか！ あの叶つて人だけじゃなく！ どんだけヤツてんですか！」

「どんだけも何だけでもやつてませんよ！」

もう一度慌てふためく高梨君と、「栄作ー、えっえ栄作ー」と奇妙なテンポを小刻みにつけて盛大にキヤラを壊しているヒーロー夫人を見ながら僕は、フウ、と安息の溜め息をついた。

あー、平和だなー……と、素直にそう思った。

酔い潰れたヒーロー夫人の服をととのえて寝袋に入れて寝かしつけ（和服姿の極道の妻が寝袋に入るシユールなシーンがこうして実現した。顔だけ見れるのがまたこう、一味出している）、僕と高梨君は一晚中語り合った。まあ高梨君からの嫁自慢ばかりだったが、それも楽しめた。

そして翌日の朝。早朝の射的訓練をするとヒーロー夫人が目覚まし、寝袋に入った自分の状態を見て、「何だいこれは」と僕の方を睨みつけてきた。一旦射撃を止め、「おはようございますヒーロー夫人」と挨拶した。

「おはようございますじゃないよ。何だいこれはって聞いているんだ」

「あまり動かない方がいいですよ。青い大きな人面ミミズがうねうね動いてるみたいに見えます」

「……へえ。あんた、私をミミズだと。いい度胸してるね。いいだろう。ミミズは土の龍と呼ばれてる存在なんだ。あんたを食つてや

るよ」

「流石のヒーロー夫人でも無理ですよそれは」

「まあね」

顔の部分から、よつと右腕を無理矢理出し、寝袋を開けると、ヒーロー夫人は着物をととのえ、何ごともなかったように腕を組んで僕に近付いてきた。

「あんた、何しに帰ってきたんだい？ 徳永切裂はどうした？ 殺せたのかい？ 捜し出せたのかい？ 見つけられたのかい？」

「どんだん達成出来るレベルが低くなってきてるんですけど」

「どうなんだい？ それともまさか、私にあんなにたんかきつておいて何もなしで帰ってきたのかい？」

僕の指摘など丸まる聞かずに話を持ち出してくるヒーロー夫人。どうやら二日酔いはしない体質らしい。確実に二桁はあつた缶ビールを飲んでおいて凄まじいな、この人。

ヒーロー夫人の後ろに高梨君が見えた。高梨君の顔は笑っていたので、気分がほぐれた。

僕は鋭い眼光を浴びせてくるヒーロー夫人に向かって言った。

「何もない訳ないですよ。ちゃんと収穫はあります」

「ほう。何だい。言っでごらん」

「復讐が終わった後、生きる目的を見つけました」

「……………へえ」

僕の言葉を聞くと一瞬目を見張ったヒーロー夫人だったが、ゴホンと一つ咳ばらいをして自分を落ち着かせ、僕の目を真っ直ぐ見る。そして僕に、こんなことを言ってくれた。

「やったじゃないか、栄作。そんなことを言われちゃあ、私もこれ以上怒る訳にはいかないね」

そうして。

ヒーロー夫人は、初めて見る笑顔で、僕にこう言った。

「おかえり、栄作」

その笑顔は、正直反則じゃないかなと思うくらい輝いていた。

「暗闇の空間って何ですか？」

それから射的訓練を終わらせ、準備中の札をカウンターに乗せたままヒーロー夫人は『僕のいじられた記憶が戻りつつある』という話しをしてくれた。僕達三人は店の真ん中のテーブルの椅子に腰をかけて座っている。現在八時。いつもならもう地下の人達が来てもいい時間帯なのに、一向に来る気配がない。この準備中の札の効力が凄いのだろう。仕組みはよくわからないけれど。

「暗闇の空間ってというのはこの地下をつくってくれたヒーロー直属の科学者集団のことなんです。彼らのおかげで俺達地下の住人は、安心して過ごせるんですよ」

言いながら高梨君は天をおおぎながら惚れ惚れとした表情になった。リアクションがオーバーだなあと思ったいると、ヒーロー夫人さえもうんうんと頷いていたので、その暗闇の空間という団体がどんなに凄まじい存在なのかを認識することができた。

「何となく暗闇の空間っていうのが凄いのにはわかったんですけど、その凄い人達が僕の記憶をいじったってどういう意味なんですか？」するとヒーロー夫人は「文字通りの意味さ」と暗い表情で僕に返した。高梨君も少し表情を暗くする。

「残念ながら、十五年前の夫の平和活動以来、暗闇の空間の奴らとは音信不通になっちゃってねえ。夫も私も、血眼になって捜し出してる最中なんだ」

この街の何処かにはいると思うんだけどねえ、とボソツと呟くヒーロー夫人。その横で「俺もたまに外へ出て捜してるんです。今週末も遊園地に行って捜す予定です」と高梨君が言っていたけれど、にこやかな表情から察するにどうせ奥さんとデートだろう。いいなあ、佐藤さん。素直にそう思う。

でも待ってくれ。

その科学者集団がどうして僕の記憶をいじろうとしたんだろう？
「わからないよ、そんなの」

僕の疑問を悟ったかのようにヒーロー夫人はスラスラと答えた。

「ただわかるのは人街審査の時に何かされたのは間違いないってことだけだね。昔の話だけど、暗闇の空間が記憶操作に成功したって聞いたことがある。元々ある記憶を変更したり、誰かから記憶を抜き取ったり　これはどうやら失敗だったらしいよ。肉体の無い人間からなら抜き取るだけじゃなくてコピーして、更にその記憶を変更した上で植え込むことなんかが出来たらしい。まあ記憶操作なんて要は欠陥品らしくてね。この先どんなに技術を積んでも完全に記憶を変更したままにしておくのは無理なんだってさ。徐々に……ゆつくりと戻ってくのさ……元の記憶にね」

「……そういうことだったんですか」
言われて見れば納得出来た。

つまり僕は、あくまでも推測だけど　無理矢理この街に侵入したことと　何故だかわからないが同僚の存在を忘れさせられた。その上で僕はヒーローがいるのに平和な街に入ったんだ。

そして、僕は記憶が戻ってきている。

「なんか怖いですねそれ……。佐藤さんはもう忘れてることって何もないですよね？」

「いえ。まだ忘れてることがあります」

心配な表情で問い掛けてくる高梨君に、同様に残念な返答しかできない僕が悔しい。

「病気で死んでいった同僚の姿と名前です。昔は背中越しでも識別出来た同僚を、僕は未だに忘れています」

いや……言っていて気がついたがそうじゃないかもしれない。

もしかしたら、他にも何か忘れてる記憶があるかもしれない。いじられた記憶があるかもしれない。けれど、それを確かめる手段はないし、確認しようがない。

「……そうかい」

すっかり意気消沈して俯いた僕なの頭を、ポンポンと叩いてきた。「大丈夫さ。今はない記憶でも、思い出せる。心配することはないよ」

「……そうですか？」

「ああ。そうさ。あんたは何も心配することはない」

そこまでヒーロー夫人が言ってくれた時、カウンターの奥にある電話が鳴った。「ちよつと待っていてくれ」と言い、ヒーロー夫人がその場を離れる。

そして三分間。高梨君と僕が朝食のトーストの用意をしようとしたところ、「何だつて！ わかった！ 今伝えておくよ！」というヒーロー夫人の喚き声が酒場を響かせた。何なんだろう……また大喧嘩かな……なら大歓迎だなあ……と思いついて待っていると、ヒーロー夫人は「栄作！」と僕の名前を言いながら大急ぎで僕の近くに寄ってきた。

「ど、どうしたんですかヒーロー夫人」

素直に僕が感想を漏らすと、ヒーロー夫人は「どうしたもこうしたもないよ！」と叫び、こう言った。

「徳永切裂の奴が夫に果たし状を送りつけてきたらしいんだ！ 場所が地下への出入口の近くにある公園！ 今週の土曜日の午後三時！ あんた……その時、徳永切裂に会いな！」

その後、約五日間。僕は猛特訓をした。銃の動きは勿論のこと、昼間は働き続け、動きに動いて体力を出来るだけつけた。あとは徳永切裂の前に立った時に冷静でいられるかどうかが問題だったけど、大丈夫そうだった。

何故なら、僕には今、未来があるから。

「……おはようございます」

土曜日の朝七時。いつもより少し遅く起きた僕は、ヒーロー夫人

しかないことに驚いた。

「あれ？ 高梨君はどこに行っただんですか？」

「あいつは今、遊園地に向かっているよ。「佐藤さんの邪魔はしたくない」ってさ」

「……出来れば見送って欲しかったんですけどね。頼りになりますし」

「まあ、その気持ちもわからなくはないよ」

それから僕とヒーロー夫人は喋りあった。今までのことを振り返ったり、時々もつと過去のことを喋ったり。これからの遠い未来のこと、僕達は過去と未来を繋ぐために囲碁をうつんだというようなマニアックな話もした。昼食はオムライス。ヒーロー夫人が作ってくれたオムライスは、温かくて美味しかった。

そしてあつという間に午後二時五十五分が過ぎた。

「ついに……だね、栄作」

「ええ。あの……本当に復讐しに行つて大丈夫なんですか？」

「ああ。今まで私はあんたが復讐し終わった時、野垂れ死ぬってわかってたから止めてただけだよ。他にも理由はあるっちゃあるけど

……私はあんたの味方だ。全面的に応援する」

「……ありがとうございます」

「礼を言うのはまだ早いよ。礼を言うのは徳永切裂に復讐してからさ」

……何だか、こうしてヒーロー夫人と話していると感慨深い気持ちになつてきた。

これまで、色んなことで迷惑をかけてきた。意味のないことで怒鳴ったり、訳のわからないところで叫んだり。でもその度に、ヒーロー夫人は僕を手助けしてくれた。

ヒーロー夫人。高梨君。地下の皆。叶さん。

僕は亜希子と父さんと母さんの復讐の為に　そして皆に謝る為に、徳永切裂と対峙しよう。

「今日の暗号は『何かいいことでもあったのかい』だよ。行ってき

な、栄作」

パイプをふかしながら、ヒーロー夫人は微笑を浮かべて僕を見送ってくれる。

「何かいいことでもあったのかい」

扉が開くと中に入り、振り返り、ヒーロー夫人の顔を頭に刻み込みながらしつかり見た。扉が閉じ、ヒーロー夫人の顔が見えなくなる。上へと移動する中、僕は考えた。

……何かいいことでもあったのかい、か。

その問いに肯定出来るよう、頑張ろう。時計を見たらちようど午後三時だった。

やがて頂上につき、エレベーターの扉が開く。降りて、僕はゆっくりと右にある公園を見た。スローモーションになったように感じる。胸の鼓動が激しい。服のあちこちに隠してある拳銃と銃弾が零れ落ちないか心配になった程だ。

そして僕は見た。

連続殺人犯徳永切裂の姿を。

ヒーローがいるのに平和な街

ヒーローがいるのに平和な街の裏

「初めましてだな。私を殺す権利を持つ者よ」

ヒーローがいるのに平和な街の表

「アハハハハ！ わーいわーい、私を追っかけて来てくれたんだ！」

ヒーローがいるのに平和な街の裏

「ああ……やっと会えた……だから僕に殺されてくれ……徳永切裂」

ヒーローがいるのに平和な街の表

「アハアハうるせえよ！ あゆみをとつと返せや、叶！」

暗闇の空間

「嫌だ」

とうとうここまでやって参りました。いやー、長かったです。本当に長い間、前兆を観ていただきありがとうございます。ですが、まあこの長い時間を使ったおかげで私たち暗闇の空間の苦勞を、この物語を通じてわかっていただけたかと思えます。そうです。そうなんです。私たちは、ずっとずっと前からこの日の為に様々な準備をしてきたのです。

刀銃という奇怪な育ちと名前をしている子供を見つけ出し、その子供を観察対象においた上でヒーローがいるのに平和な街で生活をさせ……整形して田中雄二そっくりの外見にさせたり。時期が来たと同時に死んで情報成分とだけなった田中雄二と、実験の段階でいじらせてもらった徳永切裂の情報を通い遠い国から奪い取り、それを更にいじり無理矢理刀銃の中に入れたり。そのおかげで刀銃は徳永切裂の殺人術と田中雄二の銃操作能力……田中雄二の肉体に近い運動能力と、刀銃としての温和な性格を持ち合る一般人になりまし

た。何ですかねこのクオリティ。私は平成ライダーが好きなのが。

そして、佐藤栄作という復讐に燃える若き警察官を利用する為、入街の段階で記憶をいじり、田中雄二に似た刀銃の存在に気付かないように仕様。更にこの街の地下で生活をさせ、叶香里という佐藤栄作の殺された彼女に似た人物に会わせました。

皆さん方がこれだけの仕事をして凄いと私たち暗闇の空間を褒めてくださることでしょう。ええ、いいんです。全く不満はありませんよ。私なんてただここで解説してるだけで、実際には何の処置も施していませんから。苦労なんてこれっぱつちもありませんので、私は褒められて幸せです。

ですが、私たちが行った演出は、これだけではないのです。そうです。皆さんご存じかと思えます。というよりここまでの話を聞いてあの人物のイレギュラーさに気付かない人はいらっしやらないでしょう。すいません。あの人物の変化を懇切丁寧に語ってくれる主人公は、誰一人いなかったの。

そう。叶香里です。

平和な街に住む変態。刀銃の最初の友人。ですが徳永切裂の記憶の中で快樂殺人犯の幽霊という半端じゃない立ち位置のキャラになり、その上佐藤栄作の恋人の姿に瓜二つという彼女。

叶香里。

彼女の説明を、していません。

しかし、まだこの段階では何もいうことがありません。何故ならそれは、この先の展開のネタバレになるからです。これから先の展開上、彼女の説明を根掘り葉掘りした直後、皆さんは私につかみかかってくださることでしょう。いやこれ本当なんですよ。信じてください。いえ……職務怠慢ではないです……はい……すいません……二度とアンキパンを使って演説の内容を覚えようとはしません……は

い…………あの……………すいませんでした……………。

えー、ゴホン。それでは気を取り直して、参りましょう。

今までの私たちの努力の結晶をとくところご覧ください。

ヒーローがいるのに平和な街。いよいよクライマックスです。

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

それじゃ、最後の仕上げよろしくね、セバスチャン。

……………
…ってあれ？

これまだ、回線切れてないんじゃない？

え、嘘。あ、ちょっと皆さん、待ってください

ヒーローがいるのに平和な街の裏 十一

「それでは、そちらは任せた」

徳永切裂は『上空に居る何か』に向かつてそんなことを言っていたけど、今の僕にはそんなどうでもいいことに関わっている暇はなかった。

目の前に広がるのは、復讐の対象だけ。

「……死ね」

一言だけ呟くと、僕は首の部分から服の中へ手を突っ込み ヒーロー夫人から貸して貰ったどんな物にも引っ付くガムテープとやらで五丁隠してある拳銃の内一つを右手に取った。ガムテープが引っ付いたままだけど、気にしない。

深呼吸をして、依然立ち尽くした状態の徳永切裂へと銃口を向ける。焦るな。動揺するな。出来るだけ、殺意を抑える。しっかりと両手でグリップを握り、右の人差し指を引き金に持つていく。

「ほう、銃か。ならやはり、君は私を殺す権利を持ち過ぎと表現してもいい程、持っている。……だがしかし、今の私には君だけを相手にしている暇はないのだよ」

僕は。

この徳永切裂という男をどこかで舐めていたのだろう。ヒーロー夫人からもお墨付きをもらい、今まで散々特訓をしてきた。

だから、僕はもう既に徳永切裂を殺せると思い込んでいた。

だけど、それは愚かな杞憂に過ぎなかったと一瞬にして思わされる程 徳永切裂が纏った冷徹な殺意は僕の体を恐怖で包んだ。思わず、引き金に置いた人差し指が離れる。それどころか、銃を持つ手が震えてきた。気のせいかどうかかわからないけど、汗が額から流れてきたように感じられる。

駄目だ。

この男は、駄目だ。

復讐の対象とか。

殺さなければとか。

そんな次元じゃない。

何だ……この、世の中全てに見切りをつけて、それでもその上僕の目の前で佇んでいるような、この憎むべき連続殺人犯は。

徳永切裂は。

間違いなく、関わってはいけない人物だ。

「う……うわああっ！」

だけど、だからと言って何もしない訳にはいかない。

堪らずに、僕は渾身の力を込めて無理矢理引き金を引いた。狙いも何も無い、粗い銃弾だったけど、奇跡か偶然か 徳永切裂へと向かったのが一瞬だけ見えた。

そう、一瞬だけ。一瞬だけしか見えていない。放たれた銃弾なんて有り得ない速さの物を、普通の人間が判別出来る筈がない。

普通の人間なら、だ。

「……………」

徳永切裂は、僕が引き金を引くのとほぼ同時に、青いジーンパンの上にベルトで固定してある 刀 を、鞘をそのままにして右手でスラリと抜いた。

抜いて、その刀身を消した。

消えたじゃなくて、消した。

それを見た時、僕は何が起こったのかわからなかった。僕が撃った銃弾の行方も、徳永切裂が一体全体何をしたのかも。

「……………え？」

突然だった。

徳永切裂の元に刀が戻った時、突然、『パン』という乾いた音が公園に響いた。

僕はその音が 徳永切裂が何をしたのかという答えに結び付く音が 信じられなかった。

僕が撃った銃弾が、徳永切裂の体に傷を付けていなかった。

「何……だよ……それ……」

徳永切裂は、涼んだ顔で軽く、銃弾を弾き返した。
どこのモドラド少女のストーカーだよ。

そんなろくでもない感想を、嫌が応にも抱かされる。

「それでおしまいか？」

呆然として立ち尽くす僕に、徳永切裂はそう尋ねた。

「……そんな訳、ないだろ」

それでおしまいか？

そんなことをお前なんかと言われるまでもない。思い出した。徳永切裂は、あの同僚 田中雄二と同等の力を持つていたんだった。昔から全く歯が立たなかった、あの同僚と同等の力を、徳永切裂は持っている。

僕は、覚悟は決めた筈だろう？

だったらもうなりふり構っていられない。

「徳永切裂……頼むから、僕の前から消えてくれ。存在を消してくれ。そこに居たという痕跡を消してくれ。頼むから……僕に殺させてくれ」

僕はこう呟くと、左手を服の中にもう一度突っ込んだ。二丁目の拳銃を、徳永切裂に向けて構える。

二丁拳銃。

僕が徳永切裂に対抗する為に考えた、射撃の手数を増やす苦肉の策。

欠点は ヒーロー夫人や高梨君と共にやった射撃訓練が、全く意味を成さなくなること。当然といえば当然だ。両手で構えられない分、撃った後の衝撃は一丁の時のそれと比べようがない程激しくなる。自然、照準だつてぶれる。

しかし、徳永切裂は単調な銃弾を回避することが出来る。だったらもう狙いだとか照準だとか、そんな次元の話をして四の五の言ってる場合じゃない。

手数を増やして、翻弄させるしかない。

だから、苦肉の策。

「二丁……か。面白いが、だからと言って私を追い詰められるとは限らないぞ」

「うるさい黙れ」

二発、徳永切裂に向けて撃った。何も考えずに撃った銃弾は、吸い込まれるように徳永切裂へ向かう筈……だった。

「その言葉、そっくりそのまま返すことにしよう。言っただろう？ 生憎私には、これ以上君の自己満足に付き合っている暇はないんだ」

今度は、徳永切裂の右腕ごと刀身が消えた。パァンと二回聞こえたその音は、僕に絶望を与えるには十分なものだった。

何だよ、これ。

銃を撃つても平然としてる奴を、僕はどうやったら殺すことが出来るんだ？

しかし、徳永切裂は僕にこの疑問を解消させる時間を与えてはくれなかった。立ち尽くしていた徳永切裂が、フラリと動き出す。

そして、走り出した。

「な……待て！」

「待たない」

僕は両手に握られている銃をもう一度構えて、僕に近づいてくる徳永切裂を撃ち抜こうとする。だけど、徳永切裂の右腕が消えたと思った瞬間、僕は自分の反射神経と勘を全開にして、体を回避の状態に移した。

「……ッ！」

何故かはわからないけど僕の危機感が全力で避けろという。横に倒れると、近くから風が通る音がした。何の音だと思った瞬間、突然後ろから大きな音がする。

そこには、家があった。

二階建ての一軒家が……あった筈だ。

あった筈なのに、それが一瞬にして木片の残骸と化した。

「あそこではない、か。まあいい。まだ時間はある」

徳永切裂はいつの間にか僕の横を走り去り、車道に出ていた。そして、右腕と繋がる刀を消しまくりに、その時間が長いと思えば思う程、右と左に連なっている一軒家が崩れていった。

「何だよ……何なんだよお前は！」

僕は、叫びながら立ち上がり、徳永切裂の背中を全力で追った。体が重い。そういえば僕の体には残り三丁拳銃が張り付いている。何馬鹿なことをやってるんだ、僕は。二丁でも駄目なんだ。だって控えなんて持っただけだ。でも邪魔になるだけだろう。

三丁。体から思いつ切り引きはがすと、僕はそれらを公園に投げ捨てた。

ヒーローがいるのに平和な街の表？

「それでは、そちらは任せた」

「オツケーオツケー任せといて！。徳永は栄作をお願いねー」

そんな会話を徳永切裂とすると、叶はあゆみを抱えたまま俺の方を向いた。

……つて、おいおい待てよ、叶。

お前、何で徳永切裂と話しなんてしてるんだ？

「だからさ、言ってるじゃん。え？ あれ？ 言ってなかったっけ？ まあいつか。とにかくさ、私も刀銃と一緒に徳永の変えられた記憶を入れられた実験体なのよ。だから私はあゆみちゃんを眠らせて、あゆみちゃんを人質にして、刀銃をおびき寄せるのさー」

「意味わかんねーよ」

「別にわかってもらわなくてもいいよ。ていうか……わかってもらったら困るからさ」

叶はそう言うと、俺の目の前の土管の上にスムーズな動きで降り立った。冷たい目をしながら、それでも口だけは笑って俺を見る。何だよ、その目。俺はお前のそんな目なんか、知らないぞ。

大学に居た時、一人で何も考えずに机に座っていた俺。喋る相手は若さを恨むおかしなグラマー先生しかいない。サークルも何もかもめんどくさかくて入らなかつた俺が悪いのは間違いない。だけれど、誰とも喋れない状況程キツイものはなかつた。

そんな孤独を味わって噛み締めなければいけない状況の中。

俺の目の前であゆみを誘拐した叶は、話しかけてくれた。

「そんなお前が、何であゆみを誘拐なんかするんだ？」

俺が再度こう聞くと、叶は「くどいよ。うるさい男は嫌われるつてよく言うから黙ろうよ」と言い、ゆっくりと俺に近づいてきた。

『パァン』という銃声が聞こえたには聞こえたが、生憎と俺には構っていられる精神的余裕がなかつた。

俺の目と鼻の先まで来た叶は、静かな鼻息を俺に吹き掛けながらこう言う。

「ねえ刀銃。こんな話知ってるかな？ 昔々、ある所に一人の少女が居ました。彼女は昔っから自分がおかしな性癖を持っていることに気付いていましたが、それを周りに隠したまま生活していました。母親にも父親にも。兄弟にも姉妹にも。親友にも彼氏にも。誰にもばらさずに普通に生活していました。だけどそんな生活に嫌気がさした少女は、自分を変えることにしました。ではここで選択肢です。『自分』か『世界』、どっちを変えればいいでしょう？ 少女は片方を決意し、それをある人に伝えようと思いました」

「……………」

一気にそこまで喋った叶。よくわからない話だったが、今話すということは叶にとつて、そして俺にとつて重要な話なんだろう。

「……………続きは？」

「続きはヒ、ミ、ツ。少女が誰なのかも、この話が本当にあつた話なのかも、事実とどれだけ近い話なのかも、私がこの先続きを言うのかも、全部ヒミツ。ヒミツ主義の女の子。それが私、叶香里なんだよ」

言つと叶は、俺の目の前から遠ざかり、再び上空へとあがつていった。

その間、俺は何もしなかった。ただただ、浮かぶ叶をじつと見ていた。叶が「あれ？ 刀銃ってば私の運動着に見惚れてるの？」と言つくらい、俺は叶と叶に捕らえられているあゆみを見ていた。

「……………なあ、叶」

「なあに？」

さつきと反面、とぼけた笑顔で返す叶を見ながら、俺はぼんやりと思ひ悩んでいた。

やっぱりさ。俺、信じられねーんだよ。お前があゆみを何の理由も無しに誘拐するなんて。昔から金、金、言つてたお前だけだよ、だからって『お姉様』とか言つて親しんでいたあゆみを誘拐するな

「徳永切裂の奴……家なんか壊して何を企んでるんだ……？」
あれは、徳永切裂の仕業だ。そう、俺の中の徳永切裂の記憶が告げている。

今の今、叶に向けて小さく放とうとした抜刀術を、徳永切裂は家に向けて大きく放ったんだ。

カマイタチ。

それは、徳永切裂が振る瞬間の刃から発生する風から生まれる自然現象だ。研ぎ澄まされた刃の斬っ先から放たれる研ぎ澄まされた風は、いかなる物をも切り裂く一閃の孤を描く。

徳永切裂。

自分にとつての『徳』の刃を永遠として切り裂く。

名前をそのまま具現化したカマイタチを、徳永切裂は何の躊躇いもなく使っていた。

ん？

……矛盾している。

何で徳永切裂は、今は殺人犯でも何でもないのに、誰かが居るかもしれない家を破壊出来るんだ？

「……って、待てよおい」

何で、銃声が響いているのに、平和な街の住民は誰も確認しに来ないんだ？

「盛大に無視してる所悪いけど、またまたんじゃね刀銃ー」

俺が疑問の重りの枷を何とかしようとしていたところを、叶の言葉がそれを止めた。気付くと叶は遥か高くへとあゆみと共に舞い上がっていた。街を囲む壁の高さ並の上空。見えるのは少量の点の塊となつてよく見えない叶の足だけ。

「何やってんだよ、俺は！」

我ながら馬鹿だと思つたが、後悔後先立たず。後悔後にも先にも佇むといつてもいい。あそこまでの高さに居てくれては、もつとうしようもない。

あゆみを傷付けずにカマイタチを起こそうにも、不可能に。

銃で叶を狙おうにも、不安要素が俄然として残る。

「畜生がっ……！」

馬鹿だ。俺は馬鹿だ。何としてでも二人を助けなければならぬのに、こんなどうしようもない所でヘマをした。上空の叶は電車の駅に送ってくれたセバスチャンさんの運転するリムジンくらいの速さで、左に移動する。

いやがおうにも俺は走り始めた。走れ。走れ、俺。トイレが近くにある出口とは違う出口から公園を出て、二階建ての一軒家の屋根の上にギリギリ叶の姿が見える線上で俺はその後を追った。

しかし、どんとどんとどんと着実に着々と叶は遠ざかっていく。ヒーローを追い掛けていた以前は田中雄二を模した自分の体のこともわかっていなかったが、今の俺には田中雄二に近い身体能力がある。

だが、それでも全く追い付かない。追い付く気配すらない。

「あゆみ……叶……クソっ……速く動けよ俺の足っ！」

叫んでも速さは変わらない。俺はそのまま走り続けようとした。間に合わなくなるなんて有り得ない。有り得ないなら、有り得ないなりに努力するしかない。

けれど、届かない。

いくら走っても遠ざかる。

そんな絶望の淵に。

「依頼主、ヒーロー。運び方法、リムジン。運ぶ対象は、刀銃。運び先は、叶香里」

知らない男の人の声と　セバスチャンさんが運転していたリムジンが動く音が聞こえた。リムジンが走り続ける俺の左横を、並行して走る。

「へい兄ちゃん。乗ってくかい？」

窓から身を乗り出して声をかけてきたのは、遊園地の中、あゆみ

が拾った財布を受け取っていたチャライ不良風の人だった。

「……これは俺の問題ですんで、お気遣いなく」

「んなこと言ったってよ、あんなスピード出す幽霊っ娘になんか追いつく訳ねーぜ？ それなのにお前は走るのかってんだ」

「叶とあゆみが、待ってるのは、俺ですから」

「本末転倒だぜ、それって。運び屋として、そんな甘えはいただけねーな」

リムジンを運転しながらそう言う男性。俺はピタリと立ち止まり、男性の顔を見た。

「……ヒーローは何て言っていましたか？」

「ヒーローはこう言ってたぜ。「刀銃君をよろしく頼むよ。あの勢いじゃきつと、自分で全部背負っちゃうからさ、高梨君がサポートしてくれ」ってよ。まさしくその通りだな、ハハッ」

「……………」

全部お見通しして訳かよ、ヒーロー……やっぱり俺はまだまだだな。もしヒーローがこの人を迎えに来させなかったら、俺は叶を見失っていた。上空の先の先に、叶の姿が微かに見える。

今なら、まだ追い掛けられる。

だけでもそれは、俺の力だけじゃ果たされない。ここまででもそうだ。ヒーローやセバスチャンさんの助けを借りなければ、辿り着かなかった。

「よろしく、お願いします」

腹を括って後部座席に乗り込む俺を見た男性は、「ハハッ」と軽く爽やかに笑って前を見た。

「さーて、準備は整ったな！俺の名前は高梨和也！俺もあの子には借りがあるからな！運び屋の名にかけて例え地の果て山の果て、全力で運ばせてもらう！」

「ここも違うか。ここも、違う」

徳永切裂は僕に背中を見せた状態のまま、走りながら建物という建物を全力で斬っていた。原理はわからないけれど、どうやらあの刀の延長上にある全ての物という物を斬れるらしい。

あれが、同僚から聞いていたカマイタチか。

あんな化け物と、対等に渡り合っていたのか、同僚は。

スパスパと、面白いように斬れると思ったたら直ぐに家が崩れていく。僕も走りながら撃っているけど、全く血を流さない徳永切裂の背中を見る限り、どうやら徳永切裂は消え続ける刀身を銃弾にも向けているようだった。

後ろを全く振り返らずに、銃声だけで斬るかどうかを判断している。左腕をろくに使えない状態でこれだ。徳永切裂は本当に人間なのか？

考えて、僕は気付いた。

何、甘いこと言っているんだ僕は。

こいつは僕の父さんと母さんと亜希子を殺した憎むべき悪だろう。それを何だ？ 『人間』か？ 平和ボケも大概にしてくれ、僕。

徳永切裂は、死んでもいいクズだ。

「ふんがっ、ふっ、ふっ、ふっ、ふっ！」

徳永切裂以外は何も考えない。それを僕は忘れていた。

徳永切裂が建物を壊す目的？ 知らないよそんなの。

カマイタチ？ 下らない。避ければいいだけの話した。

今の速さで徳永切裂には追い付いているんだ。案外徳永切裂は速い方じゃないのかもしれない。それが、朝から夜にかけてオーダーを聞いて走り回っていた僕が速いのか。何にせよ、さっきまでの自信喪失の状態であの速さを出せたんだ。

だったら話は簡単だ。

徳永切裂への恐怖なんて復讐心で覆い隠して、限界を 肉体の限界を超えればいい。

気合いを入れて走ると、僕は徳永切裂にどんどん近づいて行くことに成功した。距離が狭まるのは好都合だ。それだけ、徳永切裂と銃弾が届く距離が近づいていく。そうすれば、徳永切裂も流石に余裕は見せられない。

「……ほう。速いな」

前を向いて建物を壊し続けているのに、僕が徐々に近づいているのに何故だか気付いた徳永切裂は、呟き、そして走るのは止めないでピタリと腕を『見える』ようにした。

「何の真似だ」

「何の真似でも何もない。ただ単純に、君を私の敵だと少しだけ認めただけだ。近づいてもらっては困るからな。少し……ほんの少しだけ君を牽制することにしよう」

言うと徳永切裂は 刀だけをその場に残して姿を消し そし
て一瞬で刀を掴んで姿を現わした。

何をしたか、わからなかった。何をしたのか理解しなくなかったといってもそんなに変わらないと思うけど、あえて言わせて欲しい。
「徳永切裂……お前は……お前はどれだけ……っ！」

僕の目の前には。

徳永切裂が壊した残骸の大小様々なコンクリートが、僕を目掛けて迫ってきていた。

あの一瞬で。徳永切裂が刀だけを残して消えたあの一瞬だけで、徳永切裂は今までの速さとは比べるのも馬鹿らしい程超絶に速いスピードで残骸に近づき、右手だけであの大きなコンクリートを持って投げ付けたんだ。

「刀を振りながらでは亀の様にしか走れないが……刀を一瞬だけ宙に浮かべれば虎など簡単に追い抜かせる」

徳永切裂が僕の方を振り向かずになんか言っていたけど、今はコンクリートの対処に気が入っていた。

数は三個。

僕から見ていびつな円形を平面にしながら近づいてくる二人分くらいの大きさの断面が徳永切裂の左から。

角が六つばらばらに出来上がっている僕くらいの大きさの塊が徳永切裂の右から。

完全に三角形になっていて、その先端を僕に向けて襲うコンクリートが徳永切裂の頭上から。

徳永切裂は、その三つの真ん中で刀を振り続けていた。

一つ一つの速さは徳永切裂に比べたら遅いが、一つ一つの微妙なタイムラグが厄介だった。それでも対処するしかない。

風を纏いながら僕に突進してくる徳永切裂の攻撃の内、まず左の塊を対処する。大きな物程ぐらつきやすい。現在、リボルバーにはそれぞれ二発ずつしか入っていない。銃を二丁、まずは宙に浮かべて維持させ、直ぐさまポケットに両手をつ込み八個の銃弾を取り出す。瞬間的にリボルバーを開き、そしてグリップをちゃんと握りながら一つ一つ銃弾を入れた。その間、コンクリートが近づいて来ていたけど、地下の人が教えてくれたこの技のおかげで少ししか時間がかからなかったらしい。そこまで近づいていなかったことに驚いた。

右の銃を三発、左の銃を三発それぞれ撃って、左の巨大な塊の右上の頂点に集中して撃つ。ガンガンと弾と平面がぶつかった音がし、少しではあるけれど左に傾けさせ、尚且つ遅くさせることに成功した。

次に右の銃を二発、左の銃を二発撃って、造るのに失敗したような形の大きなブロックに弾かせた。今度は先刻と違ってバラバラにただし全体的に撃ったので勢いが殺され、僕に襲いかかる速さが抑えられた。

最後に左の銃を一発撃って三角の先端に直撃させる。先端が尖っているせいで衝撃が後ろ方向の辺に伝わり、これは簡単に動きを押しさえ込むことが出来た。

そして、それぞれ一様に、少しだけ遅くなって保持された中央の徳永切裂の背中へと繋がる入口が確保される。

「う、お、お、おおおお！」

そこを、全速力で駆け抜けた。

頭を両腕で庇いながら倒れ込む。ぐるぐると回転する僕の体が止まるとほぼ同時に、三つのコンクリートが地面にたたき付けられる音がまばらにした。

「……よしっ！」

徳永切裂の攻撃を、初めて避けることが出来た。というかあれが初めての徳永切裂からの攻撃だったんだ……徳永切裂は、常に背中を見せていたから、攻撃も何もなかった。

しかし、僕は初めての攻撃をかわし切った。イケル。大丈夫。僕ならやれる。例え、息がもう切れそうな状態でも、僕はやり切らなければならぬ。

改めていきり立った僕は、立ち上がると異変に気付いた。

気付くのが、遅すぎた。

三つのコンクリートをかわした直後、そのコンクリートが地面に激突する音しか聞こえなかった段階で気付くべきだったのかもしれない。

僕がその時見たのは。

周りの建物が全て壊された先にいる　遠くにおいてももう全くと言っていい程見えなくなっている徳永切裂の後ろ姿だった。

「……………え？」

待って、くれ。もう僕の体力は限界に近い。あそこまで離れてしまった徳永切裂に近づくのは、至難の技になってしまっている。

あんなに遠くじゃ銃なんて撃つても撃たなくても同じだ。

近づけない。

傷つけられない。

そんな状態で、どうやって徳永切裂を殺せるんだ？

ヒーローがいるのに平和な街の裏 十二(後書き)

アクションは難しい……

ヒーローがいるのに平和な街の表？

「ヒーローは今、地下に居るぜ。てか街の全員なんだがな」

高梨さんというらしいチャライ男の人は、叶を横目に車を走らせ追い掛けながら、現在の街の状況を俺に教えてくれた。

高梨さんいわく 今日朝早く、街全体に緊急避難警報が発令された。それを知った地上に住む街の人達は、急いで地下へと移動した。

緊急避難警報。

それは、この街が一時平和じゃなくなる報せだ。

時間はそんなにかからなかったらしい。地下へ繋がる入口は、いかなる場所にもあるんだとか。エレベーターには必ず入口は付けられているし、どうやら仮設トイレなんかにも造られているんだとか。トイレで。どんなシュールな図だよ。それだけならまだしも、「地下へ行く為にはウォーターメロンってえ叫ばなきゃなんねーんだけどよ、いかすだろ？ これよお？」と高梨さんが言った時には絶句した。

それに何よりも、セバスチャンさんの瞬間移動の装置がある。これで避難が滞る筈が無かったという訳だ。

ヒーローは全員を避難させたと思って安心しきり、そして俺を安心させる為わざとテレビの話をしたら、俺が何故だか避難していなかったことを知った。しかもそれだけならまだしも、あゆみが叶に誘拐されたというバッドニュース付きでだ。当然焦ったヒーローだったが、セバスチャンさんに概ね伝えると、セバスチャンさんは俺の助けになるようなものを送ってきた。

それが、刀と銃だったんだ。

しかしそれでも俺は止まらず、遂には緊急避難警報の元である徳永切裂が居る叶へと再興してしまった。いよいよ焦りに焦ったヒーローだったが、街の人間が不安な中、ヒーローがその場を離れる訳

にはいかない。ごうを煮やしたヒーローは、高梨さんに 緊急手段として擁してある運び屋に頼み、俺を迎えに行かせた。リムジンが西山家だけにあったのは、全て高梨さんの為らしい。

つまりは、最終手段。

ヒーローがいるのに平和な街が、ヒーローがいるのに平和な街じやなくなつた時だけ使う、最後の車。

「まあ厳密に言うとなりの街から食糧やらなんやらを輸入する時にも使つてんだがよ、それもあの執事さんの瞬間移動装置さえ使えば一度にどれだけでも運べるから、俺は三ヶ月に一度外へ出るくらいにしか『こいつ』を使つてねーんだ」

そういいながらも、高梨さんの視線は、叶が居る青空へとしか向かつていなかつた。徳永切裂がどうやら暴走しているらしい。建物が崩れ落ちる大きな音がリムジンの中にも聞こえていた。てか凄すぎだろ徳永切裂。ビルまで切り刻むとかカマイタチ程度のレベルじゃ済まないぞ、あんなの。田中雄二と対峙した時なんかよりも格段に強くなつている。

色々あつて、ふっ切れたんだな、徳永切裂は。

まあそのおかげで上空を飛ぶ叶の姿が確認出来る訳だけでも。

しかしなあ……あんなの相手に、佐藤は復讐しようとしてる訳か。

叶に似た 亜希子ちゃんの為に。いや、亜希子ちゃんに似てる

叶か。よくわかんねーが、とにかくやり切つて欲しい。

俺も、あの二人を救つとかいう目的がある。

「頑張れよ、佐藤。俺も、頑張るからよ……」

「んん？ 何か言つたか？」

「いや、何でもないです」

「そうかよそうかよ。独り言はあんまりするもんじゃないぜ。言葉つてのは他人と意思伝達するためにつくられた代物だ。その言葉を自分に向けて言つてちゃ世話ねーからよ」

「……わかりました」

しかし……この高梨さんは一体何歳なんだろうか。振る舞いが何

となく年上っぽかったから思わず敬語を使っているが、正直外見は俺と同じくらいの年齢と称してもなんら疑いの目は向けられそうになかった。

まあ、後で聞くことにしよう。その機会は必ず訪れる筈だし、少なくともその時まで俺は生きている予定だからさ。

「おう？ 何だその目は？ まるで俺が何歳か聞きたそうな目だな、おい」

すると高梨さんは、ミラーを介しながら僕を見てこういった。
何だこの人。

写輪眼でも持つてんのか。

「……まあ、はい。聞きたいですけど」

「おうよおうおう教えてやるよ」

先刻の俺の半ばカツコつけた心情表現が全くの無駄骨になって軽く自尊心が傷つけられた俺を無視して、高梨さんはこう言った。

「二十七だ」

「二十七っ！」

「しかも結婚してる」

「しかも結婚してんですか！」

「日夜やりまくりだぜ」

「年がら年中やりまくりなんですかっ！」

「そうそう。まあ欲求が抑えられねーって言うのかわかんねーけどつついいな……って年がら年中はしてねーっつーの！」

ノリツッコミだ……ノリツッコミを初めて見た！ スゲー！ これが本当のノリツッコミって奴か！ 俺もたまにやるけどこの人のノリツッコミはやるべくしてやったってというような安心感がある！
凄いで、高梨さん！

「ま、俺のポリシーの中に『俺がこの人は凄まじい人だと思った人には年下でも敬語を使う』ってのがあるんだけどよ、見たとこ感じたとこ、お前はどうかやら他人と力を合わせて頑張ってくタイプだから敬語は使わねーでおくよ」

言いながら気取る高梨さんは本当にかっこよく、どっかのアイドルグループの中にも大丈夫そうな感じだった。

デビルかっけえ！

「……しっかしまぁホント街を壊しまくりやがって……徳永切裂なんてとつと何とかして下さいよ、佐藤さん。……つと。やっこさん、どうやら到着らしいぜ、刀銃」

そんなことを思いながらそんな会話に興じていられる時間は、もう終わった。

叶が、ある場所に降り立った。俺も見ていて不審に思っていたが、どうやら叶は一度旋回して一度行ったルートを戻ってきたらしい。だからこんなに早く追い付くことが出来たんだ。

中央には都市部があり、その周りを囲むようにレトロな風景が漂う街の中。

都市部とレトロのほぼ真ん中と言っている場所にある建物の上に、叶は止まっていた。叶の顔は、俺と高梨さんが乗っているリムジンに向かっていて、ように見えたが、気のせいじゃないんだろうな。そこを選んで止まったのも、何か理由があるからなんだろう？ 少しでもないと、キレルぞ、俺。そんな場所を何故選んだんだ、叶？ 俺に対する嫌み以外の何物でもねーよ。

何で、久貝田大学なんだ？

諦めちゃうの？

何処からか、声が聞こえた気がした。誰なんだろう、この暖かみのある優しい声は。

やっぱり栄作は栄作だね。凄いんだけど凄くないよ。

ああ、わかった。誰かと思えば、この声は亜希子だ。つくづく馬鹿だな僕は。亜希子の声さえも判別出来なくなるなんて。というかまんま叶さんの声じゃないか。流石に似過ぎだろ、亜希子と叶さん。まあいいや。多分これは夢の中だ。或いは、僕の現実逃避の中。どちらの方がいいとかはわからないけれど、やっぱり久しぶりに亜希子と喋ることが出来て嬉しいという気持ちしか生まれなかった。

何だよ、諦めるって。

私を栄作の目の前から消した徳永のことよ。あんた、一体何がしたいの？

何がしたいって、どういう意味だよ。

そのままの意味しかないっての。雄二君が死んだと思ったらすぐ様、お世話になった上司さん方に脅迫するなんてさ。何がしたいの？ って感じなんだけど。

何がしたいって……僕は亜希子や父さんや母さんを殺した徳永切裂に復讐したいだけだよ。

だからそこから間違ってるんだって。

間違ってるって何だよ。

いいから聞きなさいな。まずこうして私の声が聞こえるのは何でだと思う？

夢の中だからだろ。

ブッブー。やっぱりあんた、何にもわかってないよ。私は栄作が自分で生み出した現実逃避の塊さ。

現実逃避……。

そ。現実逃避よ現実逃避。あんたは何にも考えたくないから私を生み出して、こつやつて喋らせてんの。アハハって感じよホント。

何が言いたんだよ、亜希子。

甘えてんじゃないわよ栄作ってことだけよ。私が言いたいの
は。

甘え……って……。

栄作はいつもそうよ。私達が死んだっていう事実から目を背けて、悪い方向悪い方向に目を向けてる。折角この街に来てポジティブシンキング出来るようになったと思ったら、本番ですっこけてまた元通り。ポンよポン。頭パーになったんじゃないの、栄作。

そ、そこまで言わなくても言いだろ！ 僕は亜希子の為を思っ
て……。

自惚れも程ほどにしなさいよ、あんた。その台詞を栄作の口から聞くとは思わなかったわ。絶望したわよ、私。

……ゴメン。

いーえ、許しません。罰として私は消えることにするわ。ん
じゃねー、栄作。

あ、待ってくれ、亜希子！ まだお前と喋りたい！

もう一度、自分を見つめ直してみてね。

そう言うと、亜希子は姿を消した。いやまずそもそも亜希子の姿があつたかどうか微妙なんだけど、そんな境界線はどうでもよかつた。

自分を見つめ直せて何だよ……亜希子……わかんないよ……どうすれば……どうすれば……。

こんな時、僕はいつも何をしていたっけ？こんな訳のわからない感情がごちゃごちゃになる時、僕はいつも何を……。

ああそうだ。

僕はいつも、叫び散らしていた。

でもそれは、あの時までだ。

あの時……あの、ヒーロー夫人と高梨君の前で宣言した、あの時まで。

僕はその時、何を言ったんだっけ？ 確か田中未来がどうか田中三純がどうか……… 行ってないな、こんなの。

僕が言ったのは……… 僕が言ったのは………。

「謝ります。色んな人に」

そつだ。こんな感じの、未来を見据えた僕の覚悟。

未来？ 未来ってどんなものだったっけ？

徳永切裂に復讐するのに諦めた上で手に入るものだったっけ？

……… そんな訳、ない。

そんな未来は、ありえない。

復讐するんだ、僕は。徳永切裂に。

でも、もし体力が尽きて、これ以上徳永切裂を追えない状況になったらどうする？

諦めるのか？

諦めたのか、僕は？

ホントウニ、ソレデイイノカ？

「良い訳ないだろ……… 良い訳ないだろっ！」

甘えるな。

力尽きた自分に甘えるな。

力尽きた自分に甘えるんじゃないやなくて、それでも火事場の糞力を奮う自分に甘える。

ああ、いいさ。存分に甘えてやる。甘え切って、そんな自分以外頼れないようにしてやる………！

「くそこの徳永切裂があああああっっっ！」

何度目かになる咆哮と共に、僕は駆け抜け出した。足に感覚がないけど、そんな些細なことはどうでもよかった。

到底追いつけないことはわかってる。周りは巨大怪獣が踏み潰されたみたいにスカスカだ。その先に徳永切裂はいる。だけど、こ

れ以上遠ざけさせる訳にはいかない。何がなんでも距離だけは離さない。だから走り続けてやる。

「……………」
すると遠くに居た徳永切裂が、何かを言いながら立ち止まった。またコンクリートを投げつけてくる気が。いいぞ。やってやる。十個でも百個でも避けて、お前に近づいてやる。

しかしどうやら違うようだった。徳永切裂は立ち止まったまま、僕の方を向いてこう言ったからだ。

笑顔で。

こう言ったからだ。

「暗闇の空間の場所は後回しだ。どうやら私は、君に精一杯の対応をしなければならぬらしい」

そして徳永切裂は、初めて僕に向けて刀を構えた。

「ようやく……………ここまで来た、のか」

走り、近づいた僕は徳永の刃が届かない距離で立ち止まった。銃を浮かばせポケットに手を突っ込み、弾を出してリボルバーに入れる。

計、十二の銃弾。

徳永切裂に、放つ為の弾が、準備出来た。

「僕に殺させてくれ……………徳永切裂！」

ヒーローがいるのに平和な街の表 13 (前書き)

13の記号がない!?!どうすりゃいいんだこれ!!

「運び完了。それじゃあ……頑張れよ、刀銃！ 気張れ！ お前なら出来る！」

「はい！ ありがとうございます！ 行つて来ます！」

最後に高梨さんに激励された俺は、久貝田大学の校門前で降りた上を見ると、叶があゆみを抱いたまま佇んでいる。どうやらまずは屋上まで行かないと話にならないらしいな。しょうがねえ、行くしかない。

「待つてろよ、あゆみ！ 叶！」

大声を叶に向けて放つたが、当の叶は全く相手にせず無視していた。いいぜ。そんな対応して後で後悔すんじゃないぞ、叶。

校舎に入ると、叶と一緒に過ごしていた時間が光景が変わる度に思い出されていった。

入口。ああ、そうそう。叶と出会って少ししか経ってない時だ。

あいつがいきなり飛び掛かってきて、「レポートうっさしてー刀銃ー！」って泣きながら言ってきたんだっただよな。無理だつて言つてんに、突っ掛かってきて。鬱陶しかったけど、嬉しかったのを覚えてるぜ。今でもな。

エレベーター。ここで確か、あいつと地獄やらの話しをしたっけ。そういえば、ヒーローとSMしたんだよな、叶の奴。あれ聞いた時はドン引きものだったなあ。あいつら本当にやったんだろっか。要確認だな。うん。

エレベーターの中。……ああ恥ずいっ！ あいつ、誰もいないからってあんなことしなくてもいいだろ。頬舐めるくらいで止めとけよな。おかげで体裁失うどころかそれ以上の物失うところだったつての。

……畜生。

何だよ、これは。

楽しい思い出しかないじゃねーかよ。

なのに……何でだ、叶？

お前は何で……。

ゆっくりと上がるエレベーターの中。この大学のエレベーターは屋上にまで繋がっているの、直行で叶を見ることが出来る筈だ。

そう思い返してみると、叶との思い出の中に屋上はなかった。普通は行かないからな、屋上なんて。当然といったら当然なのかもしれない。

叶……お前は何で久貝田大学を選んだんだ……？

「何で、良い思い出しかない大切な場所に、俺を向かわせたんだよ」

「アハハ？ ああ、うん。それはね、刀銃の思い出を一つ増やして上げようと思ったからだよ」

エレベーターの扉が開くと、叶が上空にあゆみと共にいた。叶の下には屋上の地面がない。あそこからあゆみを落としたら、即死は免れないだろう。

「あゆみを渡せ、叶」

「アハハハハ。いやっ」

歩み寄りながら、俺は言う。内心、ビビっていた。

こんな状況……思い浮かぶのは一つしかない。

徳永切裂の変えられた記憶の中に居た、快樂殺人犯叶香里しか思い浮かばないだろ。

「あゆみを……渡せ……叶……」

「嫌だつて言ってるじゃん」

歩み寄り、とうとう俺は屋上の端　つまり、叶と最も近い場所へと到達した。少し見上げると、叶の微笑とあゆみのグツタリとした顔がある。

ようやく、ここまでたどり着くことが出来た。

「もう一度言っぞ、叶。今すぐあゆみを渡しやがれ」

「だから嫌だつて言ってるじゃん。どうしても返して欲しいんだつたら力づくで奪いとってみなよ、あゆみちゃんをさ。アハ……アハ

ハハハハハハハハハハアハハツ！」

「……………」
「そうかいそうかい……。叶。お前、最後までそういう態度を貫くんだな？」

「だったら何も言えねーよ。何も言えねーし、何も聞けねーよ。」

「だけどな、叶。」

「忘れてないか？」

「俺はお前を責めることだけは、天下一品なんだぜ？」

「覚悟を決めた俺は、銃と刀を同時に叶へと向けて構えた。あゆみだけを救い出す勝算ならある。力は有り余ってるんだ。ただでさえ化け物の、昔の徳永切裂に近い身体能力を持つ今の俺なら、棒高跳びの棒を片腕で、マンション一世帯分くらいの長さを持つ横幅なんか簡単に投げ切れる自信がある。」

「だから、あゆみは救える。」

「刀と銃……刀銃」

「ただし、その時には俺は死んでいるけども。」

ヒーローがいるのに平和な街の裏 十四

先制は、当たり前だが瞬間的に刀を振れる徳永切裂の方だった。

あの日本刀の長さならこの距離下に居れば大丈夫だ……と断定した僕はなかなか頭に徳永切裂への復讐の高揚でまわっていないかったんだと思う。

「うあっ！」

当たり前と言ったら当たり前だけど、僕は思いつ切り身をのけ反り、徳永切裂の刃だけが発するカマイタチを避けた。ヒュン、という身の近くを風が通る音が聞こえる。危ない。今体が動いていなかったら、真つ二つになっていた。

すかさず僕は気を取り直し、右の銃から一発撃つ。

「それでは駄目だ」

ここも当然と言うべきか迷ったけど、いとも簡単に徳永切裂は刀で応戦した。音がして、弾はどこかに消える。

銃弾を弾いた刀の状態で、今度は徳永切裂自体が僕に近づいてきた。慌てて離れようとする僕。銃対刀の場合、絶対に銃側は刀側から距離をおかなければならない。銃で接近戦なんて、自殺行為に近いかからだ。以前、地下の人に銃で出来る接近戦の仕方を教えてもらったけど、生憎それは『鉄さえも軽々斬る』じゃない時の場合のみなので、使えない。

故に僕は離れようとした。けれど、ただ離れるだけじゃない。

僕はここで、ヒーロー夫人の姿を思い描いた。

左の銃の銃口を地面に。右の銃の銃口を徳永切裂本人に。

「タイムラグの恐怖ってやつを、お前にも味あわせてやる」

まず右の銃の弾丸を放った。近づいてくる徳永切裂だったが、恐らくというか必ず簡単に応じるだろう。だから跳弾を使って時間差の攻撃を試そうとした。

「……………」

だが、徳永切裂はこれを、カマイタチで対応した。腕が消え刀が消え、その瞬間、左の銃弾を撃とうとした僕の思考が緊急回避に強制的に代わる。

「おおっ！」

無理矢理横に跳び、何とかこれを避ける。そうだ。結局はこのカマイタチを何とかしない限り、僕に復讐成功の機会はないんだ。この見えない刃が、最大の難関。

そして、次の難関　徳永切裂本人が、よろけた僕の体目掛けて刀を斬る体勢に構え直し、一気に近づいてきた。眼前に広がるのは、徳永切裂という名の絶望。避けられない。駄目だ。今左の銃の引き金に手をかけたけど、どうせ弾かれて終了する。

「おしまいだ」

嫌だ。

おしまいなんてそんなの信じない。

何にしがみついても、徳永切裂を殺すんだ、僕は……っ！
そう思って極限まで辺りを見渡したおかげだろうか。
とにかくどんな理由でも何でもいい。

僕は、この場を凌げるかもしれない物を発見した。

「あれは……」

ヒーローがいるのに平和な街の裏 十四（後書き）

短いですね。アクション難しい

「何自分の名前いつちゃってんのさ。恥ずかしいったらありゃしないよ、刀銃」

「ウルセー！ 気分だ！ 気、分っ！」

まず俺は徳永切裂の刀を瞬間的に振り、カマイタチを作り出し、それを叶の左 あゆみが捕まっていけない方の体を狙った。罪悪感はないといったら嘘になるが、俺の記憶の中には斬られた後、悠々と元に戻る叶の姿が残ってる。だから容赦はねえぞ、残念だけどな。

「危ないよっ！」

言いながら叶はあゆみを右腕で抱えたまま、俺から見て左に避けてカマイタチに対処した。やはりな。簡単に避けるに決まってる。

ここで俺から見て右に避けない辺りが叶らしいな、と感慨深く思う俺。これは余裕とかそういう訳じゃなく、こんなことを思っていないと恐怖で押し潰されそうになるからだ。

俺みたいない一般人が、何で刀や銃とかいう危ない物を扱わなきゃいけないんだ。

一歩間違えたら死ぬんだぞ、あゆみが。

しかし、唯一心が救われたのが、叶の場合は俺を攻撃する手段がないという点だ。

だから力づくで奪えと叶は言った。

続いて俺は、銃の引き金を引き、銃弾を発射させた。瞬間、結構な衝撃が来る。思わず左腕が上がった。これは片手で扱うのはキツイな。田中雄二でさえも普段は一丁しか使っていなかったんだから、当然のリスクと言えば至極当然なんだが。

「うわわわっ！」

直線の軌道を進む銃弾は、カマイタチの直後で避けきれなかった叶の左肩を貫いた。しかし、沸騰したみたいに叶の肩を白い煙りが

包み、あつという間に元通りにしてしまふ。

「もう！ もうちょっと優しくしてくれてもいいじゃん！」

何だか見当違いのことを言っている叶を俺は全力で無視し、考えを纏める。

やはり、そうだ。

幽霊とかいう不可思議物体の弱点……それは、『風』だ。

煙りのようなものが傷口を包んで修復するところから察するに、幽霊の体はあの煙りで出来ているのだろう。

煙りは、風で動きを操れる。

だから叶は、カマイタチの後、体をその場に置くことに精一杯で銃弾を避けることが出来なかったんだ。

もし叶が俺と同じようにカマイタチを起こせると仮定した場合、動きはある程度制限されるんだろう。

まあ、関係ない話だ。

さて。これで叶に傷を与える方法は確立した。

後は、俺の考えを実行するだけ。

「あれ？ もう責めないの？」

叶がとぼけた顔で俺にこう聞く。こいつは……最後の最後までこんな調子か……。

まあいい。どうせとりあえず最後なんだ。最後くらい、お前のそのノリに付き合っただけ。

「安心しろ。言葉責めよりも格別な奴をお前にぶち込んでやるっての！」

俺は刀を、さっきとは比較にならない力で強く振った。残像も残らない程早いその動きは風を発生させ、カマイタチの形を紡ぐ。その描かれた孤は、叶の左をもう一度通った。

「くうっ！」

叶が必死の形相で体を風に持ってかれないうちに維持しようとする。

その一瞬　ここだけが、最後のチャンスだ。息を整え、覚悟を

決める。

「……南無三つ！」

その一瞬のチャンスを掴み取る為、考えを実行した。

俺は 屋上から背中を下にして飛び降りた……ああああっ！

一瞬間に浮いたと思っただら重力が体が持つて行くうっうっうっうっう未来が見えるああああもう駄目だこれ死ぬおれ絶対死ぬっつっさよならさよならさよならああああ皆楽しかったよ！

だからせめて……あゆみだけでも俺は助ける……！

叶の体の煙りは、何か通過するような衝撃や物を与えてやれば、

『一時的』だが揺らぐ。

一時的だが、その空間から存在が無くなるんだ。

だったら俺が狙うのはこれしかない。落ちる恐怖に堪えろ、俺。

もう何をしたらって助からないなら……花道を飾れよ、俺！

青空が見える様な横向きの体勢で、俺は落ちながら上を見た。予測通り……か。

あゆみを叶から引きはがすには、あゆみを抱いている右腕を無くすしかない。

その為には、この、叶の斜め下に移動するしか方法は無かった。

「うおりやあつ！」

俺は叫びながら、左腕に持つ銃を、叶の右腕に向かって力いっぱい投げ上げた。刀は危ないからな。普通に投げるのは、まだ弾が入っている銃だけだ。

そしてそれは高い高い放物線を描き、その途中で、叶の腕を消し去った。ゆっくりと支えを失ったあゆみが顔を前にして落ち、俺の真上に近づいてくる。カマイタチを使えばよかったんだが、残念ながらあれは空中じゃ、支えとなる地面がないから使えない。

だから俺は死ぬ。

あゆみ。お前は俺をクッションにして助かれ。

大丈夫な筈だ。杜撰な考えだけど、もう一つの可能性があゆみを助けてくれるみたいだし。

「え……ええ！ 何で……刀銃が死んじゃうっぱいのっ！ ああ！
駄目、修復しなきゃ、嫌！ 刀銃！ あゆみちゃん！ 刀銃！
嫌だ！ ヤダっ！ ごめん二人共！ 嫌……嫌ああああっ！」
叶は、消えた右腕を恨めしそうに眺めた後、涙目になりながら俺
とあゆみの名前を交互に呼ぶ叶が、空中に居た。
やっぱりあいつは、何も本気であゆみを誘拐しようとした訳じゃ
なかったんだ。

仕方なく。

何か事情があったんだろう。

いいさ。それさえわかれば、もう充分だ。

「楽しい大学生活……ありがとう……」

どんだん体が落ちていく。あゆみの体もどんだん落ちていく。

じゃあな、ヒーロー。叶。あゆみ。セバスチャンさん。

短い間だったけど、ありがとう……。

ヒーローがいるのに平和な街の裏 十五

僕は、それを見つけることが出来た。どうあがいても形勢逆転出来そうもない、この詰まれた状況をひっくり返す可能性のある物。

それが、僕と徳永切裂の後ろから 投げ込まれてきたかのように目の端を通り抜けたんだ。

「……うおおおお！」

最後の最後になるかもしれない叫びを僕は大きく発し、引き金を引き途中の左の弾丸を、向かってくる徳永切裂を狙って撃った。「今更何を……」と言って軽々避け、そのまま向かってくる徳永切裂の刀の先が、斬れる部分が、自分の目の前にどンドン迫ってくる。

するとその時。

『パン』という乾いた音が。

徳永切裂の後ろ 僕の前から聞こえてきた。

「何だ……っ！」

ここに来て初めて取り乱す徳永切裂。そんなの当たり前過ぎる。

当たり前過ぎて、徳永切裂さえも焦る事実だ。

僕の目の端を。

拳銃が通過して。

僕が空中を尚も移動するその拳銃の引き金を。

徳永切裂を狙った線上において撃ち抜いて。

徳永切裂が全く予測していなかった三丁目の拳銃の弾丸で、

徳永切裂を狙ったのだから。

決着の時間は、不確定要素によって訪れた。

思わず体全体を使って避ける徳永切裂を、僕は左の拳銃を捨てて右の拳銃だけで狙う。

そして、体がよろけながらも安心して一瞬だけ油断してしまった徳永切裂を、僕は頭を冷静にして、撃った。

撃ち抜くは、ヒーロー夫人から貰った銃弾。

狙うは、徳永切裂の右足だ　　！

「……チッ」

「はあ、はあ、はあ……ああああああっ！」
そうして。

僕は勝利の雄叫びと共に、徳永切裂を倒れさせることに成功した。

「残念だけどね、栄作。そいつは足を撃たれたくらいじゃ倒れないよ」

すると、後方から僕の知っている人の声が聞こえた。

「何にしろ、よくやったな、栄作！」

「俺らが来たんだ！ もう安心していいぜ！」

「私達がアナタを全力で援護するわ！」

「安心せい。わしゃあ、まだまだ現役じゃからなあ」

「クハハッ！」

続々と声が聞こえる。しかも、全員が全員僕の知っている人達だ。地下に住む人達が、全員拳銃を構えて僕と徳永切裂の周りを囲んだ。老若男女。僕より若い人はそんなに居ないけど、それでも身長が小さい人が拳銃を構える姿は目に残った。

「徳永切裂。残念だったね。ヒーローと夫人の名において、お前を倒させて貰うよ」

その中に。

銃を構えるヒーロー夫人が居た。

「ヒーロー夫人……何でここに……ていうか皆……どうして皆、銃を持って……」

「これが、私達地下に住む者に課せられた一つのルールだからだよ。おかしいと思わなかったのかい、あんた。いくら地下でも、平和な街に住んでる筈なのに拳銃や薬莖があるなんてさ」

言いながら、僕の隣で喋るヒーロー夫人は銃口を徳永切裂に向け。他の人も一様に、僕を円の一部に加えた上で、徳永切裂に銃口

を合わせる。

「……………」

僕があまりの出来事に口を開けてポカンとしているのを見たのか、「しょうがないねえ」と言い、ヒーロー夫人は話の続きを口にする。「答えは、『自衛』さ。もしも……もしも、この街にもう一度悪が出現したり……もしくは悪が侵入してきたりした場合に備えて、私達は皆、銃の扱いを心得てるのさ。十五年　何も無かったんだだけどねえ。あんたが初めてだよ……とっ君」

ヒーロー夫人は、そう言っただけで徳永切裂を見た。

その顔は僕が初めて見る……慈愛と寂しさに満ちた表情だった。

……………え？

ヒーロー夫人は何で、とっ君でフレンドリーな呼び方で徳永切裂を呼んでいるんだ？

「……スマナイなみっちゃん。どうやら私も、死に際のようなだ」

「何言ってるんだい、もう……」

「ちょ、ちょっと待って下さいよ！　何ですかとっ君って！　何ですかみっちゃんって！　ヒーロー夫人は徳永切裂とどんな関係なんですか！」

「不倫相手さ」

「マジですか！」

ヒーローとやらを放っておいて何普通に連続殺人犯と不倫してるんだこの人！

みっちゃんってヒーロー夫人の本名の一部かっ！

ていうか……え……ええ？

何で地下の皆は、静かに黙って徳永切裂とヒーロー夫人を交互に見てるんだ？

「もしかして……皆さん、ヒーロー夫人と徳永切裂のこの不倫関係を、知っていたんですか？」

その言葉に、僕の左にいる妙齡の女性が、銃を構えながら「不倫関係じゃないけど」と言っただけで答えてくれた。

「私達は佐藤君が来る前から知ってたよ。徳永さんがヒーロー夫人とどんな関係なのかも……徳永さんがどんな人なのかも」

「どんな人って……ただの殺人鬼でしようこいつは！」

豪を煮やした僕は、倒れている徳永切裂の顔を指さしながら叫んだ。

「こいつは！ 僕の両親と恋人を殺したんです！ 笑ってた三人を斬って、二つに分解したんですよ！ 死ねばいいんです！ 死ねべきなんです、こんな男はっ！ なのに何であんたらは親しげに徳永切裂と接してるんですか？ 一体全体何考えてるんですか？ 狂喜の沙汰ですよ、それは！ こいつは！ 死ねべきなんですよ！」

「そいつはねえ……不可能に近いんだよ、栄作」

静かに横を向いて僕に言ったヒーロー夫人の目には、涙が流れていた。

「死ぬのが不可能に近いって……どういう……」

「元々死んでるのさ、とつ君は」

そう言いながら着物の袖で涙を拭くと、人差し指で僕が打ち抜いた右足の部分を指した。 僕が打ち

白い煙りが傷口を包み、次第に治ってきていた。

「……何だよそれ……何だよこれ！」

「とつ君は、一度死んでる人間なんだよ」

ヒーロー夫人は。

何でもないことのように振る舞い、淡々と述べた。

「とつ君はね……自分を幽霊の体にした暗闇の空間を捜し出す為に、建物を壊しまくってたんだ……」

その時。

俺が諦めて体の落下に身を委ねた時。

声が、聞こえてきた。

「依頼主、ヒーロー。運び方法、リムジン。運ぶ対象、巨大トランポリン。運び先は、刀銃の真下」

頼りがいのある、男の人の声。何でその人の声が聞こえてきたんだとか、タイミング良すぎだるとか色々思うことはあったが、ともかくにも俺はその人が依頼人としてさした人物の名前を聞いて安心感に浸ることが出来た。

地面に真つ逆さまに落ちていく俺の真下には、巨大トランポリンがあるらしいし。

「よお、刀銃。お届けもんだ。ありがたく受け取ってくれよ」

「言われなくても……」

そのつもりですよ、と言おうとした所、上から 俺が見える真つ正面からまた声が二つ聞こえてきた。「落ちてる墮ちてる墜ちてるわよこれ！ キャー！」といういつの間にもやら意識を取り戻していたあゆみの阿鼻叫喚な叫び声と、「うわっ、うわっ、ゴメンね！ ごめんね、二人共！」という叶の懺悔の声だ。

二つとも、俺を安心させてくれる。

「ああ、そうそう。言い忘れてたけどよ」

下を振り向くと、全体が黄色で三人分は受け止められそうな大きなトランポリンと、こちらを見上げている高梨さんの姿があった。そこで普通に俺を見守ってくれば良かったのだが、高梨さんは軽く笑いながらこんなことを口にしてきた。

「それ、流石に屋上から来る人間なんて受け取めきれないから、頭からおちたら死ぬぞ」

「そういう大事なことは早く言ってお下さいよ！」

おいおいおいてことはあれか！ 俺がこのままおちたら普通に死ぬし、頭からおちずに何とかなっても、今度はあゆみの命が危ないってことか！

トランポリンの意味が全くないぞ！

セバスチャンさんに頼んで耐久力上げてから俺の元に運んでこいよ！

「えええええ私頭からおちたら死ぬのおおお嫌よそんなのおうおう」

「おうおうイッテルビウムぞあゆみ！」

「黙りなさいあいあいあ」

「あいあいあってどういう意味だ！」

あゆみもあゆみで俺と同じ様にテンパってるようだった。というよりか何だか落下時間が長くないか？ 転落する時はあつという間だとか言う話を聞いたことがあるが、案外そうでもないらしい。死ぬ前の時間は長く感じるって話の方が正しいって訳か。

まあしかし、このままこうやって叫び合っていても拉致が全然あかない。そうならば、俺とあゆみがとるべきは一つしかないんだ。

「叶！」

「任せて！」

これぞまさしく阿吽の呼吸というべきか、俺が呼んだだけで叶は空中からとんでもない速さで、顔を地面に向けて降下してきた。体が顔だけを残して白い煙りになったかと思うと、音をたてずにその煙りが広く広がり、俺とあゆみを包む。うおっ。なんか、耐久性のあるドデカコットンに包まれてるみたいだ。

「ああ……柔けえ」

「や、あん！ 何やってんのさ刀銃！ そこ、私のバスの領域よ！」

「わかるかそんなの！」

「だからもつと徹底的に体を擦りつけて！」

「嫌だつての！」

「案外余裕じゃないの刀銃も香里お姉様も！」

三者三様それぞれ悲鳴の代わりにボケてツッコミ合いながらも、煙りがゆっくりと転落のスピードを遅くしていき、遂には、トスン、と軽い音を起して俺とあゆみと叶はトランポリンの上に難無く着地することが出来た。

「いやー、流石じゃねえか刀銃。俺も今回ばかりは死ぬかと思ってたぜ？」

「……………」

高梨さんが勝手なことを言っていたけれど、完全スルーして叶とあゆみに向き合うことにした。「大丈夫か、あゆみ？ 怪れないか？」と俺が聞くとあゆみは俺の隣でちょこんと女座り（この場合、女の子座りとした方が良いのかどうかわからなかったが、なんか女の子座りって変態な感じがしたので女座りと表現することに落ち着いた）をしながら息を荒げていたが、俺の方を向いて「だ、大丈夫怖かったけど、刀銃が居てくれたから……………後、香里お姉様とか知らないおじさんとか」と言っているので安堵し、今度はまだ浮かび上がっている叶の方を見た。

「大丈夫か、叶？」

俺はあえて、あゆみの場合と同じ言葉を言う。それに対して、叶はいきなり泣き始めた。

「って何故に泣くんだお前！」

「きつと香里お姉様、刀銃が怖かったのよ」

「俺は男女共に怖がらせる幽霊に怖がられる存在なのかよ！」

あゆみが軽口を叩いたのを見て、「ありがとね、あゆみちゃん」と叶は涙を流しながら感謝を述べていた。ああ、そういうことか……とあゆみの叶への気遣いを悟った俺は、また一段とあゆみの好感度を上げることにした。因みに今現在のあゆみの好感度はかなりのものだということだけは言っておこう。

「グスツ……………ごめんね、二人共……………特にあゆみちゃん……………ヒック……………」

……怖い思いさせちゃったよね……………ごめんね……………」

「何言ってるのよ、香里お姉様。私は西山財閥の一人娘よ？ 香里お姉様と一緒に居て怖いなんてこと、有り得ないの」

「そつだぞ。俺なんか平凡大学に通う一人っ子だ。怖いことなんて何もねーよ」

「涙が出るくらい普通のプロフィールね」

「涙が出るくらいって!」

「まあ私のも普通のプロフィールだけど」

「お前のが普通だったら俺のは底辺になるっての!」

「あら。わかってるじゃない。凄い刀銃。褒めてあげる。よしよし」

「あ、ああ。サンキューな……ん？ なんかおかしいと思うのは俺だけか？ てか俺の頭を撫でるな。屈辱以外の何物でもねえ」

「よしよし」

「あー……こう言ってもやめないのかあゆみ……」

「……アハハ」

俺とあゆみがそうやって会話（というかあゆみが俺に屈辱を与えているだけの交流だこれは）していると、涙を拭きながらやっと叶は笑ってくれた。

「おお。やっと笑いやがったか叶」

「……笑いやがったってどういう意味？」

「いや。一応、今のところ叶は敵ってことになってるし」

「て……敵って……刀銃とあゆみちゃんの敵ってこと？」

「おうよ」

「そんな訳ない……そんなことある筈がないじゃん!」

「じゃあ、教えて貰うぞ。お前が何で、あゆみを誘拐して俺の『時間稼ぎ』をしたのかをな」

「……」

俺がこうカマをかけると、叶は口を閉ざして俯いてしまった。思えば、こいつのこんな表情は初めて見る気がする。

いつも笑ってて。

俺の横に居てくれた。

あゆみや高梨さんも、息を呑んで叶の同行を見守っている。今の状況を要約すると、幼女と青年とおじさんが泣きっ面で俯く女性を取り囲んで固唾をのんでいるということになるな。凄まじい。第三者が居なくて本当によかった。緊急避難警報さままだな、本当に。そして叶は俯いていたがようやく覚悟を決めたらしい。あゆみと俺を巻き込んだ救出劇の最後を飾る言葉を、叶は言った。

「徳永切裂の、復讐を手伝う為だよ。私を殺した徳永切裂と、私を幽霊にした暗闇の空間を捜し出す為……」

ヒーローがいるのに平和な街の裏 十六

「ゆ……幽霊？」

「ああそうさ。見ての通り、とつ君は幽霊なんだよ」

今、ヒーロー夫人は何て言った？

僕が殺さなければいけない徳永切裂が……実は幽霊だった……つて言ったのか？

幽霊って何なんですとかどうして徳永切裂と親しい関係なんですとか聞きたいことはあったけど、この状況で僕が言いたいことはこれだけだった。

「僕は、徳永切裂を……殺せないんですか？ 目の前で倒れているのに？ 上官を脅して、お金を奪って、無理矢理この街に入って……」

……そこまでしてようやく追い詰めることが出来たのに……僕は、徳永切裂を殺せないんですか？」

「いや、君は私を殺せるよ」

僕の問いに答えたのは、满身創痕のヒーロー夫人ではなく、僕が殺そうとしている連続殺人犯 徳永切裂だった。

「……はあ？」

何、言ってるんだ、こいつ。お前は僕の大切な人を殺した残虐な人をどうやって殺すかしか頭のない奴なんだろ。同僚の報告書にも書いてあった。徳永切裂のどの情報を見てもそう書いてあった。

一度逮捕した時の調書にも、そう書き記してあった。

脱獄か何かをしてもう一度シヤバとかよくいうこの普通の世界に逃げてきたのはわかってる。お前がこの街で潜伏して……この街の人間を殺す為に家を破壊していたのもわかって……わかって……え？

ヒーロー夫人は、徳永切裂について何て言っていた？

「暗闇の空間の大体の場所はわかってるつもりだったが、もうそれも過ぎたことだ。元より、私は君に殺される予定だった。私の名前が西山切裂になった時、唯一私が殺してしまった者達の肉親。佐藤

豪州 佐藤三咲 柳田亜希子 彼らの肉親からの復讐が私に迫って来た時、その時が私の死ぬ時だと決めていた」

言いながら徳永切裂は、足を打ち抜かれた筈なのに まるで何事もなかったかのように立ち上がり、僕に向かつて歩き出していた。徳永切裂の顔は、今まで僕がどの人にも見たことがない表情をしていた。

これが……死を覚悟した人間の顔だつてことか……。
何だよそれ。何だよこれ。どんな茶番だ。僕は、徳永切裂に復讐をしにこの街に来たんだ。僕は、生きてるだけで害になる人間を殺しに来たんだ。

なのに。
それなのに。

僕は、こんな晴れ晴れとした人間を撃たなければならぬんだ。

「額だ。ここに、私を司るデータチップとやらが埋め込まれている。額を撃てば、例え幽霊でも不老不死でも殺せることが出来るそうだ」
言いながら徳永切裂は、僕がいつの間にか下に向けていた右の銃口、右手で自分の額に持ってきた。
ゴリ、と。

銃口が徳永切裂の額に当たる感触が、右手を伝う。

「……よしえ、ヒーロー、いつ君、みっちゃん……あゆみ……今まで、こんな殺人鬼に付き合ってくれてありがとう。感謝する。……さあ。殺してくれ、佐藤栄作」

そうだ。ここで僕は人差し指を少し動かすだけでいい。

それだけで復讐は完遂され、僕の目的は達成する。ここまで来れたんだ。やっと徳永切裂を殺せるんだ。

だったら、引き金を引けばいい。
だけど。

「う……」

僕は、完全に臆していた。

徳永切裂が、僕の思い描いていた人物像と掛け離れ過ぎていたの

も理由の一つだけど、それよりも何よりも、今この状況が僕の動きを止めていた。

今、もしこの状況を第三者が見たら。

徳永切裂と佐藤栄作。

どっちが『正義』でどっちが『悪』なんだ？

「そうか……ならば、こう言えばいいのか？」

徳永切裂は。

僕の顔を拳銃越しに見ながらこう言い放った。

「最高だった……両親と思われる者達が二つに裂かれ臓物をちりばめ、それを支えるように寄り添う涙を流した女性が私に向かって、死ぬ死ぬ死んでこいと血気盛んに叫び立てる。気分を悪くした私は女性を斬り、斬り、斬り、だらりと垂れた舌を丹念に舐め、乳房をかじりとり、ふくらはぎを捏ねくりまわし、両目を取り出して」

「……………」

「傷を作りそこから流れ出した血を液体として体に摂取し、唇を切り取って手触りや感触を堪能し」

「死ぬ……死ぬっ！」

地下の住人が全員暗い顔で俯き。

ヒーロー夫人が小粒の涙を流しながらもしっかりと、僕と徳永切裂を見て。

僕が勢いに任せて銃を撃った時。

徳永切裂は、笑っていた。

ヒーローがいるのに平和な街の裏 十六（後書き）

まだ終わりません。後日談で伏線の回収します。

後日談 刀銃 上

一日後。まあつまり徳永切裂という『悪』がヒーローがいるのに平和な街で大暴れをした後一日経った日の朝。俺は、目の前の光景を見ながら公園の土管の上に一人で座っていた。

「……いつになったら終わるんだろうな、この作業」

一人佇みながら厄介なくらい鋭い陽射しを俺に浴びせる太陽を睨み、溜め息をつく。

現実逃避を終わらせ、周りを見渡してみると、そこには徳永切裂が壊した残骸であるコンクリートや木の破片があった。

そう。今、この街は復旧作業に追われようとしているところだ。

昨日の夕方。ヒーローは緊急避難警報を解除し、地上の街の住民を全員この公園らへんに集め、土管の上に立つと、街の皆を見渡した。住民は皆、不安と疑心暗鬼に駆られている目をしてヒーローを見ていた。まあ当たり前だろうな。緊急避難警報とかいう十五年間発動されなかった訳のわからない決まり事によって元犯罪者が大量にいる地下に集められたと思ったら、地上に上がると建物が壊れているときたもんだ。どうしたって怒らない方がおかしいだろう。

ヒーローが土管の上に立ち、そのまま神妙な顔つきで黙っていると、ヒーローから次いで二番目の代表と言われている、川田まみさんというおばさんが、「ちょっとちょっとヒーローさん」と発言をし始めた。

「これ、どういふことなのか説明して頂けるかしら？ わたくし達全員「悪が攻めてきた」とかしか言われていないんですけど」

「……すみませんでした」

暗い顔で俯きながら謝るヒーロー。こんなのがテレビの中の空想上のヒーローだったとしたら、朝早く起きて楽しみにしていた男子達は心底幻滅することだろうな。

こんな、人々から嫌な顔で睨まれながら顔を土管に向けているお

っさんなんて。

普通のヒーローじゃ有り得ない。

「すいませんで済んだらヒーローさんは要らないんですよ」

そこまで言ったところで周りの人達が「言い過ぎだろ、川田さんと止めようとしていたが、残念ながら川田さんは「いーえ。今回という今回はハッキリ言わせて貰います」と言って勢いをとめなかった。前の人を掻き分け、ヒーローが立つ土管の前まで進んで俯いているヒーローの顔を見上げる。

「大体ね。あなた、今回のこの大事で何をしていたの？ 何もしてないわよね。せいぜいわたくし達を誘導して、わたくし達と一緒に居ただけよね？ あなた、それで本当にヒーローとして恥ずかしくないの？ ヒーローならヒーローらしく、きつちり悪者を倒してわたくし達を安心させなさいよ。それだったらこの被害も許せるのに」

「……………」

ヒーローはとうとう無言になってしまった。途中、何度も川田さんの言葉を訂正しようと口を開けたが、その度に川田さんの声が大きくなり、無理矢理口を塞がれたかのように閉ざすしかないヒーロー。恐らくヒーローは何も言い返せないと思って川田さんの言葉を聞いているのだろう。確かに川田さんの言い分もわかる。十五年前俺を両親から救い出してくれたヒーローだ。当然今回も働いてくれただかと思うと、ひたすら自分達の周りにいただけ。ヒーローは何をしているんだろうと疑問に思っていたら、いつの間にか悪は倒されていてめでたしめでたし……なんてことを、はいそうですかと従順に理解出来る訳がない。だから川田さんはキツイ言い方をしているんだ。

だけどな、川田さん。仕方がないんだよ。この街のヒーローが戦えないのは仕方のないことなんだ。

ヒーローは、不老不死だが高校生男子並の力しか持ち合わせていない。

十五年前だってそうだ。

つい最近思い出したことなんだが、十五年前　両親の放った銃弾によって撃たれそうになった俺を庇ったのは、刀を持った徳永切裂だったんだ。

銃弾を庇われ、唾然としたところをヒーローによって俺の両親は捕まえられた。

どうやら誰もが、十五年前の事件はヒーロー一人で解決したものだと思っっているらしい。

だから期待もするし尊敬もする。

しかし、今回の徳永切裂が暴れた事件で、全てのレットテルが剥がれてしまったんだ。街の人からみるとそっとういう結果になる。俺はそうは思わないけれども。

「さあヒーローさん。何か言うことはありますか？　それとも、何も言えないのならせめてその捕まえた悪者をこの場で見させて貰えませんか？」

「……………見せられ、ません」

「どうして？」

「言えま、せん。絶対に」

頑なに悪者を見せようとしなないヒーローの真意を、俺は理解していた。

ヒーローは、十五年以上前から一緒に居てくれた　友人である徳永切裂をこの街の住人から悪者として見て欲しくなかったんだ。

十五年前、ヒーローの代わりにヒーローとして悪者を捕まえることを手伝ってくれたのだから。

「ここまで頑と「すいません」と「言えません」を繰り返すヒーローの態度に腹がたったのか、とうとう川田さんがこんなことを言った。

「……………貴方、『何も出来なかった』んだから、これくらいわたくし達の要望に応えたらどうなの」

「……………おい」

この言葉に、ヒーローの姿を遠巻きに見守っていた俺は流石に力

チンときた。

川田さん……だったっけか。あんた、一体何様だ？ ヒーローだって俺や佐藤のように地上にいて、徳永切裂を見守るかもしくは抑えるかしたかったに決まってるだろ。それを……そんな気持ちでヒーローは押し込めて、ヒーロー夫人と高梨さんのような地下の住人に対処を頼んだんだ。

そして、ヒーローは避難している人達の傍にいて安心させる道を選んだ。

それを、川田まみさん あんたは何て言った？
何もしてないだと？

「ふざけるのも大概にしなさいよ」
俺が川田さんに一言いおうと身構えた瞬間、上空から声が聞こえてきた。子供の声だが、その雰囲気は並大抵の大人のそれを凌ぐ声。
あゆみが。

空を飛ぶ叶に抱き抱えられながら、ヒーローが謝る土管の上によこんと降り立った。

「お婆様。あなた、今何とおっしゃったかしら？」

「な……何よこの子。早くそこから降りなさい。今わたくしは、ヒーローと喋っているんです」

というか貴女は一体何者よ、とはにかみながら宙に立つ叶を川田さんは指さしていたが、そんなことなどどうでもいいかのように、あゆみは「うるさいわね」と川田さんに物申す。小学二年生がおばさんに向かって見下ろしながら何かを言おうとしている図は、街の人をざわたてたが、俺は寧ろ感動の域にいたっていた。

あゆみ……お前……俺の言おうとしたことさえも言ってくれるのか……。

「う、うるさいですって？ 失礼ですけど、あなた教育が成っていないんじゃないの？」

「だから、うるさいって言うてるのよ。私が嫌々貴女みたいな空気の読めないお婆さんと会話してあげるって言っているのだから、素

直に喜んだらどうなのかしら」

「な……何なのよ、あなた！」

「はあ……私を誰だと思ってるの？ 私は西山財閥の一人娘、西山あゆみよ。それ以上でもそれ以下でもないわ」

「……に……西山財閥って……あの西山財閥のところの？」

「ええそうよ」

ニッコリと笑うあゆみの姿に、完全に後ずさりしてしまう川田さん。どうやら西山財閥というのは本当に凄い企業みたいらしいな。てか何故に俺は西山財閥を知らなかったんだ。記憶障害云々のせいならいいんだが。

「し……失礼させてもらいます」と川田さんが逃げる様に去って行ったのを見てもまだ満足しきれなかったのか、「あゆみちゃん、香里ちゃん、ありがとね」と言うヒーローの横で、「いいえ、まだよ」とあゆみは発言しようとしていた。

「さっきのおば様でも誰でもいいわ。とにかく私の話しを聞きなさい。私は、ずっと一人だったの。一人で遊んで一人で勉強してきたのよ。セバスチャンもいたにはいたけど、私を変な目で見てくるから正直一人でいたかったの」

……うおいセバスチャンさんあんたあゆみにばれてるよあんたの性癖！

てか知ってんならヒーローか誰かに相談して執事を変えて貰えや！
生命と貞操の危機なんだぞあゆみ！

俺の心の危険信号をあゆみに向かって送っていると、隣に浮かんでいた叶と目が合った。叶は口パクで「愛してるよ刀銃」と言ってきたように見えた。……後で真意を聞くとしよう。その時どんな反応をするかで叶との付き合い方が変わるかもしれない……。

なんてことは、有り得ないけどな。

俺は実験体で、叶は幽霊なんだから……。

「そんな中、台風がこの街を襲ってきたわ。二週間くらい前のあの日ね。私は家にいるのが嫌で、一人歩いていたら、いつの間にか怖

くなつて神社に隠れていたの。そこで、私は……ヒーローに……助けられたの。私だけの、ヒーローに」

その言葉を言った瞬間、あゆみの顔が真っ赤にほてった様に見えるが、俺の方も心が動いた。

俺が……ヒーローだって？

考えたことも、なかった。

両親が犯罪者で、ヒーローに助けってもらってばかりの俺が、誰かにヒーローと言ってももらえるなんて考えたことがなかった。

「でも、そのヒーローは私の隣にいるこのヒーローに、昔助けてもらったらしいのよ。最後の悪を捕まえる時に。そして、今回のこの事件。十五年前の時とは違って、ヒーローは悪者を捕まえてくれなかったわね。全て、地下の人達が行ったことよ。でもね」

あゆみはまだ演説を続ける。小学生の女の子にとやかく言われるのが最初はよく意味がわからなく、話し半分で聞いていた街の人達も、今では全員あゆみの話しに耳を傾けている。

無論、俺もだ。

「ヒーローは、ずっと地下に居てくれたんでしよう？ 私の場合、もしヒーローが居てくれなかったら、きつと泣き叫んでいたわ。泣き叫んで、きつと邪魔をしていたんだと思う。でも、私はヒーローが居てくれたから、頑張つて我慢出来たの」

あゆみが言うヒーローというのが、俺とヒーロー、どちらを指しているのか正直なところ曖昧だったのだが、それでもやはり、俺はあゆみの言葉が素直に嬉しかった。

街の皆も同じらしい。

ヒーローが傍に居てくれなかったら、恐怖に堪えられなかった。

ヒーローが傍に居てくれたから、押し寄せてくる恐怖の渦を堪えることが出来たんだ。

こうとやかく言う俺も同じだ。高梨さんが口にしたヒーローという四文字があの時あの場で一回でも少なかった場合、俺は簡単に諦めていただろう。

叶を追い掛ける時も。屋上からわざと飛び降りた時も。ヒーローが居てくれるという安心感がなければ、とっとと駄目になっていたんだ。

空想中のヒーローは、よく一般人を助けたりする。気色悪いコスプレをして襲い掛かってくる悪役から助けてもらって、当然の如く一般人の人はヒーローにありがとうございましたと御礼を言う。

ここまでは俺も納得がいったのだが、ここからが頂けない。そして、それが空想中のヒーローとこの街のヒーローとの大きな違いなんだ。

だから、この街にはヒーローが居ても平和なんだ。

「ありがとうね、あゆみちゃん。でも、僕は結局街の皆を危険に曝してしまっただよ。……そして、とっ君を助け出すことが出来なかった。死なせてしまった……。だから僕は、謝っても償いきれない。でも、僕に出来ることはこれしかないから」

そう言うと、ヒーローは土管から降り、で膝を折り、体を畳んで、手を地面に付けて、頭を下げた。

ヒーローは、土下座をした。

「皆を危ない目に逢わせてしまいました。ごめんなさい」

空想の中のヒーローが、『ヒーローが居るから来た』悪役のせいで危険に曝した一般人に対して、一度でも謝ったことがあるか。少なくとも、俺が知る中ではない。でもそれは単純に俺がテレビを見た回数が少ないせいかもしれない。けれどもやっぱり、ヒーローが謝るシーンを見たことは一度もなかった。

それなのに、この街だけのヒーローは土下座をしている。自分の非を認めて、自分の無力を受け取めて。みてくれは格好悪いかもしれない。まあ夢見る子供達に対しては、少々目に毒なのは認めるしかないな。

だけど、何もヒーローが守るのは子供だけではない。

老若男女、問わずなんだ。

だから、ヒーローは土下座をしても謝ってくれる。

俺は、そんなヒーローが大好きなんだ。

そして、そんなヒーローが大好きなのは俺だけではない。気がつく、周りの皆が「いやいやいいよヒーローさん!」「そうよ!私達、ヒーローが居なかつたら怖かつたもん!」「ありがとうな、ヒーロー!」「これからもよろしくおねがいしますじゃ」「頼りにしてるぜ!」と各々言いながら、ヒーローの周りを囲んでいた。川田さんは最初近寄らなかつたのだけど、周りの人の説得の末、何も言わずに無言でヒーローの傍に近寄って行った。目の端に涙が少したまっていたことは、遠くでぼーっと眺めていた俺しかわからないことだっただろう。

そう。

俺はその時立ち止まっていた。

ヒーローに感謝など、出来る身分じゃないと思ったからだ。

「そりゃ、そうだよな」

俺は一つ、命の恩人であるヒーローに言っていないことがあった。叶から全て聞き出し、知った徳永切裂の復讐。ヒーローは暗闇の空間を見つけたほしいという徳永切裂の為に　しいては自分を不老不死の体にした暗闇の空間に対するヒーロー自身のけじめの為に、ヒーローは街に緊急避難警報を発令したんだ。

では、ここでいくつかの疑問を口に出してみよう。誰に、とはまと言わない。俺にだって意地はある。恐らくこの人のせいだろうという目星はついている。だからこの場にこの人を呼んだのだが、もし間違っていた場合、笑ってごまかしてこのやり取りを描写すらしていないかったことにしたいからだ。

だから、誰にとは言わない。

まず、一つ目。

「何で、俺とあゆみは緊急避難警報に気付かなかつたんですか?」

次に、二つ目。

「何で、刀なんて物がこの街にあるんですか？」

最後に、三つ目。

「何で、刀と銃とメモが、近所の誰にもばれずに俺の部屋の押し入れの中にあつたんですか？」

これらの問いを口に出し、その人の解答を俺は待った。相変わらぬ無表情で、その人は綺麗な姿勢を保つ。

そして、「仕上げに来たのですが、そこまでご存知でありますならば、私が言うことは少ししかございません」と口を開いた。

間違つていて欲しかった。この人の評価を、改めたくなかった。

「……貴方が黒幕だつたんですか」

「正確に言う私だけではありませんが……まあ、大体の仕掛けは私が施させてもらいました。何時から気付いておらっしゃいましたか？」

その人は、尚も静かな笑みを浮かべ始めた。

自分がここにいて、真相を喋るのが当然とでもいいかげなように。

「電車の時、です」

セバスチャンさんは、俺のこの返事を聞くと、「流石ですね、刀銃様」と言つて俺を真つ正面に見た。

何が間違っていて、何が正しいのか。何が正義で、何が悪なのか。何がやってはいけないことで、何がやってはいけないことなのか。

昔も今も、僕はそれらが全くわからない。

では今、目的を終えた自分自身に試してみることにしよう。

復讐は、やってはいけないことなのか？

「駄目とは言わないけれど、やっぱりやってて気持ちのいいもんじやないよね」

僕は、口にも出してすらない空虚なこの疑問に対する返事を、誰かの口から聞いた。

そこに至るには、まず時を三十分前に戻すしかないと思う。だから、僕はあえてあの日のことを思い出す。

「……やったね、栄作。これで、あなたの復讐は終わったんだよ」
そう言ってくれるヒーロー夫人の目は明らかにやつれていた。しかしこれは朝起きて目を開けるのが辛いからとかいう下らない理由からじゃないのは、僕の間から見ても 徳永切裂の死体を仮設トイレのすぐ側にある公園の地面に埋めて黙祷している地下の皆さんから見ても明白だった。

僕は、きつと居ても立つてもいらなかったんだと思う。ヒーロー夫人の悲しみは、他でもない僕が生み出したものだ。

僕が生み出したものなのに。

僕は、いけしゃあしゃあとこんな言葉を口にしていた。

「……すいません、ヒーロー夫人」

「……今何て言った……今あなたは何て言ったんだい！」

瞬間、ヒーロー夫人は僕の服の襟元を片手で持ち上げ、僕を鋭い目で見た。息が苦しい。地下の皆さんが見兼ねてヒーロー夫人の近くに寄ろうとしたけど、その一本目で全員止まった。

そして、全員、僕を鋭い目で見た。

「あんたが！ 自分で自分の過去にけりをつけるためにとつ君を殺したんだ！ 自分の都合の為に、とつ君を殺したんだ！ 確かに、とつ君は昔、あんたの大切な人を含めていっばい人を殺したよ！ 私はそれをとつ君の口から聞いた！ とつ君は、沈んだ顔で言つてたんだよ！ 栄作！ あんたはあんたの大切な人の復讐の為にとつ君を殺した！ だけどね！ とつ君を大切な人だと思つている人も居るんだ！ 復讐つてのはね！ 誰かがどこかで止めない限り、絶対に終わらないものなんだ！」

ヒーロー夫人はそこまで言うと、「ハア、ハア、いいかい栄作」と荒い息を整えながら僕を地面に降ろし、僕の両肩に両手を乗せてこう言った。

「とつ君のことを、絶対に忘れないでくれよ。あんたを殺し、あんたが殺した徳永切裂という一人の人間の名前と顔を、絶対に忘れないでおいてくれ」

ヒーロー夫人の頬に、涙が一筋流れる。そして、ゆっくりと泣き始め、最終的に周りの人に抱き抱えられながら、声押し殺して泣いていた。周りの人も今まで留めていたのだろう。だけど、ヒーロー夫人の決壊によって、やがて泣き始める。

僕は、泣かなかつた。
泣ける訳がなかつた。

そしてゆっくりとその場を離れる為に歩き始めた。誰にもさよならを告げずに、ヒーロー夫人を含めた地下の皆さんに届くか届かないかの声で、「すいませんでした」ともう一度謝つた。今度はつられてじゃなくて自分の意志でだつたけど、そんな些細な心入れ具合なんてものが、今この状況に何の価値もないことはわかつていた。荷物は最初からそんなに持つていなかったで、このまま僕はこの街から出ることが出来る。とにかく歩き、歩いた。周りが台風でも通過したかのようにねこそぎ崩されている。徳永切裂の軌跡が、ここにもあつた。

「佐藤さん！」

すると、前から黒いリムジンが近づいてきた。窓から顔を出しているのは高梨君だ。どういう訳かはわからないけど、リムジンを運転して僕の右横側に止める。

「佐藤さん、徳永切裂の奴に復讐出来たんですね！ 良かった……良かったです！」

高梨君はさつきまで近くに居た地下の皆さんとは違い、僕の徳永切裂への復讐が完了して本当に喜んでいようだった。

「……高梨君は、徳永切裂が死んでよかったんですか？」

「何言ってるんですか、佐藤さん。こんなに街を壊した徳永切裂が死んでも俺は何も感じませんよ」

「そう、ですか」

どうやら高梨君は徳永切裂に対して何の思い入れもないらしい。

何か特別な事情が、地下の酒場にもあったんだろう。まあ、今からこの街を出る 僕には何の関係もない話だけだ。

「今までお世話になりました。すいません、迷惑ばかりかけて」

「あれ？ もしかして佐藤さん、もうこの街から出ちゃうんですか

？ 水臭いですね。もっと地下に居てくださいよ」

「……そこまで迷惑をかける訳にはいかないんで」

ヒーロー夫人が居る場所に 地下の皆さんが居る場所に、もう近付けそうもない。とにかく僕は、一刻も早くこの街から出たかった。そんな僕の気持ちを少しでも察してくれたのか、高梨君は「そうですか……残念です。あ、門まで送っていきましょうか？」と僕に申し出てくれたけど、僕はそれを断って、自分の足でこの街を歩きたかった。

高梨君がリムジンの窓から顔を出して手を振りながら去っていく姿を見送ると、僕はもう一度歩き出す。中心部の建物があった場所まで行き、そこからまた少し歩くと、僕が徳永切裂を殺した場所があった。血も何も残っていないけれど、僕が確かに徳永切裂を殺した場所。

正直、僕は何も感じなかった。復讐心と達成感と、罪悪感と謝辞

の気持ちが混じり合っていたからとかいう綺麗事をはくつもりは全くない。

僕は、徳永切裂が死んだところで、何の感情も動かなかったんだ。何の躊躇いもなしにその場から離れ、この街の出入り口に立つ。

一度振り返り、ヒーロー夫人の泣く姿をもう一度頭の中に浮かんだ。

復讐は、やってはいけないことなのか？

「駄目とは言わないけれど、やっぱりやってて気持ちのいいもんじやないよね」

その声の主を、僕は間違ひなく覚えていた。この街の中で、僕にとつて一番インパクトがあったこの人の声を、忘れる訳がない。

「アハハ。久しぶり、栄作」

叶さんが、音も起てずにジャージ姿で僕の目の前に居た。

僕が復讐する原因となった、亜希子に似過ぎている叶さんが。

「見送つてくれるんですか、叶さん」

僕が色んな感情をさらけ出して泣き出しそうになるのを堪えながら言ったこの言葉を聞くと、叶さんは「やっぱりね」と僕に言つて、続けて無表情でこう発言した。

「やっぱり栄作は、凄いんだけど凄くないよ」

「……え？」

その台詞に。

僕は、嫌という程思い入れがあった。いや、そんなことがある筈ない。僕は、亜希子が死んだのをちゃんと確認した。だから、こうして亜希子が僕に向かって喋りかけてくれる訳がないんだ。

だけ。

ここで僕は、皮肉にも徳永切裂という男のことを思い出してしまふ。

死んでいたのに、徳永切裂はああやって建物を壊しまくっていた。なら、死んだ亜希子とこうして話しをするのも、一つの可能性を

汲めば不可能になくなる。

叶さんは。

亜希子は。

フワリと宙に少しだけ浮かびながら、僕にこう言った。

「久しぶり、栄作」

後日談 刀銃 下

「あゆみが叶に誘拐されて、俺がヒーローに助けを求めた時、ヒーローはセバスチャンさんに頼んで状況を打破出来る物の瞬間移動を俺にしてくれました。その時に俺が、ヒーローに感謝を言った言葉が確か、『刀と銃だ。ありがとうな、ヒーロー……』と、セバスチャンさん』だったような記憶があるんです。そこでヒーローは驚いた。始め、ヒーローは俺がセバスチャンさんを科学者だと知っていたことに驚いたと思っていました。だけど、それが 刀と銃をセバスチャンさんが瞬間移動させたこと自体にも驚いていたことだとしたら、俺の今ある疑問が全て解消されるんです」

土管から降り、俺がここまでセバスチャンさんに言うと、セバスチャンさんは「やはりばれていましたか」と何の悪びれもせずにあつさり肯定了。

「そうでございます。ヒーロー様は私に刀と銃を瞬間移動しろとはおっしゃられませんでした。それどころか、私が刀と銃を所有していることすら存じておらっしゃいません」

そこまで言うと、セバスチャンさんは俺に「続きを聞かせてください」と催促した。俺もまだ言い足りないことがあったので、遠慮なく言わせてもらう。

「推測なんですけど、多分セバスチャンさんは、徳永切裂とよしえさんと『造られた』平和な街を抜け出す時 いや、話を知ってる限りもつと前かもしれませんけど、とにかくセバスチャンさんは刀と銃を所持していた。そして、それらを俺の部屋に瞬間移動させて隠したんです。一度目は徳永切裂との記憶を合わせる為。二度目は多分……俺を惑わせて時間稼ぎとか何やらする為でしょう」

「二度目の理由が曖昧でございますね」

「すいませんね。これくらいしか想像できません。セバスチャンさん……あんたに実験させられていた俺には理解の範疇を越えますん

で」

セバスチャンさんは、「全くでございます」といけしゃあしゃあと言いのけ、俺がこれ以上喋らないと悟ると、「では、補足をさせていただきます」と話しを切り出した。

「二度目の瞬間移動は本来予定に含まれていないものでしたが、私が所属する暗闇の空間の上のお方……傍観者様が、私に頼んで行ったものなのです」

やはりセバスチャンさんは今も暗闇の空間の人間らしい。しかしこれはおおよそ予測していたからそこまで驚かなかったのだが、セバスチャンさんが言う真の黒幕の名前で俺は反応した。

「その、傍観者とやらが今回のこの騒動の原因なんですか」

「そうでございます」

「……簡単に認めるんですね。何ですか？ 暗闇の空間を裏切って、俺に情報をまわそうって魂胆ですか？」

「そうでございます」

「そうなんですか！」

俺が何の魂胆もなく、ただ冗談として言った皮肉を、セバスチャンさんは俺の予想外に答えてくれた。

何だと！

暗闇の空間を、裏切っただと！

「本当ですか、それ！」

「ええ。だから私が、こうして出向いているという訳でございます」
セバスチャンさんは、遠い空を眺めながら俺との会話を続行した。
その表情には、疲れが見えていた。

「徳永様を幽霊とし記憶を取り出し、その記憶をいじり、幽霊と化した柳田亜希子様と刀銃様に入れ、その上この顛末を全て仕組ませる。全てが全て、あのお方の自己満足だけの為なのでございます。その為だけに佐藤様の関係者を洗いに洗い、柳田亜希子様の情報を手に入れ、幽霊とし、更に田中雄二様の情報も手に入れ、それが一番『合う』人を捜し……もう……私は疲れたのでございます、刀銃

様」

聞くだけで苦勞の端がにじみでているセバスチャンさんの言葉。十五年なんかよりもっと前から、セバスチャンさんはその傍觀者とかいう奴に言いなりになって働いてきたんだ。

しかも。

「揚句の果てには、あゆみを叶に誘拐させた。……だからセバスチャンさんは、暗闇の空間と決別するんですね」

セバスチャンさんを暗闇の空間なの科学者だと仮定づける時、唯一俺がわからなかったことがこれだった。

セバスチャンさんがあゆみを危険にさらす訳がない。

なのに、あゆみは叶にさらわれた。全て、暗闇の空間の思惑通りに。

俺の言葉に、セバスチャンさんは無表情で「そうでございます」とだけ細々と答えた。

真実には嘘偽りが含まれる場合がある。その嘘偽りが、いいものなのか悪いものなのか、それはそれを知った者にしかわからない。

この場合、どうだ？

俺は、ヒーローにセバスチャンさんの正体を教えるべきなのか？

「……まあ」

そんなことの答えは、セバスチャンさんをこの場に呼び出した時から決まっているのだけだ。

俺は決めていた。

だから、ヒーローに近寄れなかった。

だけど、ヒーローも多分、俺と同じ状況になったら俺と同じ判断をくだすと思う。徳永切裂さえも、救い出そうとしたヒーローなら「わかりました。それじゃあまた後で会いましょう。俺、ヒーローとかと一緒に街の建て直し手伝ってきますんで」

「……か、刀銃様？ わ、私のことを、ヒーロー様にばらさないのですか？」

その疑問は当然出るだろう。寧ろ、セバスチャンさんがその疑問

を出さないとおかしい。

何故なら、セバスチャンさんはこの会話を『仕上げ』と言いついたのだから。

どう転んでも、セバスチャンさんは俺がヒーローに全てを言うと思っていたのだろうな。だから普通に、セバスチャンさんもセバスチャンさんで全てをぶちまけた。

だけど。だからこそ。

「俺は、ヒーローに言いません」

「な……何故でございますか！」

「何故も何もありませんよ。単に、ヒーローならそうしないだろうとか勝手に思ってるだけです。セバスチャンさん。負い目があるなら、自分からヒーローに話してください。自分から、あゆみに話してください」

「……………」

「俺はそれを待ってます」

そうだ。きつと、ヒーローならこうする。

謝罪は、口伝えでは全く意味がないことを、俺は嫌という程昨日のヒーローの一件で知ることが出来た。自分が相手の人に、心から謝ることで気持ちは伝わるんだ。

何故なら謝罪というものは、心の底からしなければ伝わらないものだから。

セバスチャンさんは押し黙り、顔を俯けてしまった。そこから一向に顔を上げようとしない。セバスチャンさんもセバスチャンさんなりに揺れているのだろう……なんておくがましいことは考えないさ。

俺は、セバスチャンさんが俺に言ってくれたセバスチャンさんの真意を、ヒーローとあゆみと叶にも言ってもらいたいだけなんだ。

「それに……………」

多分ヒーローも、全部わかってるだろうしな。

だから、あゆみを含めた俺達二人は緊急避難警報を知ることが出

来なかったんだ。

もし俺達が緊急避難警報に気付いていたら、セバスチャンさんの使命が果たされなくなってしまう。

味方であっても。敵であっても。

正義であっても。悪であっても。

ヒーローは、誰でも助けてくれる。

何故ならヒーローが、ヒーローだから。

……さて。ヒーローの手伝いに行くのでしょうか。そうだ、途中であゆみと叶を呼んであいつらにも手伝わそう。あゆみなんかは嫌々言いながらもどうせ手伝ってくれるだろうけど、叶の奴が問題だな。だいたいあいつ、今何処にいるんだ？

ふむ。

まあ、いいさ。

これからも、馬鹿な冗談を言いつつ、それでも楽しく笑って生きていこう。

何の罪もないのに一人ぼっちだったあゆみにも。

一度は死んだ叶にも。

誰もが尊敬するヒーローにも。

セバスチャンさんにも。

一生のほとんどを全て暗闇の空間に利用されてきた俺にも。

それくらいの権利はある筈だから。

俺の名前は刀銃。

刀と銃……刀銃。

そんな俺の本名は、徳永刀銃だ。

この本名をこれから俺は二度と変えることはないだろう。この奇妙な関係性を持った名前のおかげで俺はヒーローとあゆみと

叶と　そしてセバスチャンさんと会うことが出来たのだから。

だから、胸を張って、堂々としてこの名前で生きていくのでしょうか。

「俺の名前は、徳永刀銃」

ヒーローがいるのに平和な街に住む、普通で普通な一人の大学一年生だ。

後日談 佐藤栄作 下

「亜希、子？ 本当に……本当に亜希子なのか！」

何で……何で亜希子がここに幽霊としているんだ！

僕が全力でそう思ったのを悟ったのか、叶さん……いや、亜希子は「まあまあ落ち着きなよ栄作」と僕を宥めながら、フワリと小さく地面に足をつけた。

「んじゃまずは改めて。やっと私も私が誰なのか思い出すことが出来たよ、栄作」

「亜希子……」

「うん。私の名前は柳田亜希子。徳永に殺されたけど、暗闇の空間に幽霊にさせられた、栄作の『元』彼女さんなのよ」

亜希子は。

何故だかわからないけれど、元を強調して僕にむかって言った。元を強調する理由。

そんなものは、一つしかないんだろう。

その叶の対応に落胆を隠せない僕は、テンパリながらも何とか会話を続けようと口を開いた。

「えっと……髪、伸びたね」

「ああ、うんうん。幽霊になっても伸び続けてたからさ、伸ばしちやっただ。髪が鬱陶しいのも……自虐プレイしてるみたいで気持ち良かったしね」

「え……自虐プレイ……？」

その言葉に、僕は疑問を隠せずにとぼけた声を出してしまっていた。

そつだよ。

僕が叶さんを亜希子と判断しなかったのは、髪形よりもこの性癖のせいじゃないか。

「おしとやかで八方美人で、お人よして優しい……それが私だって

栄作は思ってるもんね。だから最初私を見て私だって気付いても、後で私を私じゃなくて叶香里だって判別したんだし」

「そうだよ……亜希子はそんな変な趣味は持ってなかった……」

「隠してたのよ、私。自分がドがつくMだったってこと」

亜希子は、何の悪びれる様子もなく寧ろそれを誇るようにそう断言した。

亜希子は僕に、自分の性癖をずっとずっと、隠して……いた……？

「何の為にだつて思うでしょ？ 簡単よ。ばれたら、栄作は私を軽蔑すると思ったから」

「……………」

亜希子は清々しいくらいの笑顔で、僕に向かって言っていた。そう、清々しいくらいの笑顔で。清々しい理由が、僕にはもう既にわかっていた。

だから僕は、今まで堪えていた涙を少しだけだけど、それでも確かに流し始めた。様々な感情がいつぺんに生み出されて、僕の上に積み重なっていく。怒り。後悔。自念。悲しみ。

そして、苦しみ。

「何でこんな女の為に栄作は復讐なんてしたんだろうね」

泣き出す僕を見ながら、亜希子は僕に向けて冷たい視線を浴びせる。言葉や表情だけ読み取れば、亜希子は僕に酷い対応をしていると思われるだろう。

だけど、僕はわかってる。

こういつ時の亜希子は、本気で怒っている時の亜希子だ。

僕を軽蔑する時の亜希子じゃない。

「私は徳永に殺された。けどそれも、徳永の本質に気付かずに警察に通報しちゃった私達にも問題があったんだ。幽霊にさせられて生き返った私はまず徳永を恨んだ。おこがましいよね、今思うと。徳永のぐちゃぐちゃにされた記憶を入れられてわかったよ。徳永にもいろいろあったんだってさ。何かその人が壊れるような出来事がないと、人は殺人なんかしないんだよ。何か理由があったから。何か

過去があつたから……私は徳永に殺されて、栄作は復讐することになつちやつた。はつきり言うね。迷惑だつた。復讐なんてしても私はなんとも思わないよ。あーありがとう栄作ー大好きラブラブなんて言うと思つた？ アハハ、冗談も大概にしなさいよって感じだよ、栄作。私はあんたが大嫌い。みんな、多分嫌いなんじゃない？ 栄作のこと。優柔不断で臆病で、心が不安定で普通の人のねこ被つてるのにたまに叫び出すし。大っ嫌いだよ。栄作なんて」

ここまで一気に言うと、亜希子は僕から見て前　つまり後ろを振り返り、更に大声を張り上げる。僕は亜希子の言葉を思い返していた。みんなに嫌われている……か。確かに僕は、みんなに恨まれるようなことをして、それなのに平然とこの街を出ようとしている。だから僕は、みんなに嫌われているのかもしれない。いや、だから僕はみんなに嫌われているんだ。

でも。
そんな僕を、亜希子は好きになつてくれた。隣に居て、僕をいつも助けてくれていた。

亜希子が自分の性癖を隠していて、何で今それを僕にばらすのか。「だからとつと私の前から消えて。栄作も私に変態だつてわかつてせいせいしたでしょ？　じゃあここでサヨナラしちゃおうよ。縁切つて、それぞれの人生歩もうよ。大っ嫌いだもん、栄作なんて……」

もう、堪えられない。

僕は今でも亜希子が大好きだ。自虐趣味の変態でも。幽霊でも。

僕のこの気持ちに変わりはない。

そして。

「だから……ヒグツ……私なんて捨ててよ……幽霊の私なんて……」
折角の再会。

なのに、自分は幽霊。

自分はもう、死んでいる。

どうあがいても、決して結ばれない。

だから、冷たく接する。

冷たく接するしか ないのだから。

僕はそんな亜希子の気持ちを読み取った。これが間違いなんてことはないと思う。ないと信じたい。もしこれが間違いだったら、亜希子に抱き着きたい僕の気持ちは笑いものになるから。

そして、僕は。

「僕は、どんな亜希子でも好きだった」

最後にこう言って、出入口を開けて門へと向かった。我ながら、最悪な別れの言葉だと思う。だけど、最後に亜希子にこう伝えたかったんだ。

僕は寧ろ、叶さんの方が好きだったのかもしれない。

しかしながらそれはもう意味のない感情だし、今更そんなことを思ってもしかたのないことなんだ。

門の前まで行くと、よしえさんが僕を今まで見たことがないくらい鋭い目で僕を見ていた。

「こんばんはですわね。私の夫を殺した、佐藤栄作さん」

復讐は連鎖だ。鎖のように繋がっていて、そこから離れることは並大抵のことではない。

僕は、よしえさんの言葉とヒーロー夫人の言葉を頭の中で繰り返して、ようやく理解した気になれた。

この物語はバッドだ。誰もが幸せにならずに、誰もが不幸になる僕のこの復讐劇。

しかし、バッドエンドではない。

物語が終わる為には、主人公が死なないといけないからだ。

だから、死ぬまでこのバッドは終わらない。

運命。

輪廻。

どこまで行っただとところで、最終地点まで辿り着く為にはバッドの道を通り抜けるしかない。

僕はもう、この道から抜け出すことが不可能になっていた。

だけでも、あえて言わせてもらおう。未来に繋がる為に。未来に繋げる為に。

父さん母さん。

亜希子。

徳永切裂。

よしえさん。

高梨君。

ヒーロー夫人。

全ての人に、心を込めて。

「すみませんでした」

.....終わってしまいましたね。二つの視点から展開されたこの物語も、ついにエンディングのお時間となってしまいました。

..... 壮大な時間をかけて挑んだこの『暇潰し』だったのですが、終わるとなるとやっぱり寂しいものがあるというものです。まあそれも風情の一つと捉えさせてもらいましょうか。

..... しかしですね、まさかセバスチャンがああ言って仕上げとすとは思っていませんでしたよ。当初の予定では、『刀銃の左腕が治った理由』を言ってもらうつもりだったのですがそれをまさか裏切りと..... ああ、すいませんね皆さん。説明不足で。これは簡単な理由なんですよ、皆さん。

..... 刀銃は左腕を撃たれる時、徳永切裂によって銃弾を庇われていたのです。つまり、刀銃は撃たれてないのですよ。十五年前、刀銃は虐待の傷以外は全くの無傷だった訳です。

..... しかし刀銃の左腕は動きませんでした。それは間違っことのない不変の真理です。

..... では何故、刀銃の左腕は動かなかったのか。答えは簡単なんです。

両親に撃たれるとは思っていなかった刀銃の……トラウマだったんですよ。当然と言い切ってしまうえば、成る程確かに当然なのです。虐待はされても殺されることはないだろうと信じていた刀銃。しかしながら両親は実際に銃を所持し、自分を撃ってきた。その時照準に入っていたらと思うられる刀銃は、そのせいで自分の左腕を動けなくさせてしまいました。

ヒーローはそれを知っていたのです。皆さん。最初のシーンを思い返してみてください。そう。最初のカフェテリアでヒーローと刀銃が会話をするシーンです。

あの時、ヒーローは刀銃に向かって、無神経にも両親の話を持ち出しました。

ですが、何かおかしくありませんか？

そうですね。そうですね。

何百年も生きているヒーローが……そんな失態をおかすなど有り得ないにも程があることなんですよ。

更に、決定的なのはその後のヒーローと刀銃の会話です。ヒーローは刀銃に右腕の調子を聞きました。何かの金属を入れたから調子はどうだとか何とか理由をつけて聞いていましたね、ヒーローは。そして刀銃は右腕の調子を確認しました。

ではここで、一つの問い掛けです。

刀銃は……どうやって右腕の調子を確認したのでしょうか？

答えは単純明快です。しかしその答えが明らか過ぎて、皆さんはスルーしてしまったのです。

そうなのですよ。

刀銃の左腕は、この頃から少しではありますが動いていたのです。それは、両親のトラウマが払拭されてきたからに相違ありません。ヒーローと毎週というように喋り、最後の悪の息子だから近寄ってこなかった為友達が出来なかった刀銃に……私達が生み出した叶香里という存在を与え、友達というものに初めて触れることが出来た訳です。

そして、少しずつトラウマが消えていく刀銃。

それに呼応するかのように動き出す左腕。

ですがここで誤算があったのです。徳永切裂を殺す復讐者が、かなり早い段階でこの街に入ってしまったのです。とりあえずの処置として佐藤栄作の記憶を少し消させてもらいましたが、やはり苦肉の案。記憶は戻り、動き出すのも時間の問題でした。

仕方なく私達は刀銃に強制的に、いじった徳永切裂の記憶をコピーペーストさせ、左腕を動かすようにさせました。

そして巻き起こる二つのバツカーノ。

復讐劇と救出劇。

それらが終わりを告げる、この高揚感。

ああ……楽しかったです。本当に。満足しきることが出来ました。暗闇の空間の皆さんもご協力、感謝します。特に遊園地での刀銃と西山あゆみに対するカモフラージュの為の五、六人の協力者さん達。あなた方には本当に感謝します。途中、高梨和也に疑われたようですが、大丈夫でしたか？……そうですか。今でも地下で尋問を受けているのですか。後で誰か、瞬間移動をしてあげてください。私からお願いします。命令……と言った方がいいかもしれませんね。とにかく、お願いしますよ、皆さん。

さて。色々ありましたが、これからあなた方を元の世界に帰らせてもらいます。……ですがしかし、残念ながら暗闇の空間の情報を露見させる訳にはいきませんので、暗闇の空間の存在だけは記憶から消させてもらいます。ご了承とご理解の旨、よろしく願います。

ではでは、さようなら皆さん。楽しい一時でしたね。

またの機会を楽しみに……って、へ？

何を言っているんですか、セバスチャン？ あなた、裏切るふりをしておきながらやっぱり私に逆ら……何ですと？

……ちょっと待ってくださいよ。本当に、これを言ってしまった方がいいのですか？……いいんですね？ じゃあ言いますよ？ 後悔

しないでくださいよ？ 知りませんよ、私は。どうなっても私のせいではありませんからね。

すみません、ごたごたしました。もう少しお待ち下さい、皆さん。えー、ゴホン。

最後の最後になりますが、一つ伝えさせてもらいます。

真実には、嘘偽りが含まれる場合があります。それはいついかなる状況でも起こる事象であり、私達も含めた全員はそれに逆らうことが出来ないのです。

ヒーロー。

叶香里。

西山あゆみ。

セバスチャン。

学校の先生。

川田まみ。

山田ことこ。

柳田亜希子。

門番。

西山よしえ。

徳永切裂。

高梨和也。

高梨の妻。

ヒーロー夫人。

佐藤栄作。

刀銃。

この中で。

私は一体誰でしょう？

いた方がいいのでは……と思い、あえて書きませんでした。これからも書く予定はありません。

因みに次回作はもう構想が出来あがっておりますので、もう書くだけの状態です。今度は完全に一部始終鬱になりそうです。会話の掛け合いさせたいなーホント。

ではでは。

ヒーローがいるのに平和な街。

読了、ありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5723i/>

ヒーローがいるのに平和な街

2010年12月5日17時55分発行